

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第131集

打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書

国道343号道路改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

打越・東角地遺跡・古館跡、発掘調査報告書 正誤表

ページ	行	誤	正
74	27	<u>偏</u> 平	<u>扁</u> 平
119	10	石槍である <u>疑</u> わしい	石槍である <u>か</u> 疑わしい
119	22	と目される <u>下</u> 部分	と目される <u>部</u> 分
198	26	を特定する指標とした。 <u>_____</u>	を特定する指標とした。 <u>黒曜石は、Ca/K、 Ti/K、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、 Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。</u>
205 センター 職員名簿	9	左右 <u>腕</u> 骨 <u>小野田</u> 哲憲	左右 <u>上</u> 腕骨 <u>小田</u> 野哲憲

打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書

国道343号道路改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所にあぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備事業は高速交通時代に対応した産業経済開発の大動脈として、多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

県単高速関連整備事業である一般国道343号の改良工事に関連する陸前高田市所在の遺跡は6遺跡であり、本報告書の打越遺跡、東角地遺跡、古館跡の3遺跡については昭和62年度に調査を終了しております。矢作川左岸の丘陵地に立地するこれらの3遺跡からは、縄文時代の住居跡、中世城館に伴う遺構と遺物、中近世の採掘跡等の貴重な資料が発見されました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました大船渡土木事務所、陸前高田市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県陸前高田市矢作町に所在する打越遺跡・東角地遺跡・古館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道343号神明前地区道路改良工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局文化課と岩手県土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 遺跡台帳番号、調査期間、発掘調査面積、調査担当者等は各遺跡の中扉に記したとおりである。
4. 発掘調査に際しては、陸前高田市教育委員会と同市博物館の御協力をいただいた。
5. 分析、鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)

土壌及び石英礫の蛍光X線分析	松枝 大治
黒曜石の蛍光X線分析	藁科 哲男・東村 武信
人骨鑑定	石田 肇
石質鑑定	佐藤 二郎
6. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

I 調査に至る経過	昆野 靖
II 立地と環境	玉川 英喜・昆野 靖
III 調査と室内整理の方法	玉川 英喜
IV 打越遺跡	玉川 英喜
V 東角地遺跡	玉川 英喜
VI 古館跡	中川 重紀
7. 現地調査においては畠山繁、佐藤義男氏をはじめとする地元陸前高田市の方々に、室内整理では整理作業員の協力を得た。
8. 調査の諸記録と遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

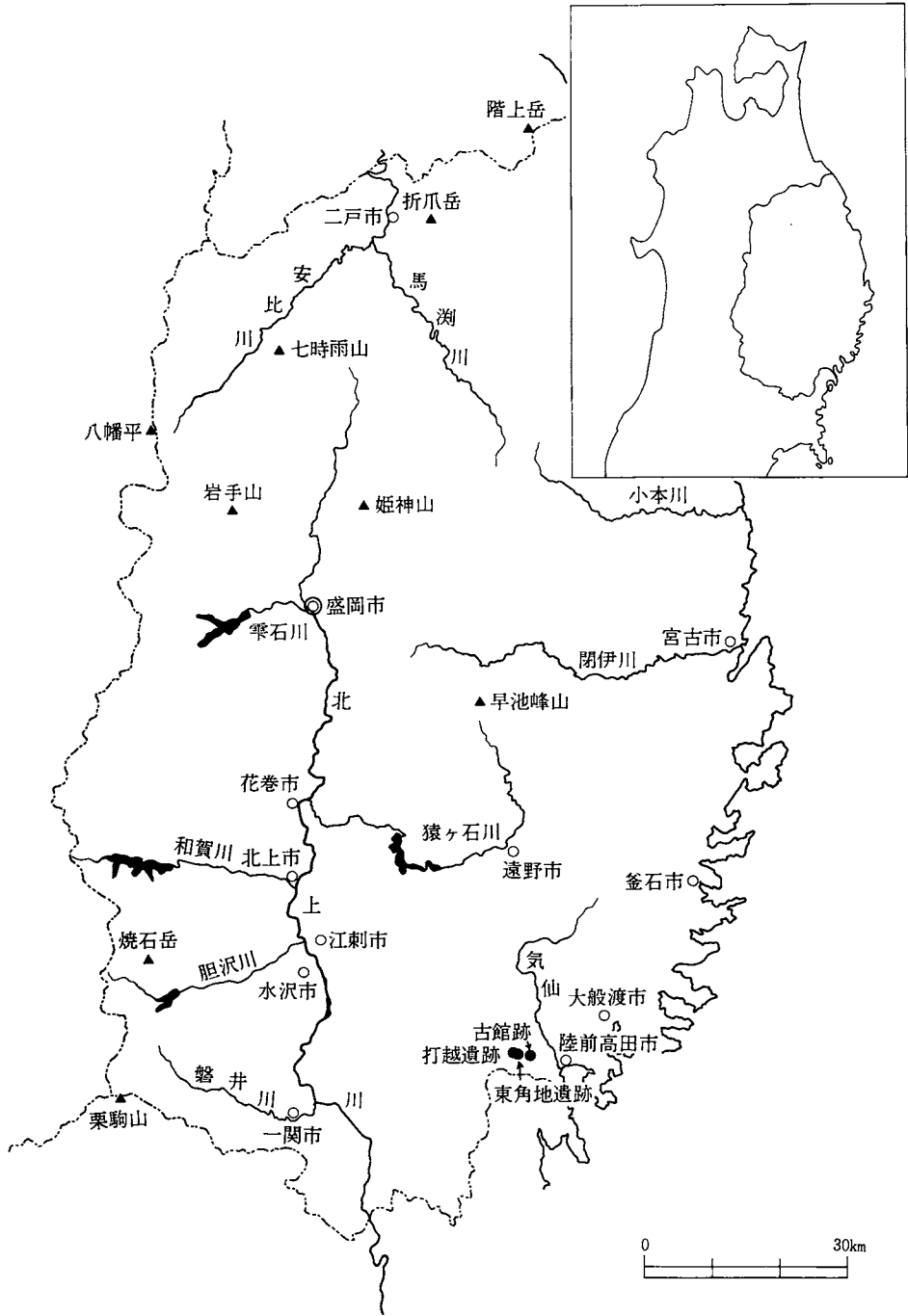
序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 地形概観	2
3. 基本層序	5
4. 周辺の遺跡	7
III 調査と室内整理の方法	13
1. 野外調査	13
2. 室内整理と報告書の作成	15
IV 打越遺跡	17
1. 検出された遺構と遺物	23
(1) 遺構	23
(2) 出土遺物	29
2. まとめ	38
3. 採掘跡の土壌及び石英礫の分析	40
V 東角地遺跡	61
1. 検出された遺構と遺物	67
(1) 西区の遺構	67
(2) 東区の遺構	68
(3) 遺構外出土遺物	71
2. まとめ	79
VI 古館跡	93
1. 検出された遺構と遺物	99
(1) 館に伴う遺構と遺物	99
(2) 館以前の遺構と遺物	111
(3) 館以降の遺構と遺物	177
2. まとめ	188
3. 鑑定分析	198

図版・表・写真図版目次

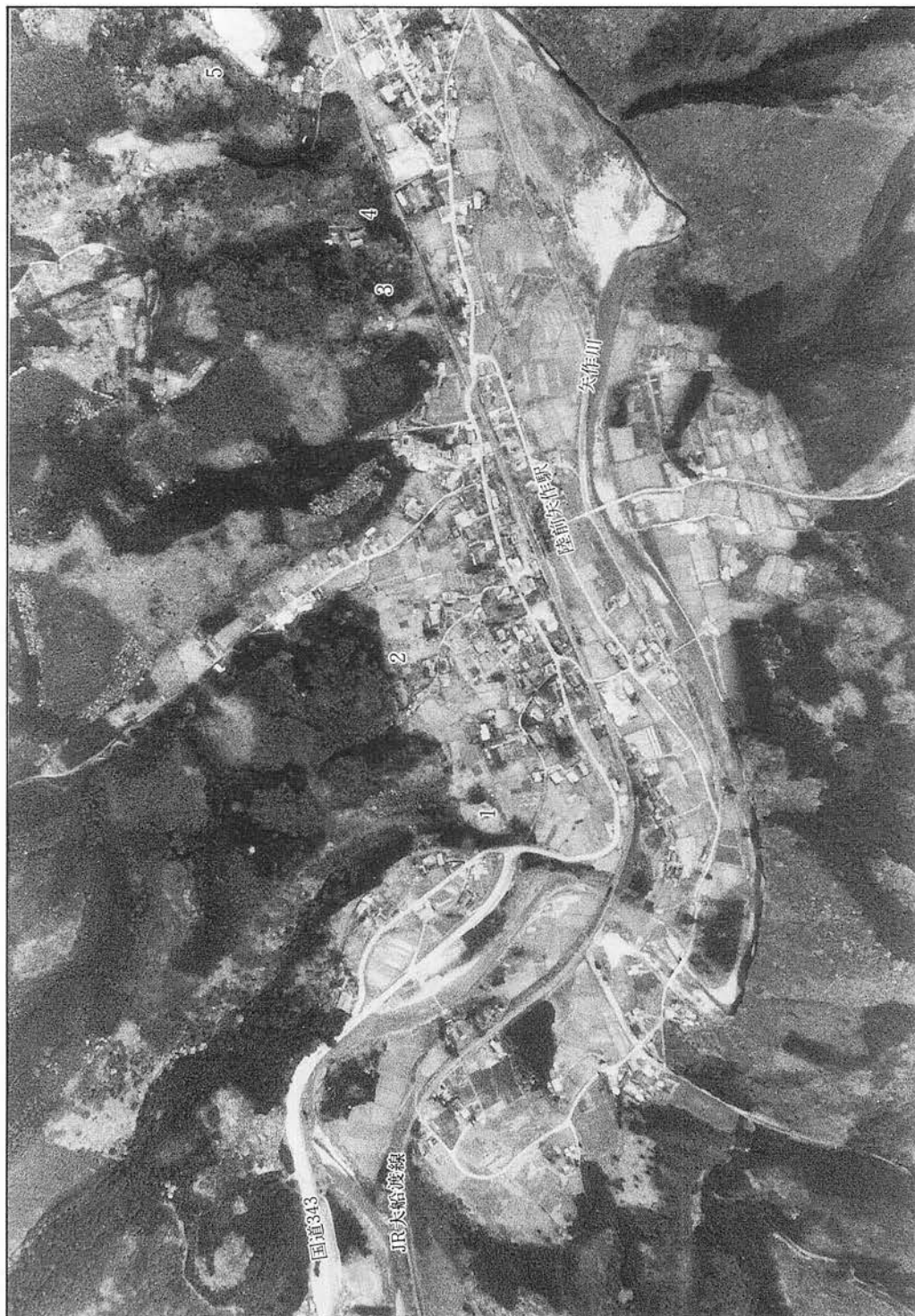
第1図	道路改良路線と遺跡位置図……………1		
第2図	打越遺跡・東角地遺跡・古館跡位置図 ……………3		
第3図	地形分類図……………4		
第4図	土層柱状図……………5		
第5図	周辺の遺跡位置図……………9		
	周辺の遺跡一覧表……………11		
	打越遺跡		
第1図	地形図・グリッド配置図……………19		
第2図	遺構配置図……………21		
第3図	方形周溝……………24		
第4図	ピット(1)……………25		
第5図	ピット(2)……………26		
第6図	1号採掘跡……………27		
第7図	8号採掘跡……………28		
第8図	出土遺物 土器……………30		
第9図	出土遺物 石器(1)……………33		
第10図	出土遺物 石器(2)……………34		
第11図	出土遺物 石器(3)……………35		
第12図	出土遺物 石器(4)・陶磁器・古銭 ……………36		
写真図版1	遺跡遠景・近景……………51		
写真図版2	方形周溝……………52		
写真図版3	ピット……………53		
写真図版4	1号採掘跡……………54		
写真図版5	8号採掘跡・基本層序……………55		
写真図版6	出土遺物 土器……………56		
写真図版7	出土遺物 石器(1)……………57		
写真図版8	出土遺物 石器(2)……………58		
写真図版9	出土遺物 石器(3)……………59		
写真図版10	出土遺物 石器(4)・陶磁器・古銭 ……………60		
	東角地遺跡		
第1図	西区地形図・グリッド配置図・遺構配置図 ……………63		
第2図	東区地形図・グリッド配置図・遺構配置図 ……………65		
第3図	西区遺構……………68		
第4図	水路跡……………69		
第5図	出土遺物 土器(1)……………75		
第6図	出土遺物 土器(2)……………76		
第7図	出土遺物 土器(3)……………77		
第8図	出土遺物 石器・石製品・陶磁器 ……………78		
写真図版1	遺跡遠景・近景……………83		
写真図版2	遺跡近景・作業風景……………84		
写真図版3	西区遺構……………85		
写真図版4	水路跡……………86		
写真図版5	出土遺物 土器(1)……………87		
写真図版6	出土遺物 土器(2)……………88		
写真図版7	出土遺物 土器(3)……………89		
写真図版8	出土遺物 土器(4)……………90		
写真図版9	出土遺物 石器・石製品・陶磁器 ……………91		
	古館跡<付図 1・2>		
第1図	グリッド遺構配置図……………95		
第2図	ⅡE～ⅡB区東西土層断面図 ……………97		
第3図	ⅢD～ⅡD区南北土層断面図 ……………98		
第4図	ⅢC-1建物跡……………100		
第5図	ⅢC-2建物跡……………101		
第6図	ⅡC区柱穴群……………103		
第7図	ⅢB区柱穴群……………105		

第8図	東側斜面断面図	107	第42図	I D - 3 土坑出土遺物(1)	150
第9図	土橋堀等平面図	108	第43図	I D - 3 土坑出土遺物(2)	151
第10図	堀跡土層断面図	109	第44図	I E - 1 土坑	153
第11図	II D - 1 住居址	112	第45図	I E - 1 土坑出土遺物	153
第12図	II D - 1 住居址出土遺物(1)	113	第46図	II C - 1 土坑	154
第13図	II D - 1 住居址出土遺物(2)	114	第47図	II C - 1 土坑出土遺物	154
第14図	II D - 1 住居址出土遺物(3)	115	第48図	II C - 2 土坑	155
第15図	II E - 1 住居址	117	第49図	II C - 2 土坑出土遺物	155
第16図	II E - 1 住居址出土遺物(1)	120	第50図	II D - 2 土坑	156
第17図	II E - 1 住居址出土遺物(2)	121	第51図	II D - 2 土坑出土遺物	156
第18図	II E - 1 住居址出土遺物(3)	122	第52図	II D - 3 土坑	157
第19図	II E - 1 住居址出土遺物(4)	123	第53図	II D - 4 土坑	157
第20図	III D - 1 住居址	124	第54図	II D - 4 土坑出土遺物	158
第21図	III D - 1 住居址出土遺物	125	第55図	II D - 6 土坑	159
第22図	III D - 2・4 住居址	129	第56図	II D - 6 土坑出土遺物	160
第23図	III D - 2・4 住居址出土遺物	130	第57図	III D - 1 土坑	160
第24図	III D - 3 住居址(1)	133	第58図	III D - 1 土坑出土遺物	161
第25図	III D - 3 住居址(2)	134	第59図	III D - 2 土坑	163
第26図	III D - 3 住居址出土遺物(1)	135	第60図	III D - 2 土坑出土遺物	163
第27図	III D - 3 住居址出土遺物(2)	136	第61図	III D - 3 土坑	164
第28図	III D - 3 住居址出土遺物(3)	137	第62図	III D - 3 土坑出土遺物	164
第29図	III D - 3 住居址出土遺物(4)	138	第63図	遺構外出土遺物(縄文土器)	168
第30図	II C - 1 住居址状遺構	141	第64図	遺構外出土遺物(弥生土器)	170
第31図	II C - 1 住居址状出土遺物(1)	143	第65図	遺構外出土遺物(石器1)	172
第32図	II C - 1 住居址状出土遺物(2)	144	第66図	遺構外出土遺物(石器2)	173
第33図	III C - 1 住居址状遺構	145	第67図	遺構外出土遺物(石器3)	174
第34図	III C - 1 住居址状出土遺物	145	第68図	遺構外出土遺物(石器4)	175
第35図	III C - 2 住居址状遺構	146	第69図	遺構外出土遺物(石器5)	176
第36図	III C - 2 住居址状出土遺物	146	第70図	III B - 1 採掘跡	180
第37図	I D - 1 土坑	147	第71図	III D - 1 採掘跡	180
第38図	I D - 1 土坑出土遺物	148	第72図	III D - 2 採掘跡	181
第39図	I D - 2 土坑	148	第73図	II B - 1 集石	181
第40図	I D - 2 土坑出土遺物	149	第74図	II B - 2 集石	182
第41図	I D - 3 土坑	149	第75図	II B - 2 墓拔	182

第76図	Ⅱ B - 3 墓抔	182	写真図版30	Ⅱ E - 1 住居址出土遺物	238
第77図	Ⅱ B - 2 土坑	182	写真図版31	Ⅱ E - 1 住居址出土遺物	239
写真図版 1	遺跡遠景・空中写真	209	写真図版32	Ⅲ D - 1・2・4 住居址 出土遺物	240
写真図版 2	遺跡近景 (現状)	210	写真図版33	Ⅲ D - 3 住居址出土遺物	241
写真図版 3	基本土層	211	写真図版34	Ⅲ D - 3 住居址出土遺物	242
写真図版 4	Ⅲ C - 1・2 建物跡	212	写真図版35	Ⅲ D - 3 住居址出土遺物	243
写真図版 5	柱穴群	213	写真図版36	Ⅱ C - 1 住居址状遺構出土遺物 ……………	244
写真図版 6	東側段差 (現状)	214	写真図版37	Ⅱ C - 1、Ⅲ C - 1・2 住居址 状遺構、Ⅰ D - 1 土坑出土遺物 ……………	245
写真図版 7	東側段差 (現状)	215	写真図版38	Ⅰ D - 2・3 土坑出土遺物 ……………	246
写真図版 8	近景 (現状)	216	写真図版39	Ⅰ E - 1、Ⅱ C - 1・2、Ⅱ D - 3・4 土坑出土遺物	247
写真図版 9	近景 (現状)	217	写真図版40	Ⅱ D - 4・6、Ⅲ D - 1 土坑 ……………	248
写真図版10	東側斜面土層断面	218	写真図版41	Ⅲ D - 1・2・3 土坑	249
写真図版11	東側斜面土層断面	219	写真図版42	遺構外の出土遺物 (縄文時代)	250
写真図版12	近景 (現況) 掘跡	220	写真図版43	遺構外の出土遺物 (弥生時代)	251
写真図版13	掘跡・現状・西側段差	221	写真図版44	遺構外の出土遺物 (石器 1) ……………	252
写真図版14	土橋	222	写真図版45	遺構外の出土遺物 (石器 2) ……………	253
写真図版15	土橋調査後	223	写真図版46	遺構外の出土遺物 (石器 3) ……………	254
写真図版16	Ⅱ D - 1 住居址	224	写真図版47	墓抔、遺構外、出土遺物 (古銭、煙管)	255
写真図版17	Ⅱ E - 1 住居址	225	写真図版48	遺構外出土遺物 (古銭、製鉄品)	256
写真図版18	Ⅲ D - 1 住居址	226			
写真図版19	Ⅲ D - 2・4 住居址	227			
写真図版20	Ⅲ D - 3 住居址	228			
写真図版21	Ⅱ C - 1・Ⅲ D - 1 住居址 状遺構	229			
写真図版22	土坑 1	230			
写真図版23	土坑 2	231			
写真図版24	土坑 3	232			
写真図版25	採掘跡	233			
写真図版26	集石・墓抔・土坑	234			
写真図版27	陶磁器	235			
写真図版28	Ⅱ D - 1 住居址出土遺物	236			
写真図版29	Ⅱ D - 1・Ⅱ E - 1 住居址 出土遺物	237			



岩手県全体図



- 1. 打越遺跡
- 2. 東角地遺跡
- 3. 古館跡
- 4. 片地家館跡
- 5. 外館跡

遺跡付近空中写真

I. 調査に至る経過

一般国道 343 号神明前地区道路改良工事は、陸前高田市矢作町字越戸内から同市矢作町字湯濱畑まで総延長 2,340 m であり、県単高速交通関連道路整備事業として昭和 59 年に着手され、昭和 65 年に完了の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地は、打越遺跡、東角地遺跡、古館跡、片地家館跡、寺前Ⅱ遺跡、寺前Ⅰ遺跡の 6 遺跡があり、この取り扱いについては岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で現地確認を含む事前協議が行われた。経過の概略は、以下のとおりである。

昭和 61 年 5 月 14 日付け 大土第 296 号 大船渡土木事務所長から岩手県教育長あて
分布調査の依頼

昭和 61 年 5 月 17 日付け 陸高教社第 122 号 陸前高田市教育長から岩手県教育長あて
分布調査の依頼進達

昭和 61 年 5 月 22 日付け 教文第 153 号 岩手県教育長から大船渡土木事務所長あて
分布調査の依頼に対する回答

昭和 61 年 11 月 7～8 日 岩手県教育委員会による現地確認

これにより岩手県教育委員会は、打越遺跡・東角地遺跡・古館跡の 3 遺跡について岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの昭和 62 年度発掘調査事業計画に編入し、昭和 62 年 6 月 1 日付け契約により当埋蔵文化財センターが調査することとなった。

その後、東角地遺跡については、調査対象区域の南東に隣接して工事用道路が新設されることとなり、昭和 62 年 9 月 30 日付け「大土第 885 号」により大船渡土木事務所長から岩手県教育長あてに追加調査の依頼があり、岩手県教育委員会との協議がなされた。さらに、昭和 62 年 10 月 6 日付け「教文第 381 号」による岩手県教育長から岩手県文化振興事業団理事長あての追加調査に関わる指導と調整をうけて、当初の調査面積に 1,042㎡を加えた 6,829㎡を対象に実施することとなったものである。



第 1 図 道路改良路線と遺跡位置図

Ⅱ．立地と環境

1．遺跡の位置

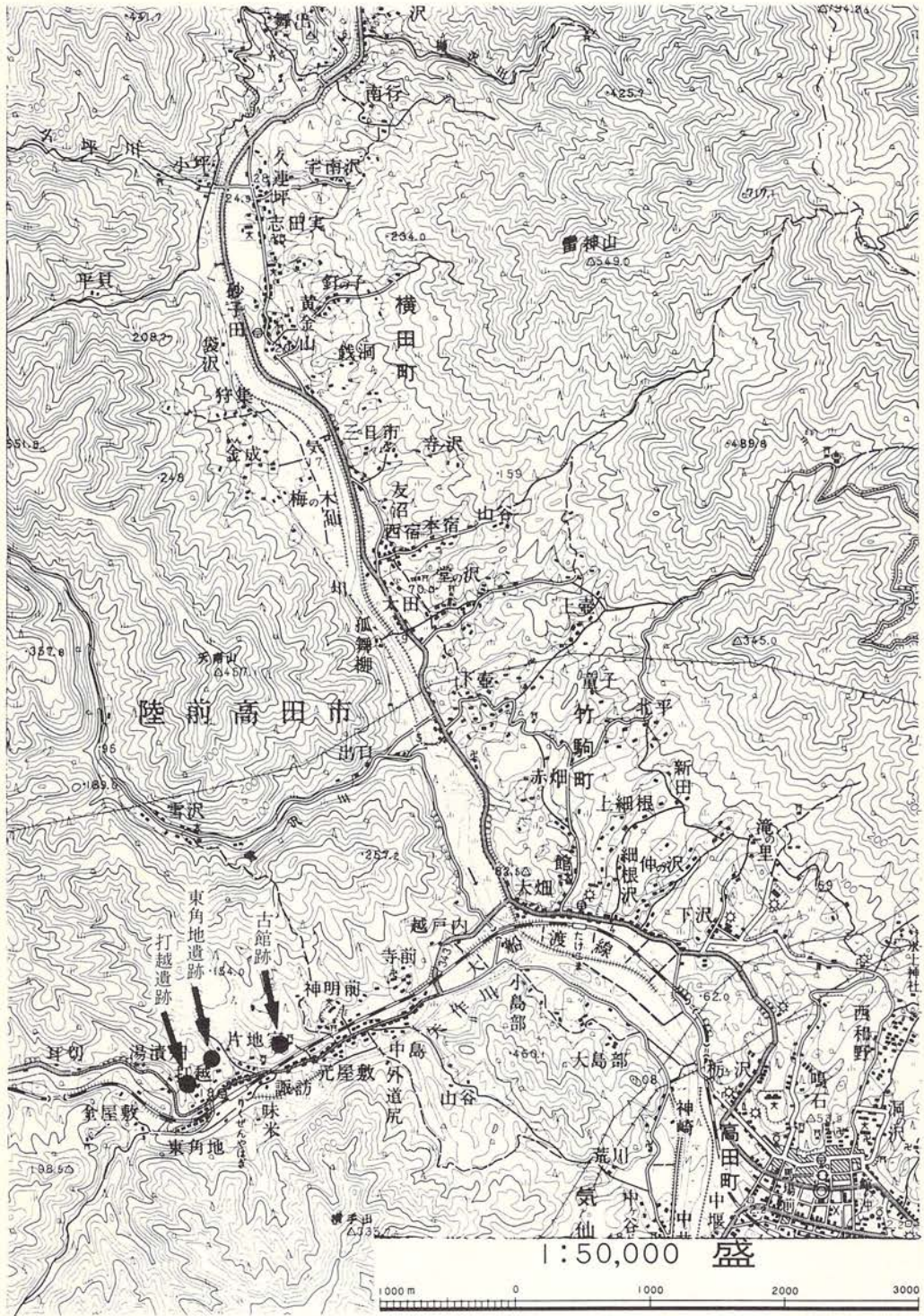
打越遺跡・東角地遺跡・古館跡はいずれも陸前高田市矢作町にあり、それぞれの所在地は前者から字東角地3ほか・字東角地10ほか・字諏訪35ほかである。陸前高田市は岩手県の南東端に位置し、東側に太平洋を望み、北側は大船渡市・住田町、西側は大東町・室根村、南側は宮城県に接する。矢作地区は陸前高田市の西部にあり、東流する矢作川沿いに集落が点在する。これら3遺跡は矢作川左岸の東角地・諏訪の集落の北側にあり、東西900mの間に隣接、またはやや離れて分布する。3遺跡のうち、打越遺跡は西端にあり、東日本旅客鉄道大船渡線陸前矢作駅の西北西約350mに、東角地遺跡は陸前矢作駅の北西約250mに、古館跡は3遺跡中の東端にあって、陸前矢作駅の北東約500mに位置する。3遺跡は北緯39度1分9秒～23秒、東経141度34分42秒～35分14秒の間にある。

2．地形概観

陸前高田市は北上山地の南東部縁辺に位置する。山地が多く、南流する気仙川を挟んで主稜線部は南に延びる。東側は氷上山（標高874.7m）を最高峰に、500～800mの山々が、西側は叶倉山（728.9m）や陣ヶ森（583.6m）など600m前後の山々が連なる。山地は気仙川やそれに注ぐ小河川によって開析される。気仙川は遠野市と住田町境にある高清水山（1013.9m）に端を発し、途中住田町川口で大股川と合流、世田米付近では大きく蛇行した後流路を変えて南流を続け、広田湾に注ぐ。また、遺跡付近を流れる矢作川は、南流してきた生出川と東流してきた中平川が矢作町二又で合流した後東流を続け、竹駒町大畑付近で気仙川と合流する。合流点は気仙川の河口から僅か4.5km程の所である。交通路はこれらの河川に沿って開かれている。

太平洋を望む海岸線は日本でも有数のリアス海岸で、山地の稜線部が海に向かって延びた半島と半島の間に湾が入り組んでいる。南三陸リアス海岸は単純な沈降によるものではなく、離水と沈水の両方の地形を残している。

第3図の地形分類図は土地分類基本調査「盛」（1973年岩手県）を基にしている。図幅の多くを占める山地は起伏量200～400mの中起伏山地とその縁辺に連なる起伏量200m未満の小起伏山地である。比較的定高性がよく、準平原化の名残りと思われる山頂緩斜面も氷上山山頂付近など一部に見られる。丘陵地は氷上山山地と気仙川の間に南北に帯状に分布する。陸前高田市の市街地の背後には開析の進んだ海岸段丘の残丘が存在する。本来は段丘面に分類される地形であるが、浸食が進み平坦面が少ないため丘陵地に分類した部分が多い。この段丘も沈水と離水の跡を残す地形であり、数回の上昇と下降をくり返している。縄文海進期における旧汀線



第2図 打越遺跡・東角地遺跡・古館跡位置図



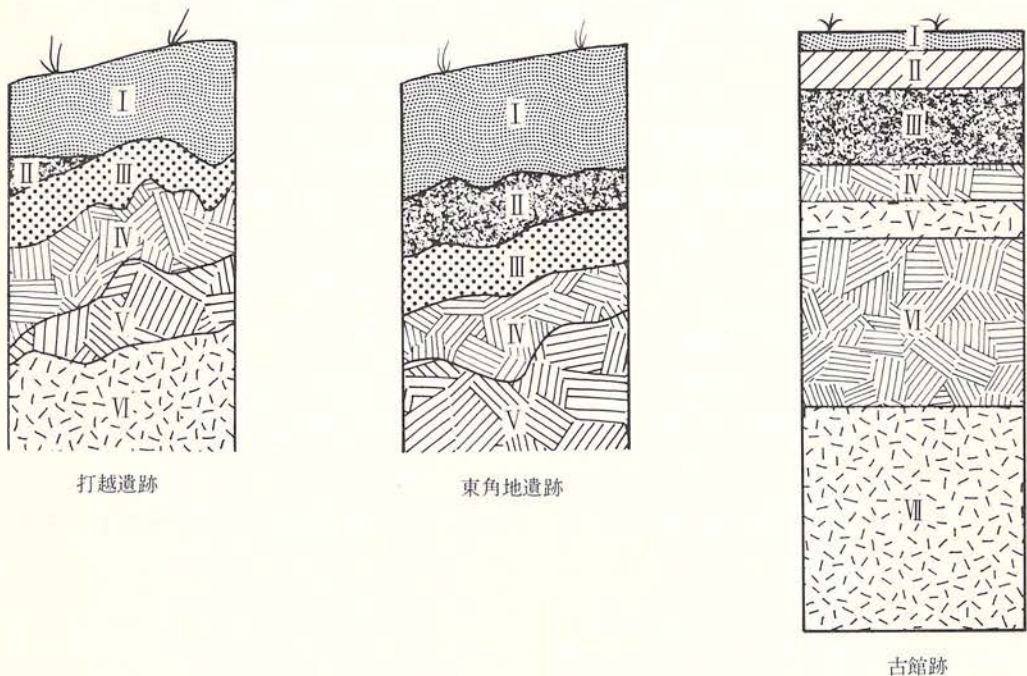
第3図 地形分類図

は矢作川下流域にまで及んでいたと思われる。段丘面には海岸段丘起源の他に河岸段丘がある。河岸段丘は気仙川沿いの左岸とそれに注ぐ小沢との合流点付近、および矢作川沿いに部分的に発達する。低地は河川に沿った谷底平野が多く、気仙川や矢作川沿いには幅数百mの平野が広がる。気仙川河口の広田湾口に広がる平野は幅4～5km程であるが、三陸リアス海岸の中では最大級の沖積平野である。

遺跡は気仙川や矢作川沿いの段丘面や丘陵地・山麓地緩斜面上に載るものが多い。今回調査が行われた3遺跡はいずれも小起伏山地の縁辺にあたる。打越・東角地遺跡は松倉山から南東に延びる尾根状の山地縁辺から低地に続く傾斜変換点の緩斜面上に、古館跡は舌状に張り出す尾根状の緩斜面上に立地する。打越遺跡の標高35～45m、東角地遺跡のそれは27～45m、古館跡のそれは25～43mである。矢作川は3遺跡の付近では標高10～20mほどの所を東流する。遺跡の現況は打越・東角地遺跡が主に畑地と牧草地、古館跡が山林である。古館跡ではかつては畑地として利用されていたことがある。

3. 基本層序

基本的には3遺跡とも共通しているが、各遺跡毎に相違も見られるので、以下に各遺跡毎に各層序の概要を述べることにする。第4図の層序名は各遺跡毎に命名している。



第4図 土層柱状図

打越遺跡（第4図）

土層柱状図はグリッドⅢAob付近で作成したものである。

- I層 暗褐色土（10YR3/3）表土で遺跡全面を覆う。粒径1cm前後のスレート状の小角礫を多く含む。層厚は斜面上部で10cm位、下部では50cm程になる。下部の色調は若干黒味が強い。少量の遺物を含む。
- II層 黒褐色土（7.5YR2/2）斜面上部ではこの層を欠く。IIA区ではこの層を欠く所が多い。砂礫が混じり、最大層厚は約50cmである。遺物を含む。
- III層 褐色土（10YR4/4）IV層土が植生等で漸移的に変化したと思われる。色調は下部程明色となる。層厚は10～20cm程で、斜面上部ではこの層を欠く。沢筋では流れ込みと思われる遺物が含まれる。
- IV層 黄褐色土（10YR5/6）地山の粘質土層で、締まりがよい。砂礫を多く含む。IIA区での遺構は主にこの層の上面が検出面である。遺物は含まれない。
- V層 明赤褐色土（5YR5/6）粘性がある。砂礫を多く含む。無遺物層である。

東角地遺跡（第4図）

土層柱状図は東区のグリッドIVB3c付近で作成したものである。色調は若干異なるが、東角地遺跡のI・II・IV・V層はそれぞれ打越遺跡のI・II・III・IV層に対応する。

- I層 黒褐色土（10YR3/2）表土で遺跡全面を覆う。スレート状の小角礫を多く含み、締りが弱い。層厚は10～40cmで斜面上部は薄い。遺物を若干含む。
- II層 黒色～極暗褐色土（10YR2/1～7.5YR2/3）スレート状の小角礫を多く含む比較的締りの弱いシルト質土である。色調は場所によって若干異なり、斜面下部程黒味が強い。層厚は20cm前後であるが、斜面上部ではこの層を欠く所もある。西区ⅧA区の遺物は大半がこの層からの出土である。
- III層 暗褐色土（10YR3/3）I・II層より粒径の大きい角礫を多く含む。締りのよい粘質土である。層厚は10～20cmであるが、この層を欠く所もある。
- IV層 にぶい黄褐色土（10YR4/3～5/3）含まれる礫はIII層に類似する。V層土が漸移的に変化して暗褐色化したと思われる。締りがよく固い粘質土である。層厚は概ね10～20cmである。
- V層 黄褐色土（10YR5/6）地山で締まりがよく固い粘土層である。小角礫のほかに大・中角礫も含まれる。

古館跡（第4図）

土層柱状図は模式図である。

- I層 暗褐色～黒褐色土 (7.5YR3/2～3/3) 表土層で、木根等が多い。遺跡全面を覆い、層厚は10～40cmである。
- II層 褐色土 (7.5YR4/4) 整地層で、明褐色土と赤褐色土の混合土である。小礫を僅かに含む。調査区の南東から東側にかけて見られ、層厚は10～20cmである。
- III層 暗褐色～黒褐色土 (7.5YR2/3～3/4) 旧表土で、調査区の南東から東側及び東側斜面の一部に堆積する。粘性があり、少量の炭化物を含む。層厚は20～40cmである。
- IV層 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性があり、小礫を含む。調査区西側での遺構検出面である。層厚は30cm前後である。
- V層 赤褐色土 (5YR4/8) 粘性がある。調査区中央部の南東側における遺構検出面である。層厚は20cm前後である。
- VI層 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性があり、IV層土に類似する。
- VII層 明赤褐色土 (5YR5/8) 粘性があり、V層土に類似する。層厚2m前後で、本層下部に人頭大の凝灰岩を含む。

4. 周辺の遺跡

気仙地方には古くから注目されてきた貝塚が多くあることで知られている。陸前高田市の広田湾や隣の大船渡湾の湾岸沿いにも全国的に名の知れた貝塚として、国指定史跡の中沢浜貝塚・下船渡貝塚・蛸の浦貝塚があり、また、縄文土器編年の標式遺跡となっている門前貝塚（後期初頭）や大洞貝塚（晩期）がある。他にも大船渡湾の細浦上の山貝塚や広田湾の瀬沢貝塚が大正年間に長谷部言人や松本彦七郎等によって人類学雑誌等に度々紹介されている。これらの貝塚はその後現在に至るまで度々調査が行われ、岩手県における貝塚研究の主要な舞台となってきた。

また気仙地方は洞穴遺跡の多いことでも知られている。大正14年8月、大山柏や八幡一郎等によって踏査された女神洞穴、蝠蝠穴洞穴、関屋洞穴などが同年10月の人類学雑誌に紹介されている。住田町には縄文時代早期の土器編年の標式遺跡として著名な蛇王洞洞穴がある。このように当地域は先人達に数多くの格好のフィールド・ワークの場を提供してきた。

現在、遺跡台帳には陸前高田市で228か所、大船渡市では74か所が掲載され、岩手県中世城館跡分布報告書には陸前高田市55か所、大船渡市11か所の城館跡が掲載されている。そのうち第5図の周辺の遺跡位置図には今回調査が行われた3遺跡を中心とする陸前高田市西部の気仙川・矢作川流域の100か所の縄文時代・古代等の遺跡と33か所の中世城館跡を図示した。以下に図示した遺跡の概要を若干述べることとする。

縄文時代の遺跡は66か所で、種類別の内訳は集落跡9、散布地49、貝塚3、洞穴5である。

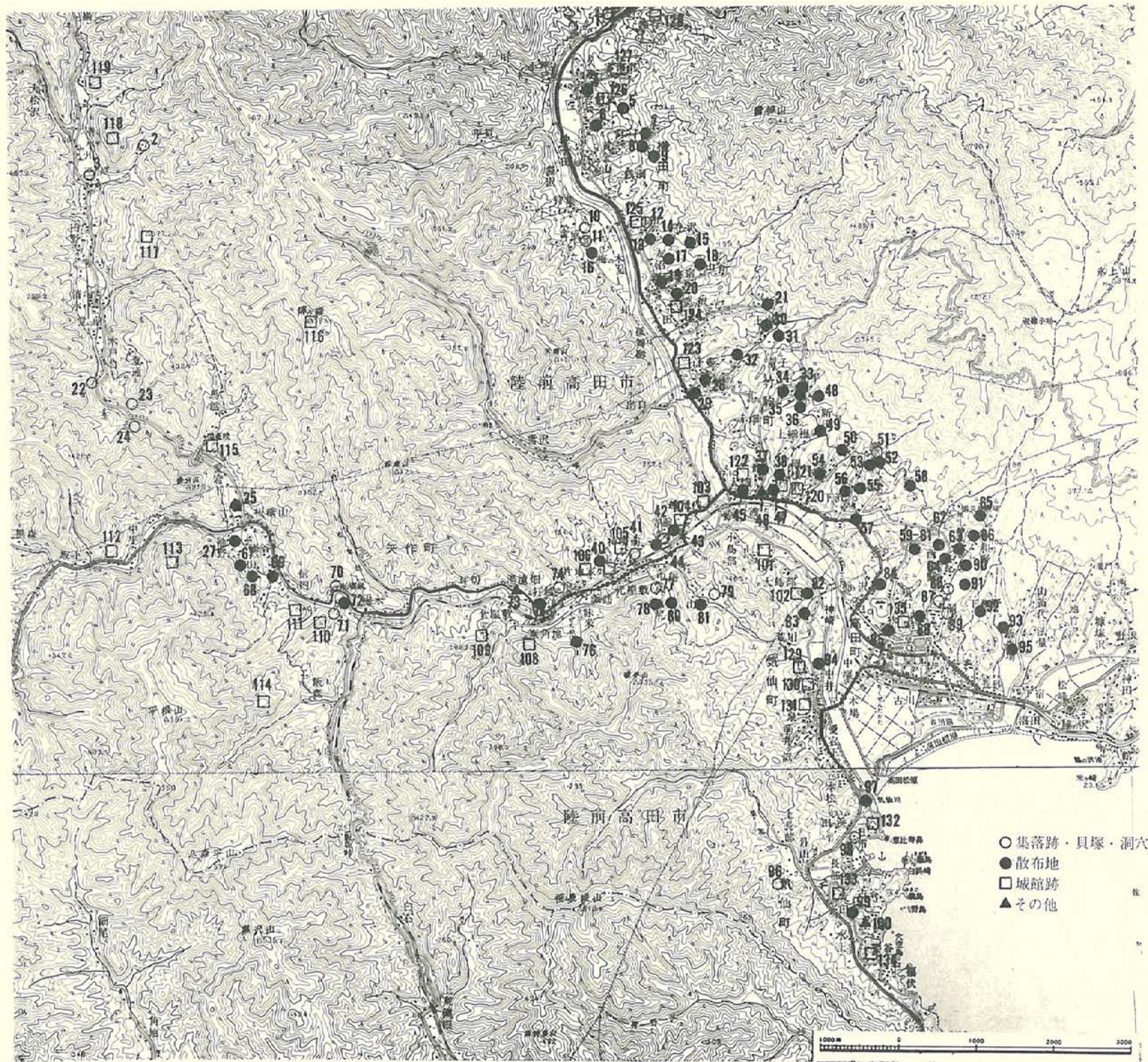
弥生時代の遺跡は散布地のみ2か所、古代の遺跡は集落跡6、散布地14か所である。時代不明の集落は4か所、散布地が21か所である。他に塚・窯跡・祭祀跡が各1か所である。なお、複合遺跡はそれぞれ1か所に数えているので、合計数は図示した遺跡数をうわまわる。気仙川流域の遺跡は左岸の氷上山山地西麓に続く緩斜面上や丘陵・段丘上に立地するものが多い。矢作川流域のものは開析の進んだ板橋山付近や湯漬畑以東に比較的多い。時代別の立地にはそれ程顕著な差は見られない。図示した遺跡で最近調査が行われた例としては、横田町の釘の子遺跡や矢作町の山崎遺跡、それに高田町の貝畑貝塚がある。釘の子遺跡や山崎遺跡では縄文土器の他に弥生土器が比較的まとまって出土している。貝畑貝塚では複式炉を持つ縄文時代中期の堅穴住居址等が検出されている。

中世の城館跡は旧気仙郡内に75遺跡が知られており、そのうち陸前高田市内には55遺跡が確認されている。その大部分は気仙川と支流の矢作川に沿った丘陵上に偏在している。矢作川沿いにおいては、今泉街道筋にあたる東角地付近までの右岸と越戸内付近までの左岸に20遺跡が立地している。

「矢作村郷土年表」による城館の初見は、正和4年(1,315)の千葉廣胤による鶴館城、外館2城の構築であり、葛西氏の姻戚である千葉氏の繁行が知られる。具体的な城館名が記されるのは、宝徳3年(1,451)の竹駒壺館城、「古城書上」には横田の本宿館、三日市館等があるが、永享8年(1,436)の千葉氏一族の争乱、永正元年(1,504)の大原館城主大原信明と米ヶ崎城主浜田基綱の合戦、天正16年(1,588)には米ヶ崎城主浜田安房守の謀反に矢作鶴館城主千葉大湯守が出陣するなど同族間の争乱があり、東磐井郡境の矢作はその前線の要衝にあたるのみならず、金採掘の利権に伴う城館の興亡が推測される分布である。

＜引用・参考文献＞

- 岩手県企画開発室 1973年 『土地分類基本調査』 盛
 岩手県教育委員会 1986年 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第82集
 及川 洵 1968年 「岩手県湯漬畑古窯址略報」 考古学ジャーナル第25号 ニュー・サイエンス社
 大山 柏・八幡一郎 1925年 「岩手県南部石器時代遺跡調査旅行」 『人類学雑誌第40巻第10号』
 大山 柏・八幡一郎・小金井良精・長谷部言人 1925年 「岩手県における石器時代の遺跡—講演要旨」 『人類学雑誌第40巻第11号』
 貝塚爽平他 1985年 『日本の平野と海岸』 岩波書店
 国生 尚・石川長喜 1984年 『川内遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第82集
 佐藤正彦・蒲生琢磨 1987年 『中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅲ』 陸前高田市文化財報告第11集
 佐藤正彦 1984年 『山崎遺跡発掘調査報告書』
 佐藤正彦 1985年 『貝畑貝塚発掘調査概報』 陸前高田市文化財報告書第8集
 鳥羽源蔵 1897年 「陸前国気仙郡の石器時代遺跡」 『東京人類学会雑誌第129号』
 1919年 「陸前国細浦上の山貝塚の環状列石」 『人類学雑誌第34巻第5号』
 長谷部言人 1919年 「陸前国細浦上の山貝塚の環状列石」 『人類学雑誌第34巻第5号』
 1925年 「陸前大洞貝塚(発掘)調査所見」 『人類学雑誌第40巻第10号』
 吉川虎雄他 1973年 新編 『日本地形論』 東大出版会



第5図 周辺の遺跡位置図

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1	穴沢	集落跡	縄文(晩期)土器	横田町字舞出	
2	三の戸沢	集落跡(?)	磨石、石斧、石剣、炉跡	矢作町字三の戸沢	
3	角地	集落跡(?)	石剣	矢作町字三の戸沢	
4	志田実	散布地	縄文土器	横田町字志田実	
5	八戸沢	散布地	土師器	横田町字志田実	
6	根岸	散布地	縄文(晩期)土器、原石、剥片	横田町字志田実	
7	釘の子Ⅰ	散布地	土器、統縄文、須恵器、土師器、原石	横田町字釘の子	
8	釘の子Ⅱ	散布地	縄文土器	横田町字釘の子	
9	釘の子Ⅲ	散布地	縄文土器	横田町字釘の子	
10	袋沢Ⅰ	集落跡	縄文土器、フレーク、土師器、石鏃、石器	横田町字袋沢	
11	袋沢Ⅱ	散布地	堅穴住居	横田町字袋沢	
12	釘の子	集落跡	縄文(中期)土器、土師器、須恵器	横田町字釘の子	57調査
13	袋沢Ⅲ	散布地	縄文土器、土師器	横田町字袋沢	
14	友沼Ⅰ	散布地	縄文	横田町字友沼	
15	友沼Ⅱ	散布地	縄文	横田町字友沼	
16	金成	散布地	縄文、打製石斧	横田町字金成	
17	友沼Ⅲ	散布地	縄文	横田町字友沼	
18	山田	散布地	縄文(晩期)土器	横田町字西宿	
19	西宿	散布地	縄文(中・後期)土師器	横田町字西宿	
20	本宿	散布地	縄文(晩期)	横田町字本宿	
21	堂の沢	散布地	縄文	横田町字堂の沢	
22	木戸口 蝙蝠洞穴	洞穴	縄文(後期)土器、土師器	矢作町字木戸口	
23	赤魚穴	洞穴	土器	矢作町字木戸口	
24	坐頭穴	洞穴	土器	矢作町字木戸口	
25	愛宕下	散布地	縄文土器、土師器、石鏃	矢作町字愛宕下	
26	板橋山	散布地		矢作町字板橋山	
27	袖野	散布地	縄文土器	矢作町字袖野	
28	壺	散布地	縄文(晩期)土器	竹駒町字上壺	
29	下壺Ⅱ	散布地	縄文、フレーク	竹駒町字下壺	
30	上壺Ⅰ	散布地	縄文、土師器	竹駒町字上壺	
31	上壺Ⅱ	散布地	縄文	竹駒町字上壺	
32	下壺Ⅰ	散布地	縄文	竹駒町字下壺	
33	北平Ⅰ	散布地	縄文	竹駒町字北平	
34	新田	散布地	石鏃	竹駒町字新田	
35	北平Ⅱ	散布地	縄文	竹駒町字北平	
36	北平Ⅲ	散布地	壺、土器、石鏃	竹駒町字北平	
37	館	散布地	壺、土器、いろり跡	竹駒町字館	
38	和野	散布地	縄文(中期)土器、土偶、石棒、石槍	竹駒町字細根沢	
39	観音寺	散布地	土器、石器	矢作町字神明前	
40	神明前Ⅱ	集落跡	縄文土器	矢作町字神明前	
41	神明前Ⅰ	集落跡	土器、大泉(?)	矢作町字神明前	壊滅
42	寺前Ⅰ	集落跡	縄文(晩期?)、土師器、石棒、石剣 e t c	矢作町字寺前	
43	寺前Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字寺前	
44	寺前Ⅲ	散布地	縄文土器	矢作町字寺前	
45	軍見洞	散布地	土器、土師器、青銅鍋	竹駒町字館	
46	細根沢石塚	塚	積石塚一基	竹駒町字細根沢	
47	細根沢	散布地	縄文、土師器、須恵器、フレーク	竹駒町字細根沢	
48	北平Ⅳ	散布地	縄文	竹駒町字北平	
49	新田	散布地	縄文、弥生	竹駒町字新田	
50	仲の沢Ⅱ	散布地	縄文	竹駒町字仲の沢	
51	坊寺	集落跡	土師器	竹駒町字滝の里	
52	滝里Ⅱ	散布地	弥生、土師器	竹駒町字滝の里	
53	滝里Ⅰ	散布地	縄文、土師器	竹駒町字滝の里	
54	仲の沢Ⅰ	散布地	縄文	竹駒町字仲の沢	
55	下沢Ⅱ	散布地	縄文	竹駒町字下沢	
56	下沢Ⅰ	散布地	縄文	竹駒町字下沢	
57	相川Ⅰ	散布地	縄文、須恵器、石器	竹駒町字相川	
58	相川Ⅱ	散布地	縄文	竹駒町字相川	
59	大隈Ⅰ	散布地	縄文、石器	高田町字大隈	
60	大隈Ⅱ	散布地	縄文	高田町字大隈	
61	鳴石	散布地	縄文	高田町字鳴石	
62	西和野Ⅰ	散布地	土器	高田町字西和野	
63	西和野Ⅱ	散布地(包含地)	縄文、土師器	高田町字西和野	
64	小森前	散布地		高田町字西和野	
65	瓜畑	散布地	縄文	高田町字西和野	
66	西和野Ⅲ	散布地	土師器	高田町字西和野	
67	山崎Ⅲ	散布地	縄文土器	矢作町字山崎	

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
68	山崎Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字山崎	
69	山崎Ⅰ	散布地	縄文(晩期)土器、土師器、鉄滓	矢作町字山崎	
70	仙婆巖岩陰	洞穴		矢作町字信内	
71	女神洞穴	洞穴	土器、貝塚、木炭	矢作町字信内	
72	梅の木	散布地	縄文土器	矢作町字梅の木	
73	湯漬畑	窯跡	土器、焼成台、須恵系赤焼陶器、灰果、スリバチ	矢作町字湯漬田	
74	東角地	集落跡	カブト、人骨、縄文土器、土師器	矢作町字東角地	
75	打越	散布地	土器、石器	矢作町字打越	
76		散布地		矢作町字片地家	
77	外道尻Ⅲ	集落跡	土器、磨製石斧、石棒	矢作町字外道尻	
78	外道尻Ⅰ	散布地	土器、石器	矢作町字外道尻	
79	山谷Ⅰ	集落跡	土器、石斧、磨石、石鏃	気仙町字山谷	
80	外道尻Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字外道尻	
81	山谷Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字山谷	
82	陣ヶ森	散布地		矢作町字神崎	
83	神崎	散布地	縄文土器	矢作町字神崎	
84	栃ヶ沢	散布地		高田町字栃ヶ沢	
85	西館	散布地	土器	高田町字西館	
86	貝畑	貝塚	縄文、土師器、須恵器	高田町和野字下和野	
87	西和野	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	高田町字西和野	
88	洞の沢	散布地	土器、石器、貝塚	高田町字洞の沢	
89	中和野Ⅰ	集落跡		高田町字中和野	壊滅
90	中和野Ⅱ	散布地	縄文	高田町字中和野	壊滅
91	中和野Ⅲ	散布地	縄文	高田町字中和野	壊滅
92	下和野	散布地		高田町字下和野	
93	飯森場	散布地		高田町字飯森場	
94	中井	散布地	合矢製品	気仙町字中井	
95	山苗代	散布地		高田町字山苗代	
96	牧田貝塚	貝塚・館跡	土器、アサリ、ハマグリ、イボニシ、レイシ	気仙町字牧田	
97	川口	散布地	土器	気仙町字川口	
98	二日市貝塚	貝塚	土器、カキ、ハマグリ、イシグタミ、イボニシ	気仙町字二日市	
99	双六	散布地	土器、石鏃	気仙町字双六	
100	双六宿	祭祀跡		気仙町字双六	

No.	名称	別称	所在地	形式	現状	城主等(文献)
101	内館	鶴崎館・鶴館城	矢作町下矢作字大島辺	山城	山林、畑	千葉広胤
102	陣ヶ森		〃 大島辺	〃	山林	菅原新左エ門春行
103	廻館		〃 越戸内	〃	〃	
104	古館	倉主館	〃 〃	〃	〃	大善院継清
105	外館		〃 神明前	〃	〃	
106	古館	片地家館・高屋敷館	〃 片地家	〃	〃	
107	東角地館		〃 東角地	〃	〃	
108	小山館		〃 味米	〃	〃	
109	八幡館		〃 金屋敷	〃	〃	
110	番館	番立	矢作町梅木	山城	〃	
111	フン館	古館	〃 山崎	〃	〃	
112	日向館		〃 中平	〃	〃	
113	大館	大立	〃 坂下	〃	〃	
114	館柵		〃 〃	〃	〃	
115	番ヶ沢館		〃 二又	〃	〃	
116	陣ヶ森		〃 馬越	〃	〃	
117	目貫館		矢作町二田野	山城	山林	
118	本宿館		〃 三ノ戸	〃	〃	
119	的場館		〃 的場	〃	〃	
120	滝ノ里館	花輪館	竹駒町滝ノ里	〃	山林、畑、宅地	佐々木与八郎重綱
121	金山館		〃 細根沢	〃	畑、宅地	
122	古館	府本館・壺館	〃 館	〃	山林、畑	
123	壺館	坪城・坪川城・竹駒城	〃 下壺	〃	山林	佐々木安芸、藏人、助次郎(古城書上)
124	本宿館	横田城・書宿城	横田町字本宿	〃	山林、畑	日(昆)野右馬之充(古城書上)
125	三日市館	外館	〃 字三日市	〃	〃	日野遠江守、大学(古城書上)
126	あかまい館		〃 字志田実	〃	山林	
127	関根館		〃 字久連坪	〃	〃	
128	南行館	弦根館	〃 字南行	〃	〃	紺野利幹
129	廻館		気仙町中が谷	〃	〃	
130	東館		〃 町裏	〃	〃	
131	館脇館	館ヶ脇館	〃 内野	〃	山林、畑	
132	二日市館	鶴飼館・八幡館	〃 二日市	〃	山林、畑、宅地	金為近
133	上長部館		〃 牧田	〃	山林、畑	千葉慶宗
134	要谷館		〃 要谷	〃	畑	
135	八幡館	東館・高田城	〃 本丸	丘陵	公園、宅地	千葉安房守広綱

Ⅲ. 調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区割の設定

3遺跡とも任意の2点を設定し、その2点を通る直線を軸線としてグリッドを設定した。各遺跡とも任意の2点については基準点測量を行っている。

打越遺跡

調査区は道路建設予定地に沿った幅20～50m、長さ125mの範囲である。基準点とした任意の2点は道路中心杭No.49とNo.52付近にあり、2点間の距離は58.808mである。基準点の平面直角座標第X系による成果値、及び杭高(L)は以下のとおりである。

基準点1 $X = -108,554.206\text{m}$ $Y = 64,503.820\text{m}$ $L = 41.524\text{m}$

基準点2 $X = -108,508.986\text{m}$ $Y = 64,542.963\text{m}$ $L = 38.225\text{m}$

区画は基準点2を原点に東西・南北30m毎に区切り大区画とした(打越遺跡第1図)。大区画をさらに6mメッシュで区切って、小区画とし、遺物取り上げの場合の最少単位とした。グリッド名は大区画が西から東にI・II…、軸線の北をA、南をBとし、その組み合わせでIA区・II B区等とした。小区画は西から東に0～4、北から南へa～eを与え、大区画名と組み合わせてIAoa等のように呼称した。

東角地遺跡

調査区は西端が打越遺跡に接し、東端は広桶の沢に至る幅18～30m・長さ300mの東西に細長い区域である。地形的な制約と調査上の便宜の為、西端から約120m東の小沢に沿った農道を境に西区と東区に分け、それぞれ別々のグリッドを設定した。西区のグリッドは打越遺跡のものをそのまま延長して設定した。(東角地遺跡第1図)東区のグリッドは道路中心杭No.63とNo.65の隣りに任意の2点を取り、それを基準点3・4として設定した。(東角地遺跡第2図)基準点の平面直角座標第X系による成果値、および杭高(L)は以下のとおりである。

基準点3 $X = -108,356.009\text{m}$ $Y = 64,694.866\text{m}$ $L = 40.700\text{m}$

基準点4 $X = -108,339.195\text{m}$ $Y = 64,731.084\text{m}$ $L = 38.298\text{m}$

区画は基準点4を原点に打越遺跡と同様に行った。グリッド名も同様の方法で呼称した。

古館跡遺跡

調査区はやはり道路建設予定地に沿った幅17～45m、長さ130mの東西に細長い区域である。グリッドは、軸線の方向が平面直角座標第X系のX座標・Y座標に一致するように設定した。その手順は以下のとおりである。

① 調査区内の任意の2点を取り、基準点測量を実施した。その平面直角座標第X系による

成果値および杭高（L）は次のとおりである。

基準点1 $X = -108,232.768\text{m}$ $Y = 65,282.631\text{m}$ $L = 43.315\text{m}$

基準点2 $X = -108,262.030\text{m}$ $Y = 65,232.126\text{m}$ $L = 43.138\text{m}$

② 基準点1・2から $X = -108,250.000\text{m}$ （この値のY軸線が調査区南北のほぼ中央を通過する）のY軸線を求め、その線上にグリッドの基準となる2点A・Bを設けた。そのY座標の値は、基準点Aが $Y = 65,280.000\text{m}$ 、基準点Bが $Y = 65,240.000\text{m}$ である。

区画の大きさは大区画が20mメッシュ、小区画が4mメッシュである。区画名は、大区画名が西から東にA～H、北から南へⅠ～Ⅲを与え、その組み合わせでⅠA区・ⅡB区のように呼称した。小区画名は大区画毎に1～25の番号を与え（古館跡、第1図）、大区画名と組み合わせでⅠA1・ⅡB25のように呼称した。

(2) 粗掘り・精査

打越遺跡・東角地遺跡の場合は調査開始当初、地形の状況に応じて数本のトレンチを入れ、遺構のあり方・遺物の散布状況の把握に努めた。両遺跡とも遺物の出土地点の一部に限られることから、その地点を除くほぼ全面の表土除去は重機による。古館跡の場合は当初、館の主体部の調査であること、重機の進入路の確保が難しいことなどから、極力人力による粗掘りを計画した。しかし、表土中の遺物がきわめて少ないこと、遺構の密度が粗であること、重機進入路の見通しがついたことなどから、その後の表土除去は重機による。

検出された遺構の呼称は次のようにした。打越遺跡・東角地遺跡では遺構の種類毎に番号を付し、1号ピット・2号採掘跡のように呼称した。なお、単独遺構の場合は与えていない。古館跡の場合は、大区画毎・遺構の種類毎に番号を与え、ⅡB-1住居址のように呼称した。後者は前者に比べ遺構数が多いためである。

遺構の精査は住居址が4分法、ピット類は2分法を原則とした。方形周溝や水路跡は適宜土層観察用のベルトを残し掘り進めた。採掘跡は検出時には遺構の性格が分からず、住居址に準じて掘り進めた。精査の各段階で図面の作成・写真撮影等必要な記録をとった。採掘跡については精査の過程で深さ3mを越えても完掘に至らず、崩落等の危険が生じたこと、物理的な制約があること等のため完掘を断念し、必要最少限の情報収集に努め調査を終えた。

遺物は粗掘り中のものは層位を確認し、小区画または大区画単位で取り上げた。遺構内からの遺物は必要に応じて記録をとった後、取り上げた。

(3) 実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量を原則とし、採掘跡や一部の遺構については平板を用いた。簡易遣り方測量は設定したグリッド毎に同一の座標系を用いて行った。すなわち、打越遺跡と東角地遺跡西区は基準点2を、東角地遺跡東区は基準点4を、古館跡は基準点Bをそれぞれ原点と

した座標系を用いた。実際の測定は、1 mメッシュを基本とした水平水糸を張って行った。断面図は任意の高さで作成している。縮尺率は1/20を原則とし、場合によって1/10を併用した。写真による記録には6×7 cm版のモノクロ1台、35mm版のモノクロとカラスライド各1台をセットとして使用し、遺構の全景、埋土の断面、遺物の出土状況等を撮影した。

2. 室内整理と報告書の作成

(1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検・合成、第2原図の作成を行い、トレース、図版作成の順に進めた。

遺物については、水洗と注記の一部を残して発掘現場で行い、残りは室内整理の最初の段階で行った。その後、接合・復元、仕分け・登録の順に進めた。さらに、報告書掲載遺物の実測や拓本、写真撮影、計測、トレース、図版作成を行った。これらの作業の一部は併行または順不同で行った。

(2) 遺構関係の報告

スクリーントーンの使用については平面図では各図版に明示し、断面図では地山を網目で表現した。

図版の縮尺は、以下のとおりである。

打越遺跡 方形周溝-1/100 ビット-1/40 採掘跡-1/80
東角地遺跡 住居状竪穴遺構・ビット-1/40 採掘跡-1/80 水路跡-1/100
古館跡 住居址・住居址状遺構-1/60 土坑-1/40
その他は-1/60～1/120・1/300

写真図版の縮尺は不定である。

(3) 遺物関係の報告

図版の縮尺は、以下のとおりである。

打越遺跡 土器-1/2 石器-1/2 陶磁器・古銭-原寸
東角地遺跡 土器-1/3 剥片石器・石製品-1/2 礫石器-1/3
古館跡 土器-1/3・1/4 剥片石器-2/3 礫石器-1/3・1/4

写真図版の縮尺はおおよそ以下のとおりである。

打越遺跡 土器-2/3ないし1/2 石器-2/3 陶磁器・古銭-2/3
東角地遺跡 土器-1/2 剥片石器・石製品-2/3 礫石器-1/3 陶磁器-2/3
古館跡 土器-1/5 剥片石器-2/3 礫石器-1/5
陶磁器・鉄製品・古銭-原寸

遺物は各遺跡毎に図版・写真図版を同一番号で統一した。

土器は、次のように分類した。なお、細分は遺跡別によった。

I 群 縄文時代前期の土器

II 群 縄文時代中期の土器

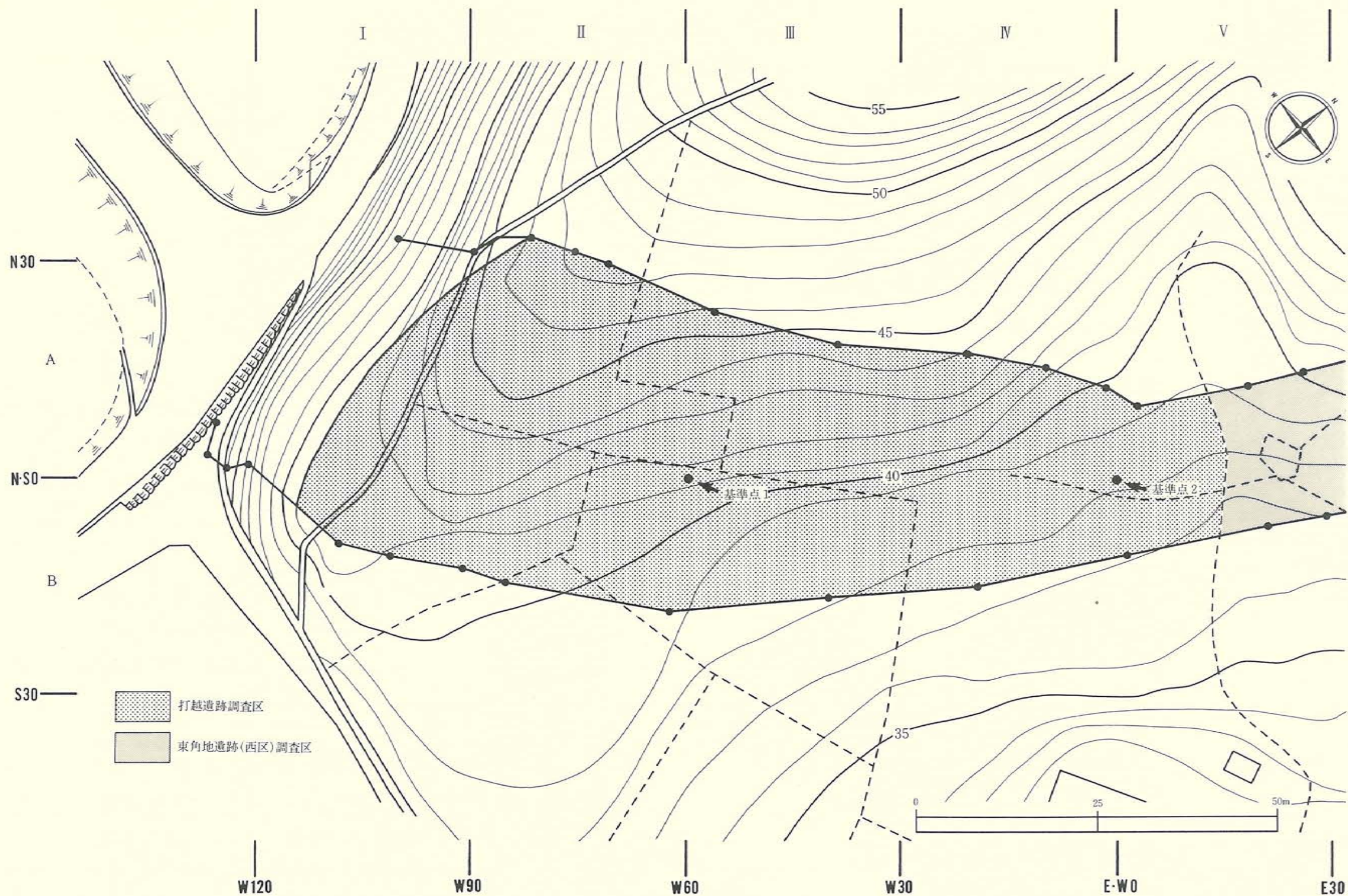
III 群 縄文時代後期の土器

IV 群 縄文時代晩期の土器

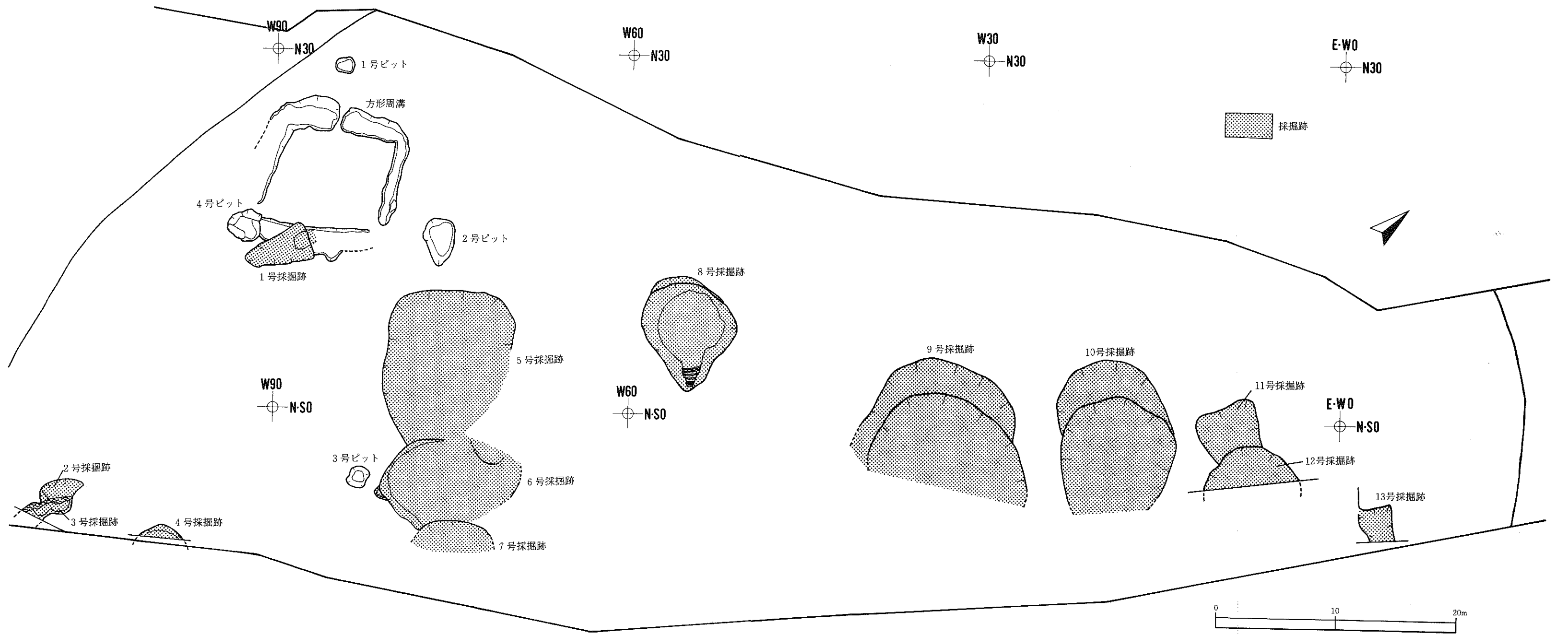
V 群 弥生時代の土器

IV. 打^{うち}越^{こし}遺跡

所在地 陸前高田市矢作町字東角地3ほか
委託者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和62年6月1日～8月5日
調査対象面積 4,632m²
発掘調査面積 4,632m²
遺跡番号・略号 NF66-0065・UK-87
調査担当者 高橋与右エ門・玉川英喜・中川重紀・酒井宗孝
協力機関 陸前高田市教育委員会



第1図 打越遺跡 地形図・グリッド配置図



第2図 遺構配置図

1. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は方形周溝1基、ピット4基、採掘跡13基である。方形周溝・ピットは調査区西側の南西に延びる尾根状の頂部付近緩斜面上から、採掘跡は調査区全体から検出されている。出土遺物は土器・石器類・陶磁器類・古銭である。土器は総量で小コンテナ1箱である。摩滅した小破片が多く、時期を推定できるものは少ない。図版には文様や縄文が比較的明瞭なもの13点を選択して掲載した。縄文時代前期・後期・晩期・弥生時代の土器片がある。石器類は石鏃等の剥片石器や磨石等の礫石器合わせて32点、ほかに微細な剝離痕のある剥片100点余りが出土している。陶磁器類は19点出土している。いずれも小破片で、粗掘り中に出土した近・現代のものと思われる16点については報告を省略した。古銭は仙台通宝5点、寛永通寶3点、元豊通寶1点が出土している。遺構内からの出土遺物は1号採掘跡埋土からの縄文土器片と磁器片、8号採掘跡埋土上部からの陶磁器片・元豊通寶・石鏃を除いて他にはなく、遺物については遺構の内外を問わず(2)出土遺物の項で一括した。

(1) 遺 構

方形周溝 (第3図、写真図版2)

I A区・II A区の南向き尾根状緩斜面の頂部で検出されている。検出面は表土除去後の黄褐色土層(IV層)上面である。なお、この付近はII・III層を欠く。本遺構は東西12m・南北13.5mの規模で、溝が方形に周る。溝の幅は270~80cm・深さ15~45cmである。溝の断面形は壁が外傾し、皿状を呈する。底面には小凹凸が多く見られる。溝は北辺中央部と南東隅で途切れる。西辺の西側壁と南西隅及び南辺の一部は攪乱を受けたり、採掘跡に切られている。

埋土は暗褐色土・黒褐色土が卓越し、埋土下部や壁際に地山の汚れた褐色土が見られる。埋土にはスレート状の小礫や少量の炭化物が含まれる。

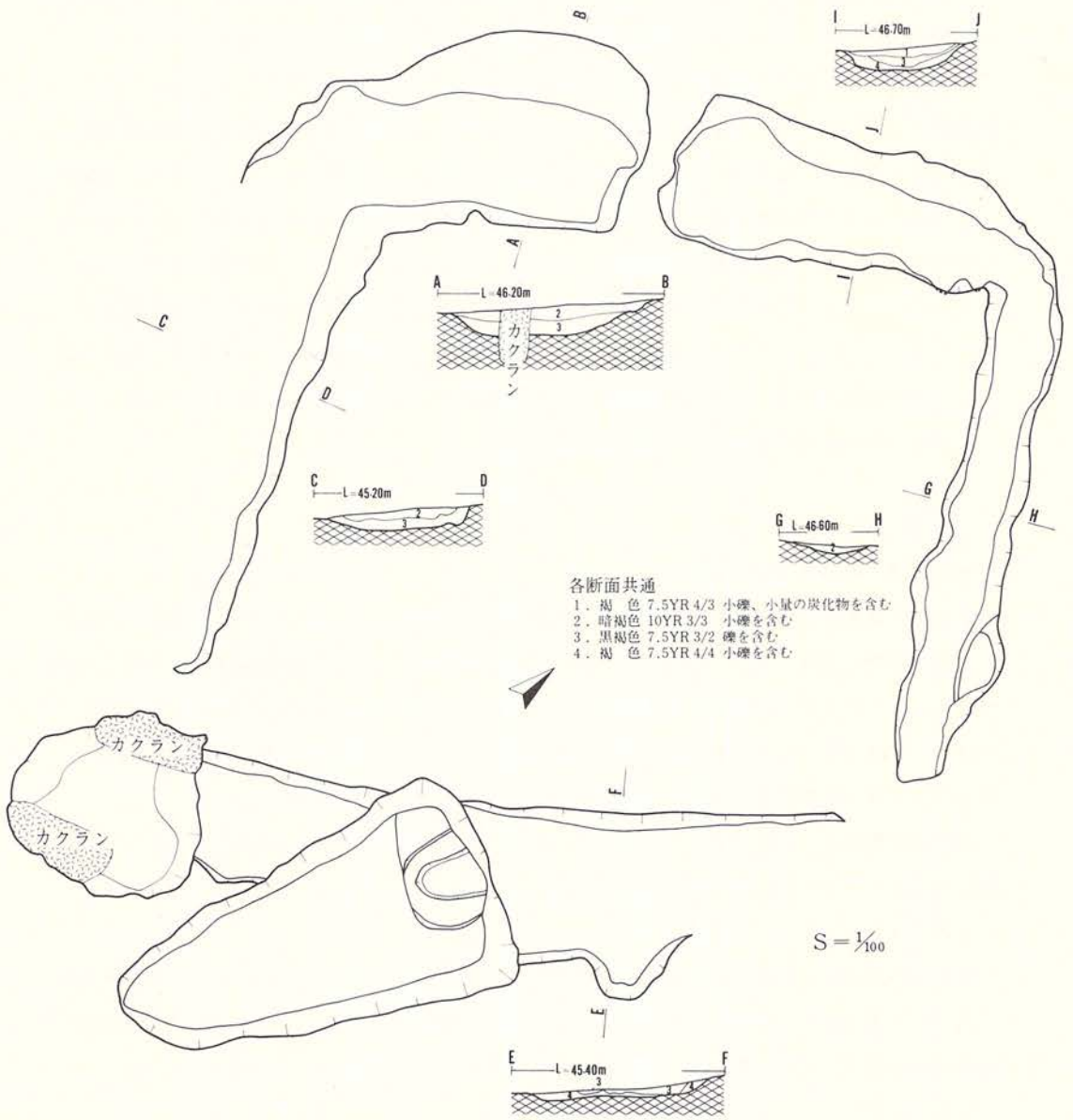
1号ピット (第4図、写真図版3)

方形周溝北辺から北側へ2.4mの所に位置する。検出面は同じく表土を取り除いたIV層上面である。平面形はやや角張った楕円形を呈し、規模は開口部で160×130cm、底部で143×112cm、深さ40cmを測る。底面は礫による凹凸がある他は平坦で、壁は直立ないしは東側で若干オーバーハングする。

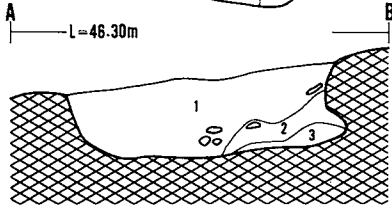
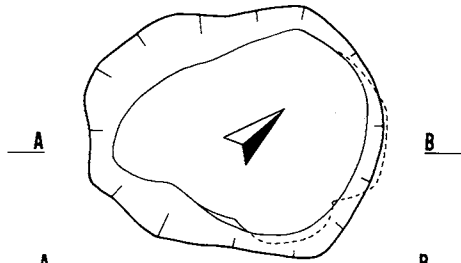
埋土は3層に分かれ、締りの弱いシルト質の暗褐色土が卓越し、他に砂礫混じりの褐色土が東側下部に堆積する。

2号ピット (第4図、写真図版3)

方形周溝の南東隅から東へ2.7mの所に位置する。検出面は1号ピットと同様である。平面形は卵形をしたやや歪んだ楕円形を呈する。規模は開口部400×265cm、底部275×210cm、深さ

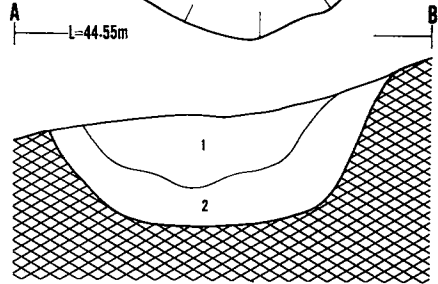
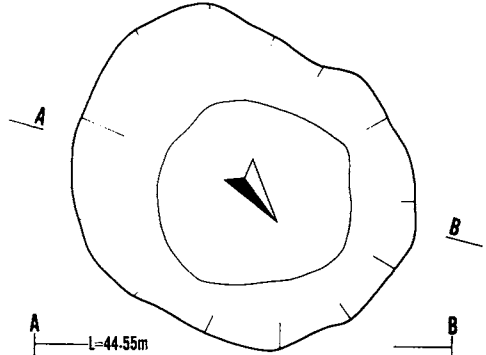


第3図 方形周溝



1. 暗褐色 7.5YR 3/4
2. 褐色 7.5YR 4/3 砂礫を含む
3. 褐色 7.5YR 4/6 砂層・礫を含む

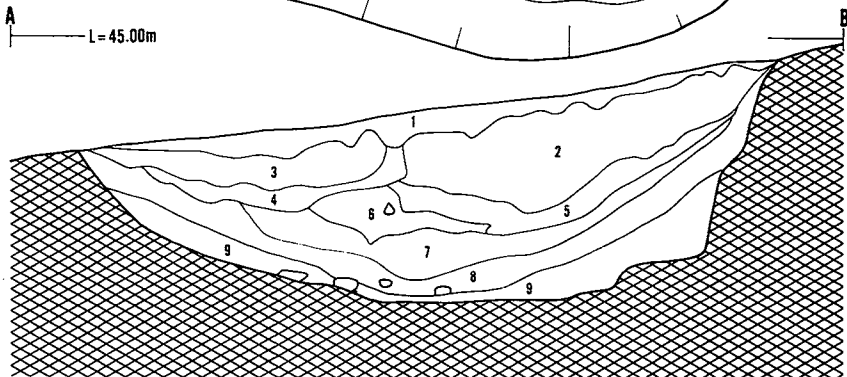
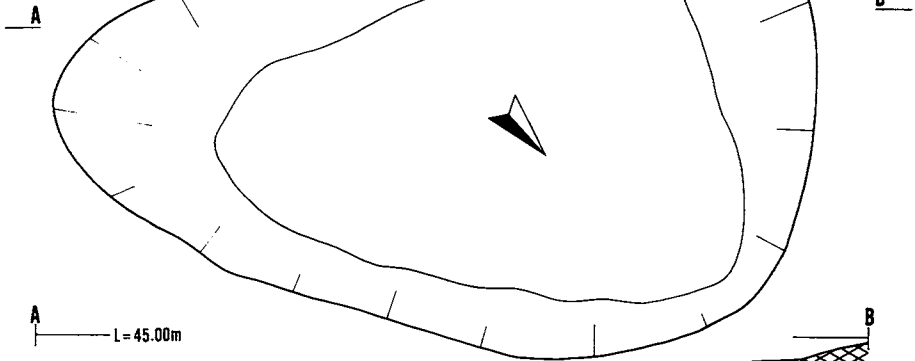
1号ピット



1. 褐色 7.5YR 4/4 礫を多く含む
2. 褐色 7.5YR 4/6 礫を含む

3号ピット

1. 暗褐色 10YR 3/3 小礫を含む
2. 黒褐色 10YR 2/3 少量の少礫を含む
3. 黒褐色 10YR 3/2 少礫を含む
4. 褐色 7.5YR 4/4 少礫を含む
5. 褐色 7.5YR 4/6 少量の少礫を含む
6. 黒褐色 10YR 2/3 礫を含む
7. 褐色 7.5YR 4/6
8. 黄褐色 10YR 5/6
9. 明褐色 7.5YR 5/6



2号ピット

第4図 ピット(1)

S=1/40

110cmを測る。底面は腕状を呈し、壁はゆるく外傾する。

埋土は9層に分かれ、上・中部は小礫混じりの暗褐色土や黒褐色土、下部は大礫を含む粘土質の黄褐色土や明褐色土である。

3号ピット (第4図、写真図版3)

方形周溝の南辺から南側へ18mの所に位置する。平面形はやや不整の楕円形で、規模は開口部185×155cm、底部105×95cm、深さ60cmを測る。底面は平坦で、湾曲して壁へ続く。壁はゆるやかに外傾する。

埋土は2層に分かれ、レンズ状に堆積する。上部は小礫を多く含む褐色土、下部は上部に同質であるが、色調にやや赤味を帯びる。

4号ピット (第5図、写真図版省略)

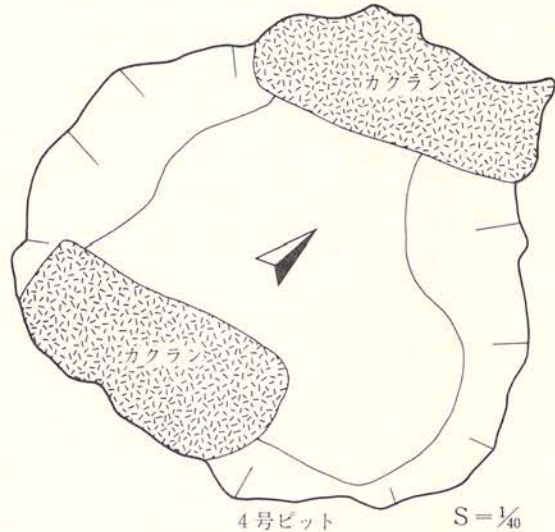
方形周溝の南西隅で重複し、本遺構が方形周溝を切っている。検出面は方形周溝と同じである。平面形はやや不整な楕円形で、規模は開口部280×255cm、底部200×160cm、深さ約70cmを測る。南側と北側に見られる攪乱は電柱設置の際の跡である。底面は若干凹凸が見られ、壁は外傾する。西壁は凹凸が多い。

埋土は礫を含む暗褐色土の単層である。

1号採掘跡 (第6図、写真図版4)

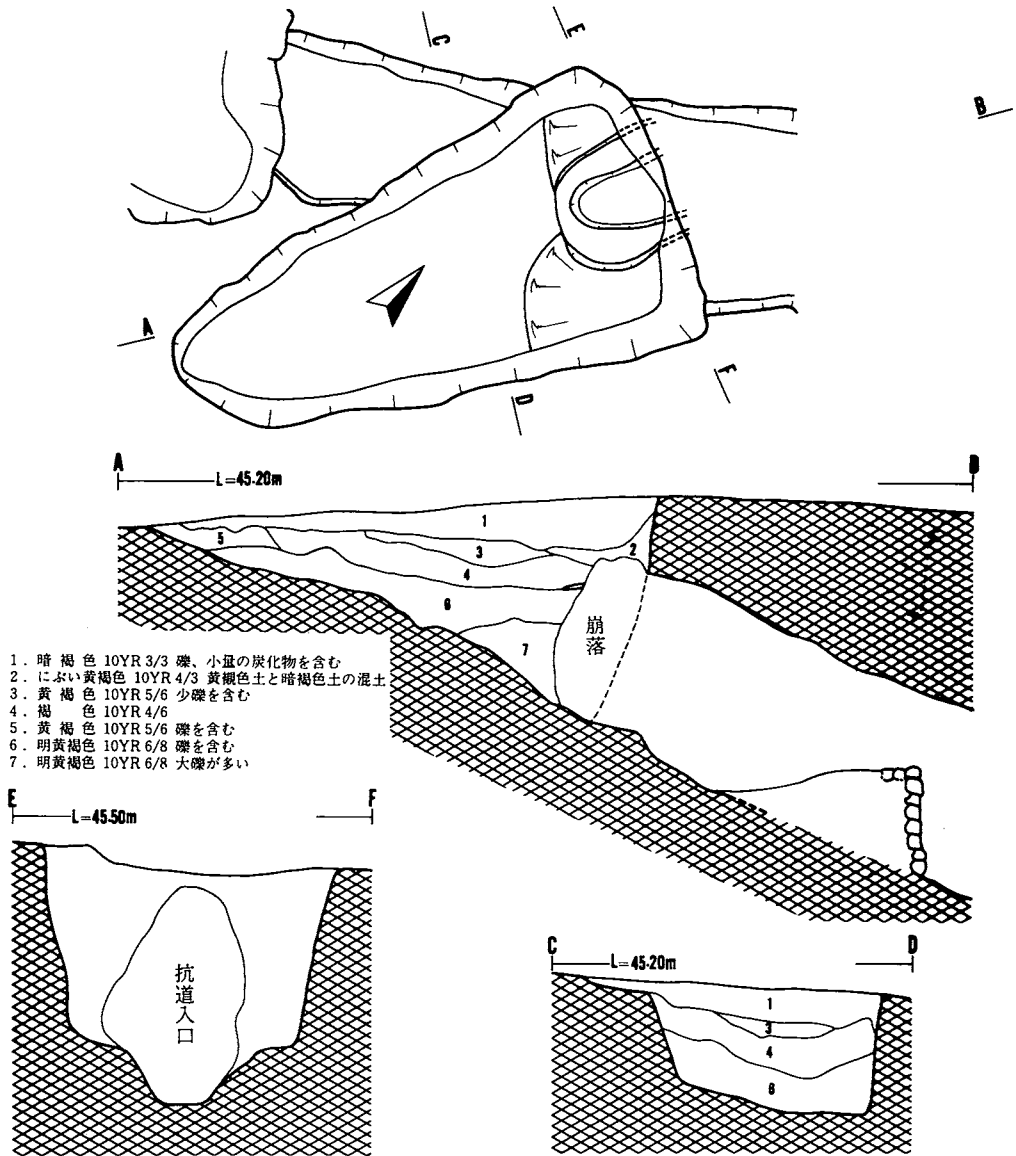
方形周溝南辺で重複関係にあり、本遺構が方形周溝を切っている。本遺構は所謂坑道掘りの採掘跡で、表土除去後のIV層上面で検出された跡は横穴式の坑道に続くスロープ状の出入口部分

である。この出入口の平面形は隅丸の二等辺三角形を呈し、規模は三角形の底辺部分で3.1m、高さ5.6mである。スロープは西から東に向かって下り、約5.5m進んだ所で坑道に続く。坑道に続く部分での深さは約2.2mである。出入りに使用したスロープ以外の壁はほぼ垂直である。坑道入口の大きさは高さ約220cm、幅約140cmで、楕円形状を呈する。坑道内部は部分的に崩落しているが、埋まりきっておらず空洞になっている。奥行きは10m以上あり、途中枝分れしているが、崩落等の危険を伴うため、詳細は確認していない。坑道入口から3m程進んだ所には土留め用と思われる石組みが見られる。坑道内部の壁面には縦方向に工具痕が見られる。



第5図 ピット(2)

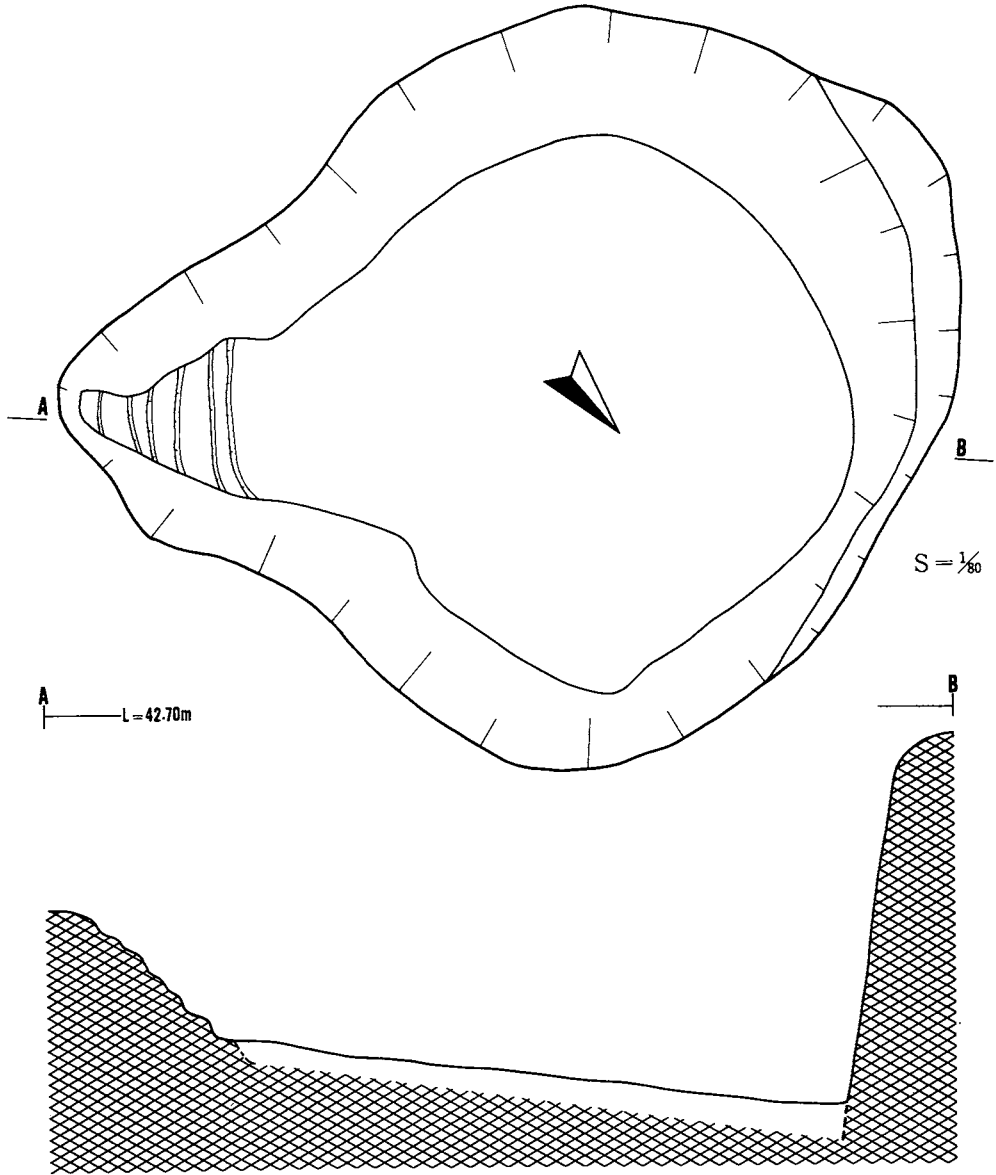
スロープ状出入口の埋土は7層に分かれ、上部は礫を含む暗褐色土、中・下部は粘土質の黄褐色土で、下部には径10cm以上の礫を含む。埋土の状況は掘り出した土が自然に再堆積した様相を呈する。



1. 暗褐色 10YR 3/3 礫、少量の炭化物を含む
2. におい黄褐色 10YR 4/3 黄褐色土と暗褐色土の混土
3. 黄褐色 10YR 5/6 少礫を含む
4. 褐色 10YR 4/6
5. 黄褐色 10YR 5/6 礫を含む
6. 明黄褐色 10YR 6/8 礫を含む
7. 明黄褐色 10YR 6/8 大礫が多い

S = 1/80

第6図 1号採掘跡



第7図 8号採掘跡

8号採掘跡（第7図、写真図版5）

Ⅲ A区の南向き緩斜面に位置し、1号採掘跡のスロープ状入口から東に約28mの所にある。
1号採掘跡と8号採掘跡の間には5・6・7号採掘跡がある。本遺構の平面形は円形を基本

とし、南側に張り出しを持つ。規模は開口部が9.5×8mで、張り出しを持つ方向にやや長い。深さは斜面上方部で約4m掘り下げても底面に達せず、底部の状況は完掘していないので不詳である。壁は若干外傾するものの、垂直に近い。南側の張り出し部分では階段状の段差が6段検出されている。一段毎の高低差は約20cmで、出入口として使用されたものと推定される。

埋土は上部に黒褐色～暗褐色土がレンズ状に堆積する。中・下部の壁際には褐色ないしは黄褐色土と黒褐色土が壁から底部に斜行して堆積する。礫も多く含まれ、下部には大礫も多い。東側中・下部には投げ込みと思われる大礫が多く含まれている。埋土の状況は、下部は人為的な部分も見られるが、上部は自然埋没の様相を示している。

(2) 出土遺物

(a)土 器

I群土器 (第8図、写真図版6. 1～4)

1～3は体部破片で器種はどれも深鉢と思われる。1は撚糸文、2はRL単節斜縄文、3はRRL直前段反撚で施文される。いずれも胎土に繊維を含むことからI群土器とした。4は鉢の口縁部破片である。波状口縁をなし、波頂部には内面から外面にかけて粘土紐を縦位に貼付している。その下位には山形の沈線と平行沈線が各2条ずつ横走する。地文は磨滅して不明である。所属時期は大木6～7a式と考えられるが、中期の土器が他になく、とりあえずI群土器とした。

III群土器 (第8図、写真図版6. 10)

10は沈線で区画し、その内外を縄文と磨消で文様を施文する磨消縄文である。

IV群土器 (第8図、写真図版6. 11)

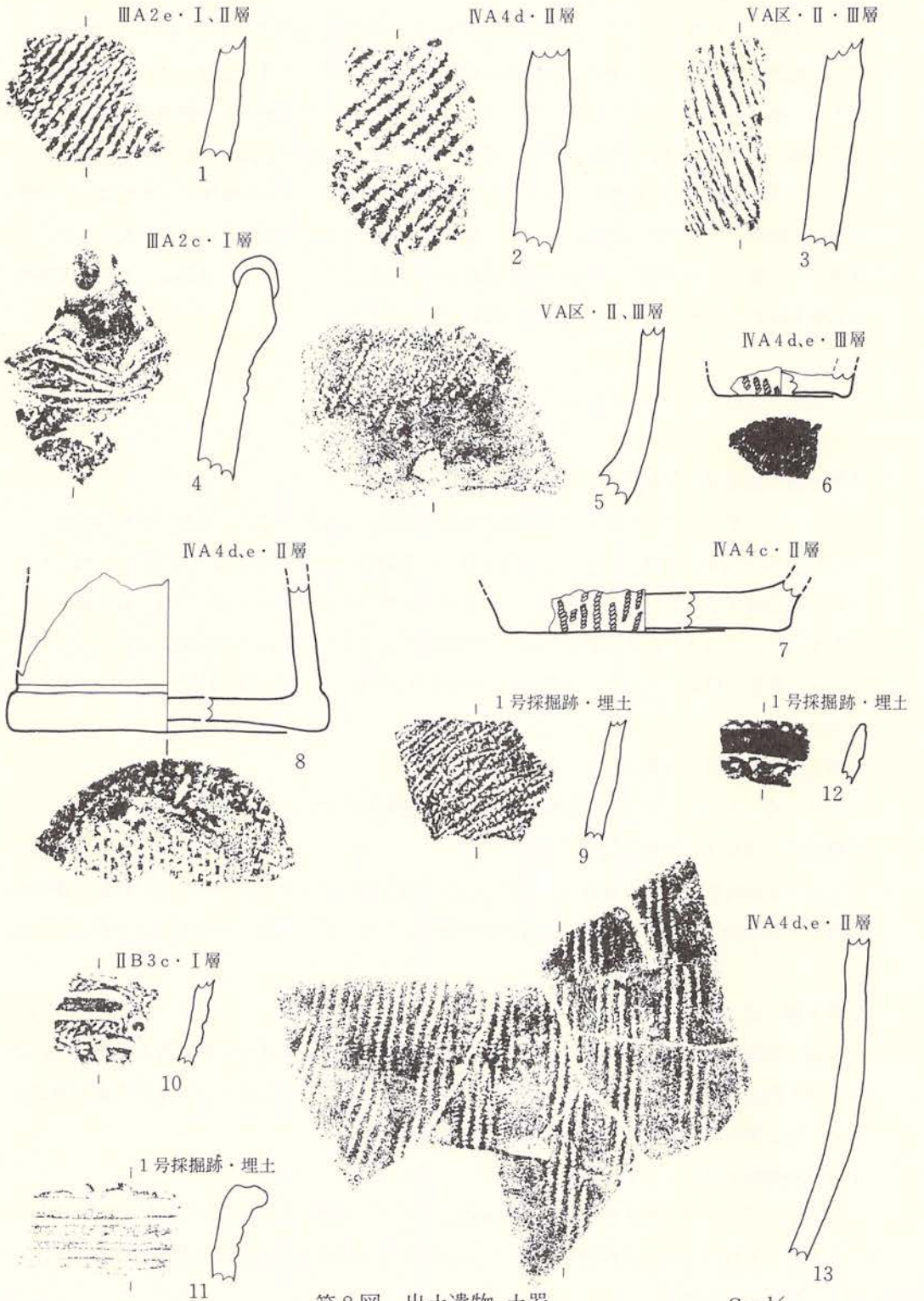
11は口縁部破片で、平行沈線と連続する小さい刺突痕による文様がつけられている。器面は内外面とも磨かれている。口唇部には沈線で段差がつけられ、2個1対の突起と小さい刻みがつく。

V群土器 (第8図、写真図版6. 12・13)

12は小型鉢の口縁部破片で、口縁端に細い沈線が横走し、その直上に刺突痕が連続する。口縁端から約1cm下位にやはり沈線が横走し、沈線上とその直下に連続する交互刺突痕が施文される。13は甕の体部破片で、縦位の撚糸文が施文されている。

その他の粗製土器 (第8図、写真図版6. 5～9)

5～9は縄文ないし無文の粗製土器である。5～8は底部、9は体部の破片である。5～7は撚糸文、9はLLR直前段反撚を施文し、8は無文である。6は底面にも撚糸文が施文され、8の底面には網代痕がつく。



第8图 出土遺物 土器

S = 1/2

(b)石 器

剝片石器 (第9～11図、写真図版7～9、14～44)

14～25は石鏃である。12点中完形品は14・15・21・25の4点で、17は身部中央から先を欠損し他は先端部や基部の一部を欠損している。22は有茎鏃であるが他は無茎鏃である。基部の形態は、19・25が平基、22が凸基のほかは凹基である。凹基のものの抉りの程度は、16・24が半円状でやや深いほかはいづれも浅い。側縁部の形態は、18・21・25がやや外湾するほかはいづれも直線的である。身部形状は、14・22が正三角形、他は二等辺三角形である。調整は15・16・18・19・22・24は両面加工、14・17・21・25は裏面の一部に、23は両面の一部に一次剝離面を残す。20は風化が進んで石が脆くなっており、剝離痕の観察は不能である。12点中5点にはタール状の付着物が見られる。16は基部から身部の中央部まで付着し、舌状に観察される。18・19・25は剝離面の稜部などに点在し、23は身部の先端部に向かって徐々に先が細くなるように付着している。

26は石錐と思われる。身部先端と頭部の一部を欠損する。身部は断面形が菱形で、両面加工で棒状に作り出している。

27・28は石匙である。27は大きな剝離によって形状を整え、上部両側辺に浅い抉りを入れてつまみ部を作り出している。側辺や先端部は部分的に細かい二次調整を加えて刃部を作り出している。28は上部を欠損する。欠損部につまみ部があったと思われる。調整は表面がほぼ全面に、裏面が周辺部のみの加工である。

29～43は不定形石器としたものである。当遺跡からは100点を越す剝片が出土しているが、その中には二次加工によって刃部が作り出されているものや形状を整えているものと微細な剝離痕の見られるものとがある。前者を不定形石器とし、後者を剝片として分類し、剝片については後述する。29は両面からの深い剝離によって比較的角度の小さい刃部を作り出している。左右側辺や先端には微細な剝離痕が見られる。30は一部に自然面を残すが、表・裏面とも大きな二次剝離を行い、角度の小さい縁辺を作り出している。側辺部にはやはり微細な剝離痕が見られる。31～33・35・37・38・40・41・43には縁辺部に連続する小剝離によって刃部が作り出されている。31・33・35は1縁辺に、37・38は2縁辺に角度の小さい刃部を持ち、32・40・41・43は1縁辺に角度の大きい刃部を持つ。34は角度の小さい縁辺に小剝離が部分的にあり、42は尖った下端の裏面に小剝離がある。36は表面の一部に比較的大きい二次剝離面を持つ。鋭利な縁辺には微細な剝離痕が見られる。39は比較的大きい剝離による両面加工が施され、角度の小さい縁辺部には微細な剝離痕が見られる。

44は打製石斧である。基部側の約半分を欠損する。両面加工によって短冊形に作り出し、刃部形態は両刃直刃である。

礫石器（第11図、写真図版9・45・46）

磨石のみ2点出土している。いずれも1/2～1/3を欠損している。楕円状の円礫で、全面を磨面として使用している。

剥片（第11・12図、写真図版9・10・47～59）

115点の剥片が出土している。その大半はIV A・V A区の限られた範囲から出土しており、115点中100点には微細な剥離痕が見られる。それらの中から図版・写真図版には13点を掲載した。剥離痕が見られる縁辺の数と角度については以下のように分類した。1縁辺のもの（Ⅰ）、2縁辺のもの（Ⅱ）、3縁辺のもの（Ⅲ）とし、さらに鋭利な角度（30°未満）のもの(a)、小さい角度（30°～60°未満）のもの(b)、大きい角度（60°～90°未満）のもの(c)とするとそれぞれの個数は次のようになる。

Ⅰ			Ⅱ						Ⅲ			
a	b	c	a・a	b・b	c・c	a・b	b・c	c・a	a・a・b	a・b・b	a・b・c	b・b・b
22	10	1	18	10	2	20	5	4	2	2	2	2

この表からaの縁辺の総数は90、bのそれは69、Cのそれは16となり、鋭利な縁辺に微細な剥離痕の見られる例が多い。縁辺の形状は直状・凸状・凹状・その他と様々であり、それぞれの総数は直状100、凸状41、凹状27、その他7である。また、図版中の52や57に矢印で示したように縁辺を縦方向に剥離した例が見られる。50は石核かもしれない。

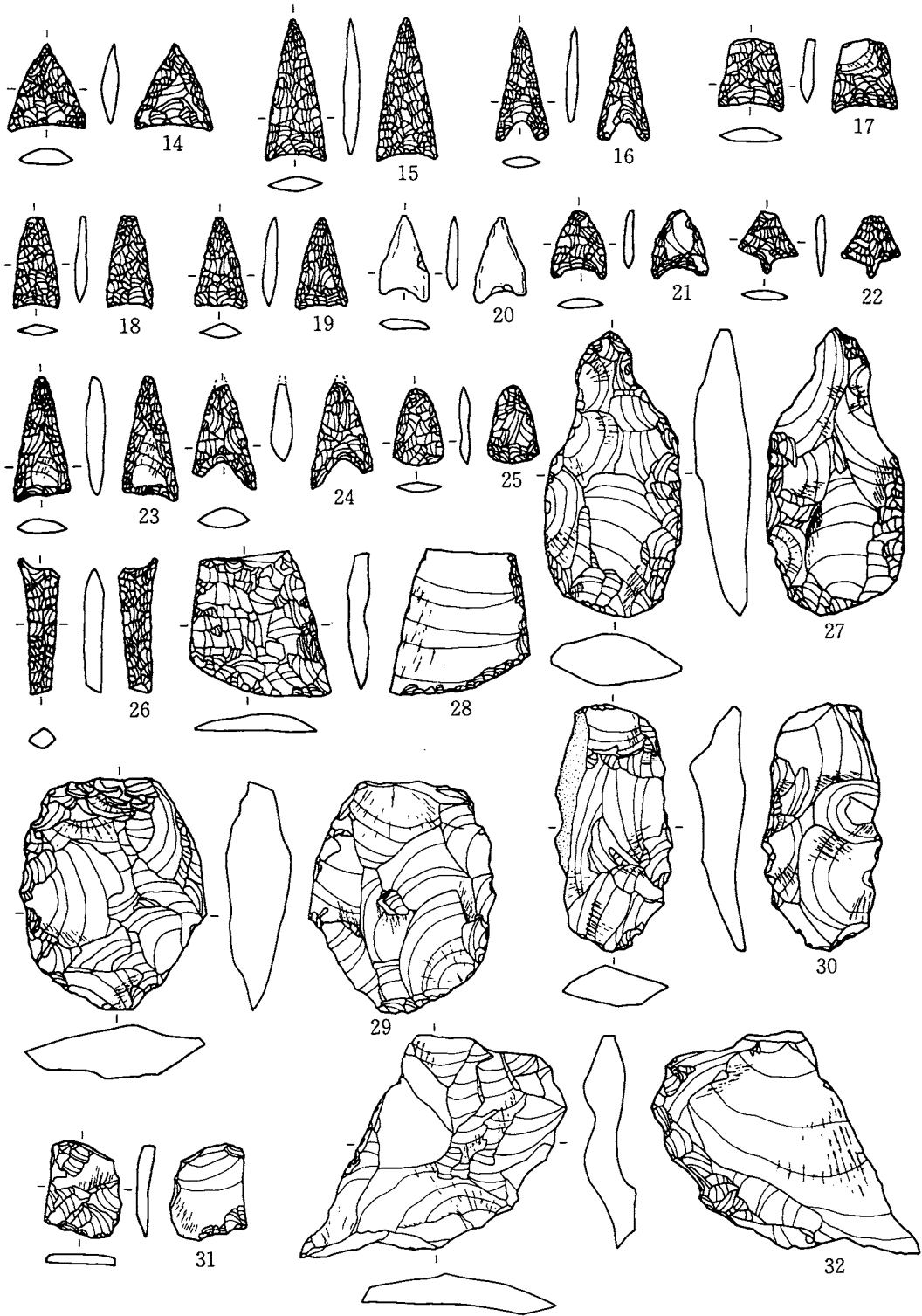
石質はすべての剥片が雫石西部新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩か流紋岩質極細粒凝灰岩である。石器計測一覧表の中には図版に掲載したもののみ掲げている。

(c)陶磁器（第12図・60～62、写真図版10・60～63）

60はグリッドⅢA2eのⅠ・Ⅱ層からの出土である。舶載の染付け碗で、16世紀後半以後のものと思われる。61・63（写真図版のみ掲載）は8号採掘跡埋土上部からの出土で、61は舶載の染付けの皿、63は美濃系の天目茶碗の破片である。どちらも16世紀末以後のものと思われる。62は1号採掘跡埋土からの出土である。染付けの皿の破片で、新しい時期のものと思われる。

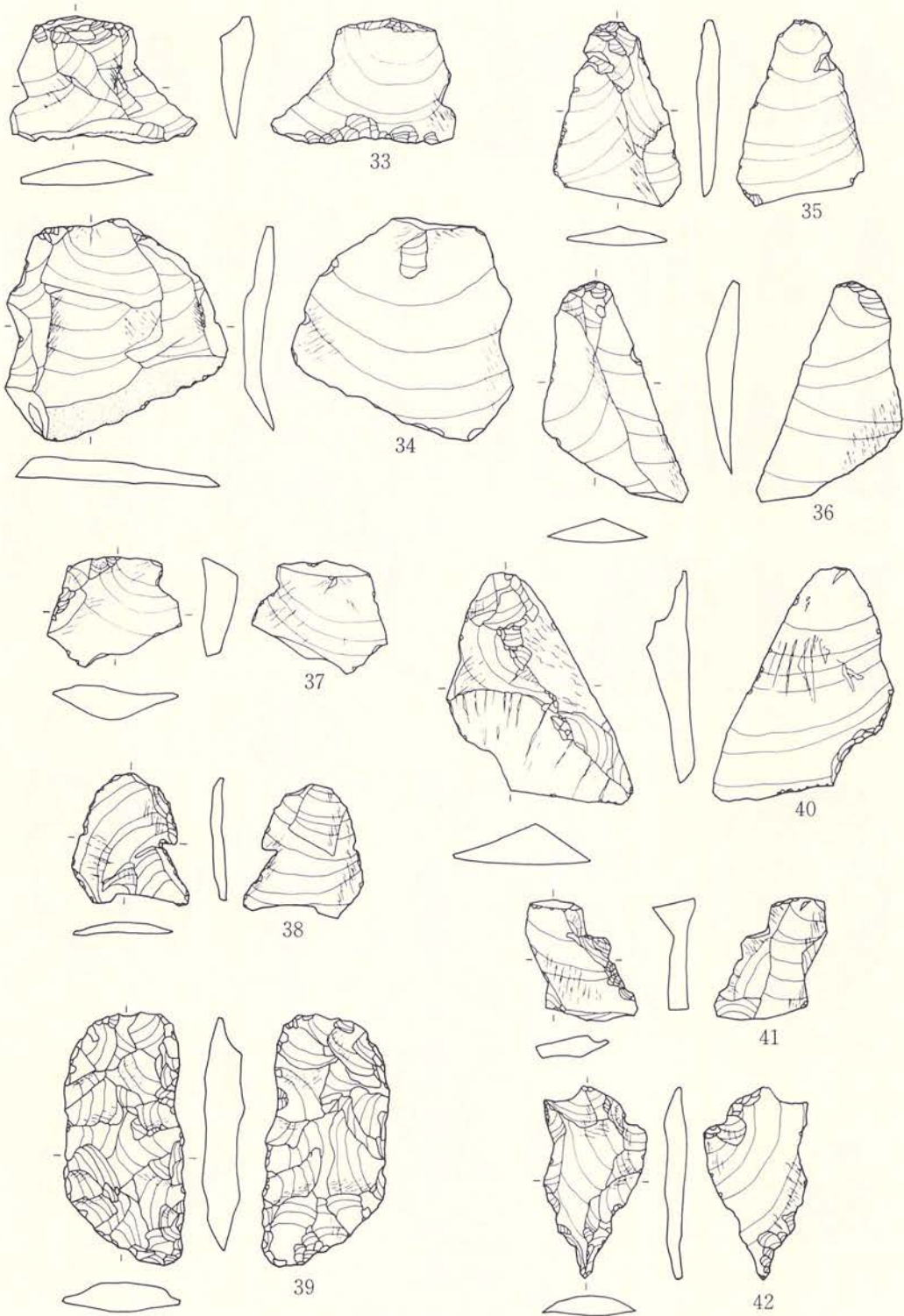
(d)古 銭（第12図・64～67、写真図版10・64～72）

64～67は図版・写真図版を、68～72は写真図版のみを掲載している。64～66は寛永通寶で、64・65はグリッドⅣA2cのⅠ層から、66はグリッドⅡBoaのⅠ層からの出土である。67は1,078年初鑄の宋銭元豊通寶である。68～72は仙台通寶で、いずれもグリッドⅣA2cのⅠ層からの出土である。



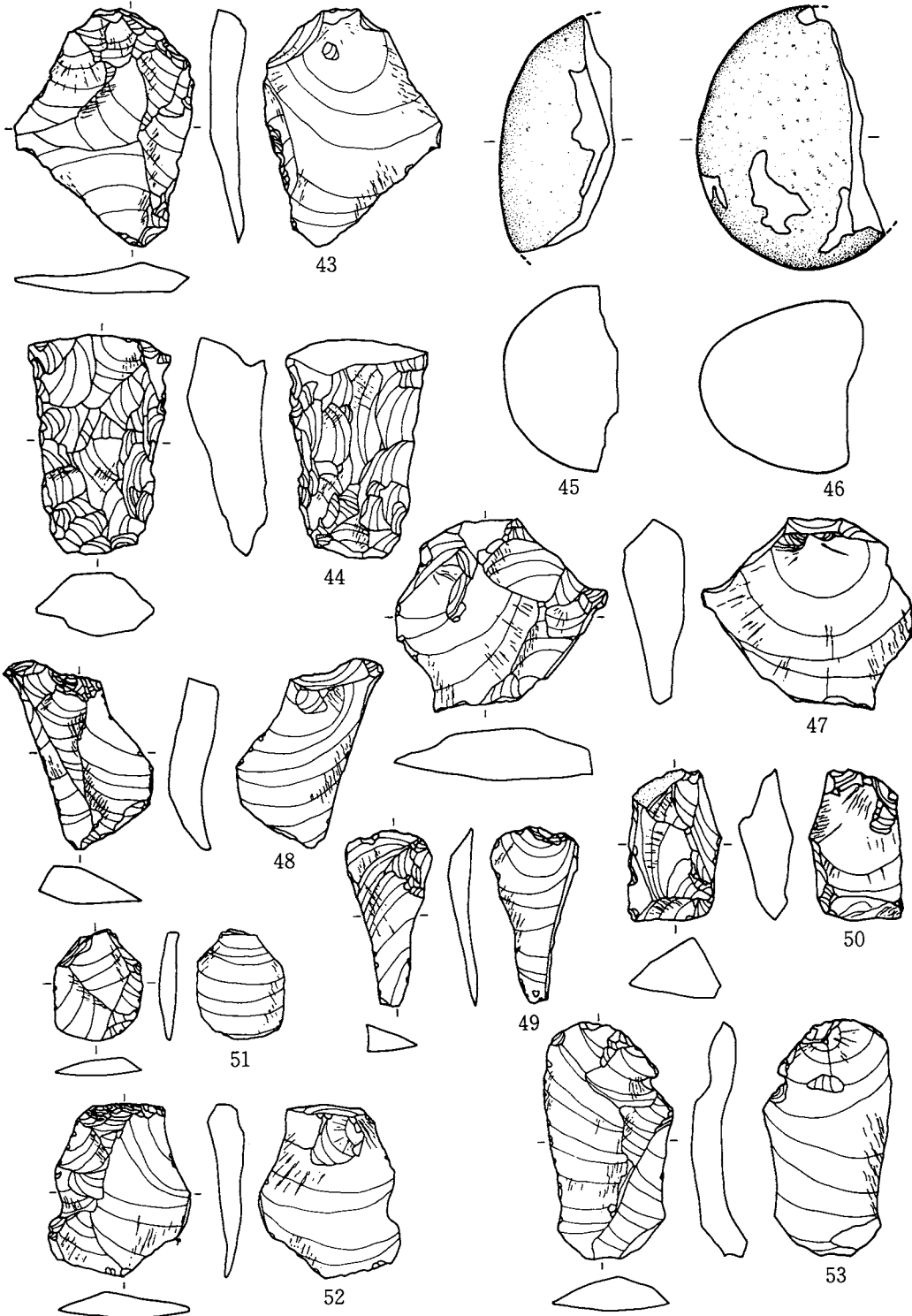
第9图 出土遗物 石器(1)

S=1/2



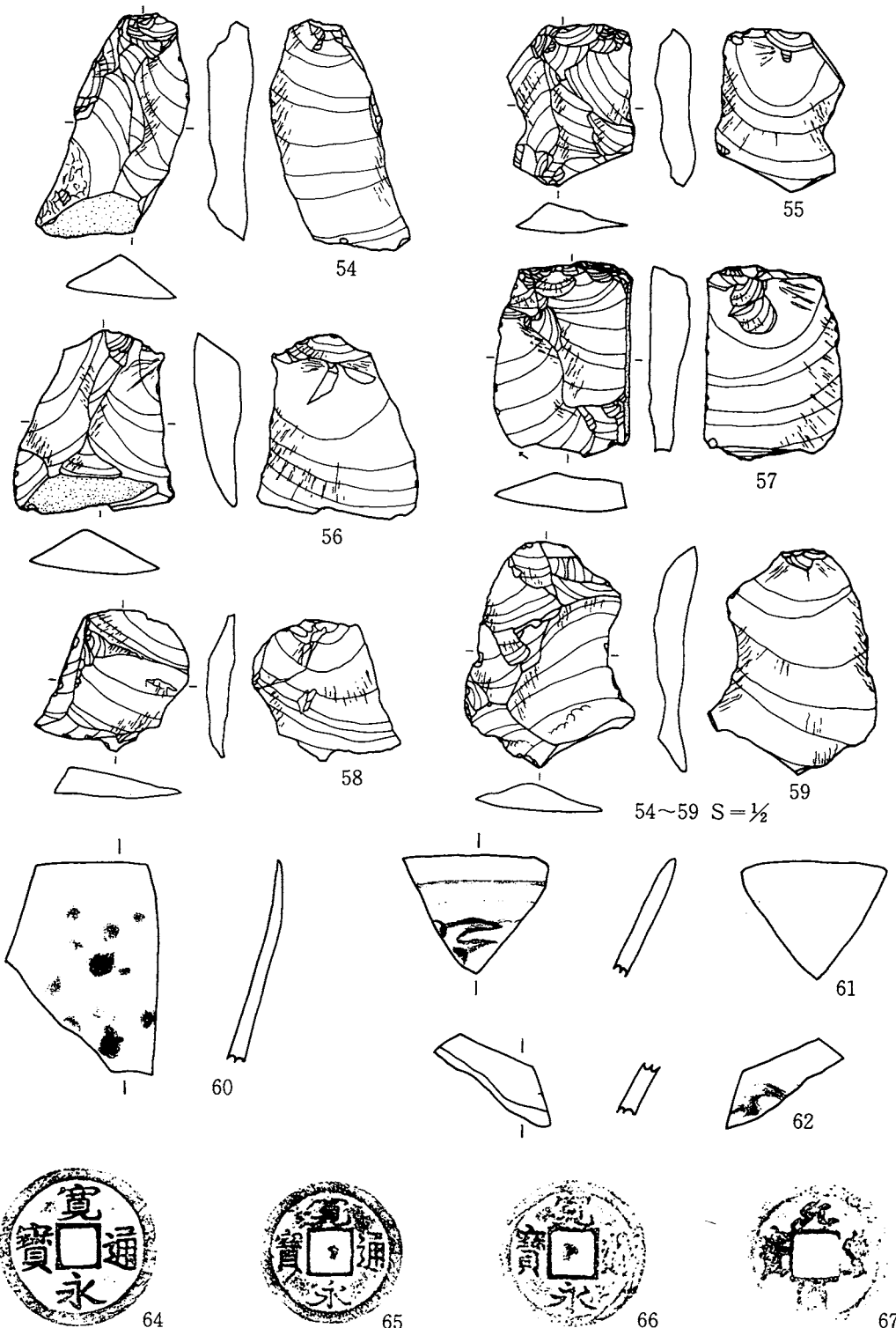
第10图 出土遺物 石器(2)

S = 1/2



第11图 出土遗物 石器(3)

S = 1/2



第12図 出土遺物 石器(4)・陶磁器・古銭

石器類計測一覽表

図版・番号	出土地点	層位	器種	最大長 ^{cm}	最大幅 ^{cm}	最大厚 ^{cm}	重量g	石質	産地
8-14	II A4d	I	石 鏃	25.7	23.0	5.3	2.2	玻璃質流紋岩	北上山地 中世界
8-15	III A区	II	〃	42.6	18.2	4.8	2.5	〃	〃 〃
8-16	III A4e	II	〃	(33.7)	15.7	2.9	0.9	〃	〃 〃
8-17	IV A区	II・III	〃	(21.4)	19.4	3.9	1.6	〃	〃 〃
8-18	IV Aod	I	〃	(27.6)	14.4	3.8	1.2	〃	〃 〃
8-19	IV A3e	II	〃	(27.0)	15.7	4.0	1.2	〃	〃 〃
8-20	IV A4d・e	III	〃	25.3	14.9	3.2	1.0	白色細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系
8-21	IV A4e	III	〃	20.1	16.4	3.2	1.0	玻璃質流紋岩	北上山地 中世界
8-22	8号採掘跡	埋土上部	〃	(17.8)	17.2	2.7	0.6	〃	〃 〃
8-23	〃	〃	〃	(37.3)	17.2	4.9	2.5	〃	〃 〃
8-24	〃	〃	〃	(32.6)	(19.2)	5.9	2.1	粘板岩	〃 古世界
8-25	〃	〃	〃	23.1	14.5	3.3	1.0	白色細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系
8-26	III A3d	III	石 鏃	(40.4)	(12.2)	5.8	2.2	粘板岩	北上山地 古世界
8-27	IV A4d	III	石 匙	87.0	40.5	16.5	49.2	凝灰質珪質泥岩	雫石西部 新第三系 中新統
8-28	V B1a	I	〃	(44.6)	(38.4)	6.1	13.1	〃	〃 〃
8-29	IV A B4d・e	II	不定形石器	70.8	56.3	20.8	71	〃	〃 〃
8-30	IV A4c	I	〃	74.0	35.5	15.5	32.9	〃	〃 〃
8-31	III A2e	I・II	〃	29.5	22.0	4.5	3.3	〃	〃 〃
8-32	IV A3d	III	〃	67.5	58.5	12.5	63	〃	〃 〃
9-33	IV A4c	II	〃	38.0	56.5	10.0	13.5	〃	〃 〃
9-34	IV A4d	II	〃	66.5	63.0	7.0	32.5	〃	〃 〃
9-35	IV A4d・e	II	〃	51.3	38.2	6.5	10.7	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃
9-36	IV A4d・e	III	〃	66.0	36.0	9.0	14.6	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
9-37	IV A4d・e	III	〃	35.0	40.3	11.7	12.1	〃	〃 〃
9-38	IV A4d・e	III	〃	39.3	34.4	3.6	5.9	〃	〃 〃
9-39	IV A4e	III	〃	76.5	35.5	12.0	28.9	玻璃質流紋岩	北上山地 中世界
9-40	V A区	II・III	〃	70.4	56.4	12.8	34.2	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西部 新第三系 中新統
9-41	V A区	III	〃	42.7	26.0	11.5	9.2	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
9-42	V A区	II・III	〃	36.3	54.8	6.6	9.4	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃
10-43	V A区	II・III	〃	70.4	51.8	10.7	30.8	〃	〃 〃
10-44	IV A1d	I	打製石斧	(66.5)	42.0	22.5	52.0	〃	〃 〃
10-45	IV A4d・e	III	磨 石	(70.0)	(34.0)	56.0	142	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系?
10-46	IV A4d・e	III	〃	78.5	(49.0)	50.5	230	〃	〃 〃 ?
10-47	V A区	II・III	微細な刻離痕を持つ剥片	56.7	62.1	17.3	50.8	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西部 新第三系 中新統
10-48	V A区	II・III	〃	58.6	46.5	13.6	23.8	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
10-49	V A区	II・III	〃	52.7	25.2	7.4	7.1	〃	〃 〃
10-50	IV A区	II・III	〃	45.0	26.9	19.5	21.7	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃
10-51	IV A4d・e	III	〃	33.0	26.2	5.4	4.9	〃	〃 〃
10-52	V A区	III	〃	51.5	42.2	10.0	17.7	〃	〃 〃
10-53	IV A3C	II・III	〃	70.7	37.8	10.6	30.9	〃	〃 〃
11-54	V A区	II・III	〃	65.9	38.4	18.8	34.4	〃	〃 〃
11-55	V A区	II・III	〃	47.7	37.2	11.9	19.0	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
11-56	IV A区	II・III	〃	59.8	47.4	13.2	27.6	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃
11-57	IV A4d	II	〃	58.0	39.7	13.0	35.8	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
11-58	IV A4d・e	III	〃	41.7	42.2	8.9	13.3	〃	〃 〃
11-59	IV A3c	II・III	〃	67.2	50.8	10.3	26.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃 〃

2. まとめ

本遺跡で検出された遺構は方形周溝1基、ピット4基、それに採掘跡13基である。採掘跡とした遺構は検出時には性格不明であったが、1号および8号の精査を進める過程において、以下のような点から採掘跡とした。1号採掘跡では底面がスロープ状の堅穴に横穴式の坑道が続き、坑道側壁には工具痕が認められ、土砂や礫を採掘したと考えられること、埋土は黄褐色土と黒褐色土等との混土や礫が多く、掘り下げ時に出たと思われる土が卓越すること、8号採掘跡では規模が径9m前後、深さ3m以上と大きく、埋土にやはり混土の再堆積や礫が多いこと、1・8号とも遺物が極端に少なく、周辺からの遺物も少ないことから恒常的・日常的な生活の場ではないと考えられること等の点が上げられる。

何の採掘跡かという点については、遺跡内から採取した石英礫等の分析結果（第3節に収録）で金の採掘が試みられた可能性が指摘されていることや、気仙地方が古来産金地帯として知られており、付近にも雪沢や玉山等に金山が点在することから、金の採掘を試みた可能性が高いと考えられる。

気仙地方の産金に関する文献資料の中から矢作地区およびその近隣に関するものを追って見ると、雪沢金山や竹駒地区玉山金山の記述が多い。採掘跡の所属する時代については出土遺物が少ないので、文献資料を含めて若干の考察を試みたい。

「雪沢金山。郷説に。文禄6年の頃。矢作の内雪沢といへる所に。金を多く掘り出し。慶長元年の頃は、民家商家共に千余軒有て。数千人居せりと云。今に其跡あり。」（気仙風土草）

「金鉞式所一は中部馬越山の内小字荏花倉にあり慶長の頃発見。一は村の北部雪沢山にあり文禄の頃発見開業及び廃業年月日共に詳ならず。」（気仙郡村誌）

「玉山。昔黄金多出たる山なり。（略）慶長12年の頃。矢作村雪沢の金師小野寺源太郎と云る者。初此山の麓なる坪と云里にて。金を掘出し段々此山に掘上り。（略）延宝8・9年の頃まで。人家多くありしが。金も不出して其後他所へうつれり。」（気仙風土草）

文献資料では雪沢や玉山の金山は16世紀末の文禄年間の頃から17世紀頃までは金の産出で賑わいを見せていたようである。そして、「政宗の支配地となった旧葛西領は北上山系の有力な産金地帯として、露頭金鉞が豊富であり、」云々「松坂家文書によれば、玉山金山は延宝年中から産金量が段々少なくなって享保初年以後掘子は次々と里へ下がって渡世するようになり、宝暦9年には遂に休山のやむなきに至った。」（1963年岩手県史第4巻）とある。出土遺物には1号採掘跡から染付けの破片、8号採掘跡から16世紀末以後と思われる陶磁器の破片と元豊通寶があるが、いずれも流れ込みと考えられるので、これらの遺物は遺構の所属する時期の上限と見るのが妥当であろう。以上のことから、本遺跡での採掘跡は16世紀から18世紀頃の遺構の可能性が考えられる。

採掘跡13基中5～7号および9～13号は、検出時における土層変化部分での推測によるものである。1号と8号の精査によって本遺跡の採掘跡には立坑と横穴式の坑道掘りのあることが確認されているが、同じく62年度に調査された東角地遺跡では立坑のもの、古館跡では両方の採掘跡が確認されている。また、周辺の山麓地斜面上には大きな窪みがいくつもあり、埋没しきれない立坑の採掘跡の可能性が考えられる。

本遺跡での出土遺物は総量は少ないが、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代の各土器片や石器があり、調査区外の周辺緩斜面上には各時代・時期の遺構の存在も予想される。矢作川左岸の付近一帯は縄文時代以来、長期にわたって人々の営みが続けられてきた場であると思われる。

＜引用参考文献＞

- 大船渡市史編集委員会 1979年 『大船渡市史』 第3巻資料編Ⅰ
岡村道雄・森嶋秀一 1984年 『里浜貝塚Ⅲ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅲ－』
東北歴史資料館資料集
岡村道雄 1979年 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例－その1－」東北歴史資料館研究紀
要第5巻
笠原信男・茂木好光 1986年 『田柄貝塚Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書第111集
小岩末治 1963年 『岩手県史』 第4巻近世編 P509～P538

写 真 图 版

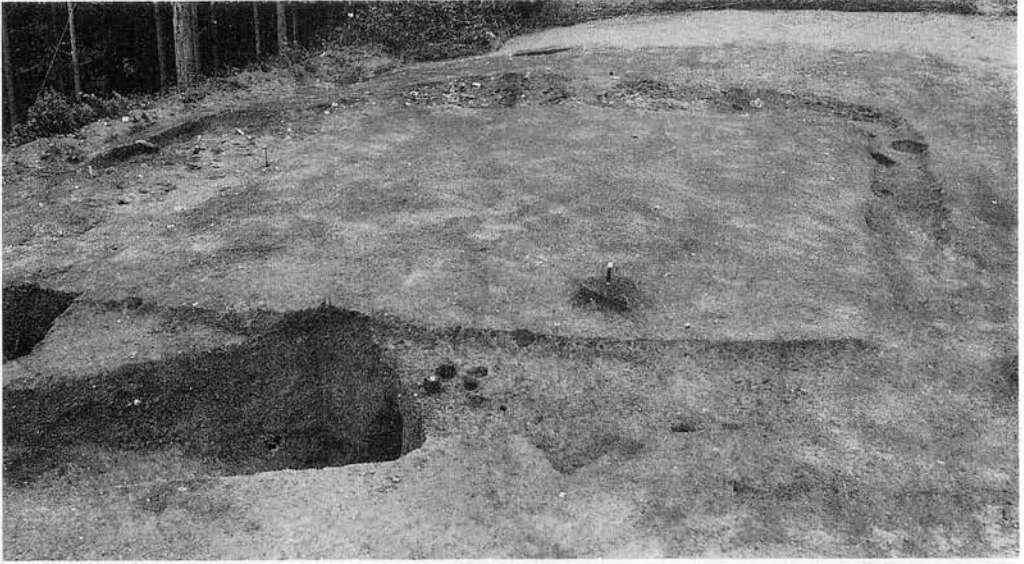


遠景（南から）

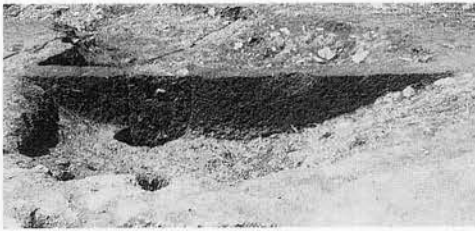


近景（東から）

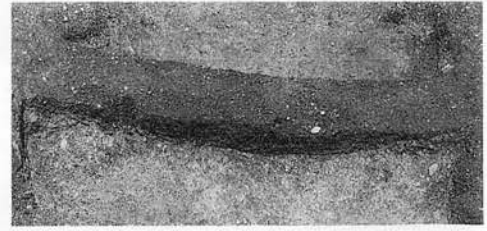
写真図版1 遺跡遠景・近景



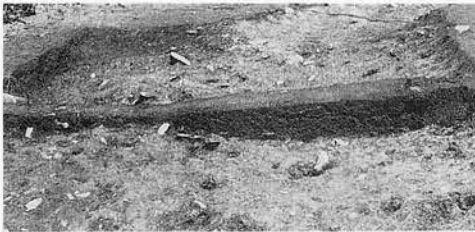
全景



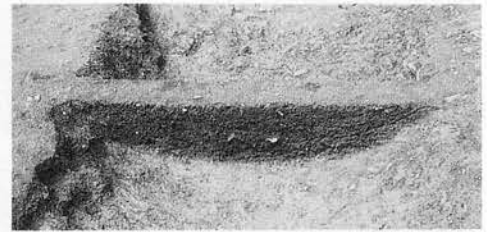
A-B 断面



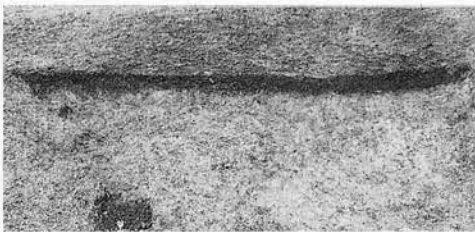
G-H 断面



C-D 断面



I-J 断面



E-F 断面

写真図版 2 方形周溝



全景

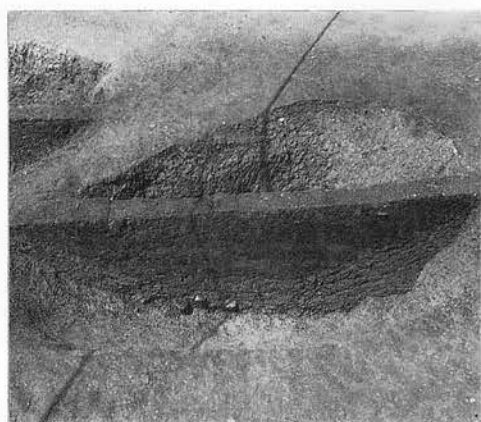


断面

1号ピット



全景



断面

2号ピット



全景



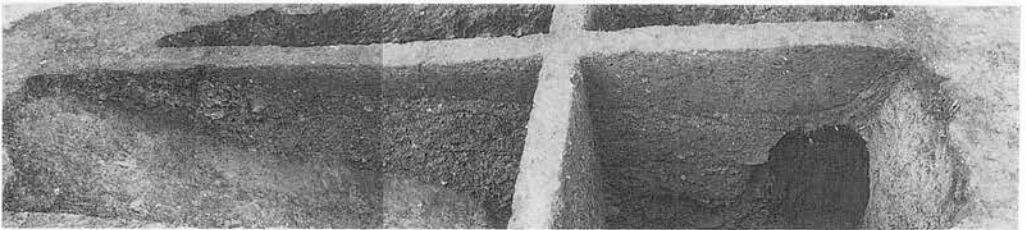
断面

3号ピット

写真図版3 ピット



坑道入口



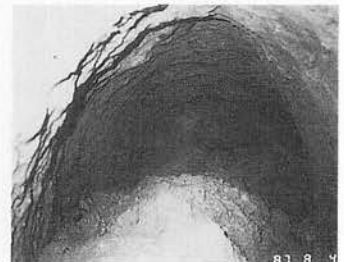
坑道入口土層断面



坑道入口付近石組

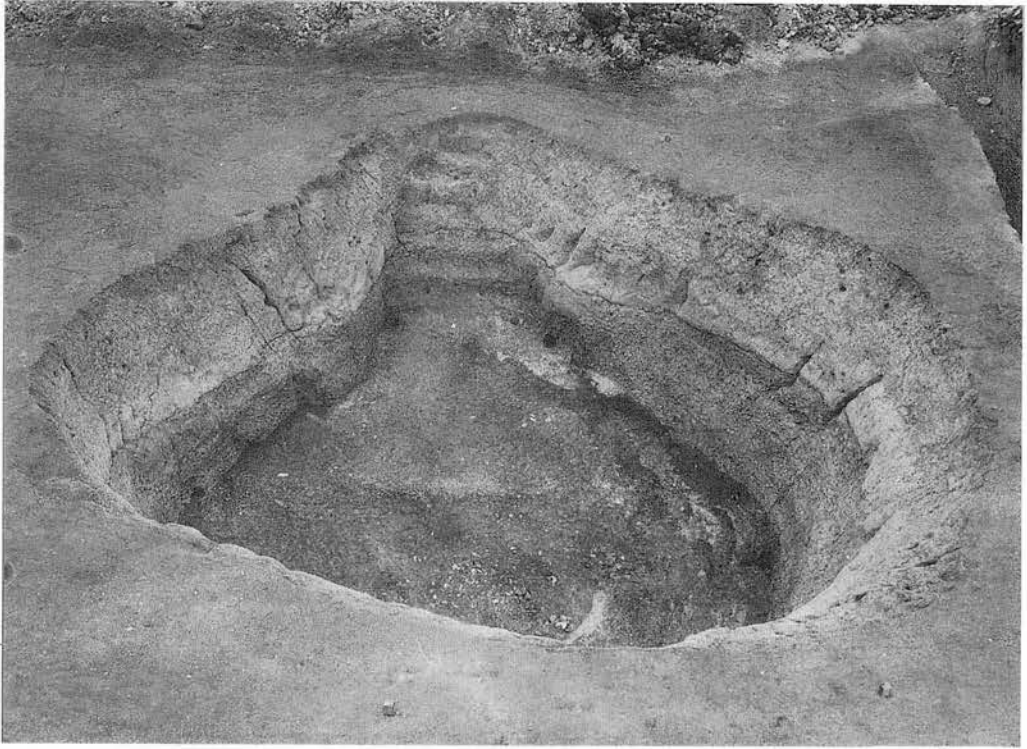


坑道側壁工具痕

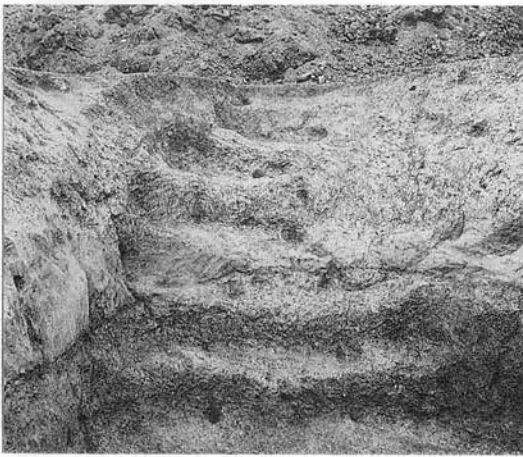


坑道内部

写真図版4 1号採掘跡



全景

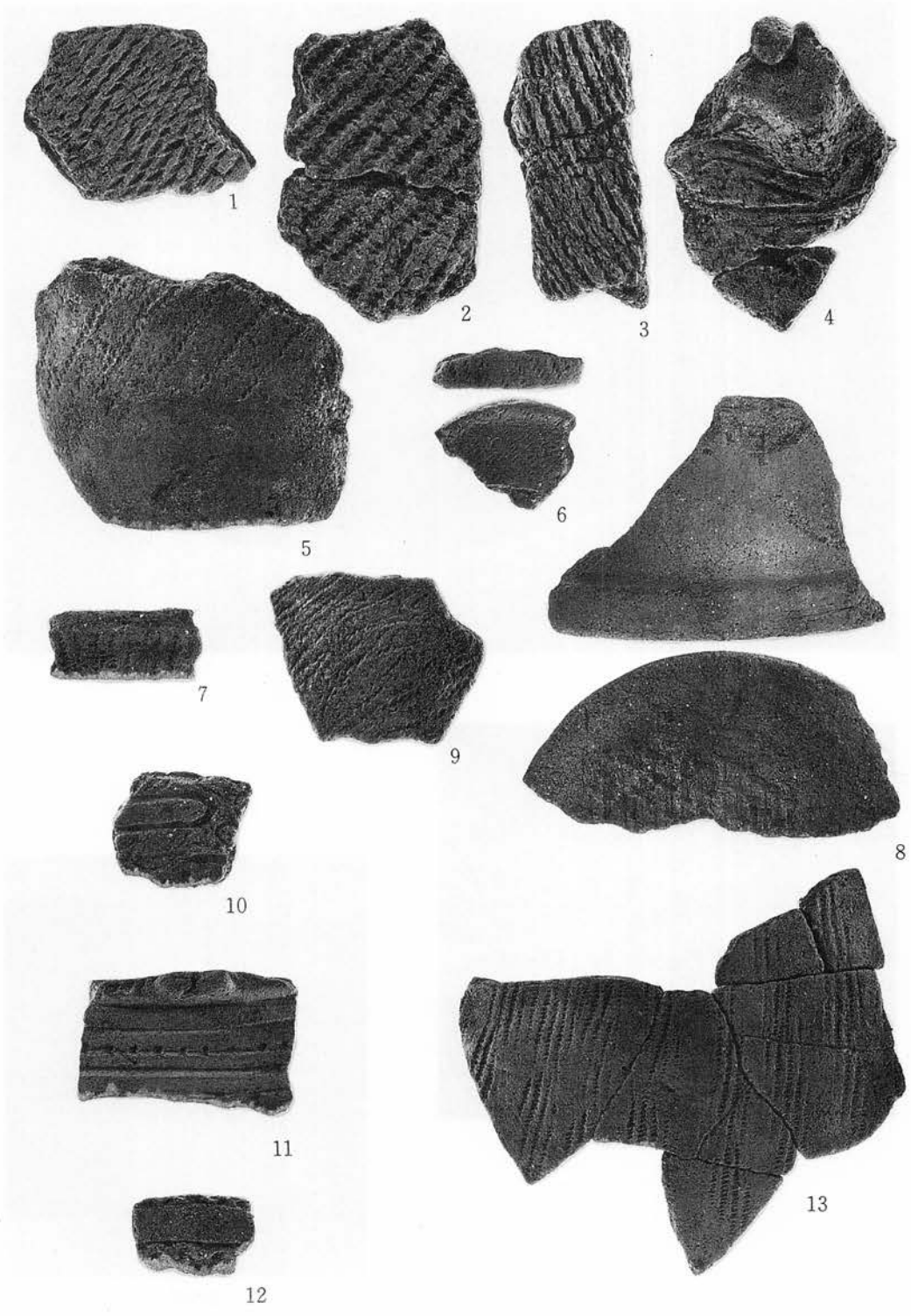


階段状出入口近接

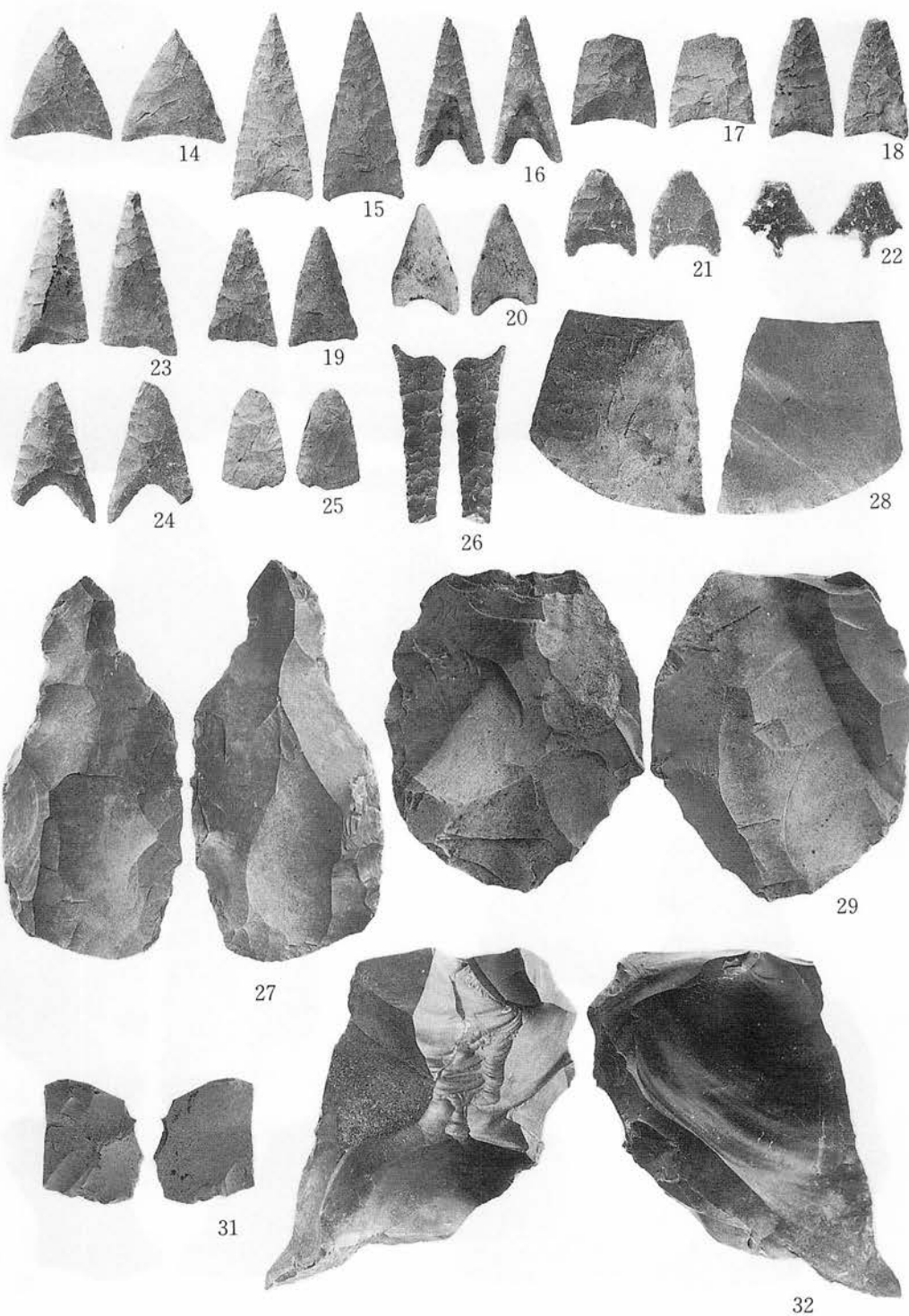


基本層序

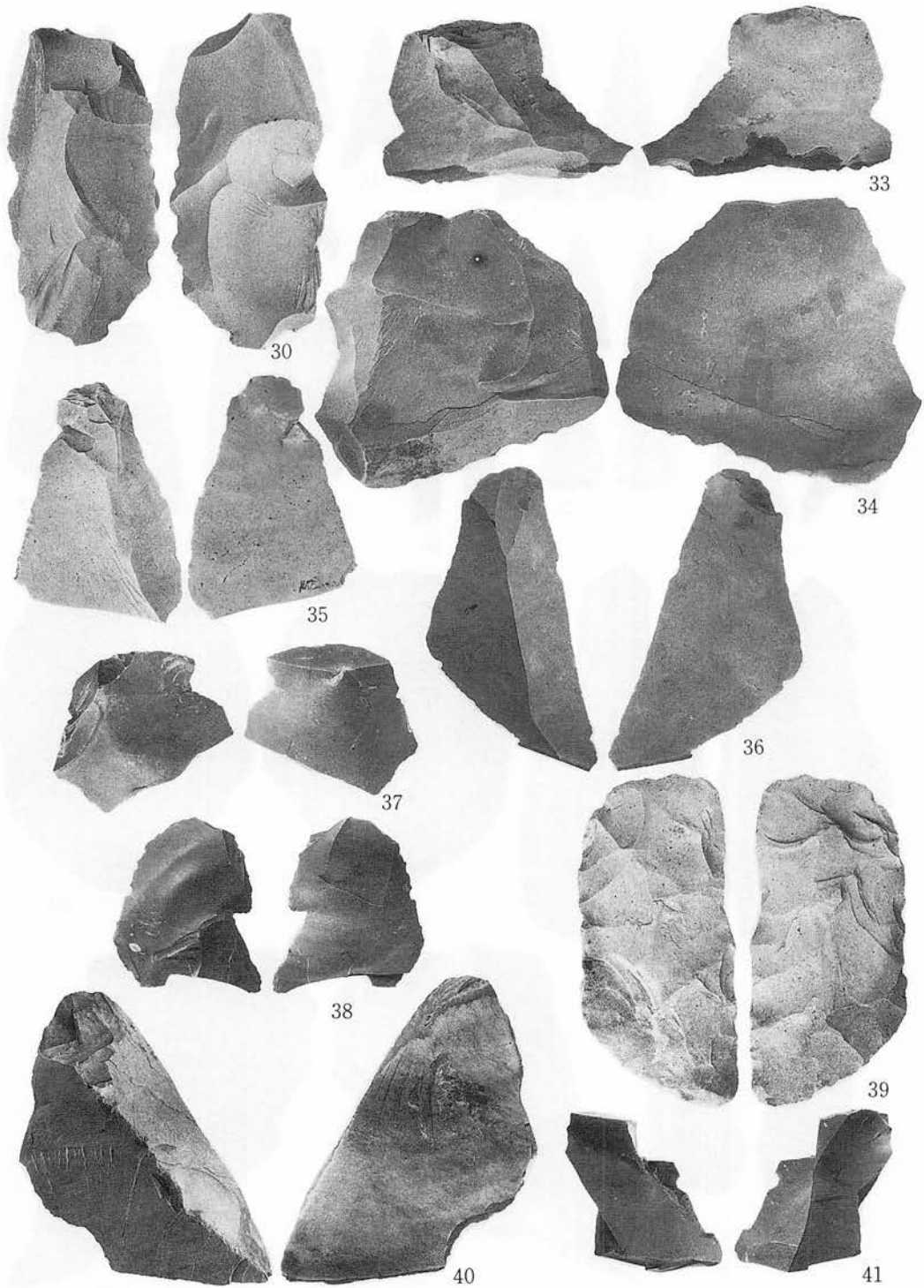
写真図版5 8号採掘跡・基本層序



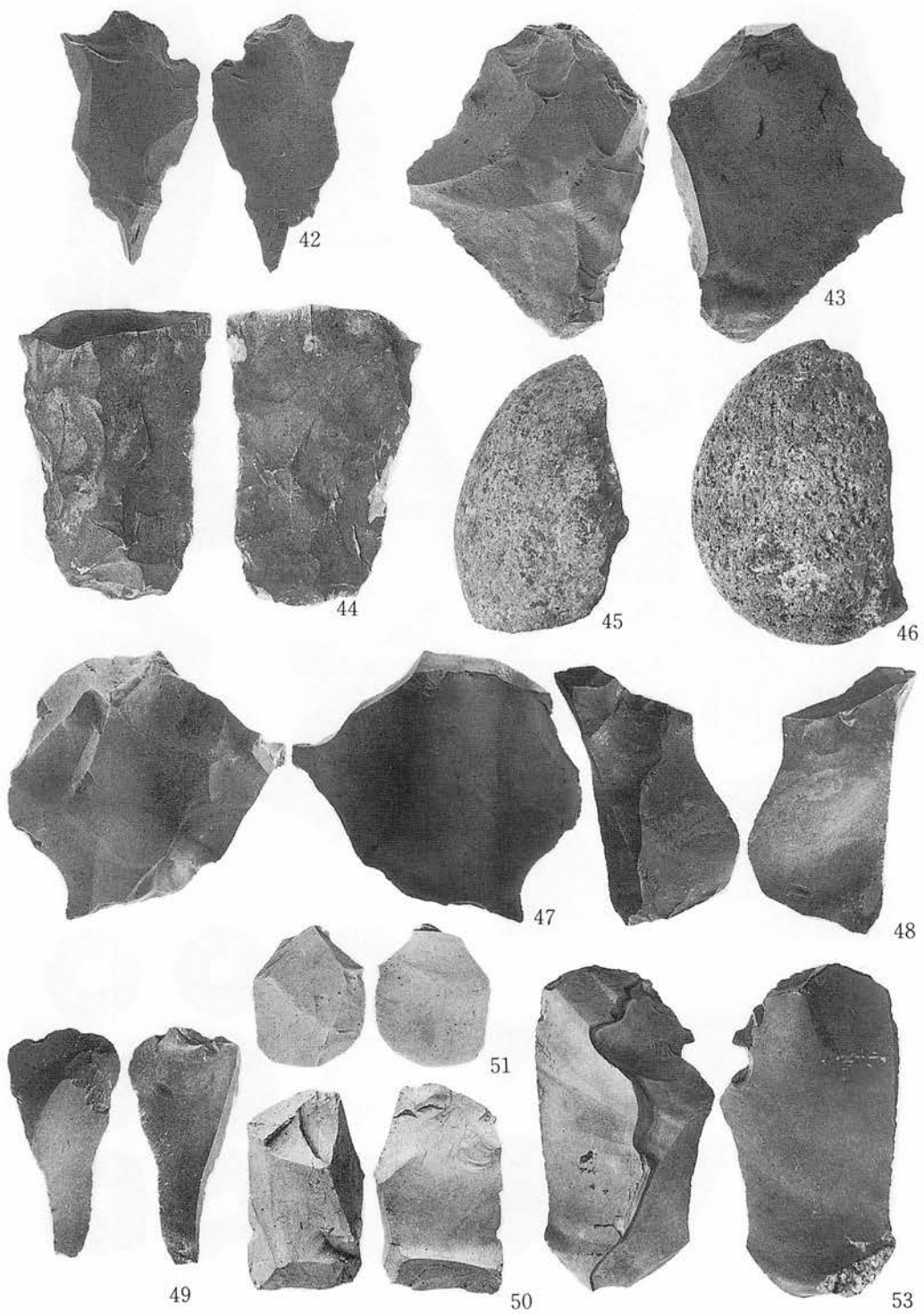
写真図版 6 出土遺物 土器



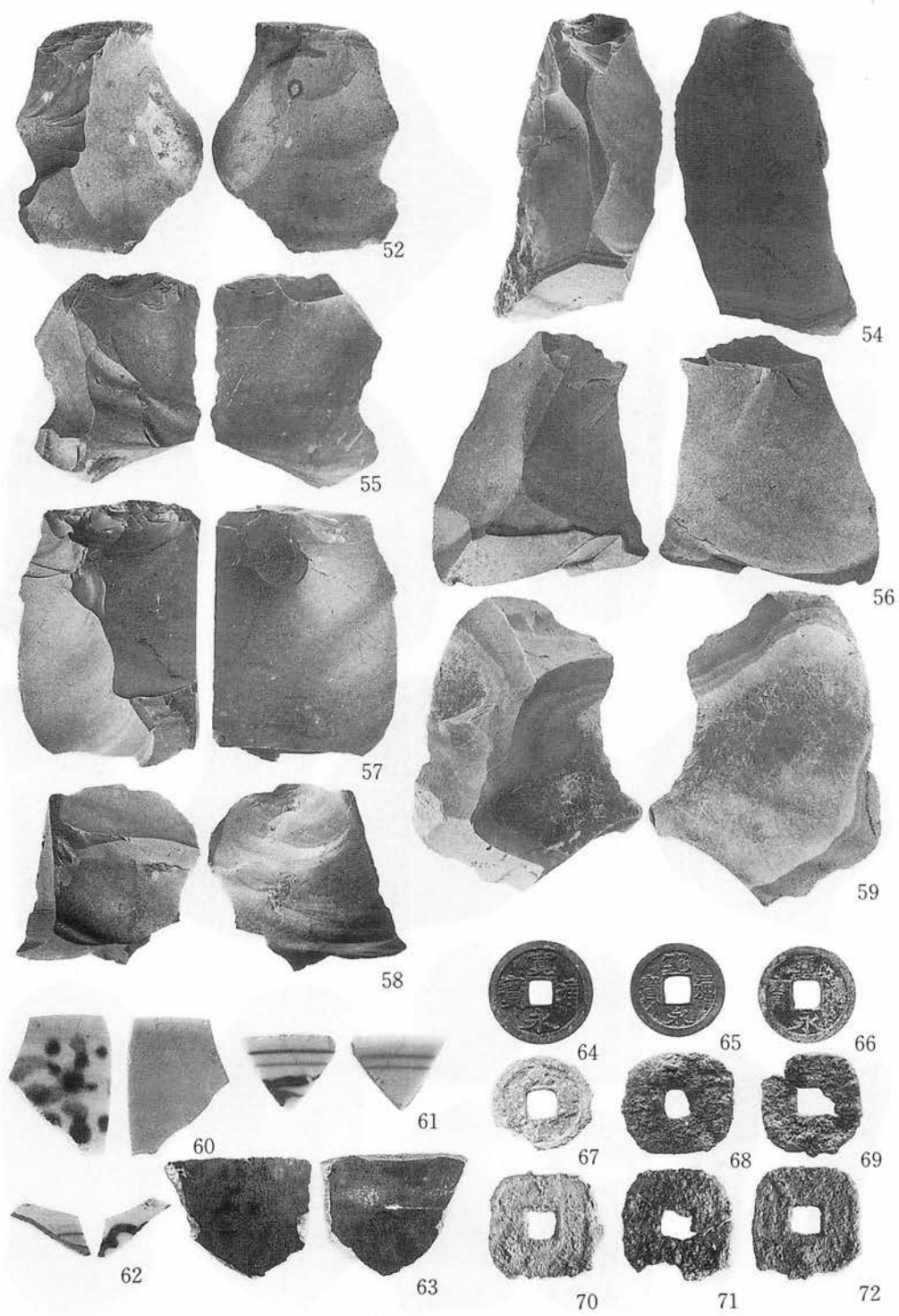
写真図版7 出土遺物 石器(1)



写真図版 8 出土遺物 石器(2)



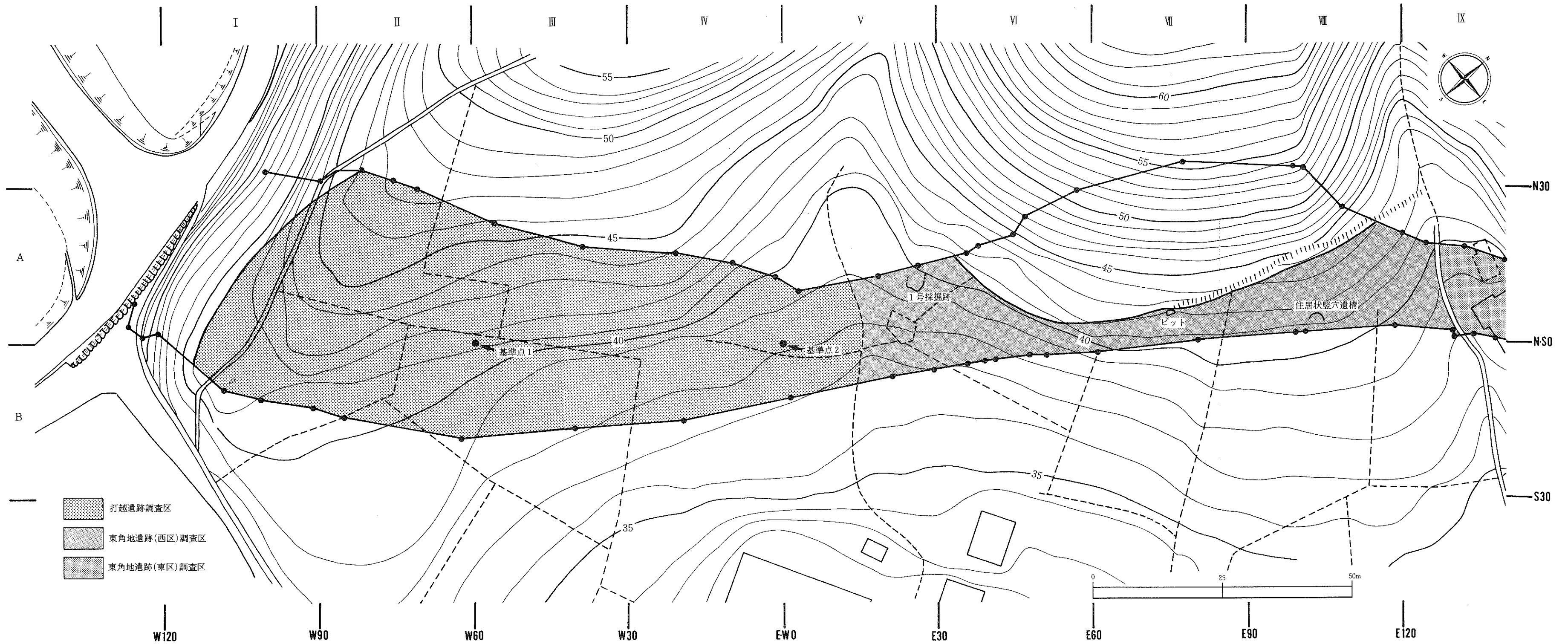
写真図版9 出土遺物 石器(3)



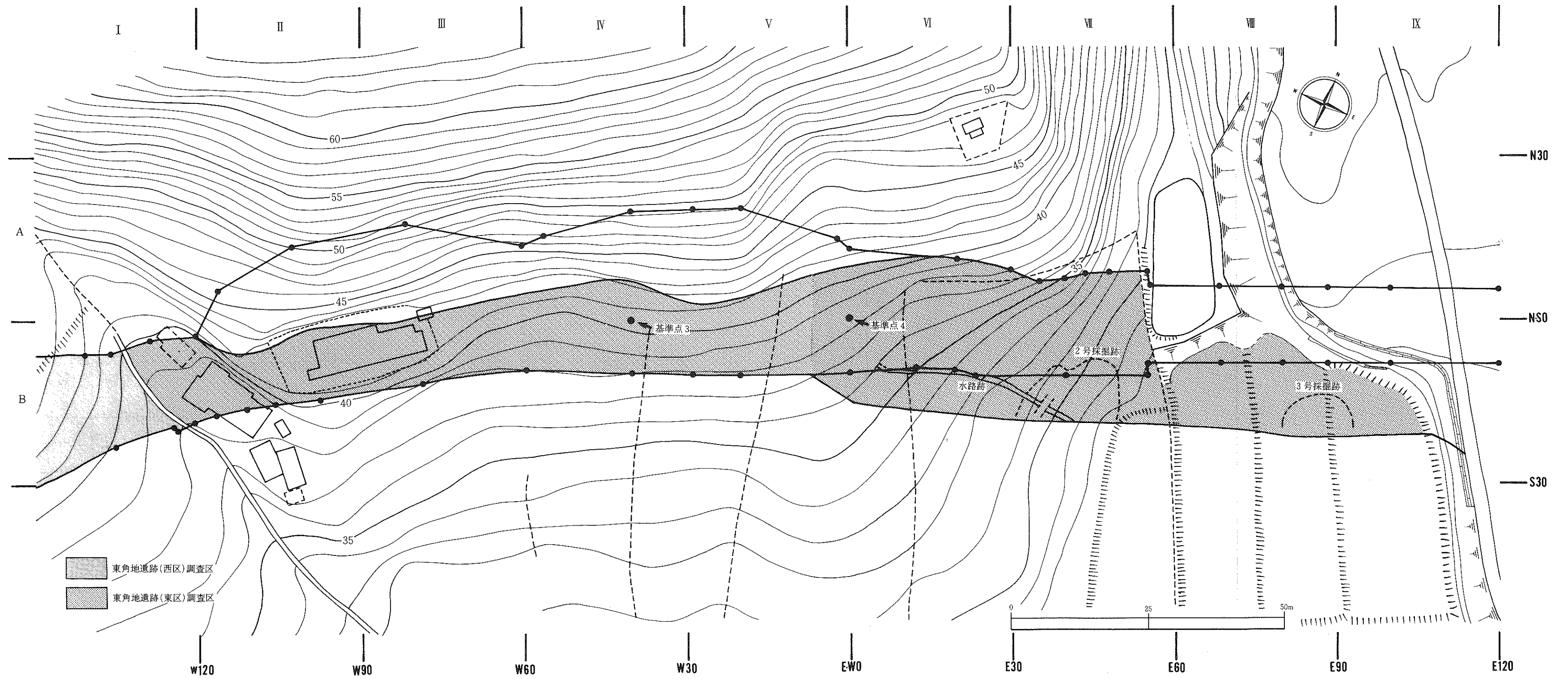
写真図版10 出土遺物 石器(4)・陶磁器・古銭

V. ^{ひがし}東 ^{かく}角 ^ち地 遺 跡

所 在 地 陸前高田市矢作町字東角地10ほか
委 託 者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和62年7月1日～10月31日
調査対象面積 6,829m²
発掘調査面積 6,829m²
遺跡番号・略号 NF 6 6 - 0 0 3 7 ・ HK - 8 7
調査担当者 高橋与右エ門・玉川英喜
協力機関 陸前高田市教育委員会



第1図 東角地遺跡(西区)地形図・グリッド配置図・遺構配置図



第2図 東角地遺跡(東区) 地形図・グリッド配置図・遺構配置図

1. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は住居状竪穴遺構1棟、ピット1基、石組みの水路跡1条、採掘跡3基である。調査の便宜上、調査区を西区と東区に分けているが、住居状竪穴遺構とピットは西区の南向き緩斜面上で、1号採掘跡は同じく西区の打越遺跡との境付近で、他は東区で検出されている。

出土遺物は土器、石器、石製品、陶磁器である。土器は縄文時代前期の大木系のものが出土量の大半を占め、他に中期・後期・晩期、弥生時代のもものが少量ずつ出土している。石器は石鏃、石匙、磨石等計13点、石製品として瑛状耳飾り1点が出土している。陶磁器は水路跡埋土から、小破片の舶載の染付磁器等2点が出土している。

(1) 西区の遺構

住居状竪穴遺構

遺構（第3図、写真図版3）

ⅧA区南東向き緩斜面上で検出されている。平面形は、斜面下方部が残存せず、半円状を呈しているが、本来は円形を基本としていたであろう。規模は残存部の値で東西約3.0m、南北約1.65mである。

埋土はスレート混じりの極暗褐色土が卓越し、下部に炭化物が一部に散在する灰褐色土が堆積する。

壁はほぼ直立し、壁高は15cm程である。床面は平坦で、北壁際には炭化物が散在する。住居址の可能性もあるが、炉・柱穴等は検出されておらず、住居状竪穴遺構とした。

出土遺物（第7図、写真図版8.60）

床面から深鉢の底部1点が出土している。無文で、胎土には粗砂が混入している。時期は不明であるが、付近からは大木6式等前期の大木系土器が比較的多く出土しており、前期の可能性を持つ。

ピット（第3図、写真図版3）

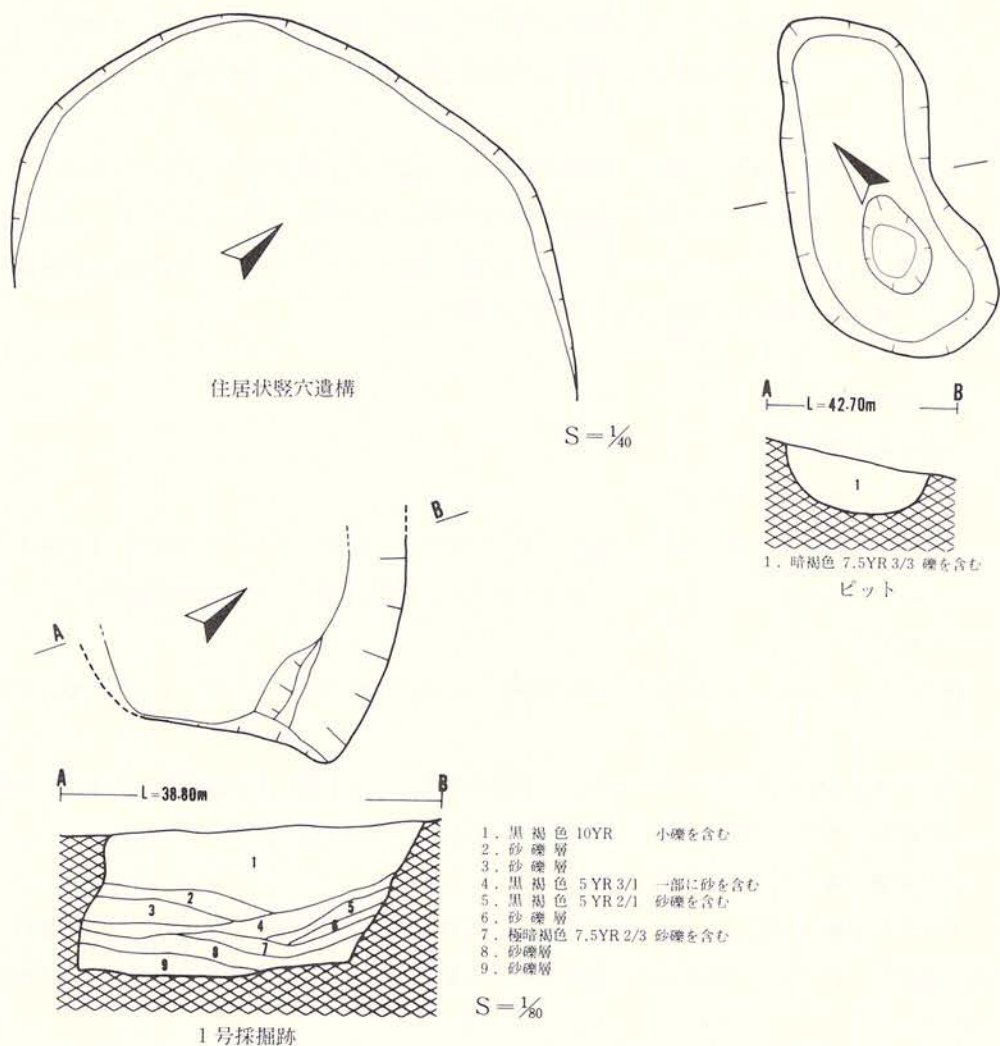
ⅧA区南東向き緩斜面上にあり、住居状竪穴遺構の西約26mに位置する。平面形は不整な長楕円形を呈し、規模は190×80cmである。底面には凹凸があり、南側には径30×50cm、深さ数cm規模の窪みがある。壁は湾曲ぎみに外傾する。部分的に直立に近い所もある。

埋土は暗褐色土の単層で、しまりの弱い礫混じりのシルト質土である。

1号採掘跡（第3図、写真図版3）

V A区の打越遺跡と沢筋を挟んだ向かい側に位置する。完掘はしていないが、調査した範囲での推定では円形状の立坑で、規模は径3m前後、深さ1.5m以上である。

埋土は上部にスレート混じりの黒褐色土、中・下部には砂利層・黒褐色土層・砂礫層等が水平ないし斜めに堆積する。



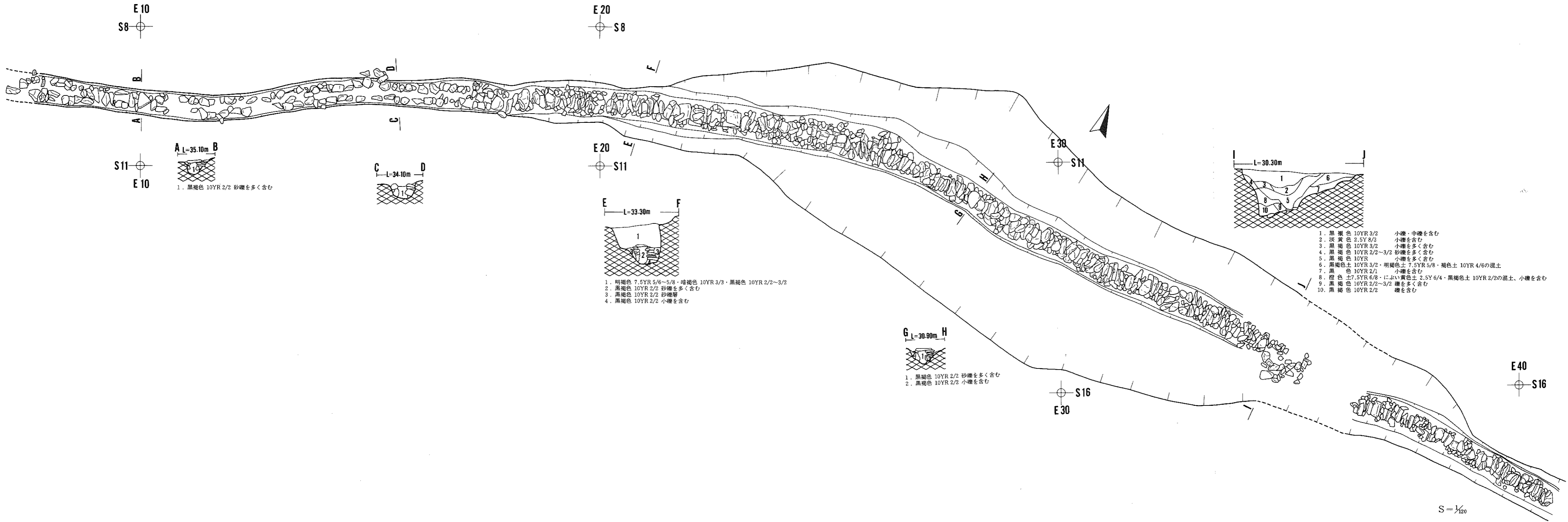
第3図 西区遺構

(2) 東区の遺構

水路跡

遺構 (第4図、写真図版4)

ⅥB区からⅦB区にかけて検出されている。グリッドⅥBob付近に湧水地点があり、そこに端を発し、東へ14m、その後東南東に向きを変えて調査区内で22m検出し、調査区外へと続く。調査区内での高低差は5.5m程である。湧水地点から12m程の地点までは比較的ゆるやか



第4図 水路跡

な傾斜で、高低差も1m程度であるが、東南東に向きを変える付近からその落差は大きくなる。水路は石組みで構築されており、幅65～120cm、深さ40cm前後の規模で箱形に掘り込んだ後、石を積み上げている。石組みの構造は、側壁に袖石を数個積み上げ、上部は蓋石を置いて閉じている。底部には石が敷かれていない。従って、石組みの断面形は円形である。石組みの間には部分的に粘土を貼り付けている所もある。

検出面は、グリッドVI B1b・2b付近では表土除去後（Ⅱ・Ⅲ層は欠く）のⅣ層上面、それ以东ではⅠ・Ⅱ層除去後のⅢ層ないしⅣ層上面である。グリッドVI B1b・2b付近の表土は薄く、層厚は20cm程である。その為、この付近の石組みは耕作等の攪乱を受けたりしく、蓋石は10m余りにわたって残存していない。

水路の埋土は、石組み内部では黒褐色土が卓越し、砂や小礫が多く含まれる。砂や小礫は特に下部に多い。また、一部は埋まりきらずに空洞として残っている。グリッドVI B3b以东では石組みの上位にも水路に沿って黒褐色土等が堆積する。その層厚はⅦB区では80～100cmである。

出土遺物（第8図、76、写真図版9、76・77）

グリッドⅦBocの石組み直上の黒褐色土中から16世紀末の舶載の染付け1点（76）と近世末と思われる陶器1点（77）が出土している。76は皿の口縁部、77は碗の体部小破片である。

2号・3号採掘跡（図版、写真図版省略）

東区からは2号採掘跡と3号採掘跡の2基検出されている。どちらも完掘していないので詳細は不明であるが、打越遺跡の例から採掘跡であろうと考えられる遺構である。規模・形状については検出時及び一部掘り下げた結果の土層変化部分からの推定であるが、2号・3号とも不整な円形状を呈し、径は2号で10数m、3号で10m余り、深さはどちらも3m以上である。

埋土は2号が暗褐色土・褐色土混じりの黄褐色土が卓越し、3号はスレート状の小礫を多く含む暗褐色土・黒褐色土が卓越する。

(3) 遺構外の出土遺物

(a) 土器

縄文時代前期の大木式土器を中心に、中期・後期・晩期の各時期のものと弥生時代の土器片が少量ずつ出土している。完形品はなく、一部底部を復元できた2個体を除き、すべて破片で、総量はコンテナ2箱ほどである。前期大木式土器の中には2b・3・4・6の各式のものがあり、便宜上古い方から順に1～4類に分類した。出土地点は、西区では住居状竪穴遺構が検出されたⅧA区からのみで、出土総量の大半を占める。出土層位はⅡ層の黒色～極暗褐色土であ

る。東区では主にⅣB区とⅦB区に少量の土器片がⅠ層ないしⅡ層に散在する。図版に掲げた土器片で東区出土のものは6・7・33・41・58(ⅦB区、Ⅰ・Ⅱ層)・39(ⅣB区、Ⅰ・Ⅱ層)42(ⅥB区、Ⅰ層)・46(ⅤB区、表採)だけで、他はすべて西区ⅧA区出土である。図版中には出土地点層位の記入を省略した。

Ⅰ群土器(第5・6図、写真図版5～7 1～33・36・37)

1類(1)

S字状連鎖沈文を施文する鉢の体部破片である。この時期のものではこれと同様の破片が何点か見られる。

2類(2～7)

2は口縁部直下にC字状の半裁竹管による刺突痕が連続し、その下位に沈線が横走する。地文はLR単節斜縄文である。3は口縁部に刻み目を持つ粘土紐貼付文と2列の連続する刺突痕が横走する。その下位に円文がつけられている。4は2条の細い沈線で菱形状に区画し、その中央に竹管円文を配する。5～7は口縁部文様に刻み目を持つ粘土紐貼付文を配する。5は2条めぐり、貼付文を境に口縁端部は無文である。6・7は刻み目のない貼付文が体部に分枝遊走する。6と7は同一固体である。

3類(8～17)

8・9は刻み目のない粘土紐貼付文の見られる土器である。8は1cm前後の幅の広い粘土紐の下位に細い粘土紐が兀字状に遊走する。9は細い粘土紐がα状に貼付される。10・11は波状の口縁部破片である。口縁部に大きな鋸歯状沈線がめぐり、その下位には1条の沈線が横走する。11では他に斜行または縦走する沈線がつけられる。12～14は小波状の粘土紐貼付文が裝飾される。12は体部に、13は口縁部に、14は口縁部裏面につけられる。15は口唇部上につけられた太い粘土紐の渦巻文と思われる。16は口縁部突起で、渦巻状の隆帯で裝飾されている。17は口唇部が小波状を呈し、口唇部上にボタン状の粘土が貼付される。

4類(18～32)

18～22は体部に竹管文による沈線によって縦線または対向線文・X字文等を大胆に施文する。地文は撫で消されているものが多く、18・21はほとんど残されていない。19・20・22にはRL単節斜縄文がかすかに残されている。23～27・29～33は口縁部破片で、23を除いて折り返しまたは貼り付けによる複合口縁である。文様帯は、23では大きな山形の波線の山または谷の部分に円形凹文がつけられる。24・25では折り返し部分に小さく連続する山形の沈線が施文される。26は折り返し部分の表面が半分以上剥落しているが、残存部分は無文である。27は竹管によると思われる沈線が弧状につけられ、体部とは横走する沈線で限られる。体部地文は僅かしか残されていないが、単節斜縄文と思われる。29は貼付けた口縁部に縦横の沈線が、30は折り返し

た部分に縦の沈線が施文される。体部地文は29が縄文、30が4条を1組とする櫛目条沈線が縦走する。30の器形は胴部がややふくらむ円筒状で、口縁部は僅かに外反する。31も折り返し部分に弧状または横走する沈線が施文され、32は口縁部に体部と同じLR単節斜線文が斜位に施文される。32は大木7a式期のものかもしれない。28は体部破片で、半載竹管による小さく連続する山形の沈線が7条めぐる。

その他のI群土器 (36・37)

36・37は円筒下層d式などによく見られる木目状撚糸文が施された深鉢体部の小破片である。36には縦に連続する刺突痕がつけられる。

II群土器 (第6図、写真図版7 34・35・38)

34は鉢の口縁部、35・38は体部破片である。34の文様は横走する2条の平行沈線をつなぐように縦の沈線が数mm間隔でつけられている。35は地文がRRL直前段反撚りで、孤状の粘土紐が貼付されている。38は沈線で区画された内部にLR単節斜縄文が施され、外部は磨消されている。34・35は大木7a式期のもものと推定され、38は中期末のもものと思われる。

III群土器 (第6図、写真図版7 33・39・40)

33・39は鉢の口縁部、40は体部の破片である。33は半載竹管による平行沈線が口縁部に2条横走し、体部にはLR単節斜縄文が施文される。焼きが比較的固く、裏面はよくみがかれている。39は左右不对称の波状口縁をなし、口縁部と体部は側面圧痕文で限られる。口縁部の上部はLR単節斜縄文が施され、下部は無文である。40は沈線で区画し、縄文と磨消で文様を施している。

IV群土器 (第6図、写真図版7 41~43)

41は鉢と思われる体部破片で、煤が付着する。文様は斜縄文を施文した後、沈線で帯状に区画し、幅広に区画した部分を磨消している。42は撚りの細かいLR単節斜縄文を施した鉢の体部破片である。器表面には煤が付着し、裏面には撫で痕が見られる。43は鉢の口縁部破片で、口縁端部から約3cm下位にくびれを持ち、くびれから上は無文、下にはLR単節斜縄文が施されている。

V群土器 (第6図、写真図版7 44・45)

甕の口縁部(44)と体部(45)の破片である。どちらも撚糸文が縦位に施文されている。

その他の粗製土器 (第7図、写真図版7・8. 46~59)

いづれも粗製の鉢または深鉢と思われる口縁部(46~48・50・55)、体部(49・51~54・56・57)、底部(58・59)の破片である。46・48・58はLR単節斜縄文が施文されている。48の口唇部には指先によるとと思われる刻みがつけられ、口縁部は撫で調整され無文である。47はLLR、51はRRLの直前段反撚で施文され、49、56は撚糸文による施文と思われる。53・54は斜位に

燃糸文が施され、53は右下りに施文した後、左下りの施文を行っている。50はヘラ状工具による綾杉状の沈線が施文され、内面には幅12～13mmの輪積み痕が残されている。52は結節回転によるZ字状の連続文が横位に、57は縦位に施文されている。57の地文はLR単節斜縄文を縦と横に回転させることによって羽状縄文状の文様をなしている。55は口縁部破片と思われる。無文で、内側に「く」字状に屈曲する。59は底面のみで、網代痕を持つ。

(b)土製品 (第7図、写真図版8. 61)

円盤状土製品が1点出土している。径45×43mmのほぼ円形の土製品で、刻み目を持つ粘土紐を孤状に貼付けた土器片を用いている。大木3式期の可能性を持つ。

(c)石器

剝片石器 (第8図、写真図版9. 62～69) 剝片 (図版8、写真図版9. 70・71)

62～66は石鏃である。完形品はなく、62・64は先端部と基部の一部、63は先端部をわずかに欠く。65は身部中央から先と基部の一部を欠損する。66は表・裏面数か所に剝落があり、身部中央から先を欠損する。65は有茎鏃、他は無茎鏃である。基部の形態は62～64は括りの浅い凹基、65が凸基、66が平基である。側縁部の形態は64がやや外湾し、62・63は直線的である。身部形状はいずれも二等辺三角形形状である。調整は62・63・65が両面加工、64は半両面加工、66は剝落が多く定かではないが、両面加工と思われる。

67～69は石匙で、いずれも縦長である。67は断面三角形の棒状の刃部を持つ。表面は全面、裏面は周辺加工である。68・69は2縁辺を持ち、先端部は尖頭状を呈する。調整は68が半両面加工、69が片面加工である。

70・71は剝片で、どちらも1縁辺に微細な剝離痕を持つ。剝離痕を持つ縁辺の角度は70が小さく、71は大きい。

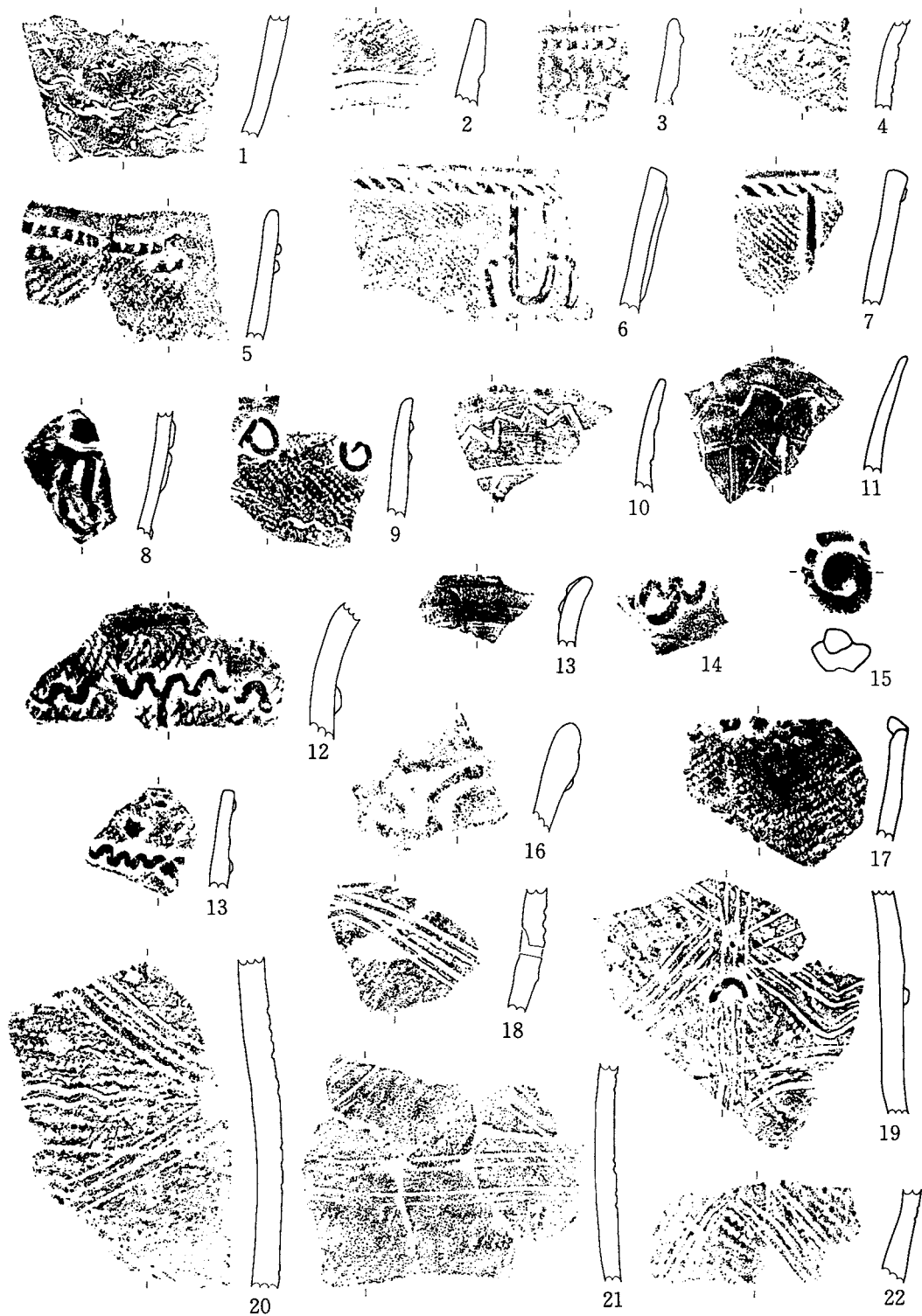
礫石器 (第8図、写真図版9. 72～74)

72は磨石で、楕円形状の円礫の全面に磨面を持つ。

73・74は凹石である。73は平面形卵形の亜円礫の1面に1個の凹みを持つ。他の1面には長さ25～48mm、幅2～3mmの擦痕が7本見られる。74は短冊形で偏平な亜角礫の2面に計3個の凹みを持つ。

(d)石製品 (第8図、写真図版9. 75)

珧状耳飾りが1点出土している。楕円形状を呈し、中央やや上部に円形の穴を持ち、下端から切り込みを入れている。断面形は扁平である。蛇紋岩製で全面研磨されている。西区ⅧA区からの出土で、付近からは大木6式土器が多く出土している。



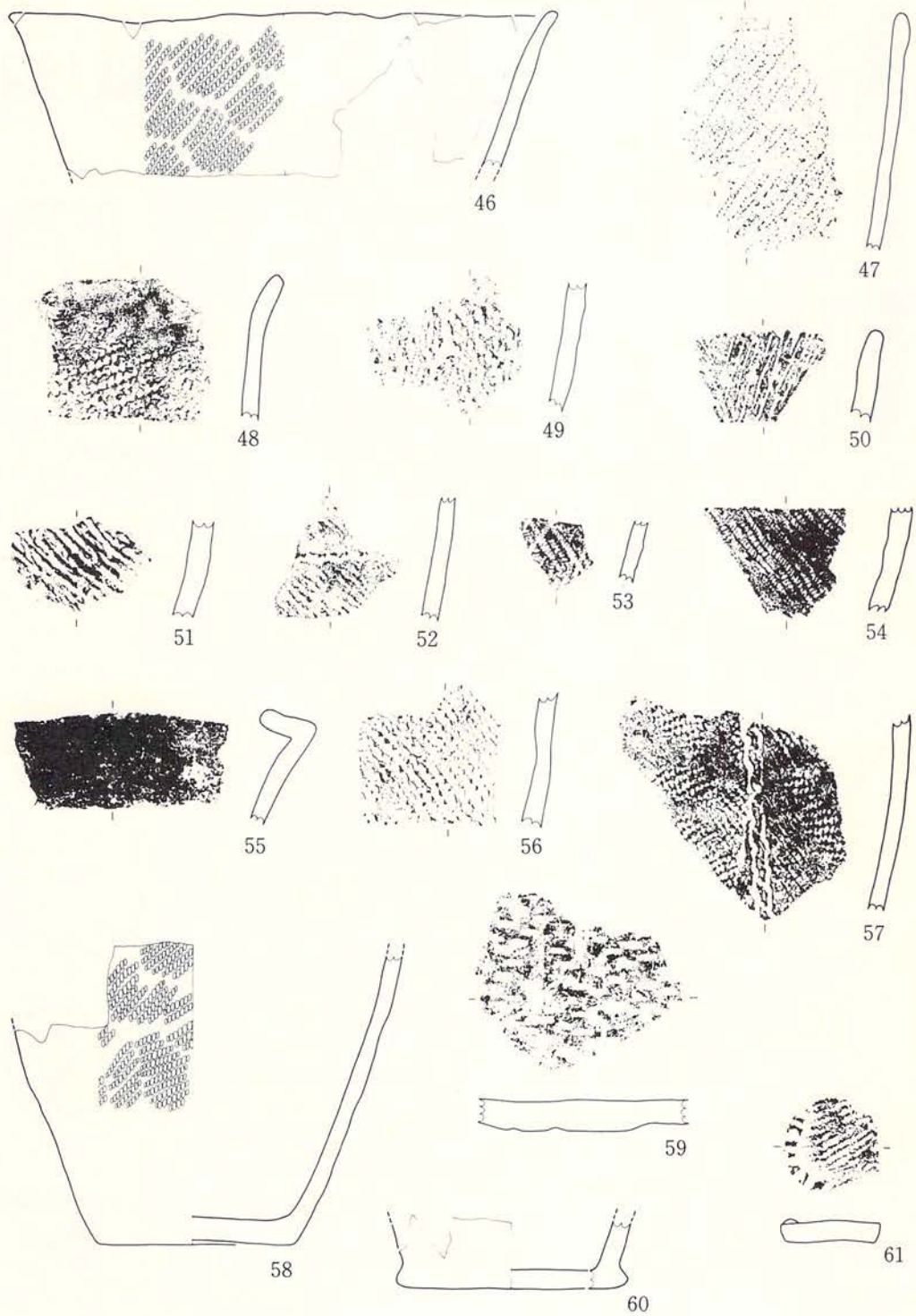
第5图 出土遗物 土器(1)

S=1/3



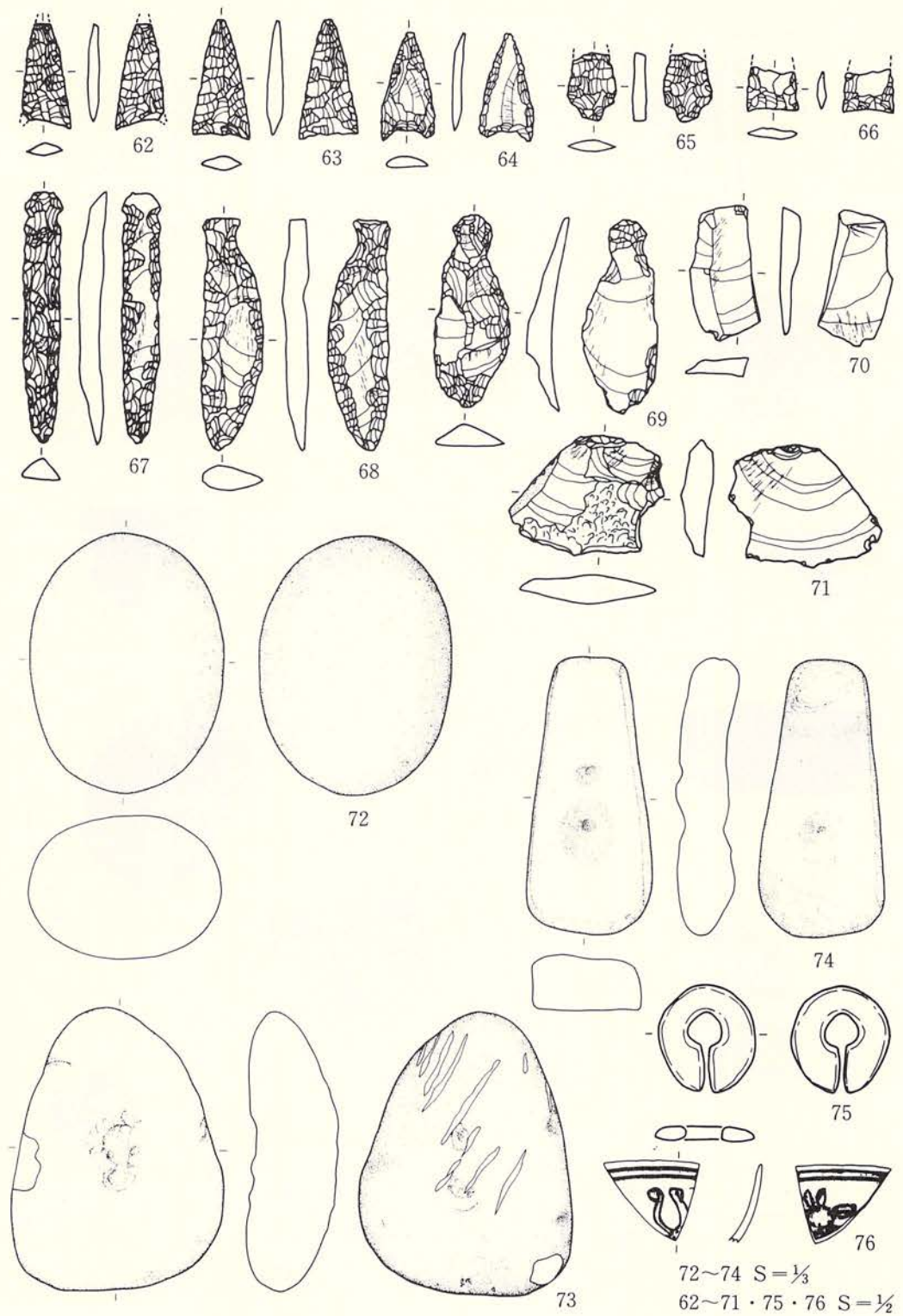
第6图 出土遗物 土器(2)

S = 1/3



第7図 出土遺物 土器(3)

S = 1/3



第8図 出土遺物 石器・石製品・陶磁器

石器・石製品計測一覧表

図版番号	出土地点 層位	器 種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	石 質	産 地
6-62	西区ⅧA区 II	石鎌	(32.4)	(14.1)	3.9	1.5	玻璃質流紋岩	北上山地 中世界?
6-63	〃 〃	〃	(36.2)	17.3	4.3	2.1	〃	〃 〃 ?
6-64	〃 〃	〃	33.4	16.7	3.6	1.9	粘板岩	〃 古世界
6-65	〃 〃	〃	(20.9)	14.9	4.1	1.3	〃	〃 〃
6-66	〃 〃	〃	(13.0)	15.6	(3.0)	0.5	〃	〃 〃
6-67	〃 〃	石匙	76.7	11.3	7.0	6.6	玻璃質流紋岩	〃 中世界?
6-68	東区ⅣB区 I・II	〃	58.8	22.7	9.7	8.3	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
6-69	〃 〃	〃	70.8	18.4	7.5	10.4	〃	〃 〃
6-70	西区ⅧA区 〃	微細な剝離痕を持つ剥片	40.7	19.8	6.2	4.9	粘板岩	北上山地 古世界
6-71	東区ⅦB区 I	〃	37.2	49.8	9.2	14.4	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
6-72	東区ⅡB区 表採	磨石	118	89	66	1060	花崗閃緑岩	北上山地 中世界
6-73	東区ⅥB区 I	凹石	128	97	44.5	585	硬砂岩	〃 古世界
6-74	東区ⅤB区 I	〃	128	57.5	27	310	〃	〃 〃
6-75	西区ⅧA区 II	瑛状耳飾	32.5	29.7	4.8	6.0	蛇紋岩	〃 〃

2. まとめ

本遺跡で検出された遺構は住居状竪穴遺構1棟、ピット1基、採掘跡3基、水路跡1条である。遺構内出土遺物が極めて少なく、性格や時期決定の資料に乏しいが、以下に性格や時期を推定できる要因について若干述べ遺構のまとめとする。

住居状竪穴遺構は、床面に炭化物の散在する状況が認められ、斜面下方部約半分が削剝されており、炬などが削剝されていることも考えられ、住居址としての可能性を全く否定することはできない。付近からは大木6式土器が比較的まとまって出土しており、縄文時代前期の遺構の可能性を持っている。

ピットからの出土遺物はなく、埋土は非常に締りの弱いシルト質土で、新しい時期の様相を示している。

採掘跡とした遺構は埋土の状況や規模が打越遺跡のそれに類似することから採掘跡と判断した。2号採掘跡は水路跡に切られており、それより古い。水路跡は後述するように16世紀末から17世紀初めの可能性を持っている。それより古いとしても打越遺跡で述べた16世紀内には納まるのではないと思われる。1・3号の採掘跡も打越遺跡で推定した時期幅に準じると思われる。

水路跡は調査区内の湧水地点に端を發し、調査区外へと続いている。地元の古老による言い伝えでは、水路跡の延びる方向に観音寺という寺院が建立されており、そこに水路がひかれていたとされている。現在矢作町寺前にある長谷山観音寺は慶長年間に宥建法印によって開かれ、創建当初は調査区のすぐ南側にある東屋舗の後ろにあったと記録に残されている。文献に述べ

られている場所は水路跡の延びる方向の場所であり、言い伝えられている水路跡の可能性も考えられる。水路跡の石組み直上の黒褐色土中から1点のみであるが、16世紀末の舶載の染付けの破片も出土している。これらのことから水路跡は16世紀末から17世紀初めの遺構の可能性を持っている。

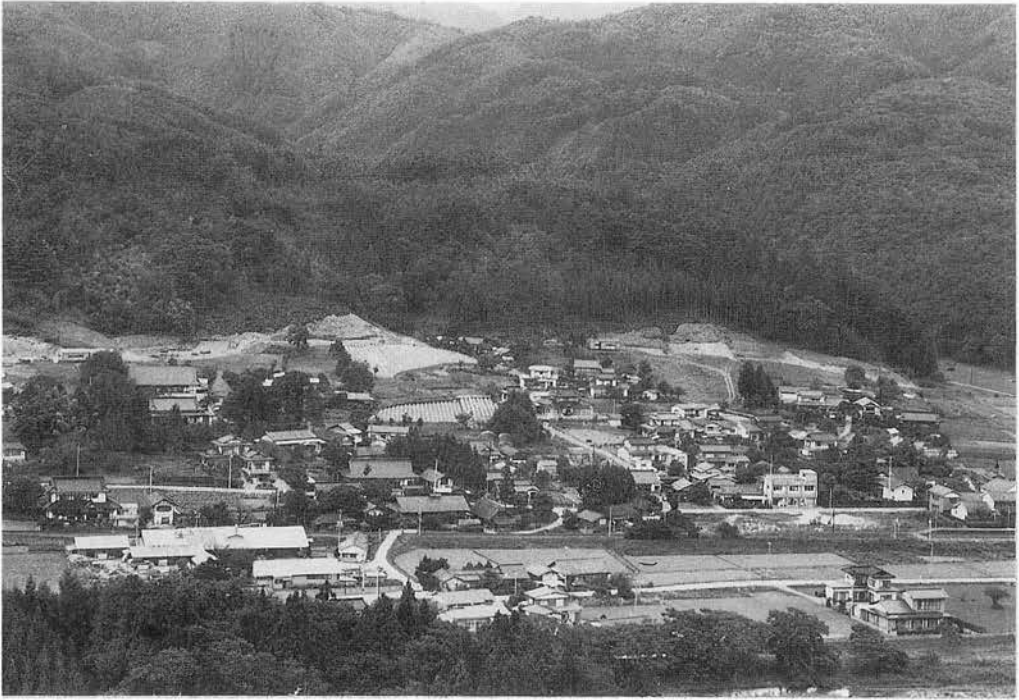
本遺跡の出土遺物には縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代の土器片と石器、それに珧状耳飾り1点などがある。土器は西区のⅧ区に集中しており、他の調査区では少量の破片が点在する。西区のⅧ区では縄文時代前期の大木系の土器が大半を占め、他には各時期のものが少量分布する。石器の出土量は非常に少ない。珧状耳飾りは付近から大木6式土器が多く出土しており、その時期のものである可能性が高いと思われる。

本遺跡は打越遺跡と同様の地形面に立地しており、調査区周辺には各時代・時期の遺構の存在も予想される。

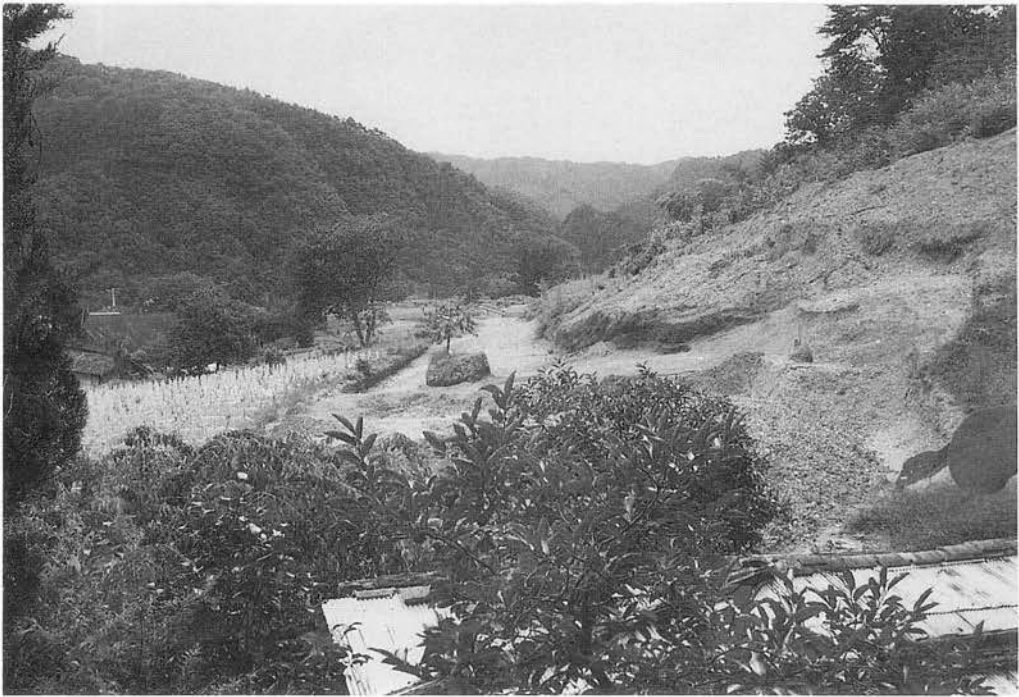
〈引用・参考文献〉

- 稲野裕介他 1983年 『滝ノ沢遺跡』 北上市文化財調査報告書第33集
及川 洵他 1979年 『大陽台貝塚』 陸前高田市教育委員会
大船渡市史編集委員会 1979年 『大船渡市史』 第3巻資料編Ⅰ
興野義一 1967年～1970年 「大木式土器理解のために（Ⅰ）～（Ⅵ）」 考古学ジャーナル第13・16・18・24・32・48号 ニュー・サイエンス社
佐々木清文 1987年 『和光6区遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集

写真図版

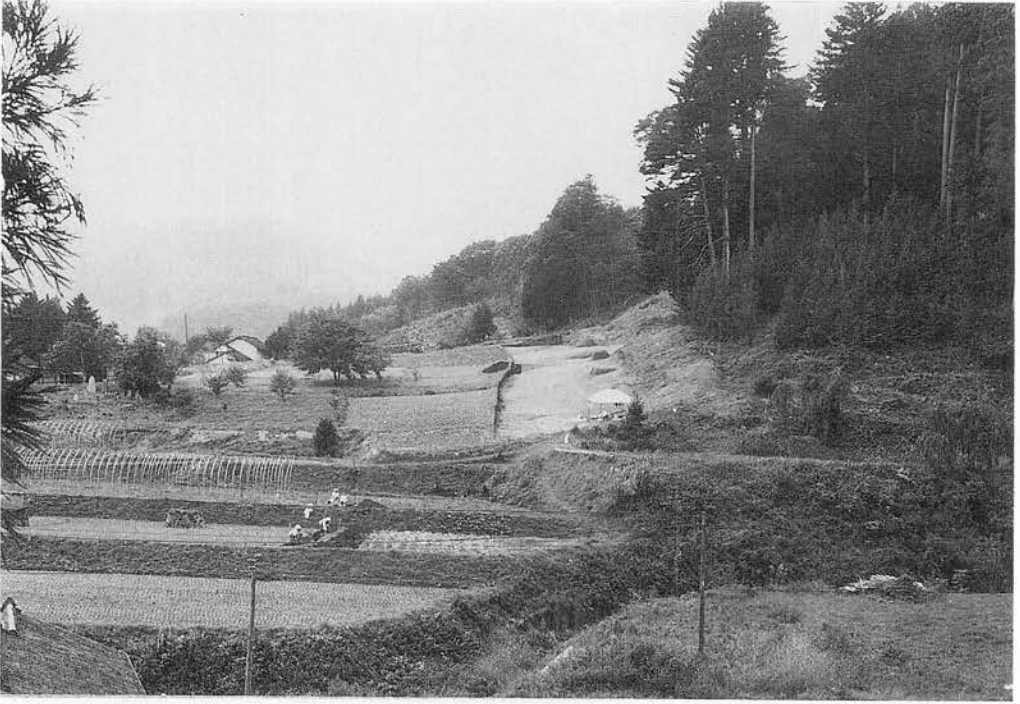


遠景（南から）



近景〔西区〕（東から）

写真図版1 遺跡遠景・近景



近景〔東区〕（東から）



作業風景

写真図版2 遺跡近景・作業風景



住居状竪穴遺構



全景



採掘跡



ピット 断面

写真図版 3 西区遺構



平面



平面



C-D断面



G-H断面

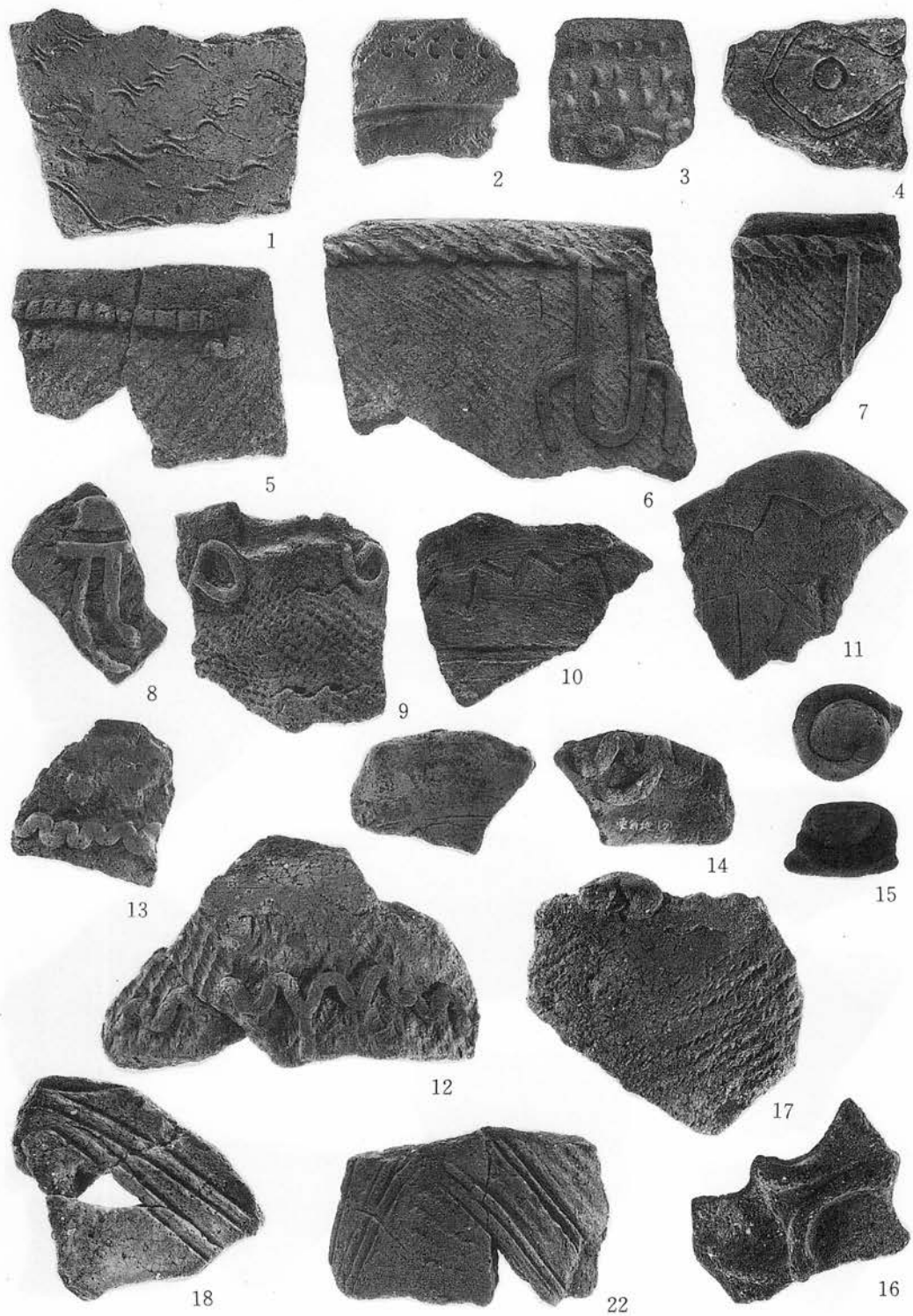


E-F断面



I-J断面

写真图版4 水路跡



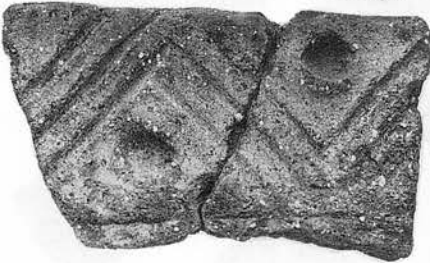
写真図版 5 出土遺物 土器(1)



20



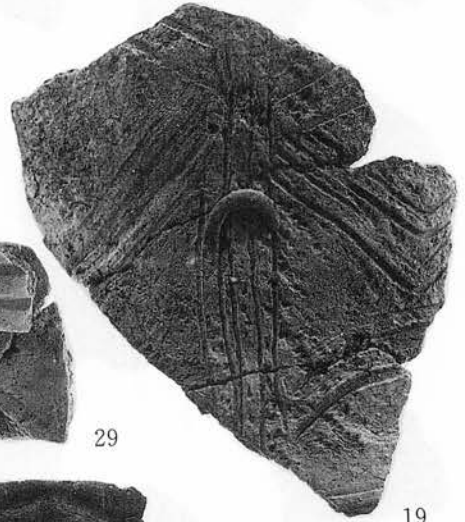
21



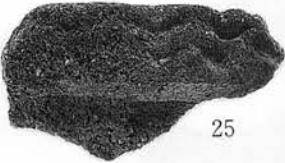
23



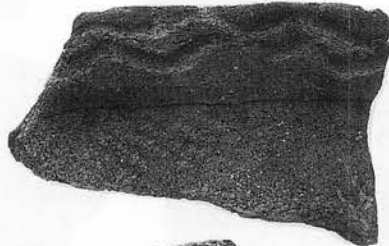
29



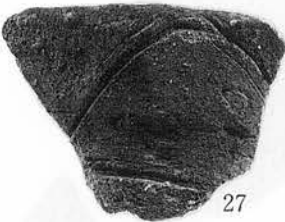
19



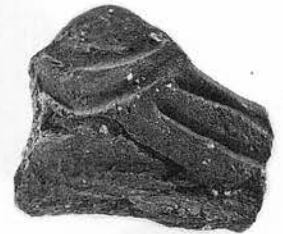
25



24



27



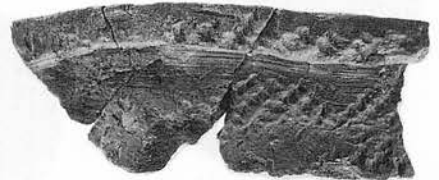
31



26

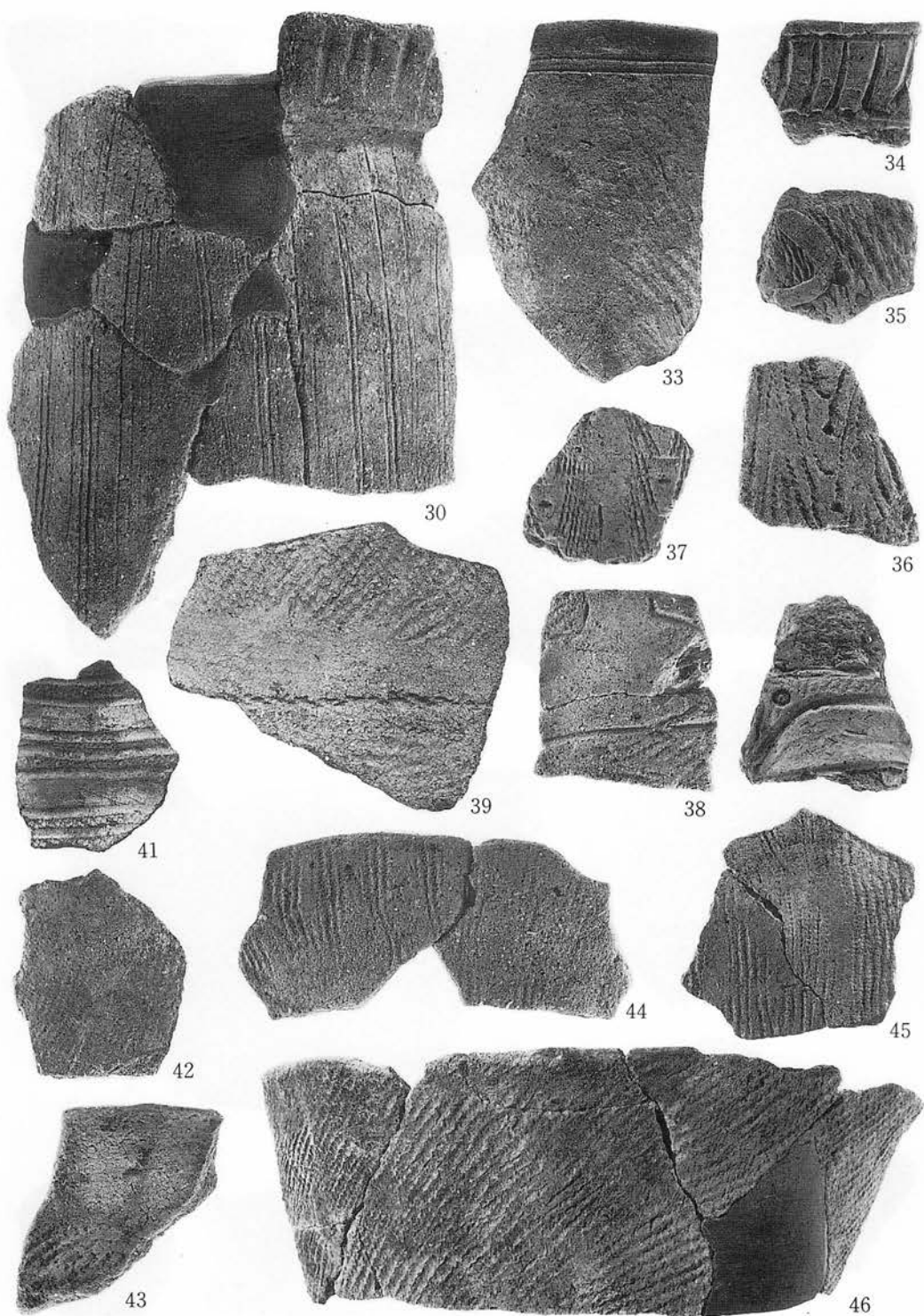


28

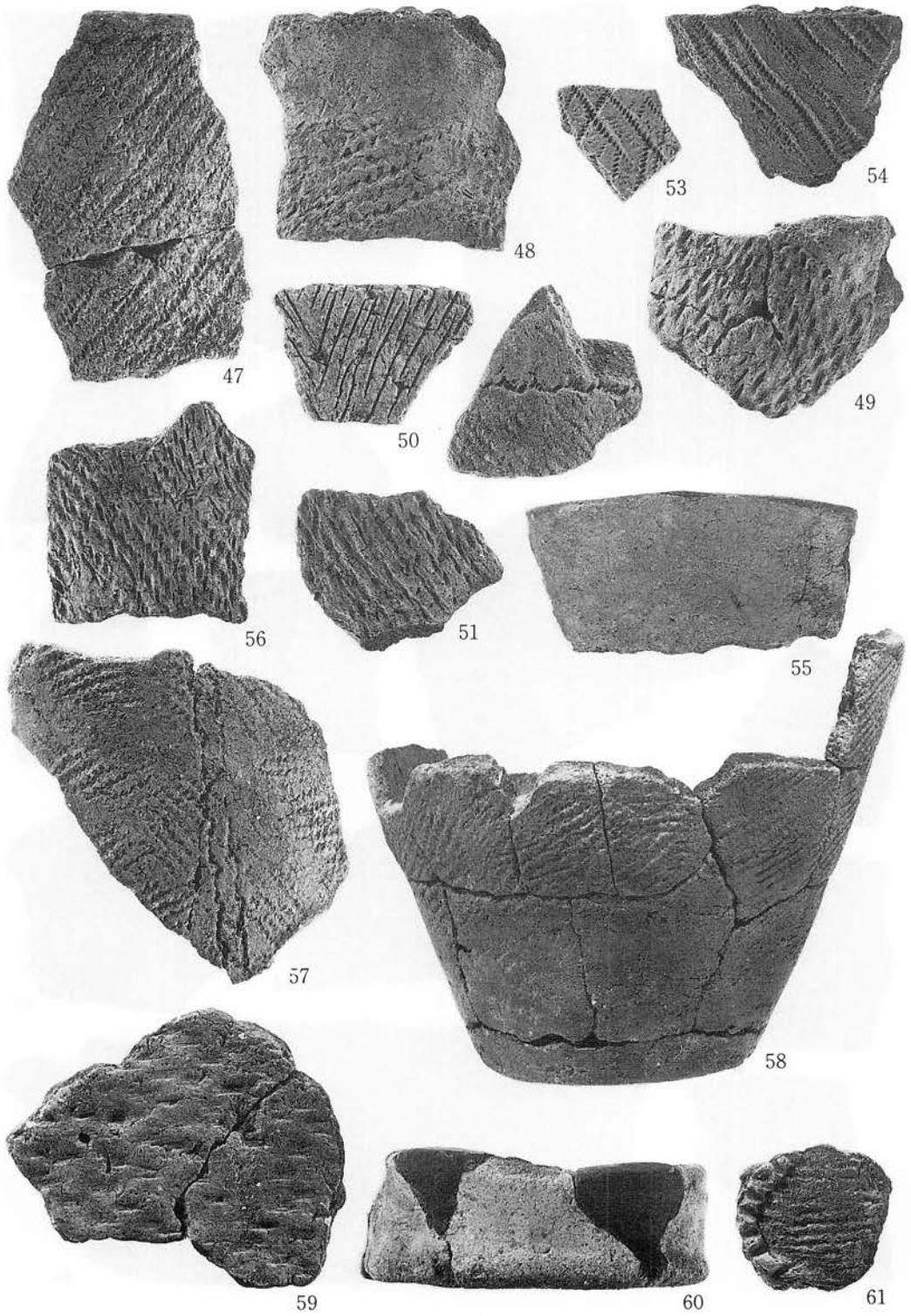


32

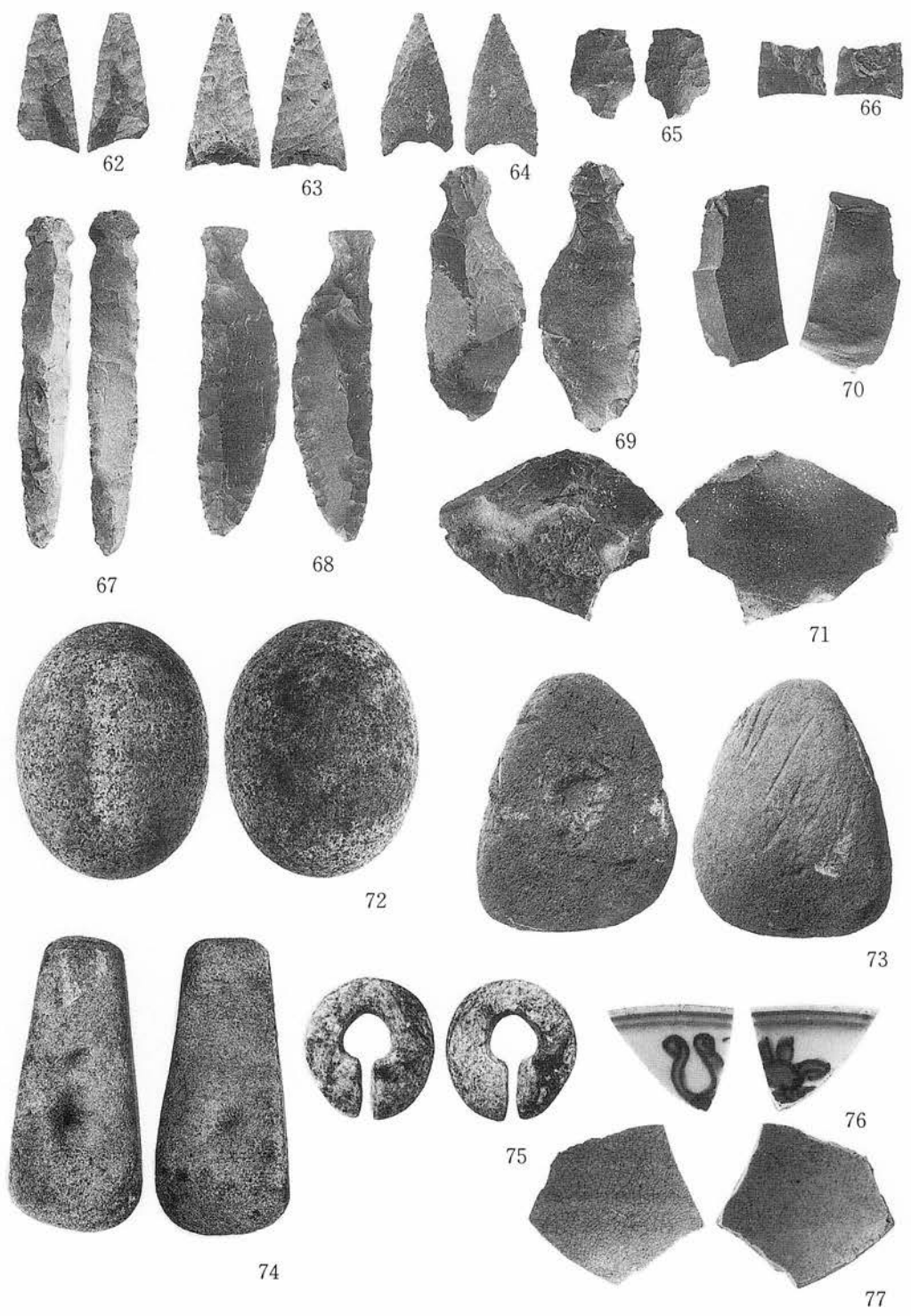
写真図版6 出土遺物 土器(2)



写真図版7 出土遺物 土器(3)



写真図版 8 出土遺物 土器(4)



写真図版9 出土遺物 石器・石製品・陶磁器

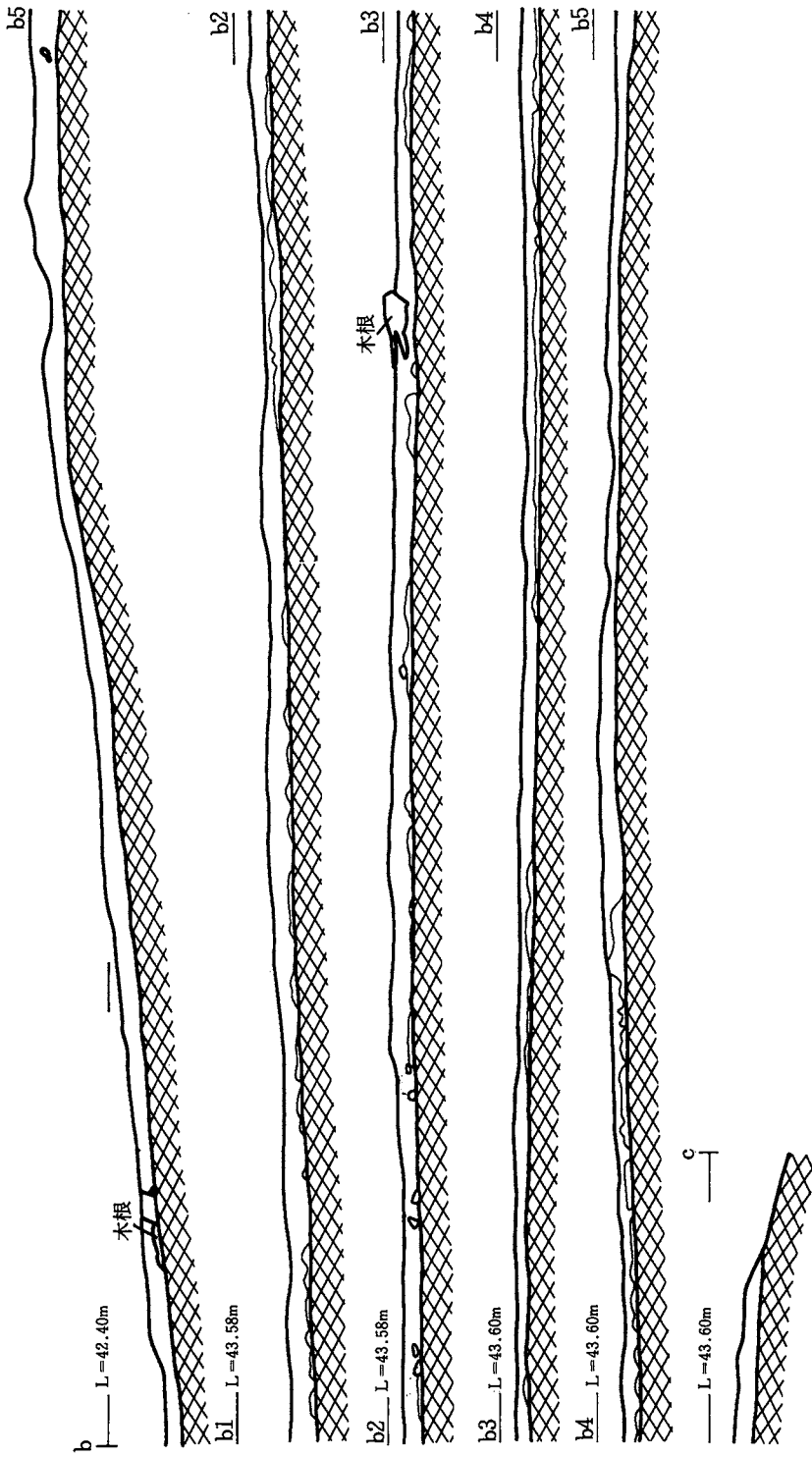
VI ^{ふる}古 ^{だて}館 ^{あと}跡

所在地 陸前高田市矢作町字諏訪35ほか
委託者 岩手土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和62年7月1日～10月31日
調査対象面積 5,030m²
発掘調査面積 5,030m²
遺跡番号・略号 NF66-0103・FD-87
調査担当者 中川重紀・玉川英喜
協力機関 陸前高田市教育委員会

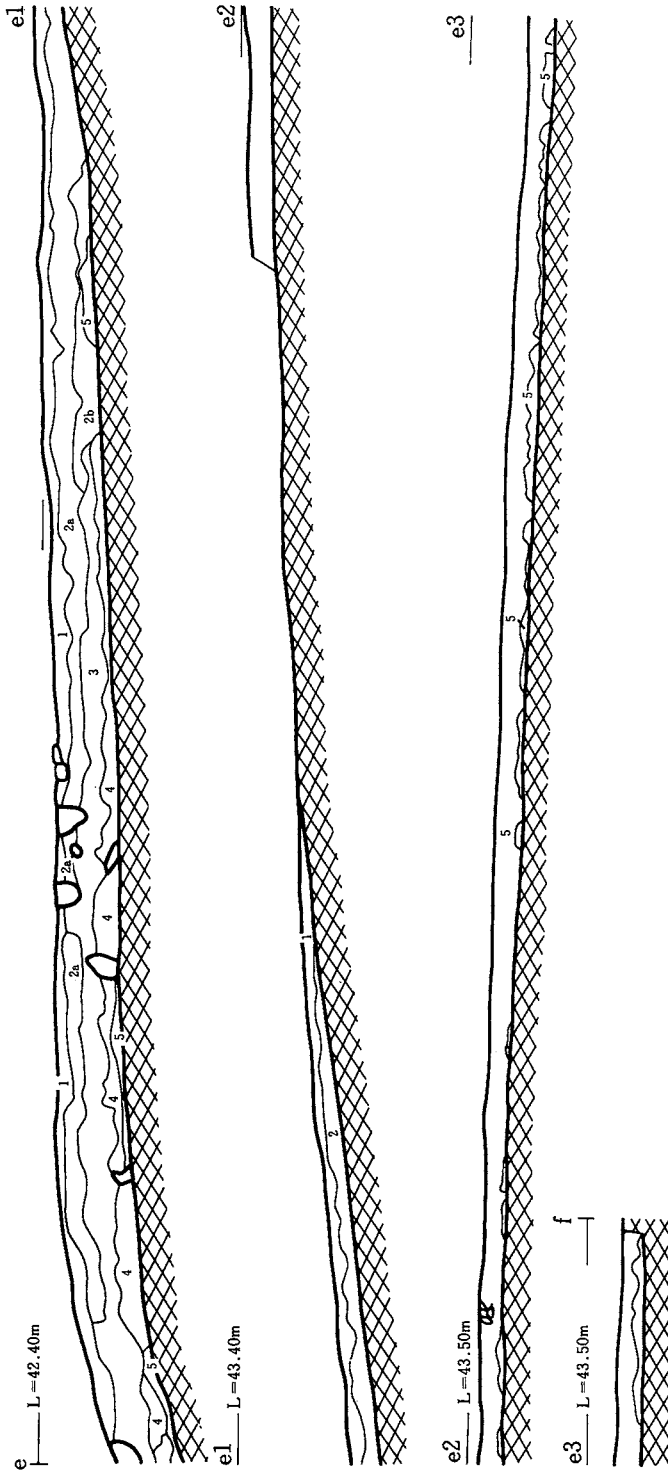


1	6	11	16	21
2	7	12	17	22
3	8	13	18	23
4	9	14	19	24
5	10	15	20	25

第1図 グリット・遺構配置図



第2図 II E ~ II B区 東西土層断面図 S = 1/60



- 1. 黒褐色土 10YR 2/3 シルト質 表土層。場所により色調が異なる。腐色土の部分は暗色。
- 2a. 褐色土 10YR 4/4 粘土質 盛土。整地層と思われる土。小礫が多い。
- 2b. 褐色土 10YR 4/4 粘土質 2a層に同じだが礫より礫が少ない。
- 3. 黒褐色土 10YR 3/2 粘土質 旧表土層。本根等によりしまりの強い所が部分的にある。小礫を含む。
- 4. 暗褐色土 10YR 3/3~3/4 粘土質 漸移層。3層と5層の混入したような土。しまりのよい土。小礫を含む。
- 5. 明褐色土 7.YR 5/6 粘土質 地山。礫を含む粘土質のかたい土。

第3図 III D ~ II D 区南北土層断面図 S = 1/50

1. 検出された遺構と遺物

今回の調査は館の中央部分を道路が通るための調査であり、館最頂部の平場と東側の段、西側に見られる土橋、堀の一部が調査対象地区である。調査の結果、館に伴う遺構は前述したものに建物跡2箇所、柱穴群2箇所であり、他には縄文時代の住居址6棟、土坑13基、近世以降と思われる採掘跡14箇所、墓墳3箇所が検出された。遺物は館に伴う陶磁器が7点あり、他は縄文時代前期、中期と弥生時代の土器、石器が主である。

(1) 館に伴う遺構と遺物

古館跡は南側に延びた東西150mの幅がある尾根の一部を切り取って構築された館跡であり、北側は尾根の付け根部分を切って東西に空堀を巡らし、南側は尾根の裾部分まで、東側と西側は南北に延びる自然の沢までの館であるが、南側は日本旅客鉄道大船渡線によって一部切られている。館の範囲は東西150m、南北が堀の北端から尾根裾部分までで約130mを計る。この館跡の現状は山林であるが以前には畑地として一部利用していたこともあり、さらに調査によっても明らかになった近世末期頃には金を捜すために採掘されたこともある所である。またこの館の最上部の南側には神社の跡があり、当地方でオドッコ様と呼ばれる神様の祠がある。

館跡は、最上部で東西85m、南北55mの平坦面（主郭？）と、この平坦面との段差3～5mで幅が狭い部分で3.50m、広い部分で20mの最上部平坦面を囲む1段目平場、更に東側斜面には1段目平場との段差2mで幅2m、長さ30m程の2段目平場、2段目平場との段差3mで幅3m、長さ30mの3段目平場、3段目平場との段差5mで幅2～3m、長さ26mの4段目平場、4段目平場との段差5mで幅9m、長さ23mの5段目平場が、南側は鉄道によって切られているため良く判らないが一部残っている部分や付図2に示した地形図から1段目平場との段差10m程で、残されている部分から幅約20m、長さおよそ140mの比較的広い平場が1段形成されていたと考えられる。

今回の調査は館の中央部を東西に横切って建設される道路部分が調査対象であり、東西140m、南北40mの範囲である。

1) 最上部平場（付図、第1～3図写真図版1, 2）

東西80m、南北45mの規模があり東西に細長い平場ではほぼ平坦であるが、東側は緩く傾斜し中央部分は僅かに高くなっている。その縁辺は凹凸が5箇所ほど見られ、これがすべて分からないが近世以降の採掘跡によって形状が変わったためと考えられる。調査範囲は東西80m、南北40mの範囲で平場のほぼ中央部を東西に横断する部分である。調査は調査区全面を剥ぐこととし、東西に1本、南北に2本の土層観察用のベルトを残して行った。その結果表土を剥ぐと直

ぐに明褐色土の地山が表れる所と一部で整地された赤褐色土の盛土層の部分があり、表土は浅く10~30cmの堆積であり、整地層は東側から南側にかけて幅12m、厚さ20~30cmで見られた。また西側から中央付近までは遺構検出面である明褐色土層が、中央付近から東側では赤褐色土層が表れた。この平場から検出された遺構は建物跡2棟分、縄文時代の遺構、近世以降の採掘跡であり、館に伴う遺構は建物跡2棟と少なくなかった。また、整地層も館の平場を作った際のものではなく畑地として利用する際か、もしくは採掘の際に整地された時のものようである。

2) 建物跡

建物跡は最上部平場の西側中央部と調査区南側に検出された。

1) III C-1 建物跡 (第4図、写真図版3)

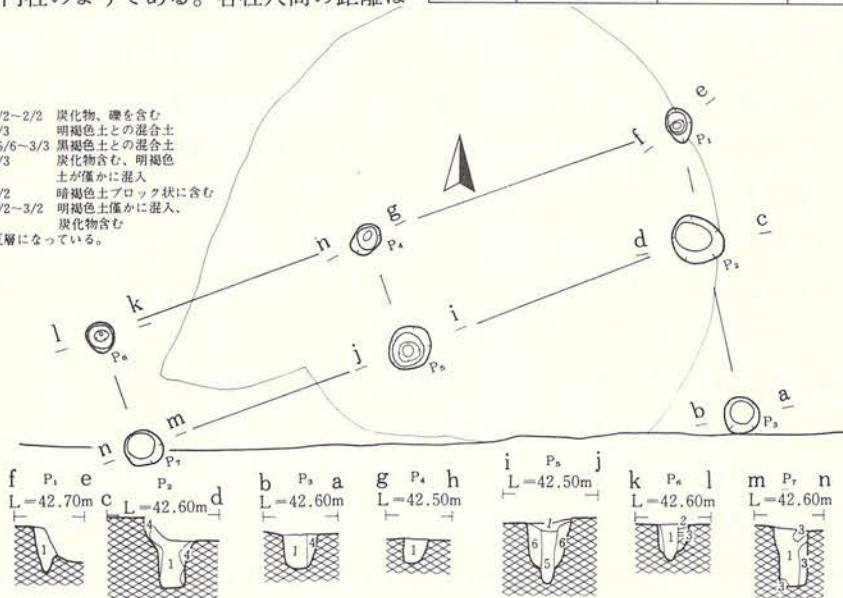
III C-1 建物跡柱穴計測表

調査区の南側、III C-15、20区にIII C-1 住居址状遺構を切って検出されたが大半が調査区外にあることから全容は判らない。検出された規模は北東-南西辺が4.80m、北西-南東辺が2.50mであり、北東-南西側で2間で北西側に1間ないし半間の底をもつ北東-南西方向に長い建物のようなものである。柱穴は7箇所検出され、そのうち柱当たりが判るものが5本あり、それを見ると柱は直径10~15cmの円柱のようである。各柱穴間の距離は

No.	開口部	底部	深さ
P1	21×27 ^{cm}	13×17 ^{cm}	35 ^{cm}
P2	42×35	29×21	56
P3	27×30	17×18	27
P4	20×28	16×15	(19)
P5	32×33	25×25	(49)
P6	22×23	18×18	27
P7	27×30	22×20	45

柱穴土層注記

1. 黒褐色土 10YR 3/2~2/2 炭化物、礫を含む
 2. 黒褐色土 10YR 2/3 明褐色土との混合土
 3. 明褐色土 7.5YR 5/6~3/3 黒褐色土との混合土
 4. 暗褐色土 10YR 3/3 炭化物含む、明褐色土が僅かに混入
 5. 黒褐色土 10YR 2/2 暗褐色土ブロック状に含む
 6. 黒褐色土 10YR 2/2~3/2 明褐色土僅かに混入、炭化物含む
- ※ P₆では2、3が互層になっている。



第4図 III C-1 建物跡 S=1/60

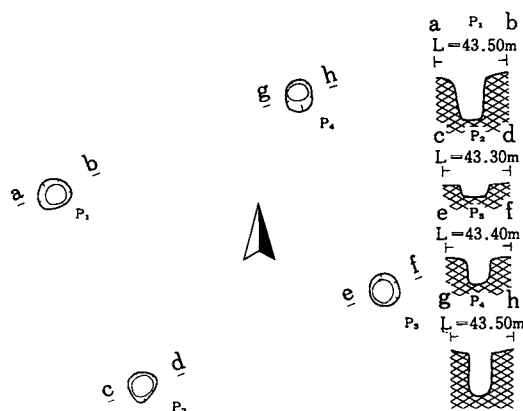
P2-P5が2.50m、P5-P7が2.30m、P2-P3が1.50m、P1-P2が0.95m、P1-P4が2.65m、P4-P5が1.00m、P4-P6が2.30m、P6-P7が1.00mである。柱穴の埋土は何れも黒褐色土であり、柱痕部分は柔らかく、その周辺は堅く締まり、なかには暗褐色土との混合土となる土層があった。また、P4-P6は掘り方より一段深く柱当たりが見られた。出土遺物は掘り方部分から弥生土器の細片が1点出土したが、中世に伴う遺物は出土しなかった。

2) ⅢC-2 建物 (第5図、写真図版4)

調査区ⅢC-1、2区の平坦面で表土を除去したV層上面で検出した。検出した柱穴は4本であり、ほぼ方形に配置されている。柱穴間の規模P1-P2が1.70m、P2-P3が2.05m、P3-P4が1.75m、P1-P4が2.10mで北東-南西方向にやや長い柱配置にある。柱穴の埋土は何れも暗褐色土の単層である。出土遺物はない。

ⅢC-2 建物跡柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ
P1	26×25 ^{cm}	15×16 ^{cm}	34 ^{cm}
P2	24×20	15×16	10
P3	25×22	15×18	18
P4	25×20	13×17	34



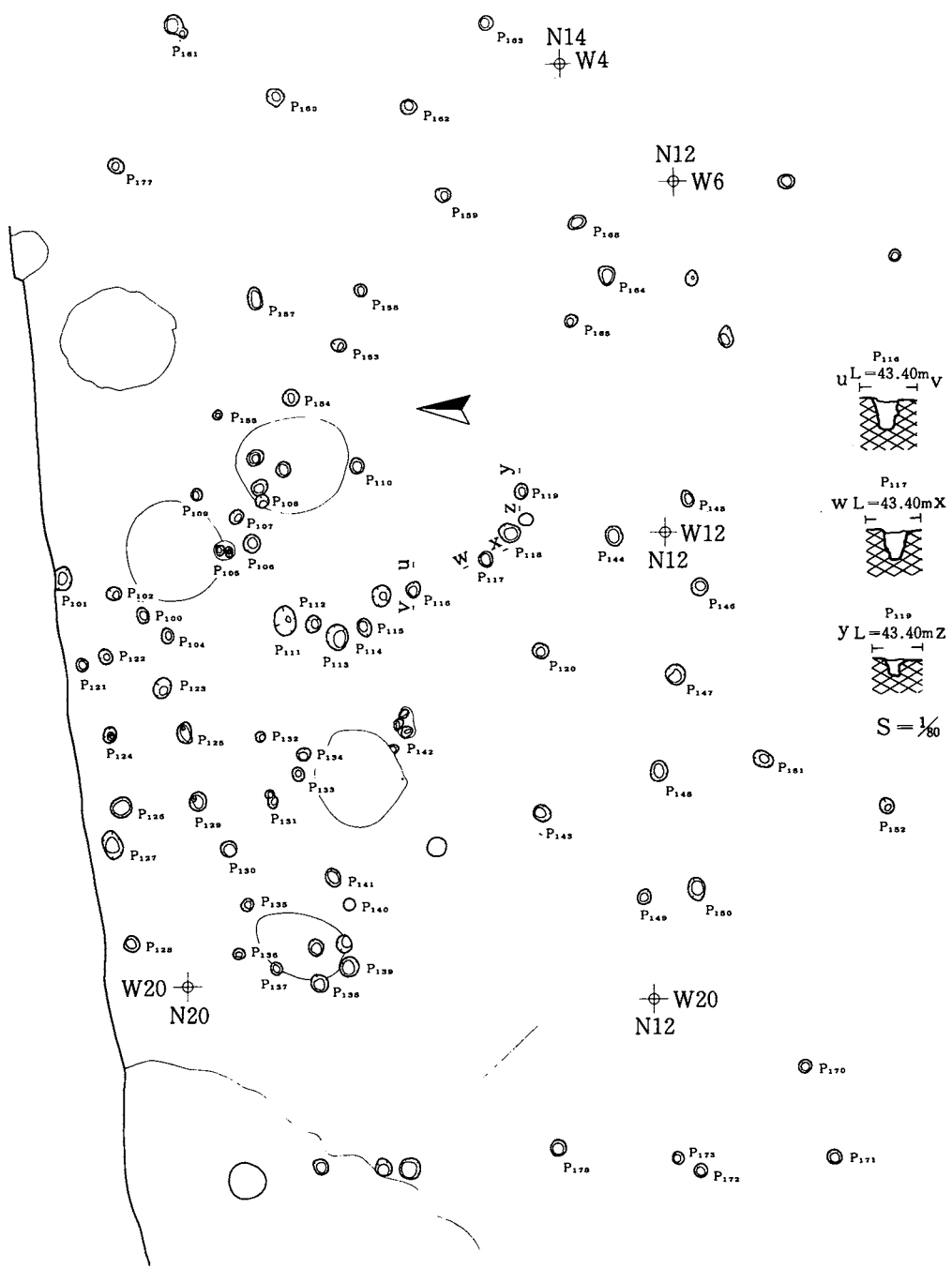
第5図 ⅢC-2 建物跡 S=1/60

3) 柱穴群 (第6、7図、写真図版5)

柱穴群はⅡC、D区、ⅢB区の2地区で表土を剥いだV、IV層面で検出された。ⅡC、D区ではIV層上面で15m、東西21mの範囲に88箇所、検出され縄文時代の土坑を切っている柱穴もある。柱穴の規模は開口部の直径14~30cm前後、深さ10~40cm前後のものが多く中には40cmを越えるものも数基ある。埋土は色調から3層に分かれ、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の単層で暗褐色土の土層のものが多。出土遺物は縄文土器片や剥片が僅かに出土している。ⅢB区では東西8m、南北17mの範囲に56箇所検出された。また、この範囲には採掘跡があることから更に多くの柱穴があったと推察される。柱穴の規模は開口部で直径30cm前後のものが多く、深さは40cm前後が多いが中には40cmを越えるものもある。埋土は暗褐色土、褐色土であり、それぞれの柱穴の埋土となっている。出土遺物は縄文時代のフレークやチップが僅かに出土している。これら柱穴群は不規則であり、建物を復元するに至らなかったが、その配置も中世の建物跡のような規則性が認められないことや後述する縄文時代の遺構の埋土に近似していることなどから縄文時代の柱穴群の可能性もある。

II C-D区柱穴計測表

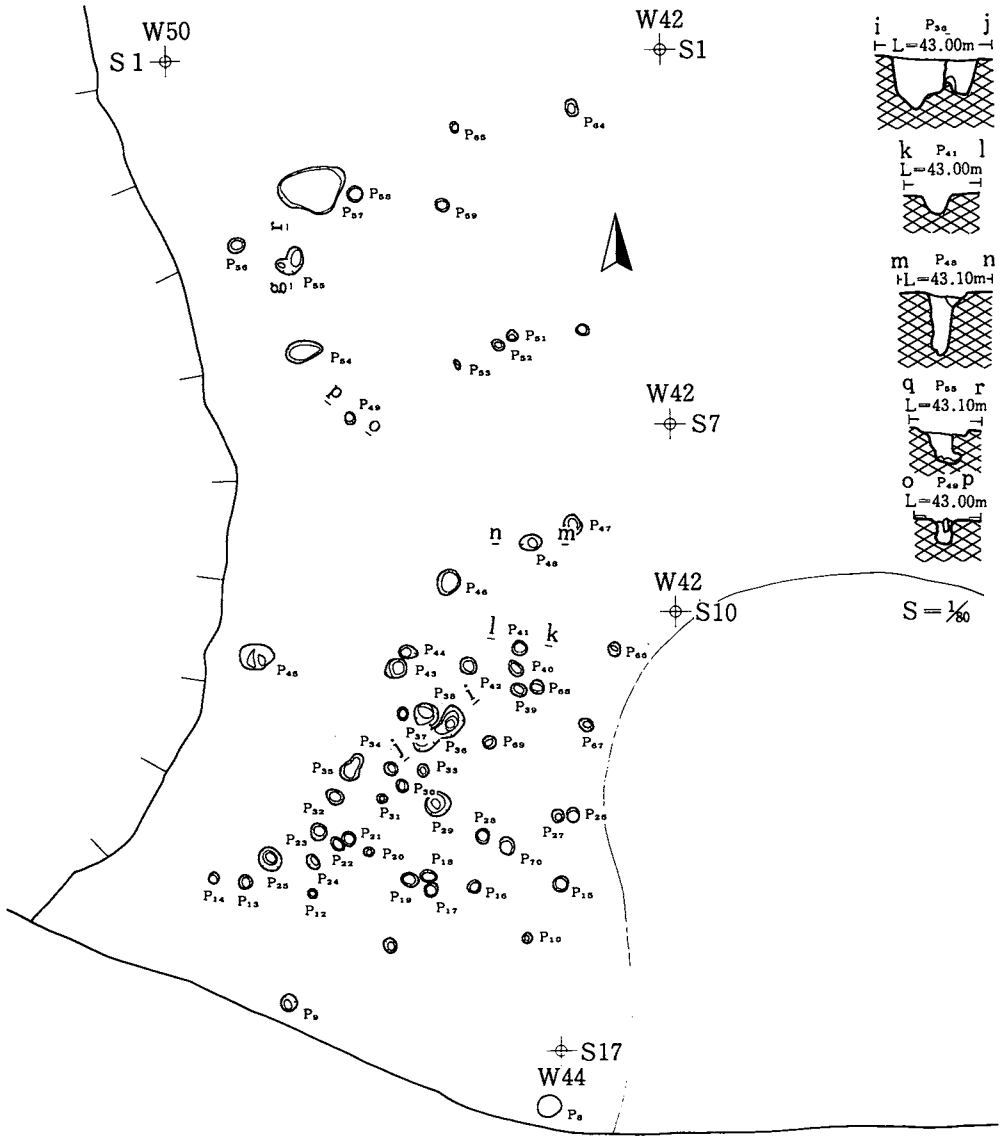
No.	開口部	底部	深さ	土色	No.	開口部	底部	深さ	土色
P101	39×28 ^{cm}	22×15 ^{cm}	32 ^{cm}	褐色	P140	18×22 ^{cm}	6×10 ^{cm}	34 ^{cm}	褐色
P102	20×26	15×12	24	褐色	P141	28×26	22×20	15	暗褐色
P103	28×22	14×14	33	褐色	P142	32×32			
P104	24×22	15×12	47	褐色	P143	29×31	16×22	23	褐色
P105	34×35		29	褐色	P144	35×29	22×22	12	褐色
P106	30×29	18×19	22	暗褐色	P145	26×24	20×16	27	褐色
P107	24×26	13×12	15	褐色	P146	29×29	19×17	18	褐色
P108	23×21	12×13	22	褐色	P147	34×33	21×20	17	褐色
P109	18×20	14×13	14		P148	34×28	24×20	52	褐色
P110	25×24	16×16	5		P149	22×24	14×16	8	褐色
P111	51×36	9×8	67	暗褐色	P150	36×30	22×22	19	赤褐色
P112	30×27	15×12		褐色	P151	25×32	14×16	21	褐色
P113	44×38	29×21	26	褐色	P152	24×24	11×12	29	赤褐色
P114	28×24	16×16	2	暗褐色	P153	23×26	9×11	10	
P115	37×32	15×12	72	黒褐色	P154	29×28	19×10	22	
P116	26×25	18×16	37	暗褐色	P155	15×15	9×10	12	
P117	22×23	17×16	36	暗褐色	P156				
P118	31×34	21×24	21	暗褐色	P157	38×24	30×14	11	
P119	26×22	12×13	20		P158	23×20	16×12	9	
P120	25×27	15×16	14	褐色	P159	22×26	15×14	29	
P121	21×22	14×14	11	褐色	P160	31×30	16×16	40	
P122	24×24	10×11	18	褐色	P161				
P123	34×29	16×15	20	褐色	P162	25×30	15×15	18	
P124	26×22	2×4	31	暗褐色	P163	24×23	16×16	49	
P125	34×22	3×4	25	暗褐色	P164	33×28	25×18	19	
P126	33×36	25×27	19	褐色	P165	22×22	14×12	13	
P127	46×32	24×25	31	褐色	P166	25×26	18×23	7	
P128	24×28	16×19	21	暗褐色	P167				
P129	32×30	3×3		暗褐色	P168	23×30	16×20	6	
P130	26×29	19×20	16	褐色	P169				
P131				褐色	P170	20×22	14×18	10	
P132	18×19	10×10		暗褐色	P171	22×26	17×20	13	
P133	23×22	11×10	30	暗褐色	P172	24×23	18×18	4	
P134	22×24	14×15	20	暗褐色	P173	20×20	15×15	15	
P135	20×22	12×11		暗褐色	P174	34×35	28×28	21	
P136	18×20	9×12	21	暗褐色	P175	30×28	20×20	21	
P137	19×19	13×12	17	褐色	P176				
P138	31×30	18×18		褐色	P177	24×27	14×13	17	
P139	33×33	25×22	25	褐色	P178	28×26	20×20	51	



第6图 II C区柱穴群 $S = \frac{1}{80}$

Ⅲ B区柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ	土色	No.	開口部	底部	深さ	土色
P 8	36×39 ^{cm}			明褐色	P40	21×22 ^{cm}	15×16 ^{cm}	19 ^{cm}	
P 9	24×26	12×16	5	暗褐色	P41	26×22		21	暗褐色
P10	15×16	9× 9		明褐色	P42	26×25	16×18	23	暗褐色
P11	20×23	12×14	34	暗褐色	P43	35×31	21×22	30	
P12	15×14	12×11	2	明褐色	P44	30×22	17×14	11	明褐色
P13	22×24	15×18	31	暗褐色	P45	53×43		26	暗褐色
P14	14×18	12×14		暗褐色	P46	36×39	27×30	13	黒褐色
P15	23×24	18×20	15	明褐色	P47	28×32	14×18	35	明褐色
P16	18×19	14×15	13	暗褐色	P48	32×27		66	明褐色
P17	19×22	17×15		暗褐色	P49	16×20	13×15	26	黒褐色
P18	24×19	3× 4		暗褐色	P50				
P19	26×24	20×17	20	明褐色	P51	16×16	11× 8	28	明褐色
P20	14×14	12×10	12	暗褐色	P52	17×17	12× 9	12	明褐色
P21	22×20	14×18	13	暗褐色	P53	9×14	5× 8	9	黒褐色
P22	14×21	12×18	11	暗褐色	P54	52×32	44×30	4	暗褐色
P23	23×24	16×15		暗褐色	P55				
P24	22×23	7×10		暗褐色	P56	26×15	20×15	25	黒褐色
P25	39×38	14×17	34	暗褐色	P57	102×76	96×75	25	
P26	21×22	17×18	3	暗褐色	P58	24×24	17×20	22	明褐色
P27	18×20	12×11		暗褐色	P59	22×19	16×16	12	黒褐色
P28	22×24	17×16	17	暗褐色	P60				
P29	38×38	14×17		暗褐色	P61				
P30	20×19	12×15		暗褐色	P62				
P31	15×13	8× 8			P63				
P32	26×23	20×14		暗褐色	P64	19×28	10×18	15	暗褐色
P33	16×18	10×11	7		P65	14×16	12×13	14	黒褐色
P34	20×18	14×10	16		P66	20×20	10× 8	34	暗褐色
P35	18×46	16×36	14	暗褐色	P67	23×18	13×12		
P36					P68	20×22	15×12		
P37	16×16	14×15		黒褐色	P69	19×16	14×12		
P38	36×38	22×16		黒褐色	P70	26×28	19×23		
P39	24×22	16×14	36	暗褐色					



第7图 III B区柱穴群 S=1/120

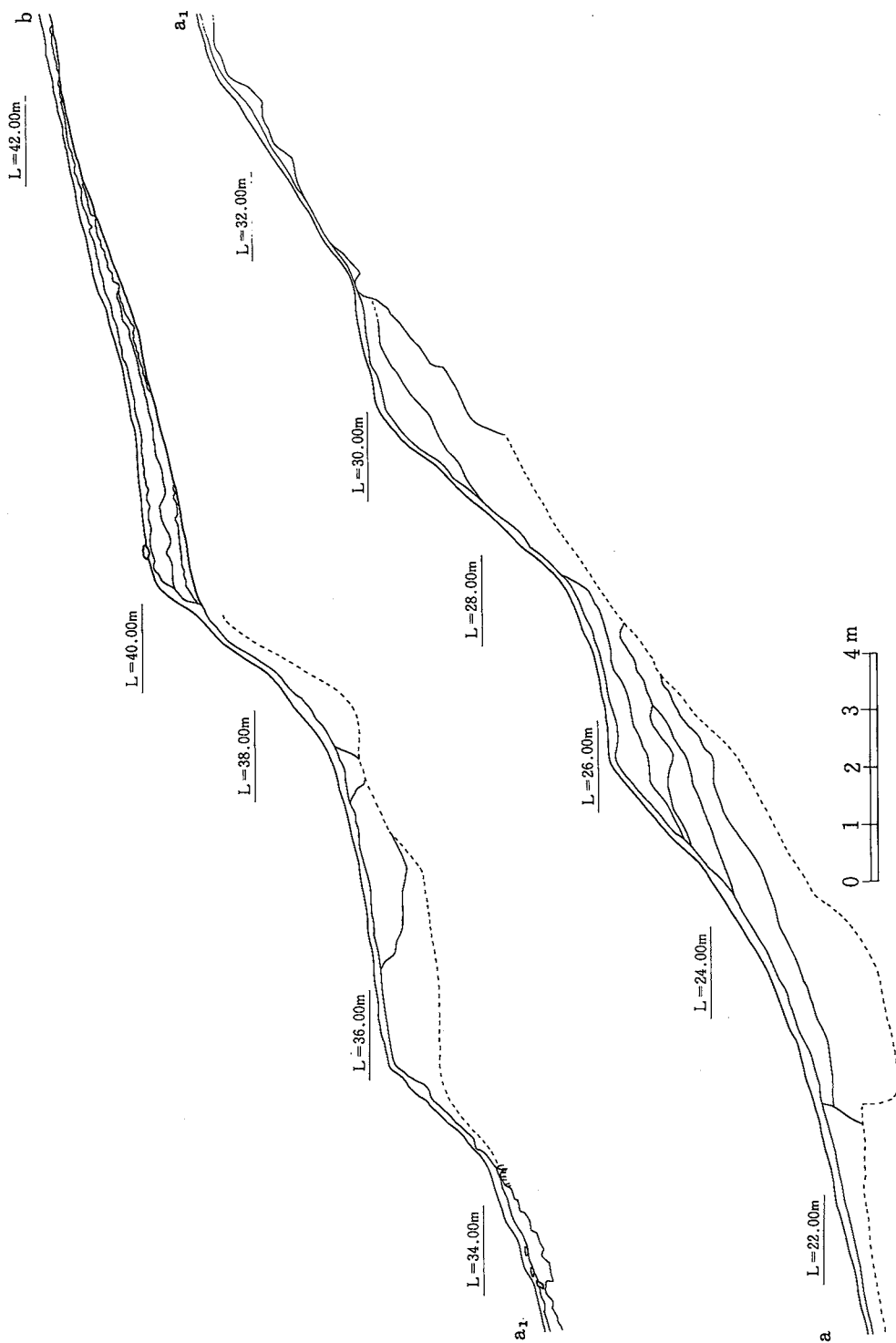
4) 東側斜面 (付図1、第8図、写真図版6～11)

館の東側の斜面に4段の段差が見られた。一段目としたものは館の最頂部平場を取り巻くように東から西側にかけて見られるもので、最頂部平場との段差は3mであり、幅6～20m程の犬走り状の平場である。調査した部分はその内の東側斜面部分であり、全体的なことは言えないが平場の作り方は、断面図を作成した部分では採掘跡によって攪乱されているためはっきりしない。調査区で見ると、基本土層ⅣないしⅤ、Ⅵ層を削り出して作っているようである。また、調査区内では建物等の遺構は検出されていない。二段目平場としたものは付図の中に表現されなかったが、一段目平場との比高差2m、幅2m、長さ10m程で礫層を削り出して作られ、やはり犬走り状を呈しているが、この段に関しては後に山に登る為に作られた可能性もある。三段目平場としたものは二段目との比高差3m、幅2m、長さ30m程であり、比較的平坦な面が極僅かにみられた。平場は旧地表面の上に砂混じりの暗褐色土層を20～45cm程に盛土して作られている。この面にも建物跡はない。Ⅳ段目平場としたものは三段目との比高差4mの急な斜面となり、幅3m、長さ25m程の平場である。平場は三段目平場と同じく砂利混じりの暗褐色土層を30～120cm程盛土して作られている。この面にも建物跡はない。また、三段目平場と四段目平場の間にそれぞれ2m位の比高差をもって南側斜面を鉄道によって切られていると思われる平場があり、調査区外であることから詳細は不明である。五段目平場としたものは四段目との比高差4mの急な斜面となり、幅9m、長さ22m程の平場である。ただしこの平場に関しては沢の中にあることから沢に浸蝕されて出来たものかも知れない。現在でも沢は平場の東側を流れており、平場は沢に向かって緩やかに傾斜している。この面にも遺構は検出されない。

東側斜面は全体で見ると急峻な面に2～4mの比高差を持って段階状に小さな平場を構成しているが、調査では館に伴って作られているかどうか判明しなかった。遺物も縄文時代の土器片が旧表土の黒褐色土から4点出土し、現表土から陶器片が1点出土しただけである。

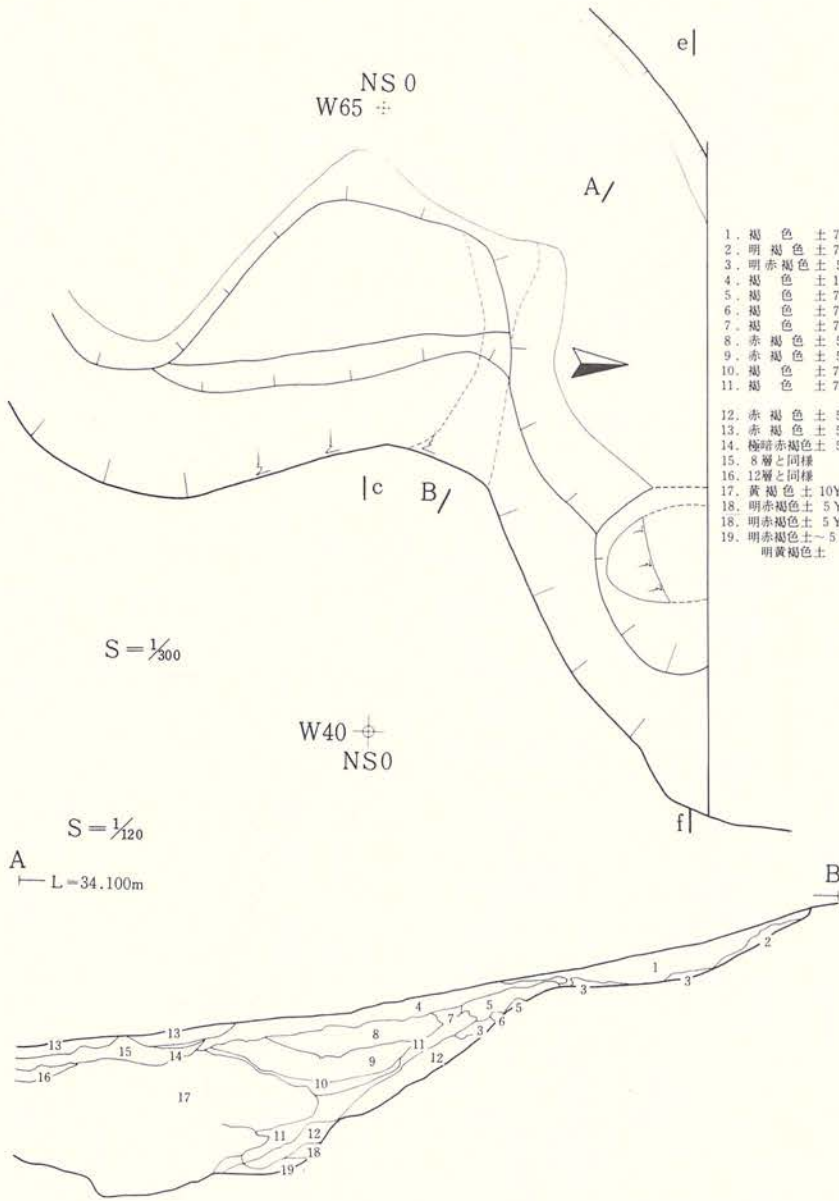
5) 堀跡 (第9、10図、写真図版12下)

堀跡は最頂部平場の北側にも見られるもので、尾根を東西に切って作られている。現状では幅20m、長さ90m、最頂部平場との比高差3～5mである。この堀は当初、北側から最頂部平場に沿って南側に延びているものと判断したが、調査の結果西側の沢に続いていることが判明している。調査の対象は堀の西端の一部であり、道路用地に沿って堀の形状と土層を確かめるために幅2mのトレンチを入れ、その形状と土層を確かめた後に全面を掘り下げた。その結果、堀全体を見ることは出来なかったが、第9、10図に見られるように後世の採掘跡によってかなり攪乱されていることが確認され、僅かに土橋と西側の壁部分にその形状を残していると思われる部分が検出されたにすぎない。それによると堀の幅は検出面上端で約10m、下端で約8mで、堀の形状は箱葉研状を呈するようであるがこの地区の土層も攪乱を受けている可能性



第8図 東側斜面断面図

|d

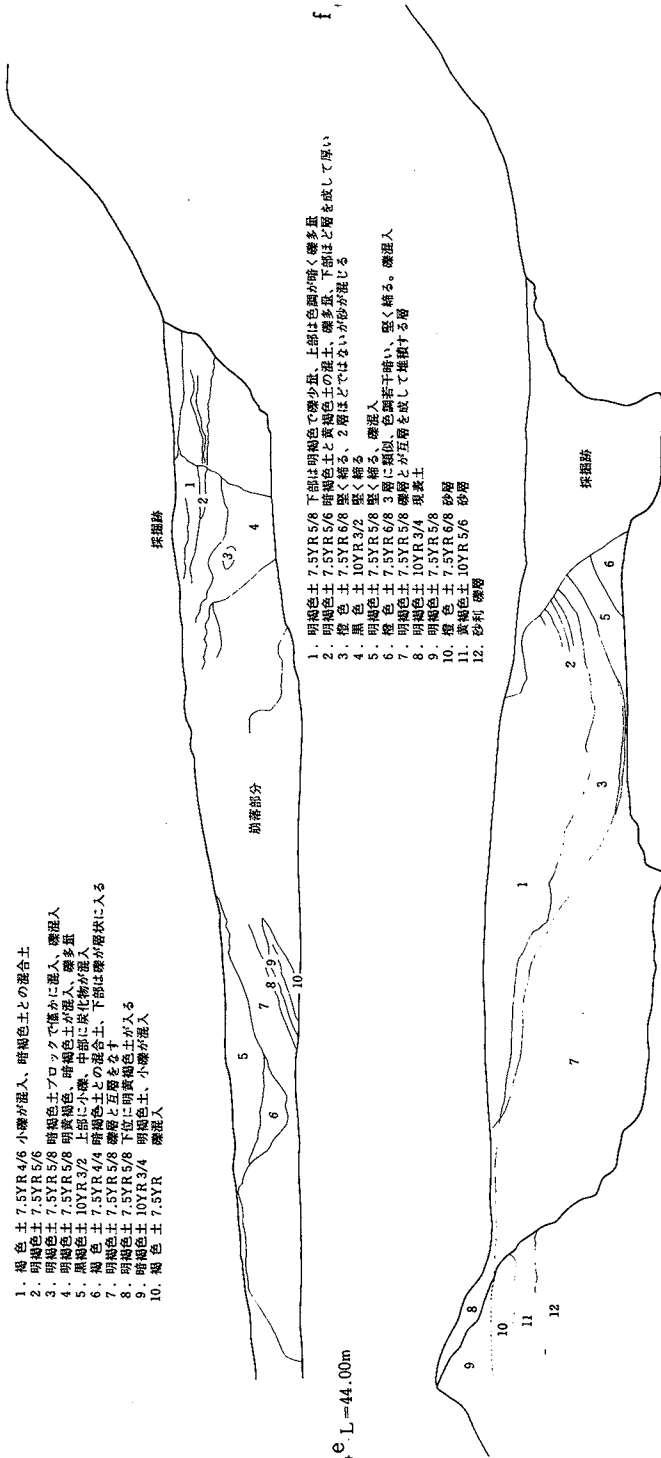


1. 褐色土 7.5YR 4/6 堅く締る、炭化物微量、小礫含む、黒褐色土との混合土
2. 明褐色土 7.5YR 5/6 堅く締る、炭化物微量
3. 明赤褐色土 5 YR 5/8 堅く締る、褐色土が混入する部分あり
4. 褐色土 10YR 4/6 堅く締る、炭化物微量、1層と2層の混合土
5. 褐色土 7.5YR 4/4 柔らかい、炭化物微量、1層より黒み強い
6. 褐色土 7.5YR 4/4 柔らかい、5層と3層の混合土
7. 褐色土 7.5YR 4/6 堅く締る、炭化物微量、4層と2層の混合土
8. 赤褐色土 5 YR 4/6 堅く締る、炭化物微量、小石含む、1層と3層の混合土
9. 赤褐色土 5 YR 4/8 堅く締る炭化物微量、礫層との混土
10. 褐色土 7.5YR 4/4 柔らかい、炭化物微量、黒褐色土との混合土
11. 褐色土 7.5YR 4/6 柔らかい、炭化物微量、10層より明るい。小礫含む、3層との混合土。
12. 赤褐色土 5 YR 4/6 柔らかい、3層と2層の混合土
13. 赤褐色土 5 YR 4/6 堅い、炭化物微量、2層との混合土
14. 極暗赤褐色土 5 YR 2/4 堅い、11層と黒褐色土との混合土
15. 8層と同様
16. 12層と同様
17. 黄褐色土 10YR 5/6 黄褐色砂砂土と基本土層と礫層の混合掘
18. 明赤褐色土 5 YR 5/8
18. 明赤褐色土 5 YR 5/8 柔らかい
19. 明赤褐色土～5 YR 5/8-8-10YR 6/8 柔らかい
明黄褐色土

第9図 土橋・堀等平面図

1—L=44.00m

1. 褐色土 7.5YR 4/6 小礫が混入、暗褐色土との混合土
2. 暗褐色土 7.5YR 5/6 暗褐色土アロックで僅かに混入、礫混入
3. 暗褐色土 7.5YR 5/8 暗褐色土が混入、礫少量
4. 暗褐色土 7.5YR 5/8 暗褐色土が混入、礫少量
5. 暗褐色土 10YR 3/2 上部に小礫、中部に炭化物が混入
6. 褐色土 7.5YR 4/4 暗褐色土との混合土、下部は礫が層状に入る
7. 暗褐色土 7.5YR 5/8 礫層と互層をなす
8. 暗褐色土 7.5YR 5/8 下部に暗褐色土が入る
9. 暗褐色土 10YR 3/4 暗褐色土、小礫が混入
10. 褐色土 7.5YR



1. 暗褐色土 7.5YR 5/8 下部は暗褐色で礫少量、上部は色調が暗く礫少量
2. 暗褐色土 7.5YR 5/6 暗褐色土と黄褐色土の混入、礫少量、下部は之層を成して厚い
3. 褐色土 7.5YR 6/8 炭く礫層、2層ほどではないが砂が混じる
4. 暗褐色土 10YR 3/2 炭く礫層
5. 暗褐色土 7.5YR 5/8 炭く礫層
6. 暗褐色土 7.5YR 5/8 炭く礫層
7. 暗褐色土 7.5YR 5/8 暗褐色土が互層を成して堆積する層
8. 暗褐色土 10YR 3/4 暗褐色土
9. 暗褐色土 7.5YR 5/8 暗褐色土
10. 褐色土 7.5YR 6/8 砂層
11. 暗褐色土 10YR 5/6 砂層
12. 砂利礫層

第10図 堀跡土層断面図 S=1/60

がある。埋土は第10図に示したようにレンズ状に堆積しているがほぼ同一の層であり、褐色土～赤褐色土による土層が大半である。その中の含有物によって層が分かれるが、層の状態から人為的に一度一気に埋められた可能性が強いものである。また、これら土層も採掘の際に何度となく掘り返えされ、埋め戻されている可能性もあり、堀本来の埋土であるか不明である。堀内からの出土遺物はない。

6) 西側平場 (第9図、写真図版 12、13)

西側平場としたものは、最頂部平場を取り巻くように見られる一段目平場の西側部分であり、当初堀の一部と見られた地区である。調査の結果、堀と同じように採掘跡によって大部分が壊されていることが解り、第9図に示した土橋から南側の部分で最頂部平場からの比高差6m、東西6m、南北10mの範囲で僅かに残っているだけである。この部分は表土(I層)を剥ぐとVII層の砂礫層である。遺構、遺物とも検出されていない。

7) 土橋 (第9図、写真図版14、15)

館最頂部平場の北西側にあり、第一段目平場ないし堀に向かって緩いスロープ状となっている。長さは10mほどあり、幅は約2mで地山(V層)を削り出して作られたようであるが一部壊されているために全体でみることは出来なかった。地山面より上層は表土(I層)と暗褐色土層が堆積し、本層から明治初期頃の陶磁器の破片が出土していることから館に伴うと考えられず、明治以降に盛土されたものであろう。現状は山林であるが、以前には畑として利用されており、さらに近世末期には屋敷等があったと伝承されている。

8) 出土遺物 (写真図版27)

陶磁器 (写真図版27)

陶磁器のうち、明らかに館跡に伴うのは白磁3点、染付5点、灰釉陶器1点のあわせて7点である。前二者は舶載品であり、後者は美濃産である。

白磁3点のうち1点は端反り口縁の皿であり、灰白色を呈する。他の2点は高台と体部片である。16世紀の館跡から出土する皿に酷似する。

染付4点には碗1点と皿3点がある。碗は内湾気味に立ちあがる口縁部をもち、皿には端反り口縁のものと内湾して立ちあがる皿がある。また厚手で焼成が弱く、内外面に貫入をもつ破片が含まれる。いずれも16世紀後半に出土する例が多く、内湾皿については17世紀に入る可能性もあげられる。

灰釉陶器皿の細片1点は、美濃大窯期の製品とみられる。

(2) 館以前の遺構と遺物

館が構築される以前の遺構と遺物である。遺構は何れも縄文時代の住居址6棟、住居址状遺構3棟、土坑13基であり、最頂部平場から表土層を剥いだ基本土層のⅣ、Ⅴ層面で検出された。遺物は縄文時代と弥生時代の土器、石器が出土している。

1. 縄文時代の遺構と遺物

1) 住居址

住居址は館最頂部平場に6棟検出され、調査区のほぼ中央部に1棟、東側に1棟、南側に4棟が検出され、南側に検出された4棟のうち2棟が調査区外に延びている。

Ⅱ D-1 住居址 (第11~14図、写真図版16、28、29)

調査区Ⅱ D-13、18区の平坦面に位置し、表土を除去したⅤ層面において黒褐色土が検出され、検出時には土坑が重複したものと判断されたが、調査が進むに連れて住居跡であることが判明した遺構である。規模は炉の長軸方向で5.15m、短軸方向で4.80m、検出面からの深さは0.18mである。平面形は円形状を呈している。埋土は色調や含有物等から3層に分けられる。

1層は黒褐色土でフレーク、チップ、土器、炭化物粒等が混じっている。2、3層は褐色土に明褐色土や炭化物粒が極僅かに混じり、小石が多く含まれる土層である。1層は自然層、2、3層は人為層と考えられる。床はほぼ平坦で堅く、

Ⅳ層面が床面である。柱穴は4基検出され、南北にやや長い方形に配置されている。各柱穴間の距離はP1-P2は1.76m、P2-P3は2.90m、P3-P4は2.11m、P1-P4は2.66mである。炉は長軸を東西方向にもつ石組の複式炉で全長185cmである。石囲い部は長さ20~40cm大の長方形の礫で作られ、土器埋設石囲い部と石囲い部、それに前庭部からなり、各

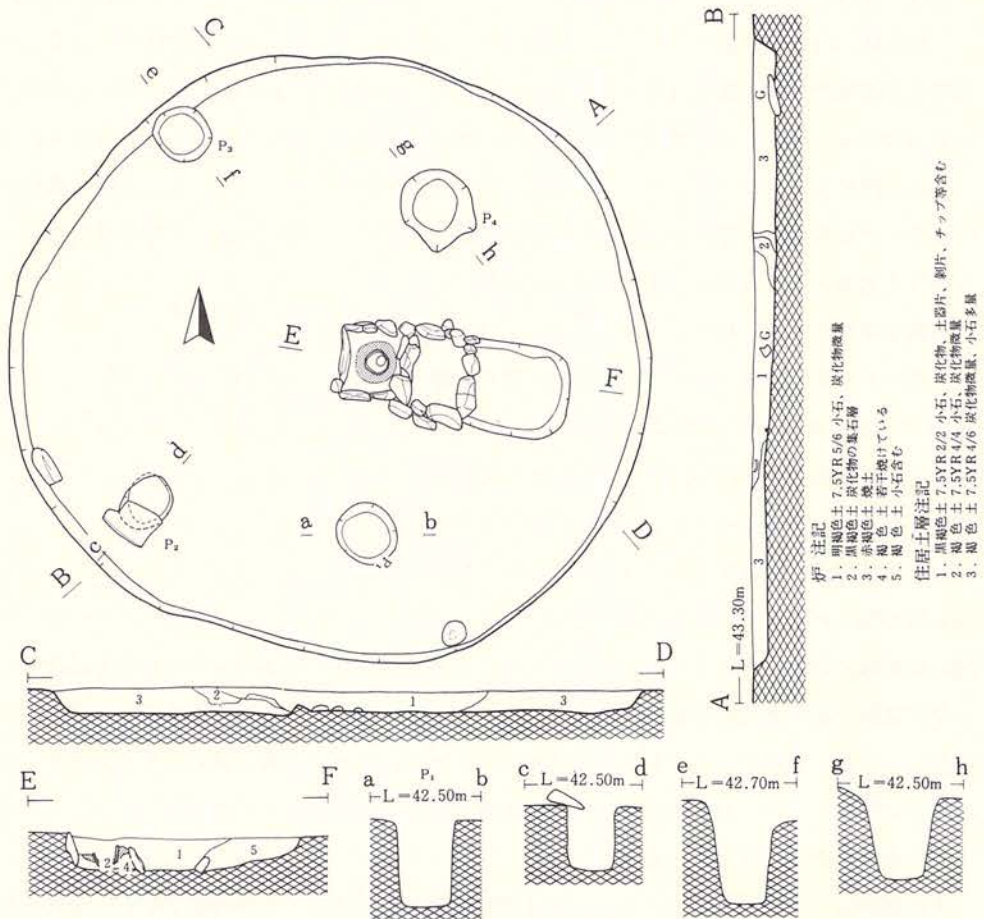
Ⅱ D-1住居址柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ
P1	45×50 ^{cm}	35×39 ^{cm}	68 ^{cm}
P2	45×36	40×31	50
P3	46×44	35×32	85
P4	57×60	35×37	65

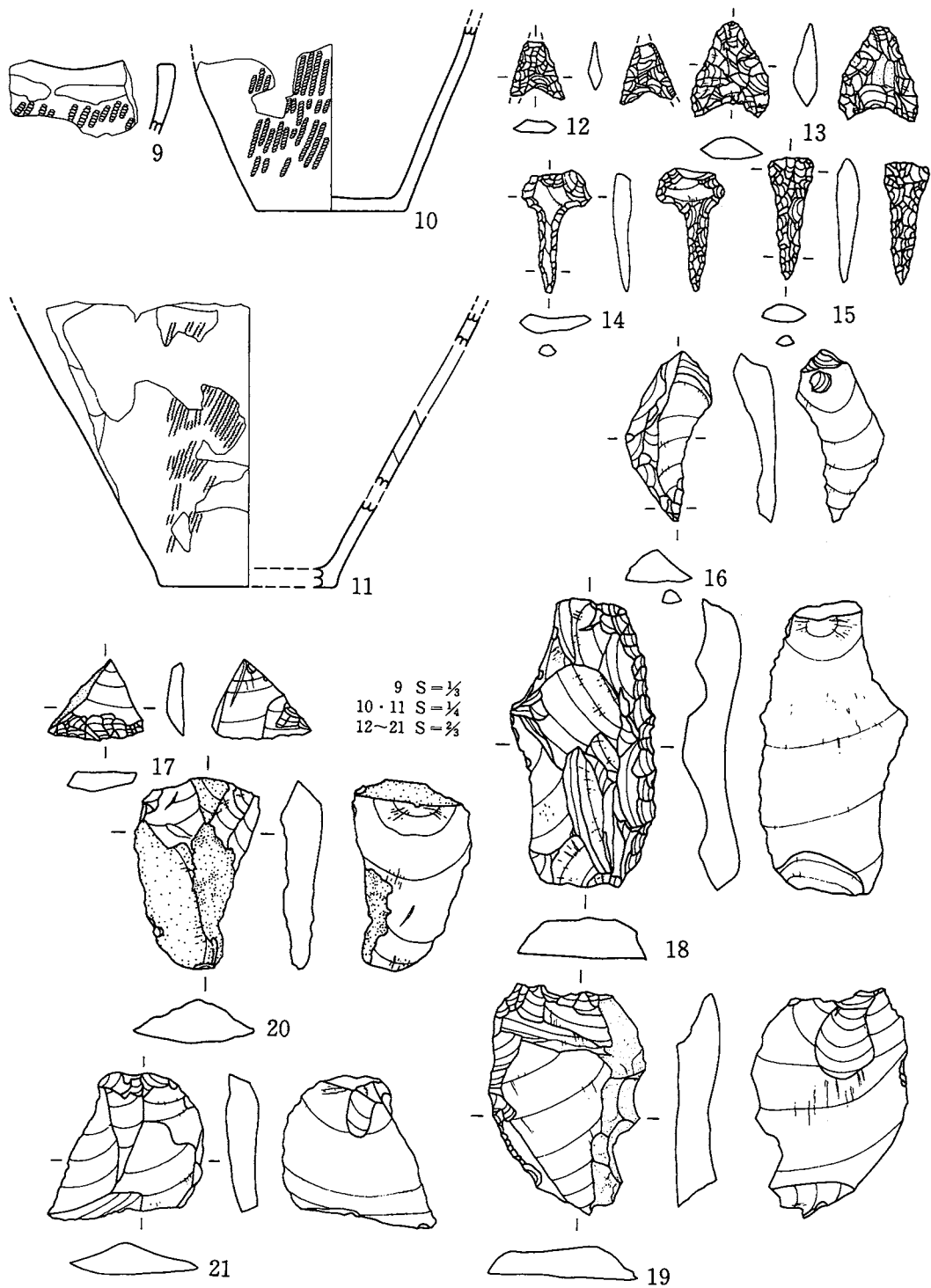
石囲い部の境には更に大きな石を使用している。土器埋設石囲い部は60cm×60cmの方形状の石囲い部に深鉢土器の底部部分が10cmの深さで中央部に据えられ、その周辺は暗褐色土で埋められ、土器周辺は赤く焼けている。石囲い部は48cm×75cmの長方形の石囲い部で深さ20cmあり、底面は僅かに焼けていた。前庭部は77cm×72cmの長方形で住居の壁まで達していない。底面はやや堅く中央部がやや窪んでいる。

出土遺物は、土器、石器である。土器は炉の埋設土器を除いて1層の埋土中と、柱穴の埋土上部から出土している。9~10は何れも深鉢土器であり、9は口縁部破片で断面三角形の粘

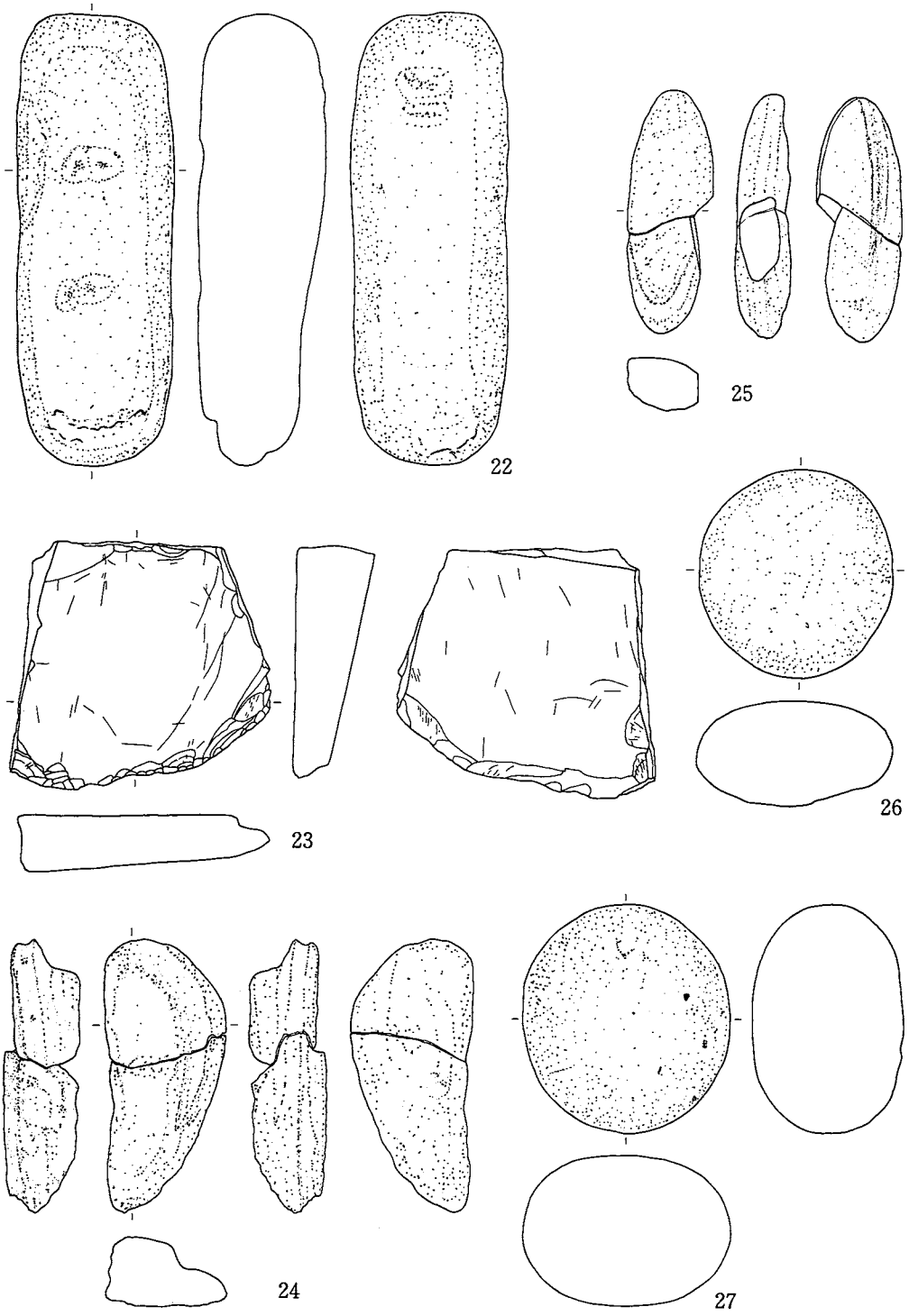
土隆帯が口縁直下を巡っている様であるが、隆帯が剥がれている。縄文は隆帯の下部に見られ、原体RLが施文されている。10は炉の埋設土器として使用されたもので胴下半部から底部の土器である。器表面や内面は火熱のため脆くなっている。縄文はLRが施文されている。11は表面にススが多く付着している深鉢体部から底部破片で器面は脆く、縄文もRLが施文されているようである。これら土器の時期は中期末葉で第Ⅱ群土器2類に属する。石器は埋土中と床面上の壁際から出土している。器種は石鏃、石錐、不定形石器、凹石、礫器、砥石、磨石、大型球状石、石皿である。石鏃は12、13の2点が出土した。何れも基部は凹基式状で、12は側縁が直線的で、13は側縁が湾曲している。12は先端を欠損している。石錐は14~15の3点が出土した。何れも縦長剥片に調整を加えて錐として使っているもので、14、15は頭部と錐部が明瞭に分かれ、錐部は断面が菱形になるように表裏側縁から加工されている。16は縦長剥片の先端部分に片面から調整加工して錐として使っている。何れも明瞭な使用痕は観察されない。不定形石器は17~21の



第11図 II D-1 住居址 S=1/60

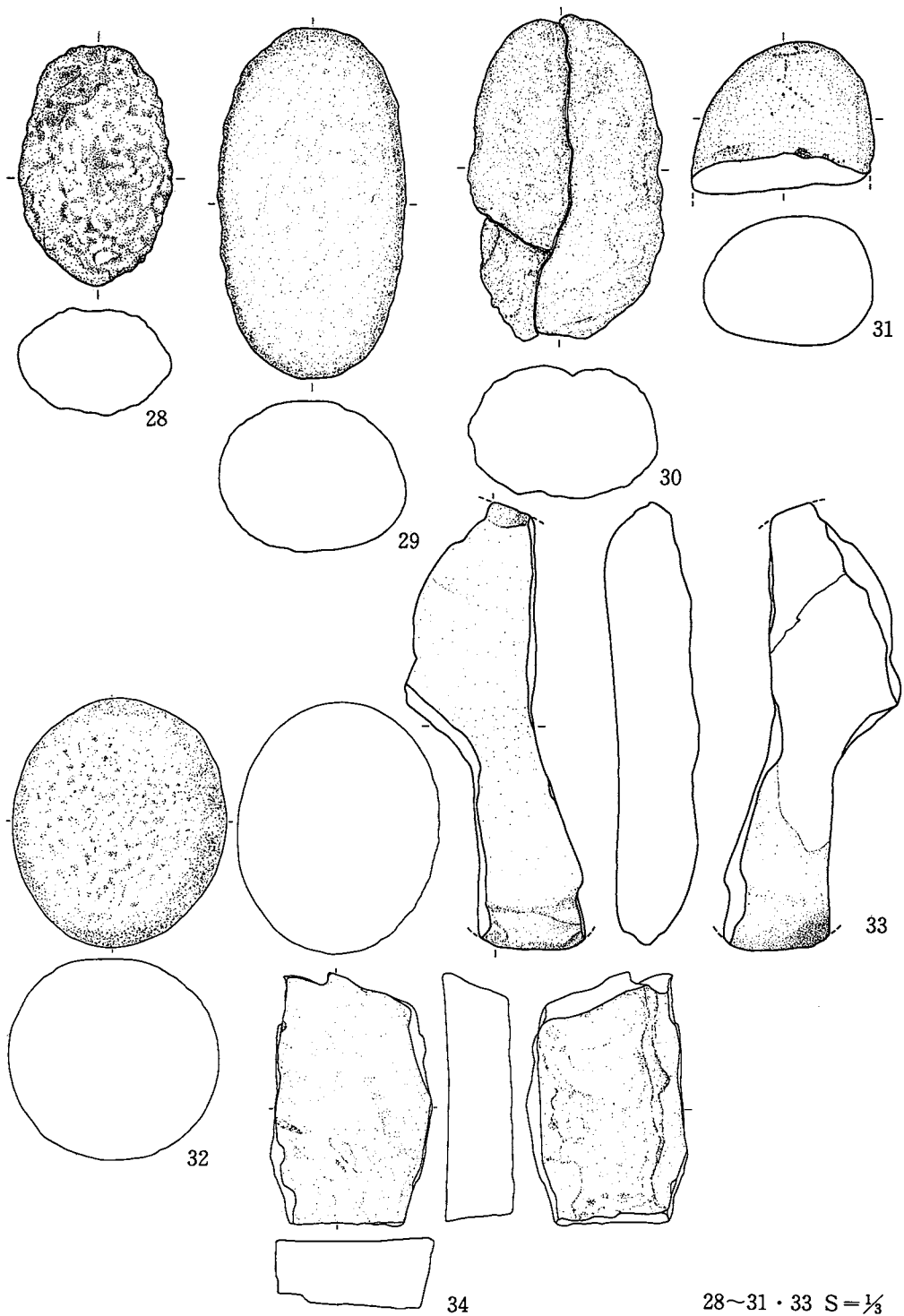


第12图 II D-1 住居址出土遺物(1)



22~27 S=1/3

第13图 II D-1 住居址出土遺物(2)



28~31・33 S=1/3
 32・34 S=1/6

第14図 II D-1 住居址出土遺物(3)

5点が出土した。何れも縦長剥片の側縁の一部に片面から調整加工を施して石器としているもので、17は破損品と考えられ、19～21は側縁に使用ないし調整と思われる微細な剥離面が見られる。凹石は22の1点が出土した。長方形の形状の礫の表裏に敲打痕が見られるもので、凹みは逆円錐形を呈し表面に離れて2箇所、裏面に近接して2箇所見られる。礫器としたものは23の1点が出土した。偏平な粘板岩の1側縁に調整加工と思われる剥離面が見られ、その周縁は使用によると思われる摩滅痕がある。砥石は24、25の2点が出土した。何れも石質は硬砂岩であり、炉の埋土中からの出土であることから同一個体と考えられる。それによると隅丸長方形形状の礫の表面や側面に溝が付けられているもので溝幅は0.5～1cmである。磨石は26～31の6点が出土した。何れも自然礫を使用し、26～28は円礫よりやや偏平な球体を呈するもので表面全体が磨られている。29～31は長楕円形状を呈し表面が剥落しているがやはり全面が磨かれているようである。大型球状石としたものは、32の1点で住居の南壁際に検出された。人頭大の縦長の礫であり、風化しているが一部に磨き痕が見られることから表面は全面磨れたものようである。石皿は33、34の2点が出土した。何れも破損品であり、全体形は不明である。何れも片面に使用面があり若干窪んでいる。

Ⅱ E - 1 住居址 (第15～19図、写真図版17、29～31)

調査区Ⅱ E - 6、7区の平坦面に位置し、表土を剥いだV層上面で小礫を含む暗褐色土の広がりが見られた住居である。規模は炉の長軸方向で5.75m、短軸方向で5.32m、検出面からの深さ0.40mである。平面形は隅丸方形形状であるが、周溝の状態等を見ると多角形状の平面形態を呈するようである。なお、住居の北西隅は木根で攪乱された部分で掘り過ぎたものである。埋土は色調などから4層に細分され、1層は暗褐色土に小礫を多く含み、土器片や微量の炭化物粒を含む。2～4層は褐色土、明褐色土で微量の炭化物粒を含んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが特に堅い面はない。床は平坦で南側部分を明褐色土で貼り床をしている。炉の周辺は堅いが他は特に堅い面はない。柱穴は壁沿いに8本検出され、P1～P6は規模が大きい炉No.2の脇に見られるP7、P8は他に比べて小さい。柱穴の埋土は褐色土か明褐色土で、比較的柔らかい。これら

住居址埋土注記

1. 暗褐色土 7.5YR 3/4 炭化物少量
2. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物小ブロック状に含む
3. 明褐色土 7.5YR 5/6 炭化物少量
4. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物微量
5. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物微量
6. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物中量
7. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物中量
8. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物微量
9. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物少量
10. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物少量
11. 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物微量

柱穴

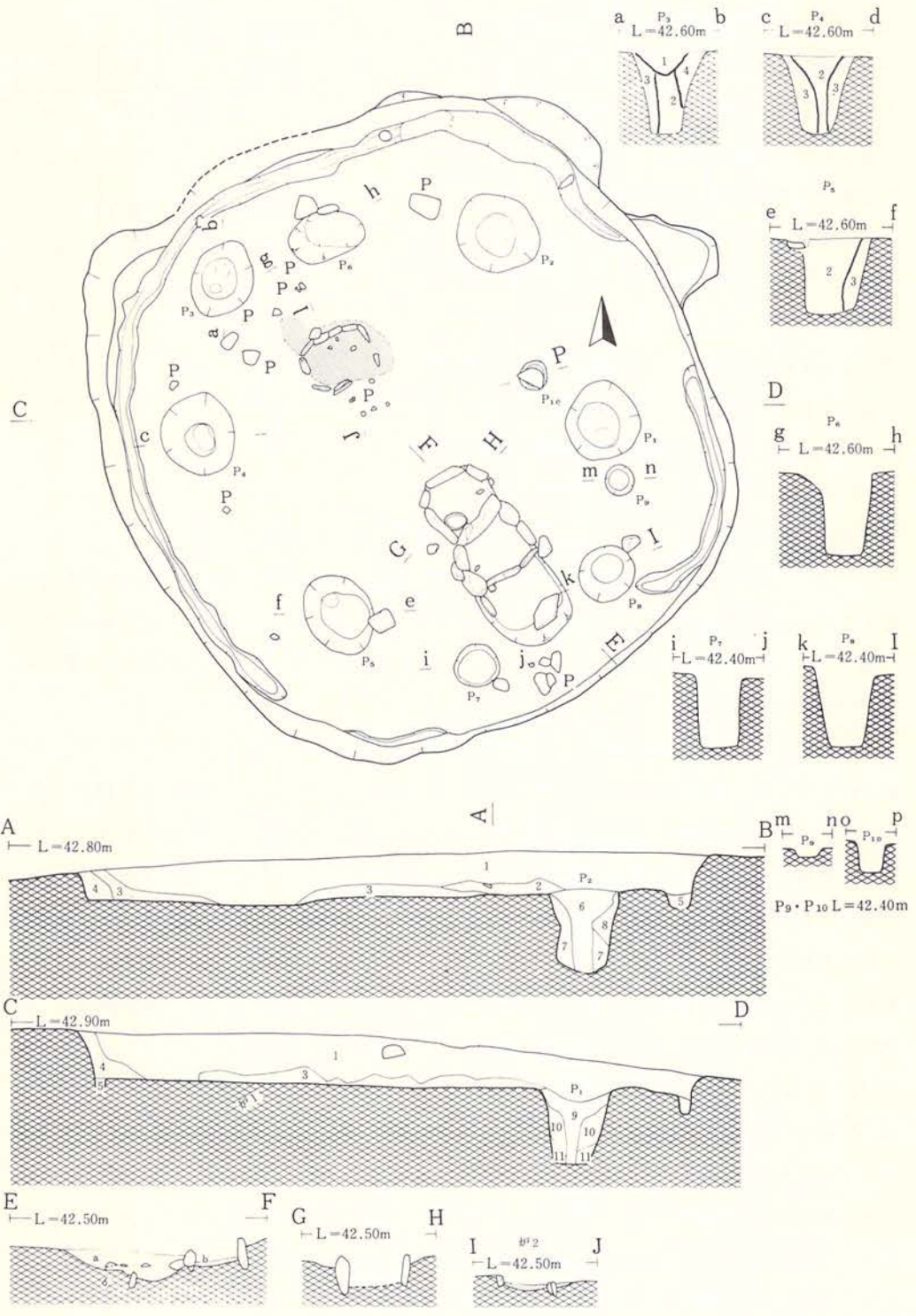
1. 褐色土 7.5YR 4/6 非常に堅い
2. 明褐色土 7.5YR 5/6 やや柔らかい
3. 明褐色土 7.5YR 5/6 堅い
4. 明褐色土 7.5YR 5/6 堅い

炉 No.2

- a. 明赤褐色土 2.5YR 3/6 焼土、強く締る

炉 No.1

- a. 褐色土 10YR 4/6
- b. 赤褐色土 2.5YR 4/8 焼土
- b'. 赤褐色土 焼土



第15图 II E-1 住居址 $S = \frac{1}{60}$

柱穴の中には柱痕が見られるものもあり、P1～P5では底面に柱痕が見られ、それによると2～3回ほど柱の据え替えが行われたようである。以上のほかに埋土等から本住居に伴うものであるP9、P10の小柱穴がP1の両側に見られる。

炉は長軸を北西-南東方向にもつ炉1と炉1の長軸上にある炉2の2基がある。炉1は石組複式炉で全長185cmである。石囲い部は長さ40cm大の偏平な礫によって作られており、土器埋設石囲い部と石囲い部、それに前庭部からなり、土器埋設石囲い部は40cm×40cmの方形形状の石囲い部に深鉢土器の底部部分が13cmの深さで石囲い部の南西隅に据えられ、その周辺は黒褐色土で埋められ、土器周辺は焼土粒が

僅かに見られた。石囲い部は70cm×60cmの長方形の石囲い部で深さ25cmあり、中央部が僅かに窪んでいる。前庭部は68cm×70cmの長方形で住居の周縁まで達していない。底面はやや堅く平坦である。炉2は拳大の石を長方形に10個配置し、炉の周辺と炉内には焼土が多く見られ、炉内の底面は強く焼けていた。

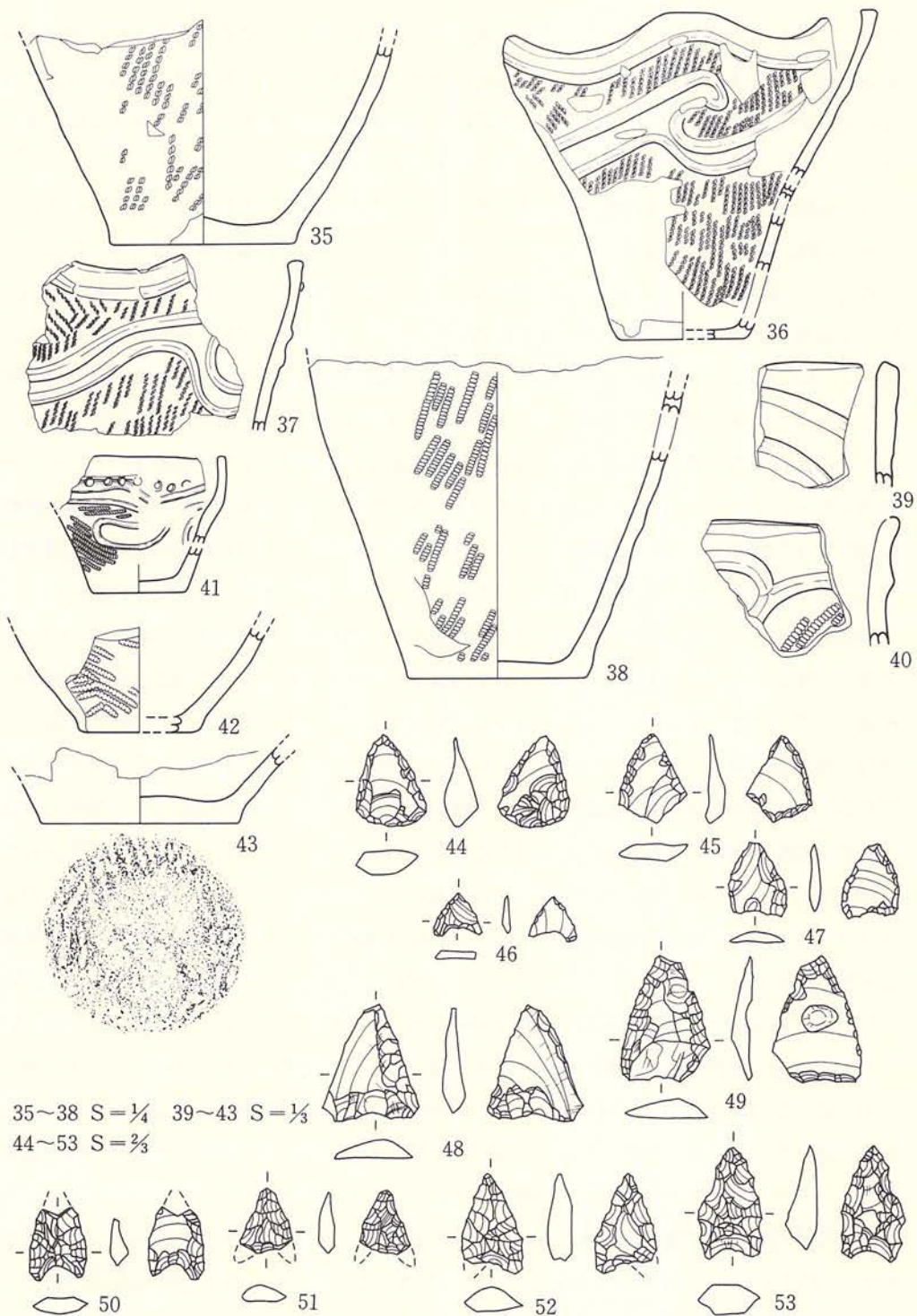
出土遺物は、土器と石器である。土器は35の炉の埋設土器と柱穴P6の埋土中から出土した41を除いてすべて1層埋土中からの出土である。41が小形土器であり、他は深鉢土器である。35は炉に使用されたもので内外面とも脆くなっている。縄文は複節LR Lが施文されている。36は胴中央部でくびれた口縁部が外傾する深鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、口縁は平坦である。文様は口縁部直下に1条の隆帯を巡らし、口縁部は擦り消され、胴部には隆帯で横位に文様を展開し、隆帯は擦り消されている。隆帯は断面三角形で隆帯は顕著にみられる程ではない。縄文は複節LR Lが施文されている。37、39、40も36と同様の文様を構成する深鉢形土器の口縁部破片である。37は36と同様の文様を呈する土器で縄文も複節LR Lが施文されている。39は口縁部が外側に傾き、文様は無文地に断面三角形の隆帯が2条見られる。40は口縁部が外傾し、口唇部は丸くなっている。文様は断面三角形の隆帯が見られ、縄文LRと思われる施文がある。胎土は砂粒が僅かに混じるが比較的堅い。41はP6の埋土中から出土した小形土器で口縁部が直立し頸部に最大径がある。文様は頸部に浅い沈線を2条巡らし、沈線の上に棒状工具による刺突が巡っている。頸部より下位には縄文LRを施文し、後に沈線を横位に巡らして沈線間を擦り消し、J字状の文様を作りだしている。胎土は砂粒が多く入り、器表面は脆い。38は深鉢胴下部破片で器表面に炭化物が付着している。縄文はLRが施文され

II E-1住居址柱穴計測表

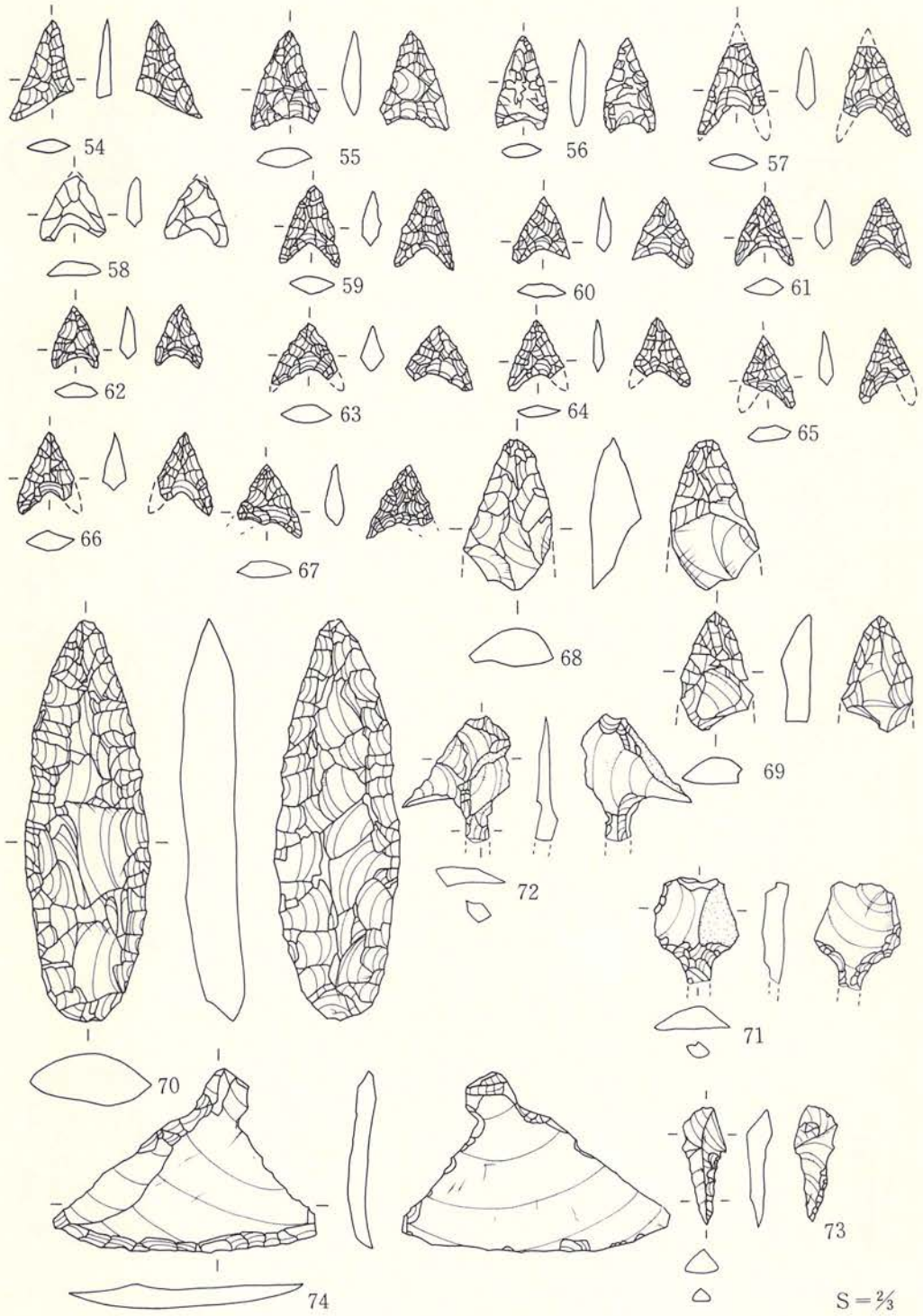
No.	開口部	底部	深さ
P 1	67×67 ^{cm}	40×37 ^{cm}	70 ^{cm}
P 2	74×70	34×37	75
P 3	55×72	30×40	73
P 4	65×72	25×30	70
P 5	60×73	40×45	69
P 6	65×44	22×35	72
P 7	42×38	38×30	65
P 8	51×46	28×24	73
P 9	26×27	17×18	9
P10	24×27		28

ている。胎土は砂粒が多く入り、二次的に焼けているためか脆い。42は底部が小さい深鉢土器の底部破片であり、縄文が付けられているが表面の剥落が激しいため良く解らない。胎土は脆く砂粒が多く入っている。43は底部破片で底面に網代痕が付けられているが網み方は良く解らない。これら土器の時期は中期末葉で第Ⅱ群土器2類に属する。

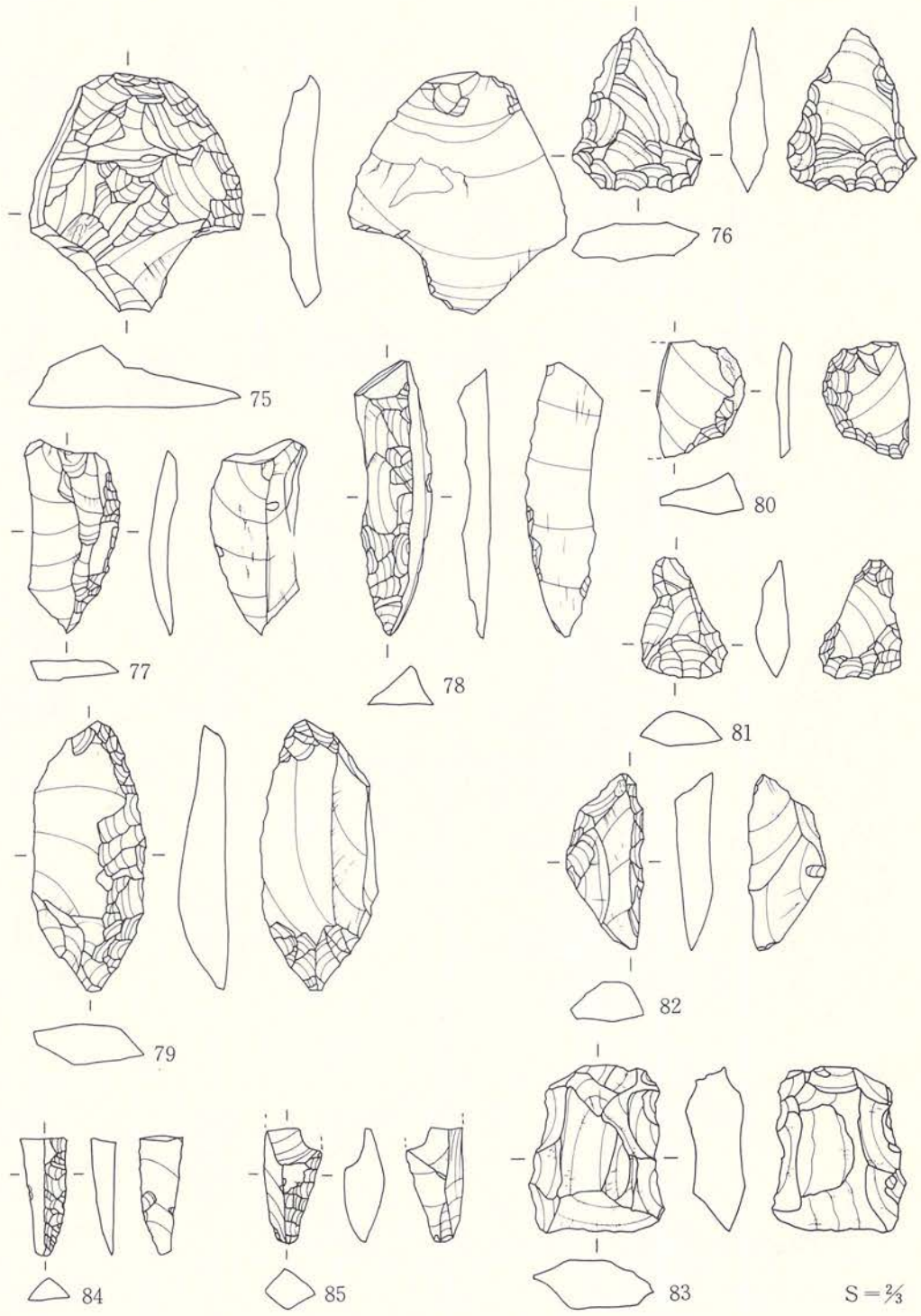
石器は50点出土し、住居の埋土中、柱穴埋土中、床面上等から出土している。器種は石鏃、石槍、石錐、石匙、削搔器類、石斧、砥石、磨石、石皿である。石鏃は24点出土し、円基状のもの(44)、尖基状のもの(45)、凹基状のもの(46~67)で凹基状の内49、50は先端部欠損し、54は先端部分だけであり、51が返し部分が両方欠け、57は先端部と返しの片方が欠けている。52、55、63~67は返し部分の片方が欠けている。石質は大部分が珪質泥岩であるが、67は黒曜石である。石槍は3点出土したが、68、69は先端部分だけであり、石槍である疑わしいものである。70は比較的大形で薄身の剥片を加工して柳葉形状に仕上げたもので表裏面とも第一次剥離面が見られないものである。石錐は3点出土した。何れも剥片を加工したもので頭部と錐部が明瞭に分かれるが、71、72は錐の部分が付け根から折れている。73は細見の剥片の先端部分と側縁の一部に調整加工を加えて錐としたものである。石質は71が玉ずい、72が珪質泥岩、73が黒曜石である。石匙は74の1点が出土した。横形石匙で横長剥片のバルブ部分に摘みを設け、刃部は片側からの調整加工を施している。削搔器は11点出土した。75、77は縦長剥片の側縁に片面から細部調整を施しているが、75は中ほどから折れているものである。76は剥片の端部や周縁に細部調整が見られ、特に端部は表裏両面から調整が加えられ形態は石鏃状である。78は縦長剥片が中程から縦に折れた剥片にさらに細部調整を施している。79は剥片の一側縁と端部に細部の調整を施しているもので、先端部は幾らか磨耗していることから錐として使用された可能性もある。80~82は小形の剥片の一部に調整痕が見られるものである。83は石筥状で刃部と目される下部分に微細な剥離が見られる。84、85は黒曜石の小片の一側縁に片側から細部調整を施している。石斧は86、87の2点が出土し、何れも表面を磨いている磨製石斧である。86は完形品で基部はやや平坦で両側縁の稜が明瞭である。刃部は中央部がやや凹状に窪んでいる。87も86と同様に基部はやや平坦で側縁の稜が明瞭であるが、刃部の一部が欠損している。磨石は88、89の2点が出土した。88は縦長の磨石で形状はすりこぎ状である。全面が擦られており、特に上部は先端が尖状に入念に擦られ、胴部と下端部の一部に敲打痕が見られる。89は一部剥落しているが、楕円形状の石の全面が擦られている。砥石は90、91の2点が出土した。何れも凝灰質硬砂岩の全面に溝が見られるもので、溝の断面は凹状で溝幅は1.2cmである。石皿は92、93の2点が出土した。92、93とも破損品で、92は表裏両面が擦られ、両面の中央部が凹んでいる。93は片面が擦られ、中央部分はやや凹んでいる。



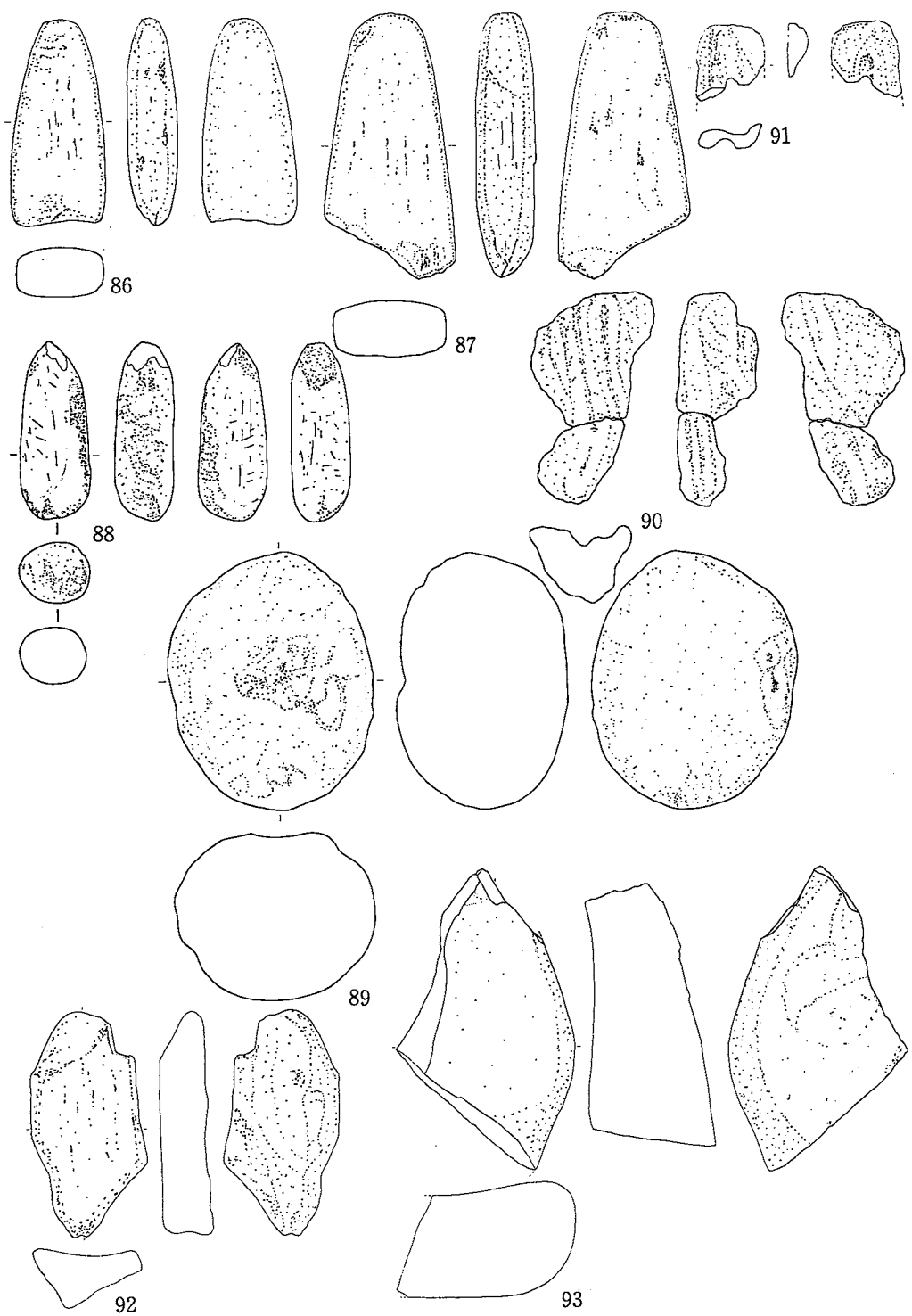
第16图 II E-1 住居址出土遗物(1)



第17图 II E-1 住居址出土遺物(2)



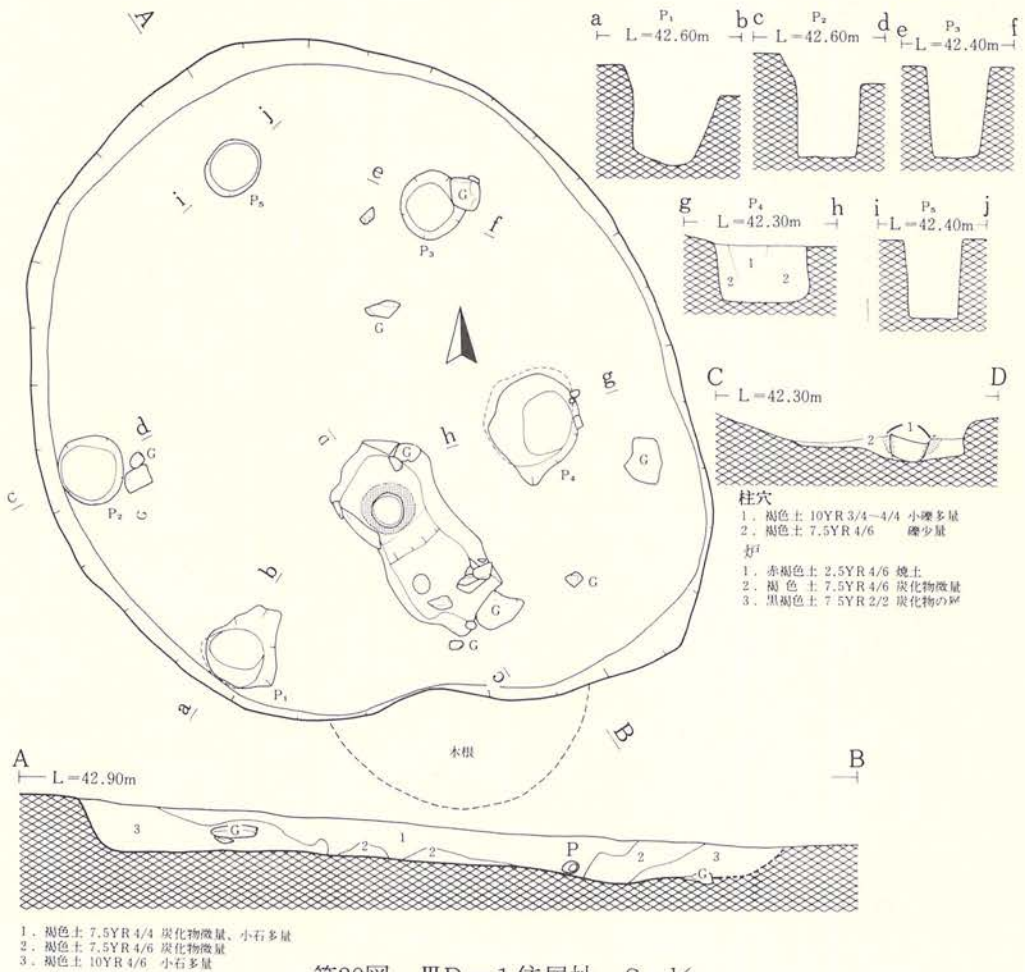
第18图 II E-1 住居址出土遺物(3)



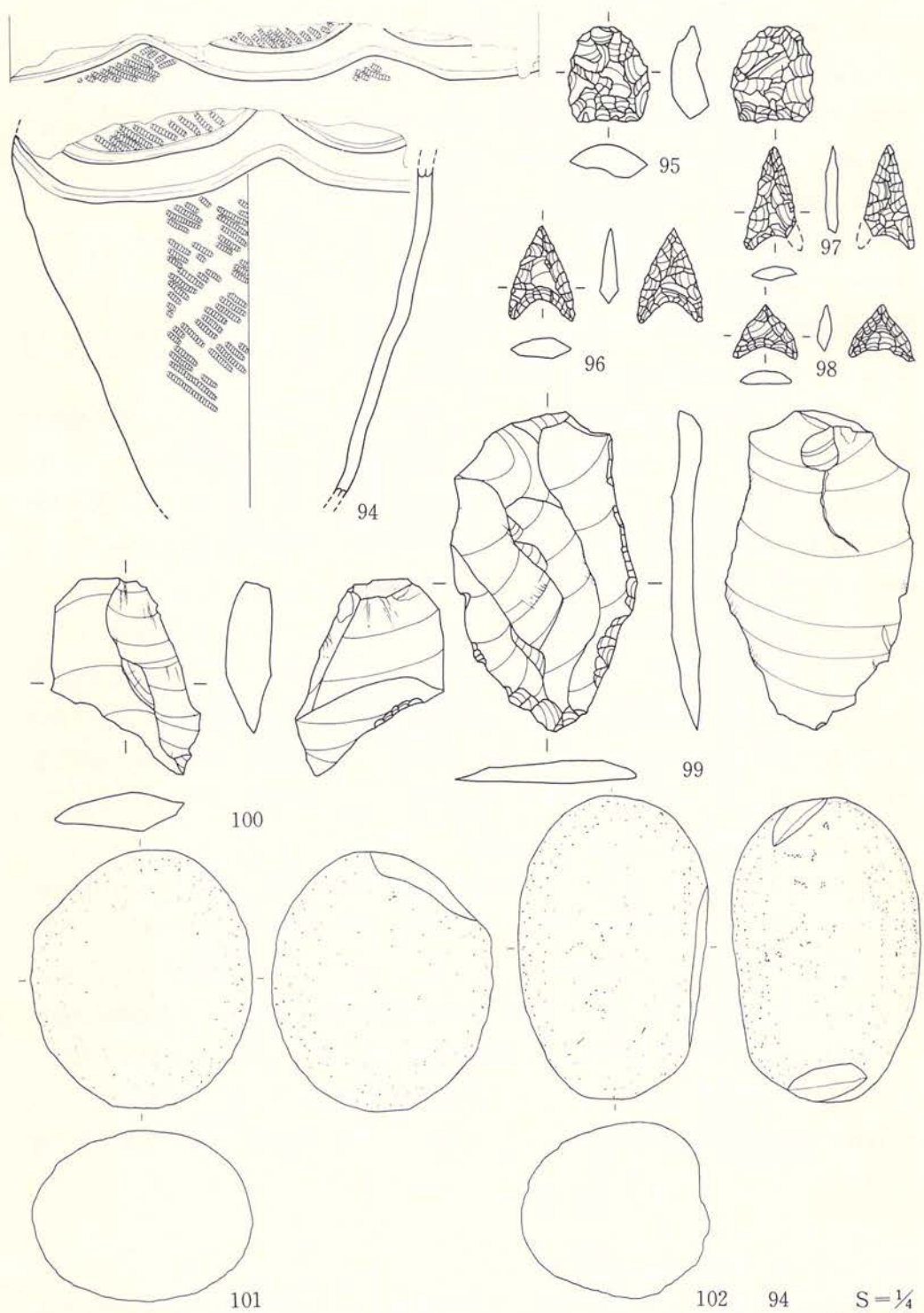
第19図 II E-1 住居址出土遺物(4)

ⅢD-1 住居址 (第20、21図、写真図版18、21、32)

調査区ⅢD-13区を中心とした平坦面のV層面で土層の変化により検出されたが、住居の南側は樺の大木によって壊されていることから全体形を明瞭に捉えることが出来なかった。規模は炉の長軸方向で約5.64m、短軸方向で5.04m、検出面からの深さは40cmである。平面形は南側壁が木根によって壊されているために判然としませんが、楕円形状を呈していると思われる。埋土は全層褐色土であるが、含有物の違いによって3層に細分される。1層は黒褐色土と微量の炭化物が混じり、2層は堅く微量の炭化物を含み、3層は赤褐色土との混合土である。1層と3層には小石が入っている。これらの土層は人為的に投げ込まれたものと考えられる。壁は若干外傾して立ち上がるが、特に堅い面はない。床はほぼ平坦であるが、特に堅い面はなかった。柱穴は5基が五角形に配置されて検出され、P1、P2が壁寄りに、P5が炉の長軸上から僅かに東に寄った位置に、P3、P4がP1、P2と対象になる位置に検出された。柱穴の規模は開口



第20図 ⅢD-1 住居址 S=1/60



第21图 III D-1 住居址出土遗物

94 S = 1/4
 95~100 S = 2/3
 101 · 102 S = 1/3

部で50cm前後、深さ70cm前後である。P4は断面形がフラスコ状で、埋土中には柱痕が見られ、柱痕の規模は下部で15cmである。各柱穴間の距離はP1-P2が1.88m、P2-P5が2.66m、P5-P3が1.61m、P3-P4が1.90m、P1-P4が3.01m、P2-P3が3.43mである。埋土は褐色土の単層である。炉は、北西-南東方向に長軸をもつ石囲い複式炉で全長165cmあるが、木根によって石が動かされて原形を留めていない。炉の構成は土器埋設石囲い部と石囲い部から

ⅢD-1住居址柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ
P1	60×68 ^{cm}	46×44 ^{cm}	79 ^{cm}
P2	52×55	41×42	81
P3	52×54	37×37	73
P4	69×87	70×75	45
P5	46×39	38×33	61

なるが石は抜き取られたり木根によって動いており残っていたものは僅かである。土器埋設石囲い部は70×75cm、深さ30cmの方形状で中央部に口縁部と底部を欠く深鉢胴部を据え、その周辺を褐色土で埋めている。土器は住居床面から深さ10cmの所から埋められている。土器の周囲は赤く焼けて、土器内の埋土最下部には炭化物の層が見られた。石囲い部は95×82cm、深さ15cmの長方形状で、底面は住居周縁に向かってやや上昇している。

出土遺物は土器、石器である。土器は床面上と炉から出土したが、床面上から出土したものは地文も分からない状態であるために割愛した。94は炉の埋設土器であり、口縁部と底部を欠いている。器形は口縁部が広く底部が小さいものと考えられる。文様は胴部上半に断面三角形の隆帯を緩い波状で横位に2条巡らし、隆帯間を磨り消している。縄文は隆帯間外に原体LRが施文されている。胎土は良好であるが、器表裏面は加熱のために剥落し脆くなっている。これら土器の時期は中期末葉で第Ⅱ群2類に属する。

石器は埋土中や床面上から出土している。器種は石鏃、不定形石器、磨石である。石鏃は95～98の4点が出土した。95は基部が平基式で、先端部から側縁部にかけて膨らみをもっている。96～98は基部が凹基式状で、96は側縁が緩やかに膨らんでいる。97は側縁が直線となり、抉り部分の片方が欠けている。98は黒曜石で平面形が三角形をなし、先端部が突出し側縁は緩やかに膨らんでいる。不定形石器は99、100の2点が出土した。何れも縦長剥片の側縁や端部の一部に微細な剥離痕が見られる。磨石は101、102の2点が出土した。101は一部欠損しているが円形状の礫の全面に磨り痕があり、102も一部欠損しているが楕円形状の礫の全面に磨り痕が見られる。

ⅢD-2住居址（第22、23図、写真図版19、32）

調査区ⅢD-15区を中心とした平坦地のV層面に検出された。東側をⅢD-2採掘跡に切られ、西側ではⅢD-4住居址に切られ、南側は調査区外に延びている。北西隅ではⅢD-3土

坑に切られている。また、本住居も狭い範囲での検出であるため良く捉える事が出来ないが、焼土や床面の状況から重複関係にある事が明らかになった。

ⅢD-2 a 住居址

規模は東西5.50m、南北2.80m + α 、検出面からの深さ0.30mである。平面形は東西辺の形状から長方形ないし方形と考えられる。埋土は暗褐色土と褐色土層がみられ、投げ込みと自然に堆積したものであろう。壁は若干外傾して立ち上がるが、壁面は特に堅い面はない。床は平坦であるが、堅い面はない。柱穴は壁沿いに大小合わせて11基検出されたが、ⅢD-2 b 住居址との関係もあり、本住居に伴うかはっきりしなかった。埋土は何れも褐色土で柔らかい。柱穴は開口部で直径45cm～15cm、深さ80～21cmである。炉は石が3個配置された炉1が住居の東西壁に沿うように検出された。石は20cm大のもので方形に配置されていたようである。焼土は石囲い部とその西側に長さ1m、幅0.50mの範囲で見られ、厚さは石囲い部とその西側とも5cmである。他に焼土は炉の東側で開口部直径50×40cmの浅い窪みの中に見られた。

ⅢD-2 b 住居址

ⅢD-2 a 住居址の床面下位に検出された。規模はⅢD-2 a 住居址より約20～30cm内側部分に壁があり、東西4.70m程である。埋土は暗褐色土の単層で上面はⅢD-2 a 住居址の床面である。壁は15cm程残っており、外傾している。床はV層面で凹凸があり、中央部が幾らか窪んでいる。炉は炉2が調査区外に延びており、その形態も良く解らないが浅い掘り込みが2基繋がって東西に長い炉2があり、全長5.81cmである。西側の掘り込みは開口部で1.32×0.65m、深さ15cmであり、焼土が約10cmの厚さで堆積している。東側の掘り込みは開口部で1.00×0.90m、深さ20cmで焼土が極僅かに見られた。また、炉の東側には直径64cmの円形状にV層面が焼けた面がある。

出土遺物は埋土中からと柱穴から土器、石器が出土している。土器は103～107の5点で何れも破片である。103はⅢD-2 a 住居埋土とⅢD-2 b 住居炉埋土とが接合した土器片で底部を欠いている。口縁部は外傾し、頸部ですばまり胴中央部に最大径がある。口縁は平坦で口唇部は先端が細く丸みを帯びている深鉢形土器である。文様は口縁部から胴上部にあり、口縁部には沈線による連続孤線文、頸部は粘土紐による隆帯が1条巡り、隆帯の上を半載竹管による刻みが等間隔状に押し引きによって施文され、一部口縁部に隆帯が「工」字状に付けられている。胴上部には縄文LRを施文後に頸部のすぐ下位に縄文Lrによる側面圧痕文が1条押圧され、胴最大径の上には沈線による2条一対の連続孤線文と一部に孤線文の上に円文が施文される。最大径部分には押し引き沈線による刻みが1条巡っている。最大径以下には縄文LRが施文されている。胎土は器表面が幾らか剥落しているが比較的堅い。104は埋土中からの出土で口縁部に最大径のある深鉢型土器口縁部破片で、口縁部は平縁で口唇部は丸みを帯びている。

文様は綾織り文が横位に口縁部から胴部にかけて巡り、1個の「 \cap 」状の隆帯が付けられている。縄文はLRが施文されている。胎土は砂粒が多く脆い。器表面は剥落が著しい。器表面には炭化物が付着している。105は深鉢土器口縁部破片で、口縁部は平坦で口唇部は厚く内傾している。文様は粘土紐を貼り付けた隆帯文と沈線文、隆帯の上下に三角形の切り込みを加えたもので構成され、施文工具は半載竹管のようである。胎土は砂粒が多く脆い。106は深鉢口縁部の突起と思われるもので1条の隆帯が見られる。胎土は砂粒が多く脆い。107は深鉢胴部破片と思われる。2個の粘土粒と沈線が縄文RLを施文後に付けられている。器表面には炭化物が付着し

ⅢD-2-4 住居址柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ
P 1	44×45 ^{cm}	40×40 ^{cm}	48 ^{cm}
P 2	35×	20×20	60
P 3	22×23	10×10	35
P 4	25×25	12×10	21
P 5	27×27	15×16	22
P 6	20×15	15×10	34
P 7	35×40	15×15	79
P 8	13×15	9×9	26
P 9	37×47	21×27	80
P10	35×32	24×23	60
P11	23×23	14×17	40

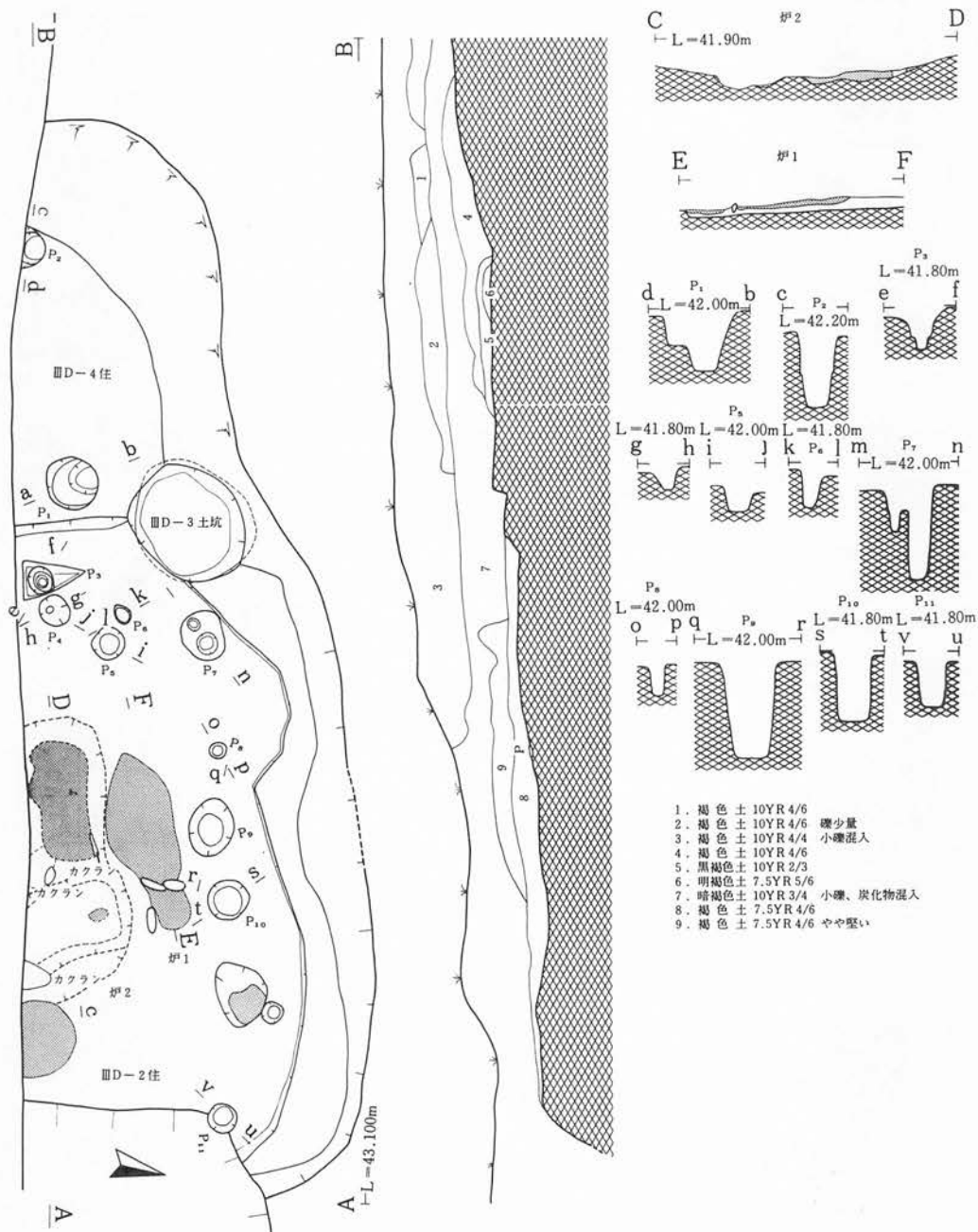
ている。胎土は比較的良い。これら土器の時期は103が縄文時代前期で第Ⅰ群土器に、その他は中期初頭で第Ⅱ群Ⅰ類に属する。石器は石鏃、石槍、不定形石器が出土した。石鏃は108～112の5点である。何れも基部は凹基式状で、108は二等辺三角形状、109～112は正三角形状、110～112は黒曜石製で何れも抉り部分の片方や両方が折れている。石槍は114の1点出土した。中程から折れた基部だけである。表裏両面から調整を加え、断面が凸レンズ状である。不定形石器は113の1点出土した。縦長剥片の側縁部分に微細な剥離が見られる。

ⅢD-4 住居址（第22、23図、写真図版19、23）

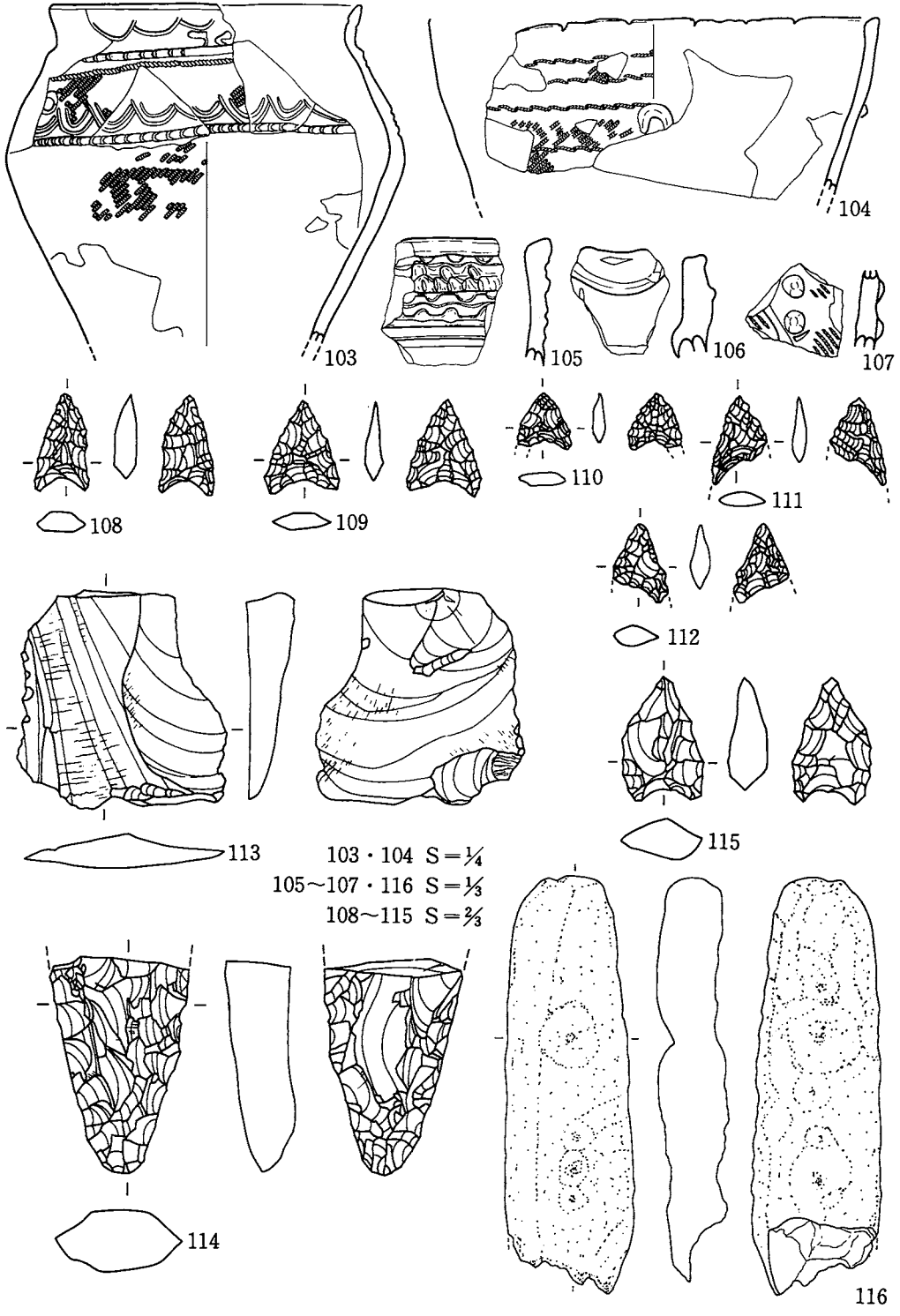
ⅢD-2住居と重複関係にありⅢD-2住居を切っていると考えられるが、明確に捉える事が出来なかった。北東側でⅢD-3土坑を切り、南側は調査区外に延びている。

規模は東西3m+ α 、南北1.70m+ α 、検出面からの深さ0.20mである。平面形は円形ないし楕円形と思われる。埋土は明褐色土や褐色土である。壁は緩く外傾し明瞭な立ち上がりはない。床はほぼ平坦であるが、特に堅い面はない。柱穴は2基検出され、P1が直径45cm、深さ48cm、P2が直径35cm、深さ60cmである。埋土は何れも褐色土の単層で柔らかい。その他の施設は検出されなかった。

出土遺物は石鏃、凹石の2点が柱穴の埋土中と住居の埋土中から出土している。石鏃は115で基部は凹基式状で、身は厚く細部加工も粗い。凹石は116の1点で、細長い棒状の礫の表裏面に敲打痕が見られ、凹みは逆円錐形を呈し、表面に4箇所、裏面に5箇所見られる。



第22図 III D-2・4住居址 S=1/60



第23图 III D-2 · 4 住居址出土遗物

ⅢD-3 住居址 (第24~29図、写真図版20、33~35)

調査区ⅢD-17、18、22、23区にまたがって検出された。検出面は東側に傾斜しているV層面である。本住居のすぐ東側で採掘跡と接している。住居の埋土は色調等から4層に細分され、1、2、4層が褐色土に黒褐色土が混じり、炭化物を微量に含んでいる。3層は暗褐色土に黒褐色土が混じり、炭化物を微量に含んでいる。どの層も投げ込み等による人為層である。この住居は周溝や炉の検出状況から建て替え、拡張があることが確認された。以下に構築当初の住居より順に説明する。

ⅢD-3 a 住居址

構築当初の住居であるが、拡張、立て替え後の住居は床面の高さを変えないで拡張していることから壁は存在しないが、周溝が残っていることから平面形を推定することができた。規模は炉の長軸方向では4.50m、短軸方向で4.60で平面形は円形状を呈するが、周溝の在り方から多角形状とも見られる。周溝は北東側の一部を除いてほぼ全周巡っており、深さは床面から約20cmほどである。柱穴は周溝内を含めてP1~10、13、15、19、20の14基で住居の北側に寄った配置で多角形状に検出された。柱穴の規模はP1~4が開口部で40~50cm、深さ64~70cmであり、他の柱穴は20~40cm、深さ30cm、もっとも深いもので80cmである。埋土は褐色土の単層で柔らかい。柱痕は見られない。また、P5では埋土中に炭化物の層が柱穴の壁沿いに見られた。炉は長軸を東西方向にもつ石組複式炉2で全長175cmである。石囲い部は長さ20cmから40cm大の扁平な礫によって作られており、土器埋設石囲い部と石囲い部、前庭部と思われる部分からなる。土器埋設石囲い部は50cm×50cmの方形状の石囲い部に深鉢土器の底部部分が8cmの深さで石囲い部の中央部に据えられ、その周辺は褐色土で埋められ、石囲い部ほぼ全面に褐色土が焼土

ⅢD-3 住居址柱穴計測表

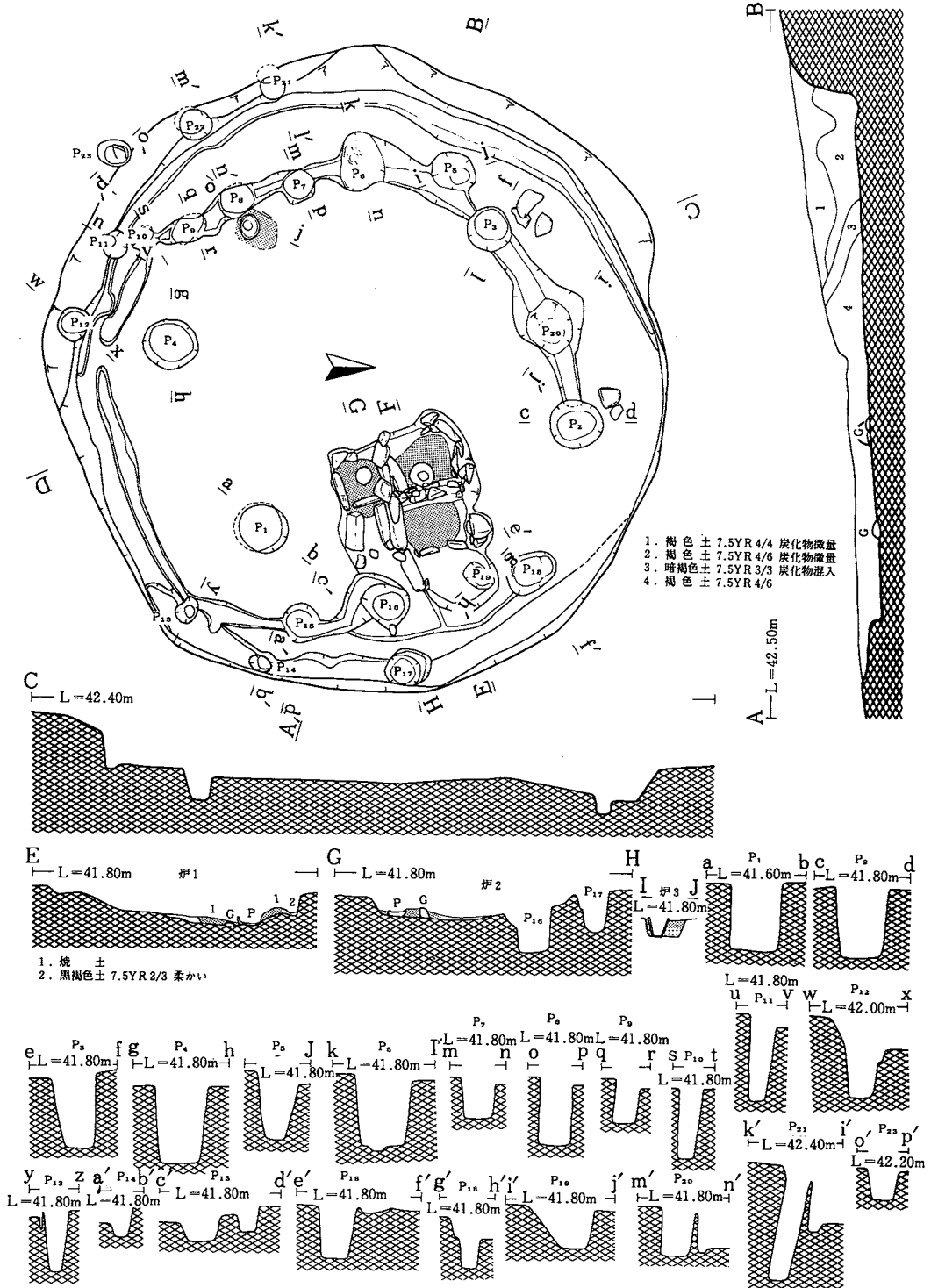
No.	開口部	底部	深さ
P 1	45×40 ^{cm}	44×42 ^{cm}	64 ^{cm}
P 2	47×44	34×25	64
P 3	39×42	30×27	69
P 4	50×46	40×34	72
P 5	42×30	15×16	63
P 6	37×55	32×38	72
P 7	28×29	27×25	39
P 8	30×28	29×26	62
P 9	29×22	25×25	40
P10	14×13	14×15	65
P11	20×25	15×10	80
P12	30×32	25×20	73
P13	20×22	8×10	55
P14	18×14	11×10	30
P15	35×36	32×24	32
P16	43×42	27×24	50
P17	32×28	27×24	43
P18	45×34	36×25	48
P19	29×20	19×13	46
P20	42×50	25×22	40
P21	22×20	21×16	105
P22	30×27	25×23	47
P23	31×23	22×15	30

化して見られた。石囲い部は50cm×58cm、深さ15cm、前庭部は石囲い部との境は明瞭でないが70cm×50cm、深さ10cmで住居壁に向かって「ハ」字状に開き住居壁まで達しているようである。底面は平坦で一部焼土が見られた。

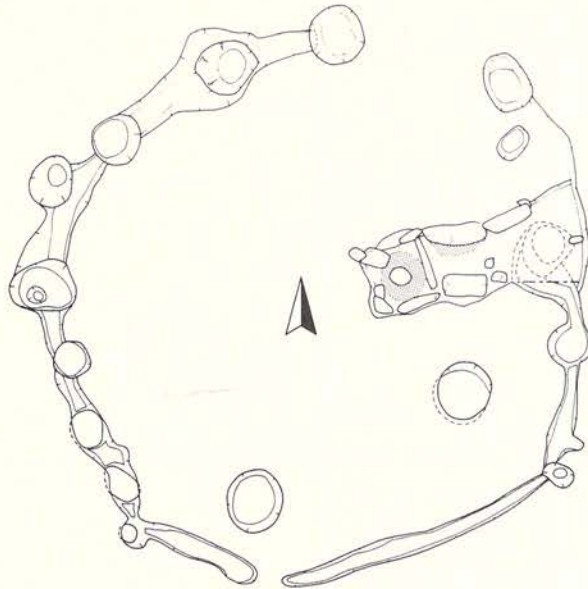
Ⅲ D-3 b 住居址

Ⅲ D-3 a 住居を拡張、立て替えした住居である。規模は炉の長軸方向で5.92m、短軸方向で5.73m、検出面からの深さ0.50mである。円形状であるが見方によっては五角形状にも見られる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁では上部が崩れている。床はほぼ平坦であるが特に堅い面はなかった。周溝は住居の西側に半周ほどあり、深さ5～10cmである。柱穴はP1～4、16、18が主柱穴で6基が対症的に配置され、P1～4はⅢ D-2 a 住居の柱穴を利用している。壁柱穴は11～14、17、21～23の8基が検出された。そのうちP11、21、22が住居内側に向かって傾いている。規模はP16、18が開口部で45cm前後、深さ45cm前後、P11～14、21～23が開口部で30cm前後、深さ30～100cmである。埋土は何れも褐色土である。炉は住居の東側で長軸を東西方向にもつ石組複式炉1と西側に土器埋設炉3の2基が検出された。石組複式炉1は全長178cmで、Ⅲ D-3 a 住居の炉の北側石組部分を再利用して作られ、土器埋設石囲い部と石囲い部、前庭部からなる。土器埋設石囲い部と石囲い部の境は溝状で、その中には20cm大の石が詰まっている。石囲い部と前庭部の境には20cm大の偏平な石を2個配置している。土器埋設石囲い部は55×65cmの方形状石囲い炉であるが、住居中央部分では石が抜き取られているようである。土器は中央より東側の位置に深さ10cmで据えられ、土器周辺や石囲い内部全面に焼土が見られ、土器周辺は特に強く焼けている。石囲い部は60×64cmの方形状で、底面は強く焼けている。前庭部は住居壁まで達せず、63×64cmで東壁が丸みを呈した方形状となり、底面は住居壁に向かって緩やかに上昇している。土器埋設炉は深鉢土器の口縁部を欠いた土器を検出面で37×30cm、深さ18cmの方形状の掘り込みの中に埋設したもので、焼土は掘り込み面全面に見られた。

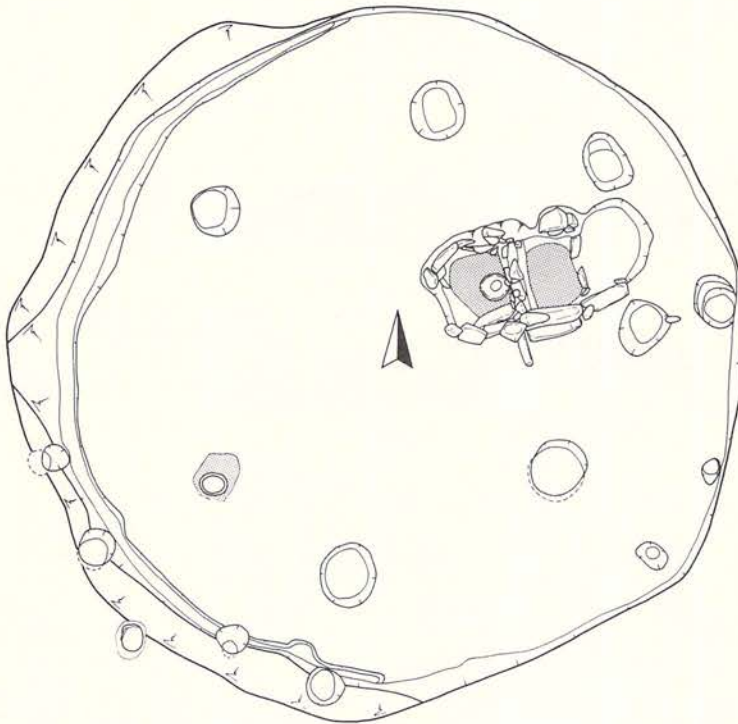
出土遺物は土器、土偶、石器が出土している。土器は炉の埋設土器として利用されたもの以外ではP23の埋土上部から出土した。その他はすべて住居の埋土から出土しているが掲載したもの以外は小破片で文様等も不明なため割愛した。掲載した土器は117～122の6点あり、117～119が炉の埋設土器として利用されたもの、120、121が住居の埋土中、122がP23の埋土上部からの出土である。117は炉1の埋設土器で、深鉢形土器の胴下部から底部にかけての土器で、原体LRの縄文が施文されている。胎土は加熱のために表裏とも脆くなっている。118は炉2の埋設土器で、深鉢形土器の底部部分で縄文は見られず無文である。胎土は加熱のため脆くなっている。119は炉3の埋設土器で、口縁部を欠いた深鉢土器である。文様は断面三角形の低い隆帯が見られ、隆帯内は磨り消されたようである。縄文は原体RLが胴部に施文されている



第24図 III D-3住居址(1) S=1/60

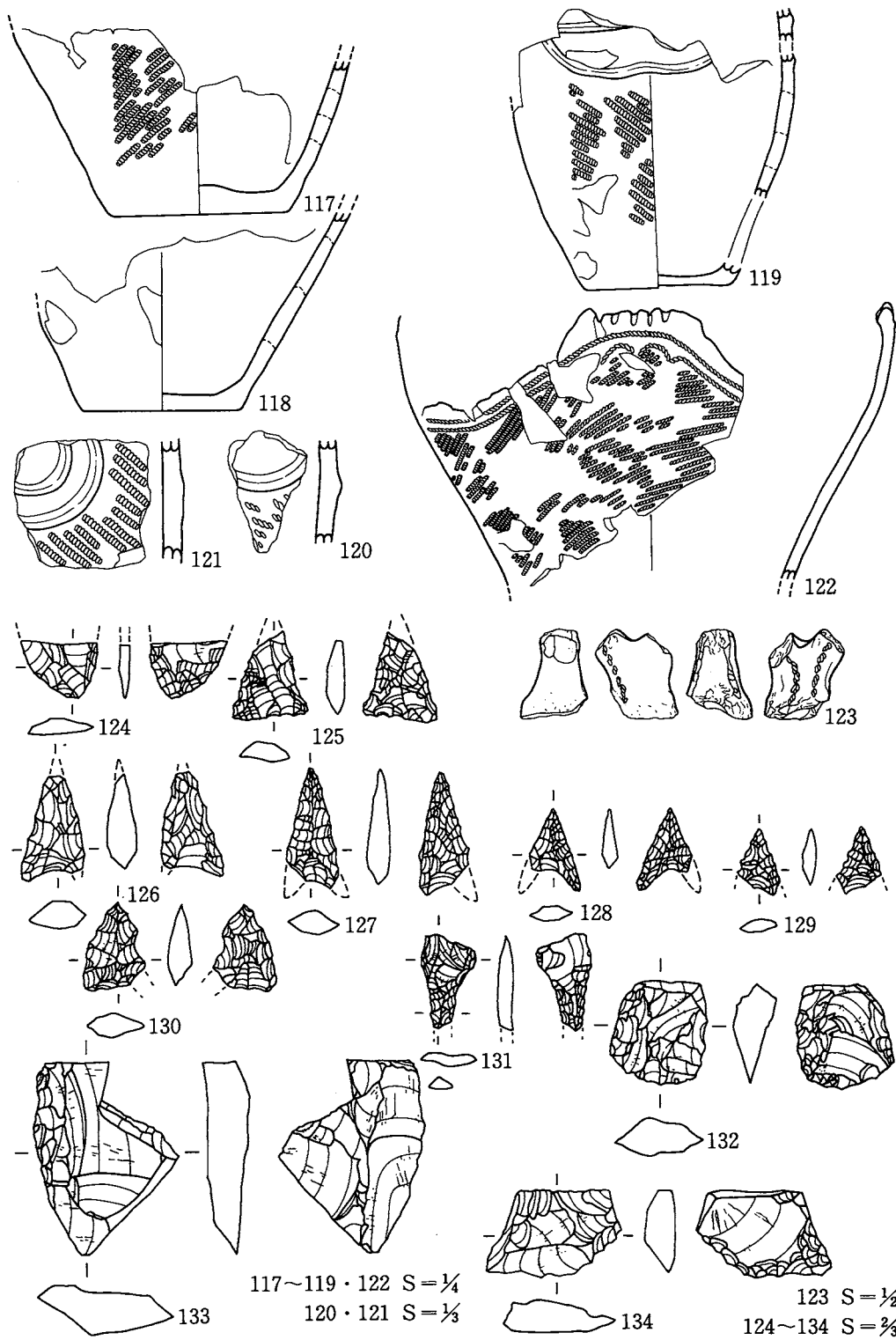


ⅢD-3a住

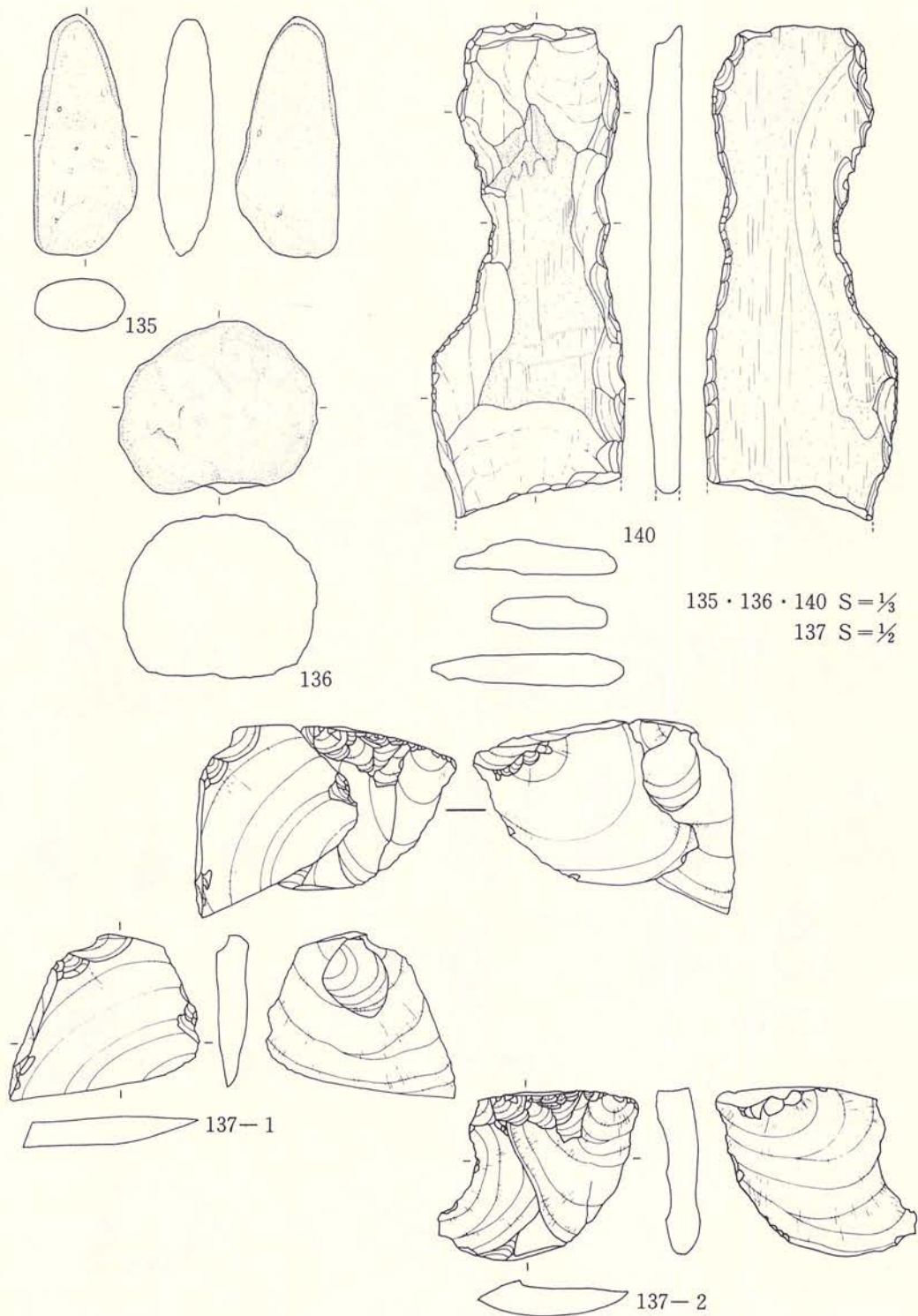


ⅢD-3b住

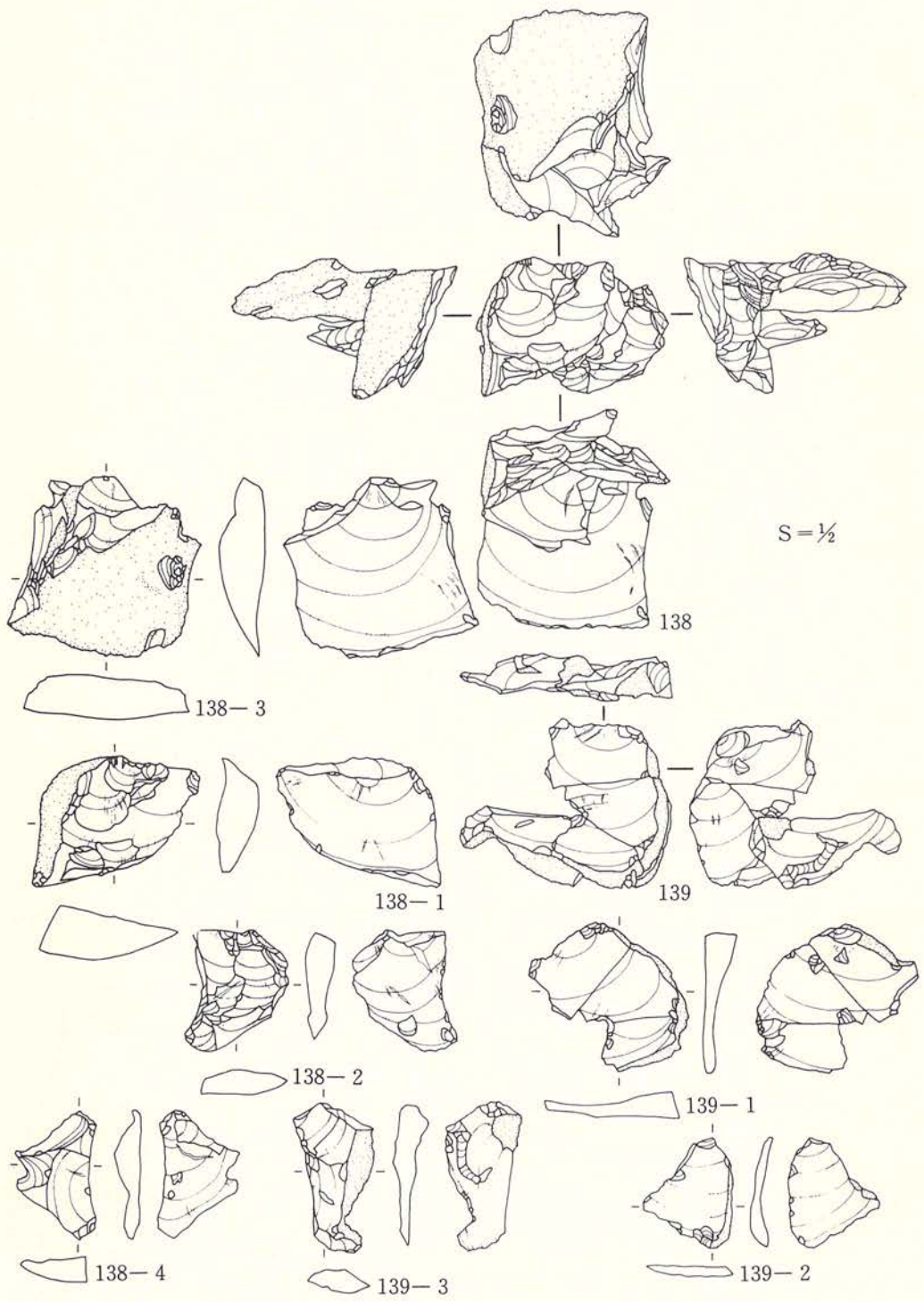
第25図 ⅢD-3住居址(2) S=1/60



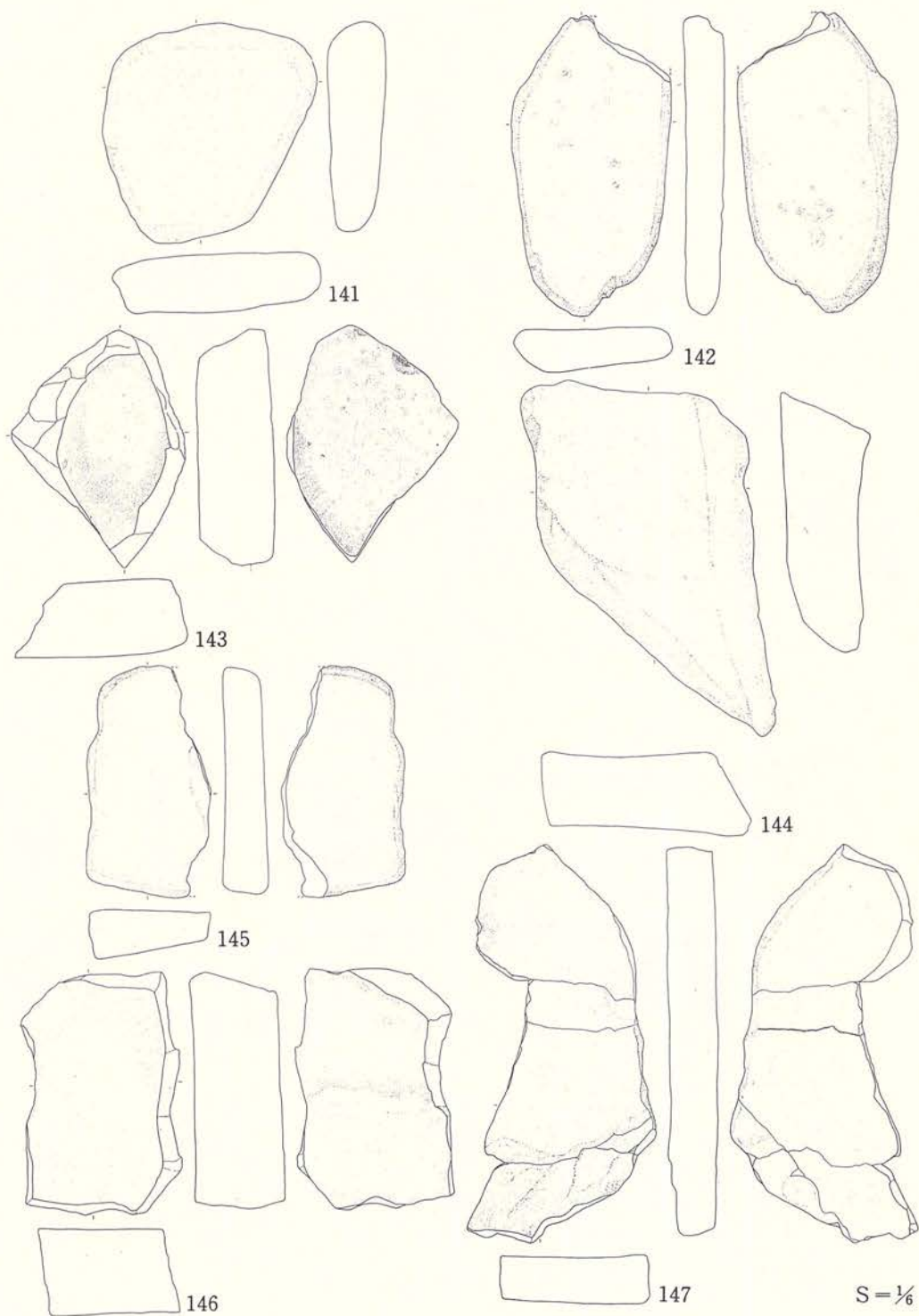
第26图 III D-3 住居址出土遺物(1)



第27図 III D-3 住居址出土遺物(2)



第28图 III D-3 住居址出土遗物(3)



第29図 III D-3 住居址出土遺物(4)

が、器表面が加熱のために剥落して全面には見られない。胎土は表裏面とも加熱のため脆くなっている。120、121は住居址の埋土中から出土した土器片で、断面三角形の低い隆帯が見られ、隆帯間は磨り消されたようである。縄文は原体R Lが施文されている。胎土は普通である。122は柱穴P23の埋土上部から出土した口縁部破片である。器形は破片のため推定の域を出ないが、口縁部は大きく外反し頸部ですぼまる深鉢形土器のようである。口縁部は波状を呈し、口唇部は内側に肥厚し、波状頂部に刻みが付けられている。文様は口縁直下に2条の押圧縄文を巡らし、下位の押圧縄文は頂部部分で弧状になっている。縄文は原体L Rが施文されている。胎土は砂粒が入るが比較的良好。土偶は123の1点が住居西側の埋土中から出土した。胴部小破片で腹部と見られる所が膨らんでいる。縄文圧痕が表面に1条、裏面に2条見られる。これら土器の時期は117～121が中期末葉で第Ⅱ群土器2類に属し、122は中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。

石器は石鏃、石錐、不定形石器、石斧、磨石、打製石斧状、石皿、剥片が接合するものが検出された。石鏃は124～130の7点が出土した。124は基部が尖基状を呈すると見られる中程から折れて詳細は不明である。125は基部は平基式で先端が一部欠けている。126～130は基部が凹基式のもので何れも挟り部分の両端や片方が欠けている。129、130は黒曜石製のものである。石錐は131の1点で頭部と錐部が明瞭に分かれる。錐部は断面三角形であるが先端は欠けている。不定形石器は132～134の3点が出土した。剥片の側縁の一部に片面ないし両面から細部調整加工を施している。石斧は135の1点が出土した。磨製の石斧で一部に擦り痕が見られ、基部は丸みを呈し刃部の一部が欠けている。磨石は136の1点が出土したが、表面の風化が著しいものである。打製石斧状は140の1点が出土した。粘板岩製の薄身のもので先端部が欠けている。表裏両面を粗く剥離し、側面には両面から細部加工を施し、基部部分には挟りがあり、片側が挟りの度合いが大きい。石皿は141～147の7点が出土し、何れも扁平な転石を利用している。完形のもの141の1点で、他は半欠品や破片である。147は炉の仕切りに転用されたものである。その中で144は両面を使用したもので両面が中央部で凹み、他のものは片面を使用している。使用面は摩滅している。143は裏面が整形され、丸みを帯びている。剥片が接合するものは138～139の3個体あり、138は2片が接合したもので打面が上下にある。先端は剥片1がフェザーで剥片2がヒンジとなり、剥片1が横長剥片状、剥片2が縦長剥片である。138は4片が接合したもので、接合状態から母岩の形状は長方体状を呈するようである。剥片剥離の方法は剥片1、2が自然面の平坦な面で図の上方を打面として見られる面から剥離され、その剥離された面を利用して剥片3が剥離され、更に剥片3が剥離された面を利用して剥片4が剥離されている。その結果、打面が3面あり、母岩の中に打面が移行していることが判った。当然剥片は中に入る程小さいものとなっている。剥片の形状は縦長剥片状で先端は剥片1、2、

4がヒンジ、剥片3がフェザーとなっている。139は3片が接合したもので、そのうち剥片1は3箇所折れている。打面は2面あり、剥片1、2が図の上方から剥離され、剥片3が図の右側面から剥離されている。何れも打面は自然面であり、剥片の形状は剥片3が横長剥片状で、剥片1、2が縦長剥片である。先端は何れもフェザーである。この接合資料は138と同一の石質、色調であることから同一母岩と考えられる。

2) 住居址状遺構

住居址状遺構としたものは平面形が不整形のものや炬等が検出されない遺構であり、調査区の北側に1箇所、南側に2箇所の計3箇所検出された。

II C-1 住居址状遺構（第30～32図、写真図版21、36、37）

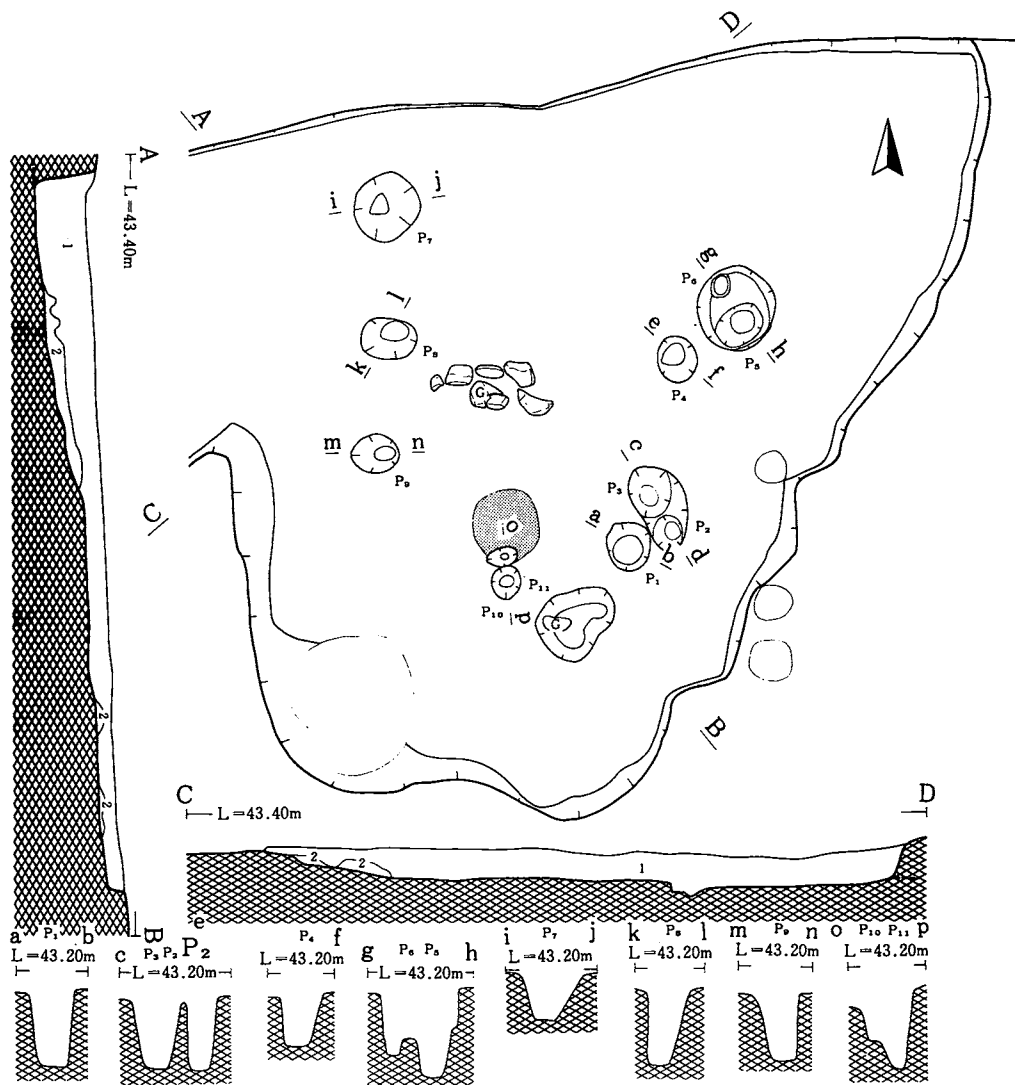
調査区II C-16区を中心とした平坦地で黒褐色土の広がり認められ、当初から住居址と見られた遺構で、南西隅ではII C-1土坑に切られ、北側は調査区外に延びている。規模は黒褐色土の広がり東西6.45m、南北5.81+ α mであり、平面形は方形状を呈する。埋土は黒褐色土の柔らかい単層で微量の炭化物粒や土器、石器、チップ、剥片などを含んでいる。壁は明瞭な立ち上がりとはなっていない。床面と見られる所はなく、IV層が北に向かって傾斜し特に堅い面はない。柱穴は10基が台形状に検出された。規模は開口部で40cm～20cm、深さは浅いもので35cm、深いもので70cmであり、埋土は何れも黒褐色土の単層である。焼土はP10の一部に切られて検出された。規模は直径58cmの円形状で焼土の厚さは2cm位である。

出土遺物は土器、石器が埋土中から出土した。土器は148～155の8点を掲載したが、出土した大半が小破片である。148～151が縄文時代の土器で何れも深鉢形土器の口縁部破片である。148は口縁部が波状を呈し折り返し口縁で口唇部は丸みをおび、波状頂部付近は刻みが付けられている。文様は粘土紐の隆帯が波状頂部付近から鋸歯状に垂下して頸部付近まで見られる。頸部は小さな段となっている。地文は綾繰り文が横位に施文されているが、器表面の剥落が激しいため良く分からない。胎土は砂粒が多く

II C-1 住居址状遺構柱穴計測表

No.	開口部	底部	深さ
P 1	32×40 ^{cm}	23×22 ^{cm}	60 ^{cm}
P 2	25×28	12×15	59
P 3	32×39	14×17	56
P 4	30×36	16×17	43
P 5	30×39	18×20	72
P 6	15×17	12×15	54
P 7	54×55	14×15	36
P 8	45×22	22×16	61
P 9	40×32	17×12	55
P10	23×14	6×5	42
P11	24×27	12×8	62

入り脆い。149は口縁部の突起と思われる破片で、突起上部に粘土紐の隆帯が鋸歯状に付けられ、突起周囲には粘土隆帯が巡り、隆帯より下位には更に隆帯が「ハ」字状に見られる。縄文は見られない。胎土は砂粒が入り脆い。150は小型の口縁部破片で、文様は沈線による文様が見られる。胎土は脆い。151は口縁部が頸部で外反する平縁で口縁部には沈線と隆起帯による横位の楕円文が施文され、頸部から下位には沈線で「U」状の文様が付けられる。縄文は頸部より下位にLRが施文されている。胎土は砂粒が多く入り脆い。これら土器の時期は縄文時代



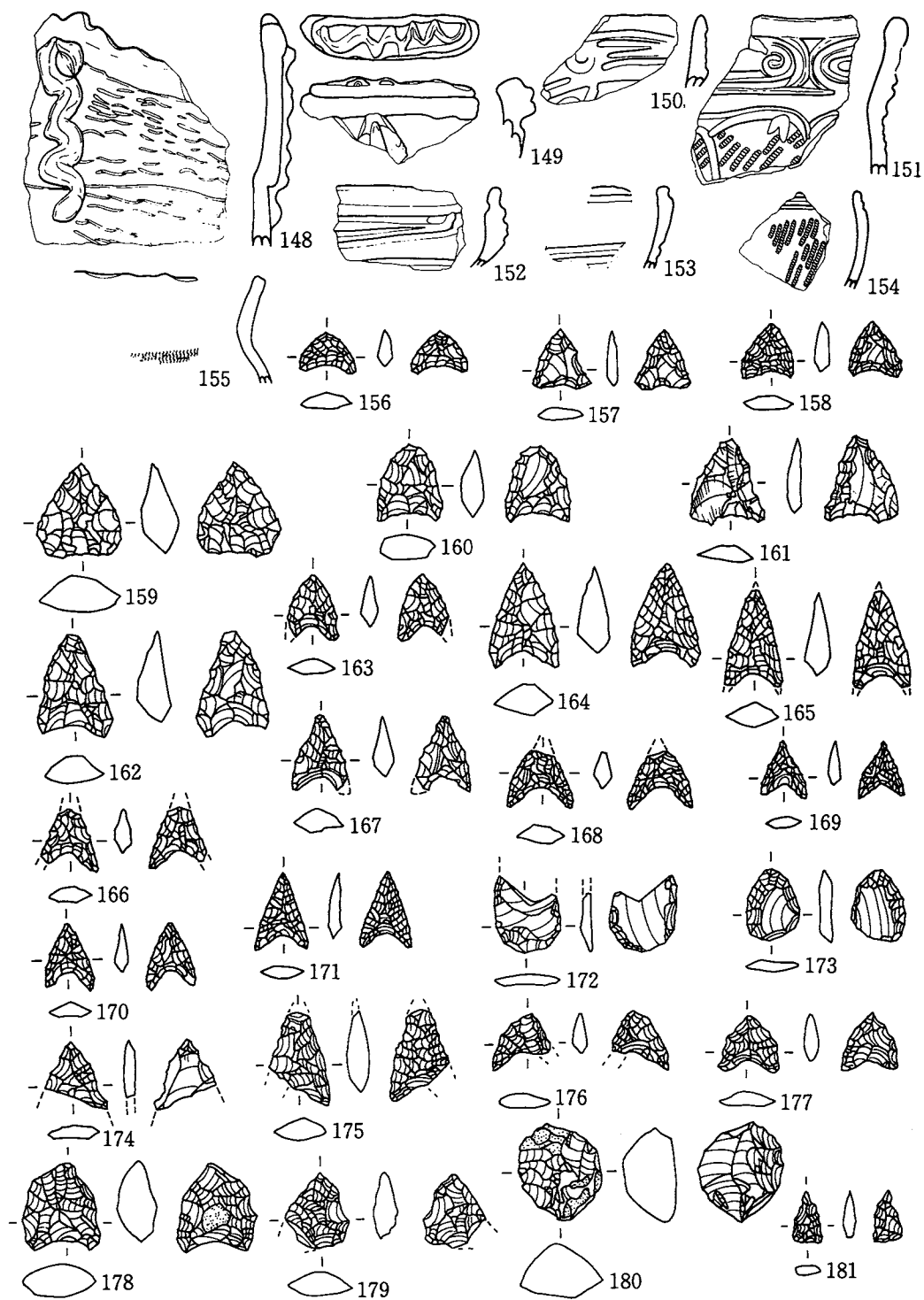
注記

1. 暗褐色土—黒褐色土 7.5YR 3/4—3/2 炭化物微量、剥片、チップ、土器等多量出土
2. 褐色土—明褐色土 7.5YR 4/6—5/6

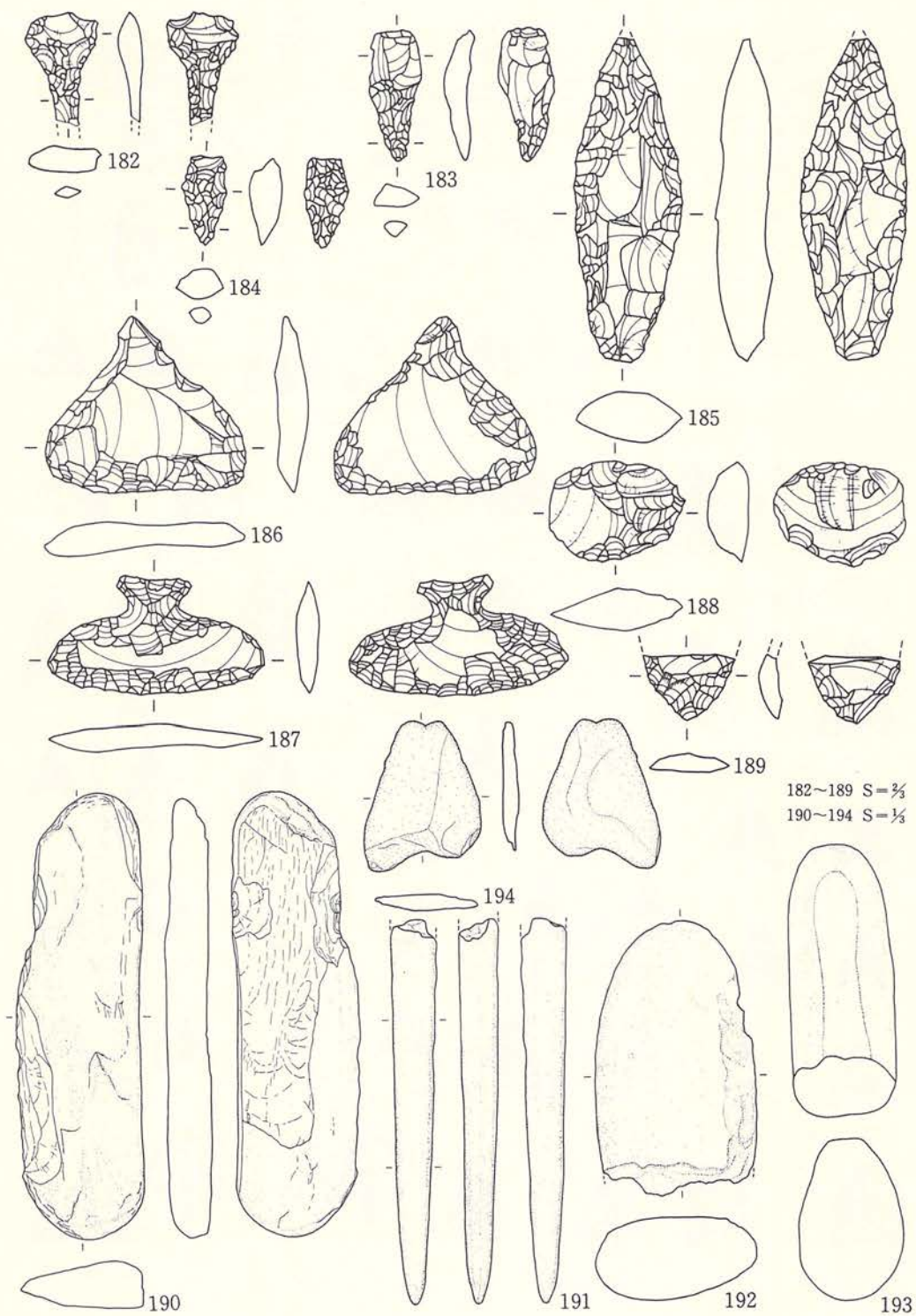
第30図 II C-1 住居址状遺構 S=1/60

中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。

152～155が弥生時代の土器で152～154が鉢形土器の口縁部破片である。152は平縁で口縁が内湾する器形で口唇部は丸くなっている。文様は表面に隆沈線による変形工字文が施文され、裏面には口縁部に沿って1条の沈線が巡っている。胎土は比較的良い。153も平縁で口縁が内湾する器形で口唇部は丸くなっている。文様は口縁直下と頸部付近に沈線が巡るだけである。胎土は良好である。154も平縁が内湾する器形である。文様は口縁部直下に2条の沈線が巡り、沈線下位には原体が細い縄文LRが施文されている。胎土は良好である。155は小形の甕形土器の口縁部破片で口縁部は頸部から外反している。口縁は平縁で口唇部が角ばっている。口縁部は無文で胴部には横位の縄文が施文されている。胎土は良好である。これら土器は第Ⅴ群2類に属する。石器は石鏃、石錐、石槍、石匙、不定形石器、石剣状石器、石棒、磨石、石錘である。石鏃は156～179、181の25点が出土し、基部形態が平基式、凹基式状、円基式のものである。平基式のもの181の1点で平面が二等辺三角形状である。凹基式状のものは156～171、175～179の21点で、挟りの少ないものが157～161の5点、157、158、161が薄身の剥片で正三角形状、159が五角形状、160が二等辺三角形状で基部が厚い。挟りが明瞭に見られるものは156、162～171、175～179の16点で、156が正三角形状、178が五角形状、他は二等辺三角形状で166、168が先端部、175、176、179が先端部や、挟り部分で折れている。円基式の172、173の2点は何れも薄身の剥片で側縁も膨らんでいる。172は先端部で折れている。他には174が先端部分だけであり、基部形態が分からないものである。175～179、181は黒曜石製である。石錐は182～184の3点が出土し、何れも錐部分には表裏両面から調整加工が施されている。182は先端部が欠損し、184は頭部が欠損している。182、183の先端部は断面が菱形状である。石槍は185の1点が出土した。柳葉形状に仕上げられ、先端部分は入念に表裏両面に調整加工を施している。石匙は186、187の横型石匙2点が出土し、摘みの位置が身部中央にある。186は摘み部分が明瞭に見られない。刃部は両面加工されて直線的となっている。187は摘み部分と身部が明瞭に分かれ、刃部は両面加工されて直線的となっている。不定形石器は180、188、189の3点が出土した。何れも縁辺に調整加工が見られるものであるが、180は石核とも見られるもの、189は石匙の破損品の可能性があるものである。180は黒曜石製である。石剣状石器としたものは190の1点であり、薄身の長楕円形状の石に一部加工を加えて石剣状としたもので基部と身部の部分に挟りがあり、刃部に相当する部分は片側を剥離して刃部状としている。使用痕はない。石棒は191の1点が出土し、頭部が欠損した先端部分だけのものである。粘板岩製で断面が丸くなるように整形し、先端が尖っている。磨石は192、193の2点が出土した。何れも偏平な石の稜の一部に磨面をもつが、192は明瞭な磨面となっていない。石錘は194の1点が出土した。偏平な石の上下の両端に極僅かに凹みが見られるものである。



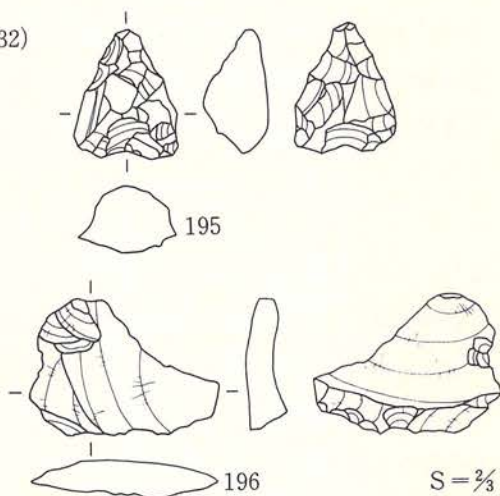
第31图 II C-1 住居址状遺構出土遺物(1)



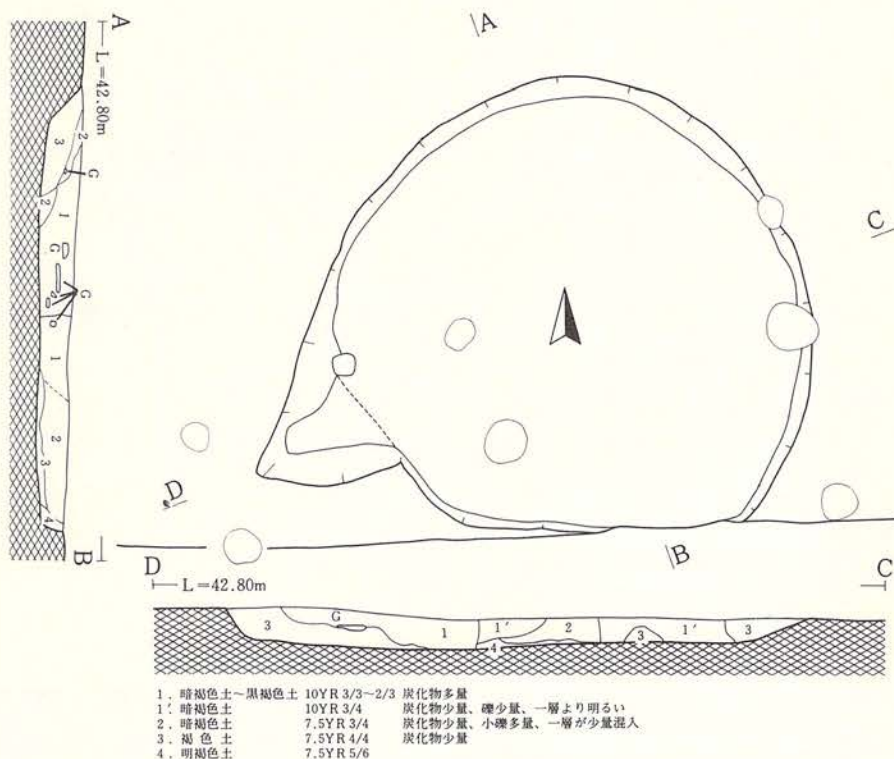
第32図 II C-1 住居址状遺構出土遺物(2)

ⅢC-1 住居址状遺構 (第33、34図、写真図版32)

調査区ⅢC-14、15、19、20区にまたがって検出された。ⅢC-1 建物跡に切られ、西側は木根によって一部壊され、南側では一部調査区外に延びている。炉や柱穴が検出されないことから住居址状遺構としたものである。規模は東西3.87m、南北3.50m、検出面からの深さ0.32m、平面形は円形状を呈している。壁は外傾して立ち上がり、床は中央部が僅かに窪み特に堅い面はない。埋土は4層に細分され、1層は黒褐色土で暗褐色土との混合土、炭化物が多く含まれる。2層は暗褐色土で小礫が多く入り、炭化物を僅かに含んでいる。



第34図 ⅢC-1 住居址状遺構出土遺物

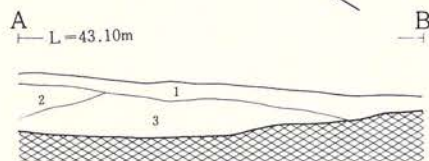
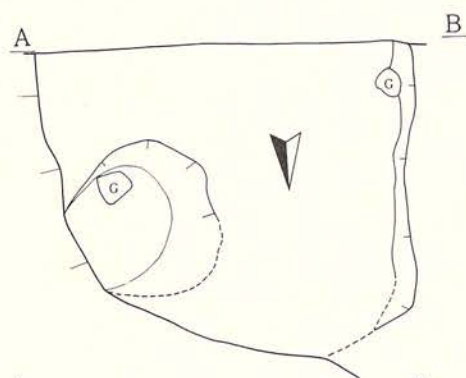


第33図 ⅢC-1 住居址状遺構 S = 1/60

3層は褐色土で炭化物を僅かに含んでいる。4層は明褐色土の粘土質のもので壁際に見られる。出土遺物は西側の木根跡の攪乱部分から石鏃1点と、埋土中から剥片が1点出土した。石鏃195は基部が凹基式状で、身が厚く石鏃の未製品のようにも見える。196は端部で広がる縦長剥片である。

ⅢC-2住居址状遺構（第35、36図、写真図版37）

調査区ⅢC-25区で表土を剥いだV層面で検出された。東側を採掘跡で切られ、床面も一部で土坑状の穴によって切られ、南側は調査区外に延びているため平面形や規模については不明である。壁は明瞭ではなく、床面はほぼ平坦であるが、堅い面はない。埋土は暗褐色土で小礫、炭化物を含む単層である。出土遺物は197の深鉢の口縁部破片が1点出土した。破片であるため形態等不明な点が多いが、口縁部は波状を呈するようである。口唇部は丸みを呈している。文様は粘土紐の隆帯で横位の楕円文等の施文をしているようであるが、器表裏面の剥落が著しいため良く判らない。胎土は砂粒が多く入り脆い。この土器は文様や施文の特徴から中期初頭に位置づけられ第Ⅱ群1類に入るものであろう。

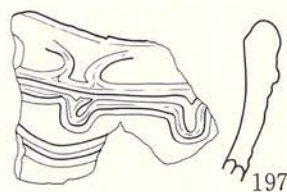


- 1. 褐色土 10YR 4/4 小礫微量
- 2. 褐色土 7.5YR 4/6 堅く締る
- 3. 暗褐色土 10YR 3/4 小礫、炭化物混入

第35図 ⅢC-2住居址状遺構 S = 1/60

2) 土坑

今回の調査によって検出された土坑は13基である。何れも平場の平坦面に位置し、調査区の北側と南側に分かれて検出された。断面形がフラスコ形と皿状の土坑で、フラスコ形土坑のうち北側に検出した土坑は開口部から底部にかけて急に広がり浅いものが多く、南側の土坑は開

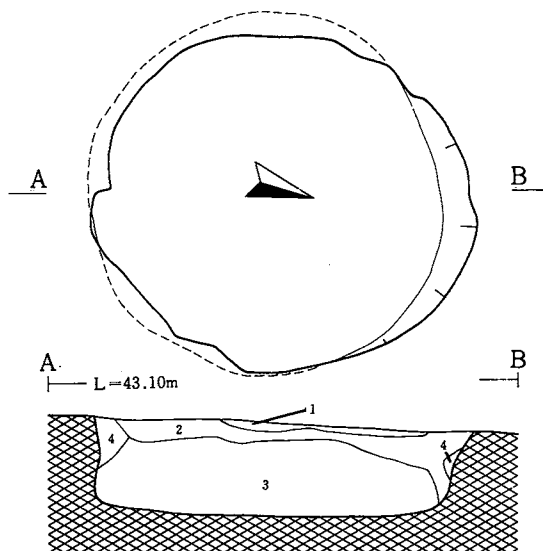


第36図 ⅢC-2住居址状遺構出土遺物 S = 1/3

口部から頸部にかけてくびれて狭くそこから底部に向かって広がり深いものである。

1. ID-1 土坑 (図版37、38、写真図版22、37)

調査区 ID-15 区の平坦面に位置している。規模は開口部径で 2.00×1.75m、底部径で 1.86×1.85m、検出面からの深さは中央部で 54cm である。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈している。埋土は色調などから 4 層に細分され、何れも投げ込み等による人為層である。1、3 層が褐色土、2、4 層が明褐色土で何れも黒褐色土や微量の炭化物を含んでいる。出土遺物は 3 層中から土器、石器が出土している。198 は深鉢の口縁部破片で、縄文 LR の地文を施文後に粘土紐隆帯で円形、横線、懸垂文を施文している。199、200 は LR、RL の縄文をそれぞれ付している深鉢の口縁部破片であり、200 は口縁部を 2cm の幅で折り返している。何れの土器も表面は脆く縄文もはっきりと認められない。胎土は砂粒が多く入り脆い。これらの土器は縄文時代中期初頭で第 II 群 1 類に属する。石器は 201 の 1 点が出土した。断面三角形の棒状の凹石で 3 面に 2 箇所以上の凹み部分が見られる。凹み部分は浅い摺鉢状である。

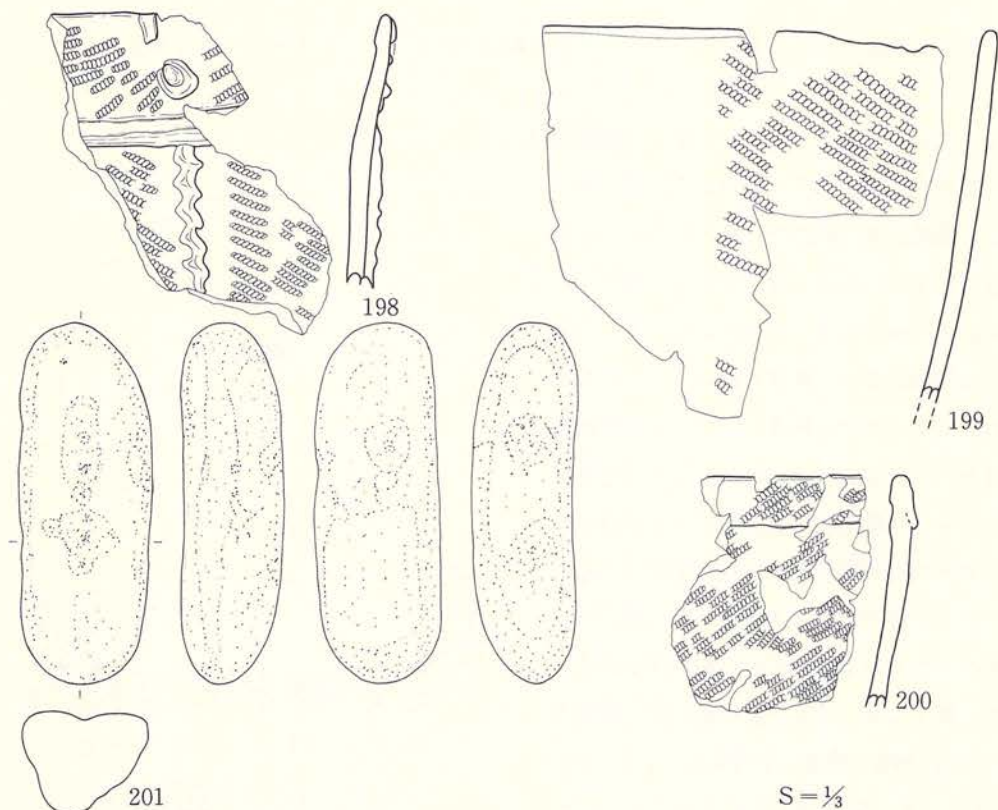


第37図 ID-1 土坑 S=1/40

- | | |
|-----------------------|-------------|
| 1. 褐色土 7.5YR 4/6 | 炭化物微量 |
| 2. 明褐色土 7.5YR 4/6-8/6 | 炭化物微量、小石多量 |
| 3. 褐色土 7.5YR 4/6 | 炭化物微量、土器片含む |
| 4. 明褐色土 7.5YR 5/6 | |

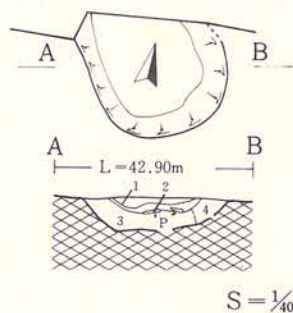
2. ID-2 土坑 (図版39、40、写真図版22、38)

調査区 ID-20 区の平坦面に位置し、北側約半分は調査区外に延びている。規模は開口部径で 0.72m、底部径で 0.52m、検出面からの深さは中央部で 18cm である。平面形は北側に遺構が延びているためよく分からないが、開口部、底部とも楕円形状を呈するものと考えられ、断面形は皿状を呈している。埋土は色調などから 4 層に細分されるが何れも投げ込み等による人為層である。特に 2 層には炭化物が多く見られ、3 層との境に土器片が見られた。出土遺物は 2 層と 3 層から土器が出土している。土器は 3 点出土し、何れも深鉢形土器の口縁部破片であるが全体形は不明である。202 は口唇部が丸みを呈し、内側に幾分肥厚している。文様は器表面が脆く剥落も激しいが、粘土紐の隆帯によって渦巻状の文様が口縁部に付けられ、頸部に相当



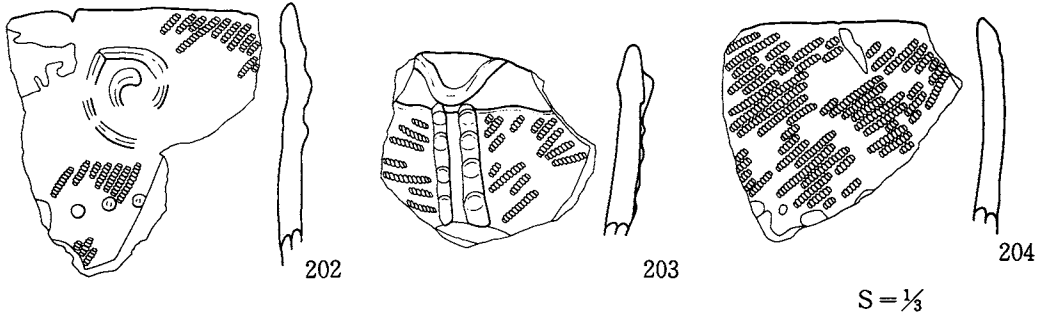
第38図 ID-1 土坑出土遺物

する部分に竹管もしくは棒状の施文具による刺突列が巡っているようである。縄文はLRが付されているようであるが、器表面の剥落が激しいためよく分からない。胎土は砂粒が多く入り脆い。203は口縁部が折り返し口縁で、口唇部が丸みを呈し内側にも若干肥厚している。文様は口縁部に隆帯が波状に付けられ、折り返し口縁の下端から粘土紐による縦位の隆帯が2本平行に垂下し、隆帯上は棒状工具による刺突が付けられている。地文は縄文RLが折り返し口縁の下位より付けられている。胎土は脆く器表裏面とも剥落しており、砂粒が多く入っている。204は口縁部が若干内湾する器形の深鉢で、口縁部から縄文LRが付けられている。胎土は砂粒が多く入り、器表面が脆くなっている。何れの土器も二次焼成を受けているものと考えられる。これらの土器は縄文時



第39図 ID-2 土坑

1. 暗褐色土 7.5YR 3/4 礫、炭化物微量
2. 黒褐色土 炭化物の層、土器片含む
3. 褐色土 小礫、炭化物微量
4. 褐色土

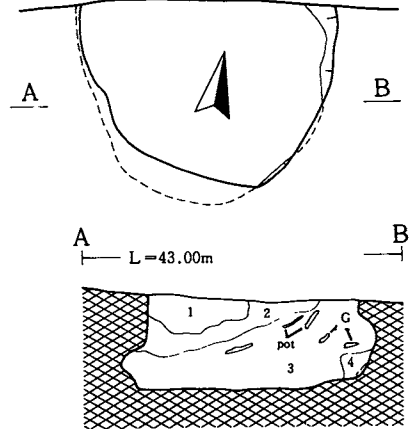


第40図 ID-2 土坑出土遺物

代中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。

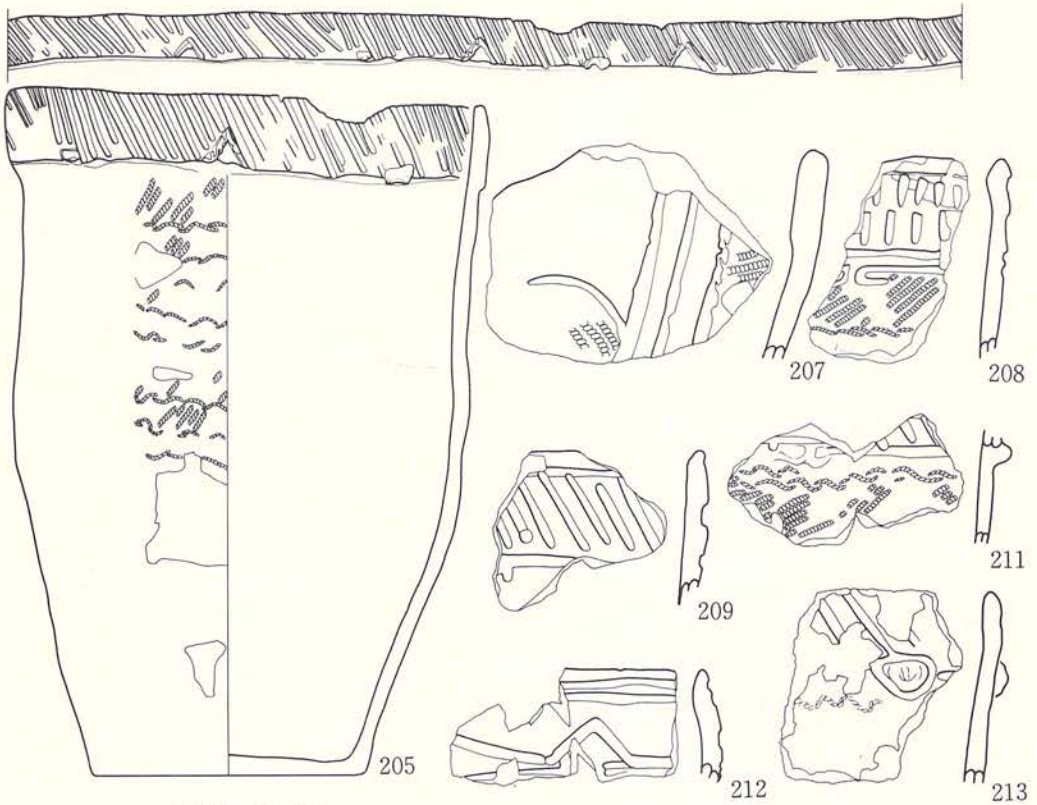
3. ID-3 土坑 (第41~43図、写真図版22、38)

調査区ID-20、25区の平坦面に位置し、北側約半分は調査区外に延びている。規模は開口部径で1.24m、頸部径で1.14m、底部径で1.18m、検出面からの深さは中央部で50cmである。平面形は北側に遺構が延びているためよく分からないが、開口部、底部とも円形状を呈するものと考えられ、断面形は頸部が狭く底部で広いフラスコ状を呈している。埋土は色調などから4層に細分されるが、何れも投げ込みに等よる人為層である。特に2層には炭化物が多く見られ、3層中に土器片が詰まって見られた。出土遺物は土器、石器が出土し、何れも3層中からの出土で底面まで土器が見られた。土器は12点出土し、5点の器形が判るが他は破片である。205は口縁部で直立し、胴下部で若干膨らみ底部ですぼまる平縁の深鉢形土器である。口縁部は折り返し口縁で幅3cmである。文様は折り返し口縁部にあり3箇所粘土紐によって三角形状に隆帯を貼り付けた後に、棒状工具によって斜位の刻みを全周させ、さらに隆帯間に粘土粒を2箇所設けている。縄文は頸部から下位に施文され、器表面が脆く剥落しているため良く分からないが、横位の綾繰り文と縄文が見られる。縄文は原体LR、綾繰りは結束第1種のようなものである。器内外面ともに炭化物の付着が認められた。胎土は砂粒が多く脆い。206は円筒形の深鉢形土器で、口縁部は欠けているが平縁のようなものである。口唇部はやや丸みを帯び、内側に幾らかそげている。文様は口縁部に施文され、沈線による連続弧線文を四単位巡らし、その

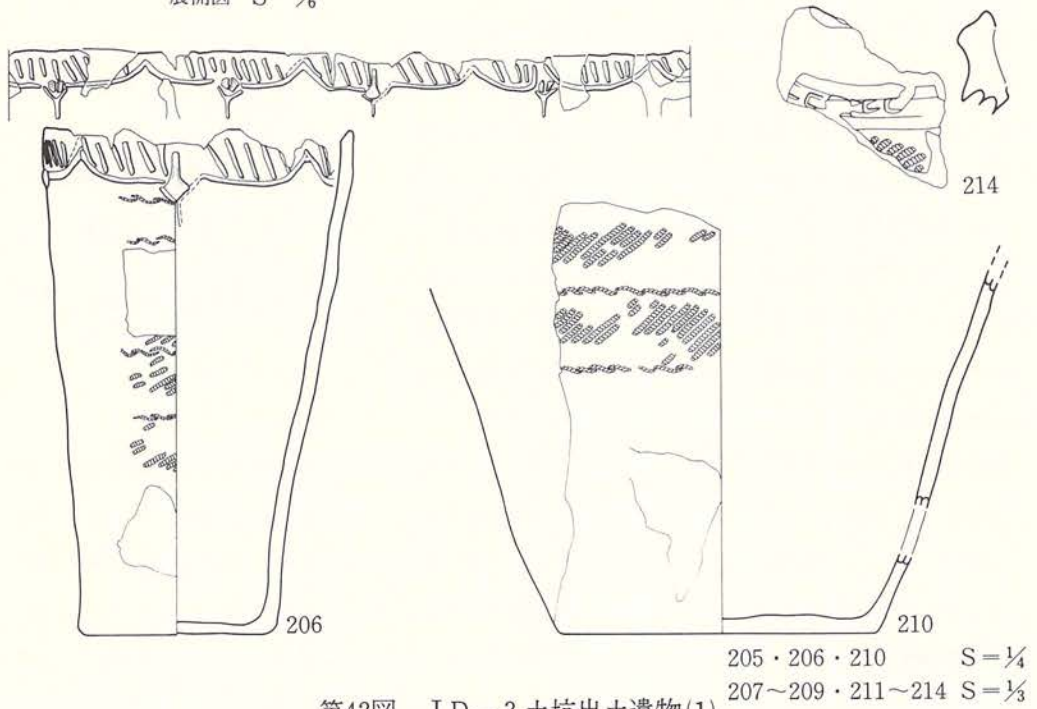


第41図 ID-3 土坑 S = 1/40

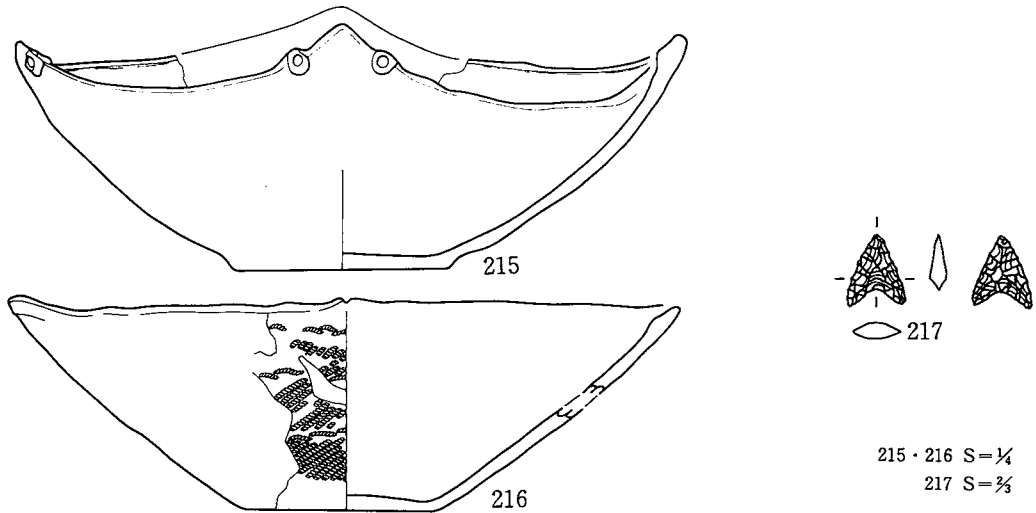
1. 明褐色土 7.5YR 5/6
2. 黒褐色土 7.5YR 2/2 炭化物の層、割片、チップ、焼土粒含む
3. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物、小石炭粒含む
4. 明褐色土 7.5YR 5/6



展開図 $S = \frac{1}{6}$



第42図 ID-3 土坑出土遺物(1)



第43図 I D - 3 土坑出土遺物(2)

中に斜位の刻みを等間隔状に巡らしている。孤線文の中間部分に沈線で「Y」字状4箇所が等間隔に付けられ、その部分に2個一対の粘土粒3箇所と「Y」字状を逆さまにした隆帯一箇所が施文されている。縄文は横位の綾織りを伴う原体LRが施文されているようであるが、器表面は剥落が激しいため良く捉えることができない。胎土は砂粒が多く入り脆い。207~209、211~214は深鉢形土器の口縁部破片であり、何れも器表面が剥落して文様は良く捉えることができなかった。207は口縁部が波状を呈する器形で、文様は粘土紐による隆帯が見られ、縄文は原体LRと見られるものが施文されている。208は口縁部が平縁と思われ、口唇部が幾分肥厚し内側にそげている。文様は口縁部にあり、上下2段に縦位の刻みが施文され、頸部付近に2条の沈線を巡らす。下位の沈線は「□□」状になっているようである。頸部付近より下位には縄文と綾織り文が施文され、綾織りは横方向に見られ、縄文は原体LRのようである。胎土は砂粒が多く脆い。209は平縁の口縁部破片で、口唇部は丸みを帯びている。文様は口縁部直下と頸部付近にそれぞれ1条の沈線を巡らし、その間に斜位の刻みを施文している。縄文はみられない。胎土は砂粒が多く脆い。211は口縁部が欠けている。文様は口縁部に斜位の刻みが見られ、頸部に1条の沈線を巡らし、一部に粘土粒を貼り付けているようである。縄文は頸部より下位に綾織り文と縄文が施文される。綾織り文は横方向に見られ、縄文は原体LRのようである。胎土は砂粒が多く脆い。器表面に炭化物が付着している。212は平縁で口縁部がやや内傾するようである。文様は無文地に沈線が横方向に巡り、一部山形状となっている。胎土は砂粒が入るが比較的よい。213は平縁の口縁部破片で、文様は器表面が剥落しているためよく捉え

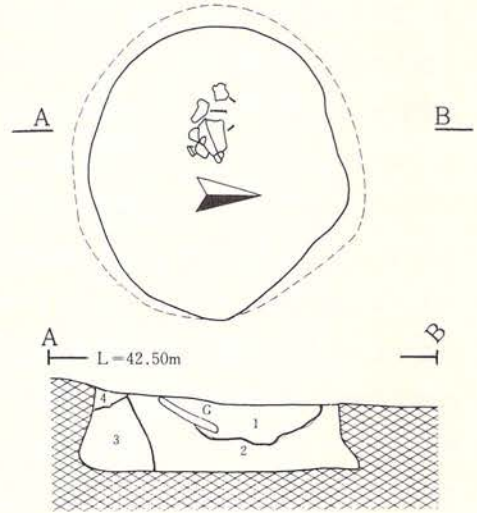
ることができないが、頸部に粘土粒が付けられ、口縁部に斜位の沈線文か刻みが施文されているようである。縄文は頸部下位から施文されているようであるが、器表面が剥落しているため分からない。綾織りが一条横位に見られる。胎土は砂粒が多く脆い。214は口縁部が波状を呈する深鉢形土器の破片と思われるが、器表面の剥落が激しいためによく分からない。文様も同様で僅かに1条の押し引き沈線が見られる。縄文も原体LRらしきものが見られる。胎土は砂粒が多く脆い。210は深鉢形土器の底部破片で原体LRと横位の綾織り文が施文されている。器表面には炭化物が付着している。胎土は脆い。215、216は浅鉢形土器である。215は4単位の波状を呈し、上から見ると四角形状を呈するもので口唇部は内面が厚くなっている。波状頂部の口唇部の両側に粘土紐による円文が表裏面に付けられている。表裏面とも縄文はなく丁寧に磨きが施されている。胎土は砂粒が入るが比較的良い。216は平口縁で1箇所に入り込みが見られ、口唇部は内面に肥厚している。器表面は原体LRと横位の綾織り文が施文されている。内面は磨きが見られる。胎土は比較的良好である。これらの土器は縄文時代中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。石器は217の石鏃1点が出土した。基部は凹基式で、両側縁は直線的である。

4. IE-1 土坑 (第44、45図、写真図版24、39)

調査区IE-10区の緩斜面部に位置し、南側の一部が木根によって攪乱されている。規模は開口部径で1.35×1.54m、底部径で1.52×1.64m、検出面からの深さは中央部で35cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈する。断面形は開口部から底部にかけて広いフラスコ状を呈している。埋土は色調などから4層に細分され、1層が黒褐色土で炭化物、焼土粒が微量に入り、2～4層が明褐色土で炭化物を僅かに含んでいる。何れも投げ込み等による人為層と考えられる。

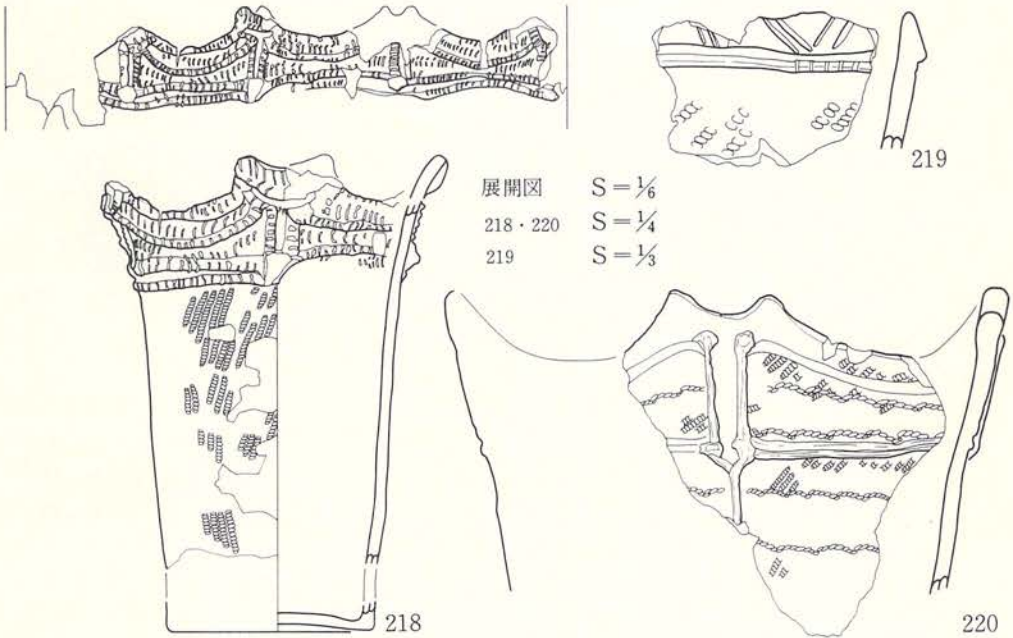
出土遺物は土器が1層中から出土している。218は口縁部と底部近くを欠く円筒形の深鉢形土器で、口縁部は外傾し口縁部が波状を呈し、4個の扇状突起が付くようである。文様は口縁部にみられ、粘土紐による隆帯が貼り巡らされる。突起部分から垂下する隆帯と粘土瘤、頸部に巡る隆帯によって四つの文様区画に分けられている。区画内部には爪形状の縄文の側面を押し付けた圧痕文が隆帯の上や器面に施文されている。縄文は頸部から下位に原体LRが付けられている。胎土は比較的良く繊維の混入はない。219は平縁の深鉢形土器の口縁部破片と思われるもので、文様は口縁部に見られ沈線状の刻みが鋸歯状に見られ、口縁部の張り出す直下に沈線を巡らしている。縄文は原体LR状のものが口縁部直下から付けられているが、器表面の剥落があるためによく分からない。胎土は砂粒が入り脆い。220は口縁部が波状を呈する大型深鉢形土器の破片で2個一対の突起がある。文様は縄文の施文後に突起部分から垂下する粘土紐の隆帯と横位に巡る隆帯、それに沿うように沈線との組合せで方形に施文されている。縄

文は口縁部から原体LRと思われるものが施文され、綾織りが横位に等間隔で見られる。胎土は砂粒が入り脆い。これらは縄文時代中期初頭で第II群1類に属する。



第44図 IE-1 土坑 S=1/40

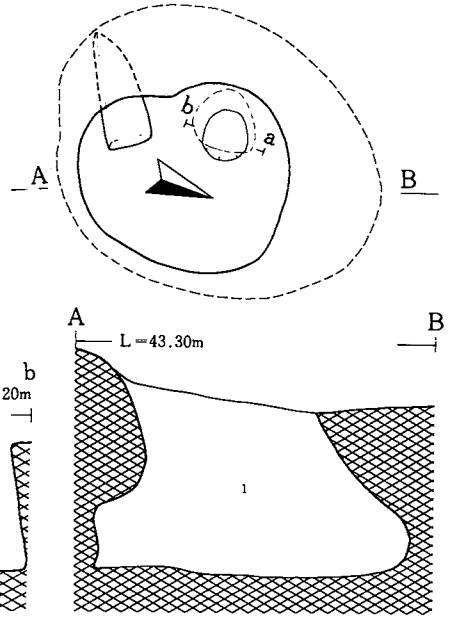
1. 黒褐色土 7.5Y R 2/2 炭化物多量、焼土粒少量、下部に土器片出土
2. 明褐色土 7.5YR 4/6 炭化物微量、小石多量
3. 明褐色土 7.5YR 5/6 炭化物微量、小石多量
4. 明褐色土 7.5YR 5/6



第45図 IE-1 土坑出土遺物

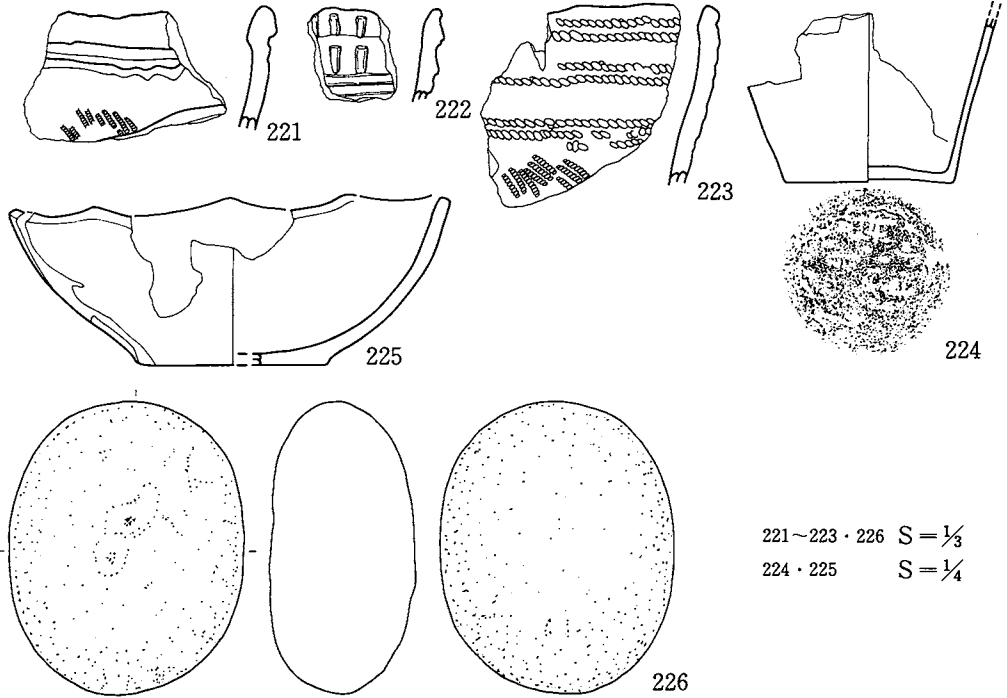
5. II C-1 土坑 (第46、47図、写真図版39)

調査区 II C-16 区に検出され II C-1 住居址状遺構を切って検出された。規模は開口部径で 1.10×0.98m、底部径で 1.70×1.50m、検出面からの深さは中央部で 1.08m である。平面形は開口部、底部とも円形状を呈する。断面形は開口部から底部にかけて広がっているフラスコ状を呈している。底面には直径 22cm、底面からの深さ 65cm の柱穴状の穴がある。埋土は 1 層で暗褐色土で褐色土と混じり微量の炭化物を含んでいる。投げ込み等による人為層と考えられる。出土遺物は埋土下部から出土した土器、石器である。土器は 5 点出土し、221~224 が深鉢形土器の口縁部破片と底部破片である。221 は丸みを帯びる口縁部で、口縁部直下に 2 条の沈線を施文し、1 条には鋸歯状になっている部分が見



第46図 II C-1 土坑 S=1/40

1. 褐色土~暗褐色土 7.5YR 4/4~3/4 炭化物多量



221~223・226 S=1/3

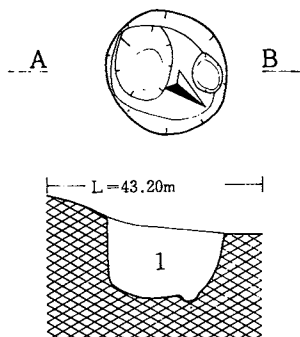
224・225 S=1/4

第47図 II C-1 土坑出土遺物

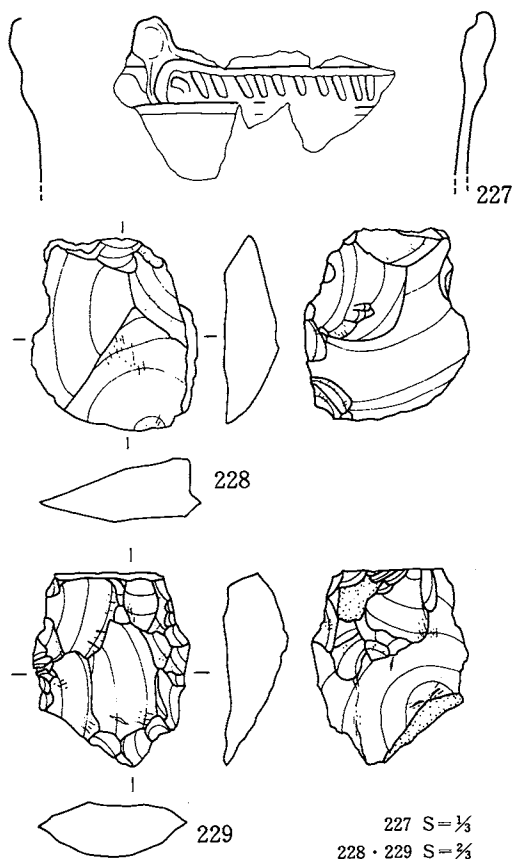
られる。縄文はR Lと思われるものが施文されているが、器表面の剥落が著しいためよく据えることができない。胎土は砂粒が多く入り脆い。222は口縁部に2段の刻みがあり、頸部と思われる部分には沈線が見られる。縄文はない。胎土は砂粒が入り脆い。223は口縁部が僅かに内湾している土器で、口縁部には原体Rの縄文側面圧痕文が2条一対で3段に見られる。胴部には縄文原体R Lと見られるものが施文されている。表面には炭化物が付着している。胎土は砂粒が多く入り脆い。224は無文の底部片である。底面には網代痕が付いている。225は浅鉢形土器で口縁部は小波状を呈し、器表面は無文で良く磨きがかけられている。胎土は比較的良好い。これらの土器は縄文時代中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。石器は226の1点が出土した。全面に擦り面が見られる磨石である。

6. ⅡC-2土坑 (第48、49図、写真図版39)

調査区ⅡC-21区に検出されⅡC-1住居址状遺構を切って検出された。規模は開口部径で0.64×0.65m、底部径で0.54×0.47m、検出面からの深さは中央部で42cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈する。断面形はピーカ状を呈している。埋土は1層で、暗褐色土と褐色土とが混じっている。層中には微量の炭化物を含んでいる。投げ込み等による人為層と考えられる。出土遺物は土器、



第48図 ⅡC-2土坑 S=1/40



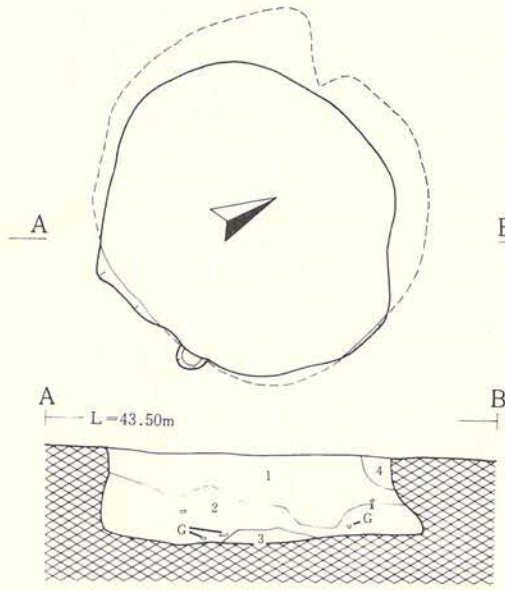
第49図 ⅡC-2土坑出土遺物

227 S=1/4
228・229 S=3/4

石器がある。土器は227の1点である。深鉢形土器の口縁部破片で、平縁に突起が付いている土器のようである。文様は口縁部にあり、刻みを施文後に沈線による楕円状の区画を作り出しているものである。縄文は見られない。胎土は砂粒が多く入り脆い。この土器は縄文時代中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。石器は228、229の2点が出土した。何れも不定形石器であり、剥片の縁辺に刃こぼれ状の微細な剝離が見られる。

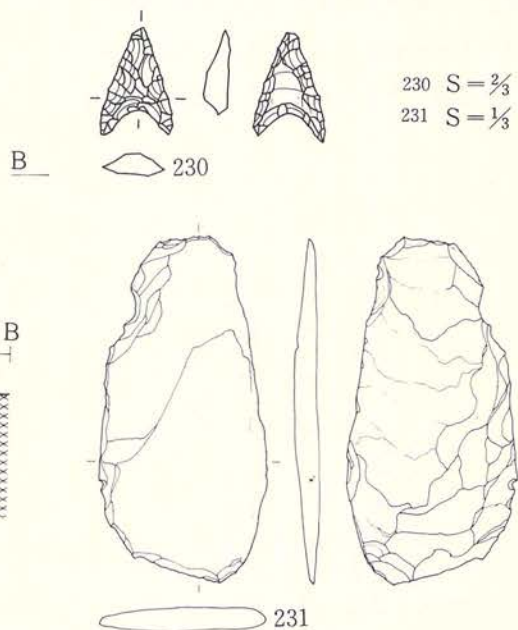
7. ⅡD-2土坑 (第50、51図、写真図版23)

調査区ⅡD-6区の平坦面に位置している。規模は開口部径で1.54×1.62m、底部径で1.78×1.98m、検出面からの深さは中央部で46cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形は開口部から底部にかけて広いフラスコ状を呈している。埋土は色調などから4層に細分されるが、何れも投げ込み等による人為層で、1～3層中には炭化物、小石が混入している。出土遺物は土器、石器が出土したが、土器は細片のため掲載できなかった。石器は石鏃と打製石斧状の2点が出土した。石鏃は230で、基部が凹基式のものである。打製石斧状としたものは231であり、礫を薄く剥いだ剥片の側縁に片側から調整を加えて形を整えているもので、刃部と思われる所は幾らか擦れているようである。



第50図 ⅡD-2土坑 S=1/40

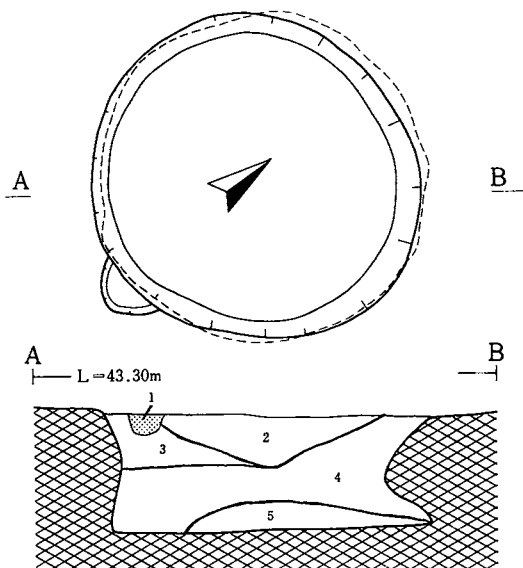
1. 褐色土 7.5YR 4/6~4/4 炭化物微量、土器片出土
2. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物微量、小礫含む
~10YR 4/6
3. 黄褐色土 10YR 5/6 炭化物微量、小礫含む
~褐色土 ~7.5YR 4/6
4. 赤褐色土 10YR 4/6
~褐色土 ~7.5YR 4/6



第51図 ⅡD-2土坑出土遺物

8. II D-3 土坑 (第52図、写真図版23、39)

調査区 I D-10区を中心とした地区の平坦面に位置している。規模は開口部で1.74 × 1.70m、頸部で1.50 × 1.48m、底部で1.72 × 1.74m、検出面からの深さは中央部で60cmである。平面形は開口部底部とも円形状を呈し、断面形は頸部で狭く、底部で広いフラスコ状を呈している。埋土は色調などから5層に細分され、1層の焼土以外は褐色土が主で層中には炭化物、小石が含まれる。何れの層も人為的に投げ込まれたものと考えられる。出土遺物は5層中から土器細片が出土したが、文様などは分からないため割愛した。

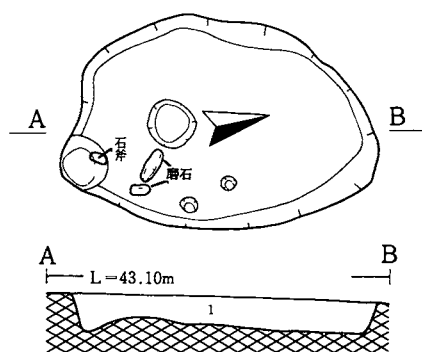


第52図 II D-3 土坑 S=1/40

1. 赤褐色土 5YR 4/6 焼土
2. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物微量、小石含む
3. 明褐色土 7.5YR 5/6 炭化物微量
~褐色土 ~10YR 4/6 小石多量
4. 明褐色土 7.5YR 5/6 炭化物多量、小石含む
~褐色土 ~7.5YR 4/6
5. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物多量、小石多量、土器片含む

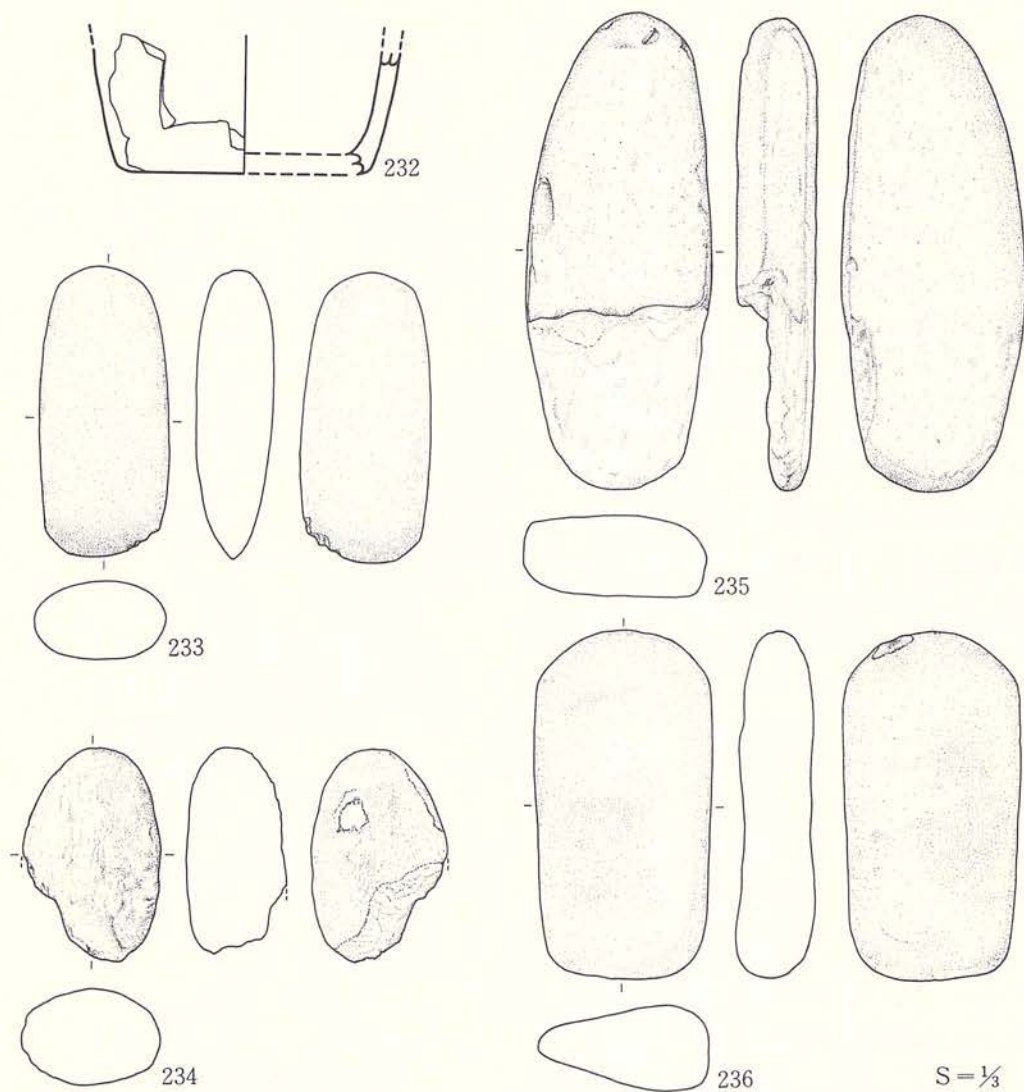
9. II D-4 土坑 (第53、54図、写真図版23、39、40)

調査区 II D-1 区の平坦面に位置し、II D区に検出された柱穴群の柱穴に切られている土坑である。規模は開口部で1.62 × 1.12m、底部で1.48 × 0.98m、検出面からの深さは中央部で17cmである。平面形は開口部底部とも南北に長い楕円形状を呈し、断面形は皿状である。埋土は暗褐色土の単層で小礫や炭化物を含んでいる。人為的に投げ込まれたものと考えられる。出土遺物は土器、石器であり、土器は埋土中、石器は底面上からの出土である。土器は232の1点で、無文の深鉢形土器の底部破片である。胎土は砂粒が多く入り脆い。時期は文様等がないことから不明である。石器は石斧と磨石が出土した。石斧は磨製石斧で233、



第53図 II D-4 土坑 S=1/40

1. 暗褐色土 7.5YR 3/4 風化した礫多量、炭化物微量

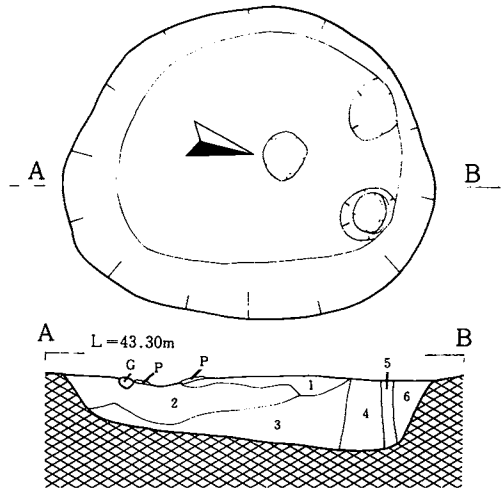


第54図 II D-4 土坑出土遺物

234の2点で、233は完形で頭部に丸みがある。胴部の断面形は楕円形状であり、刃部は僅かに丸みをもち片減りしている。234は頭部部分のもので、胴中央部から刃部にかけて欠損している。頭部は丸みがあり、胴部の断面形も楕円形状を呈するようである。磨石は235、236の2点で何れも偏平な石の側縁や表裏面を磨いている。235は側縁の片側が直線的で稜が見られ、片側表面が剝落している。

10. II D-6 土坑 (第55、56図、写真図版23、40)

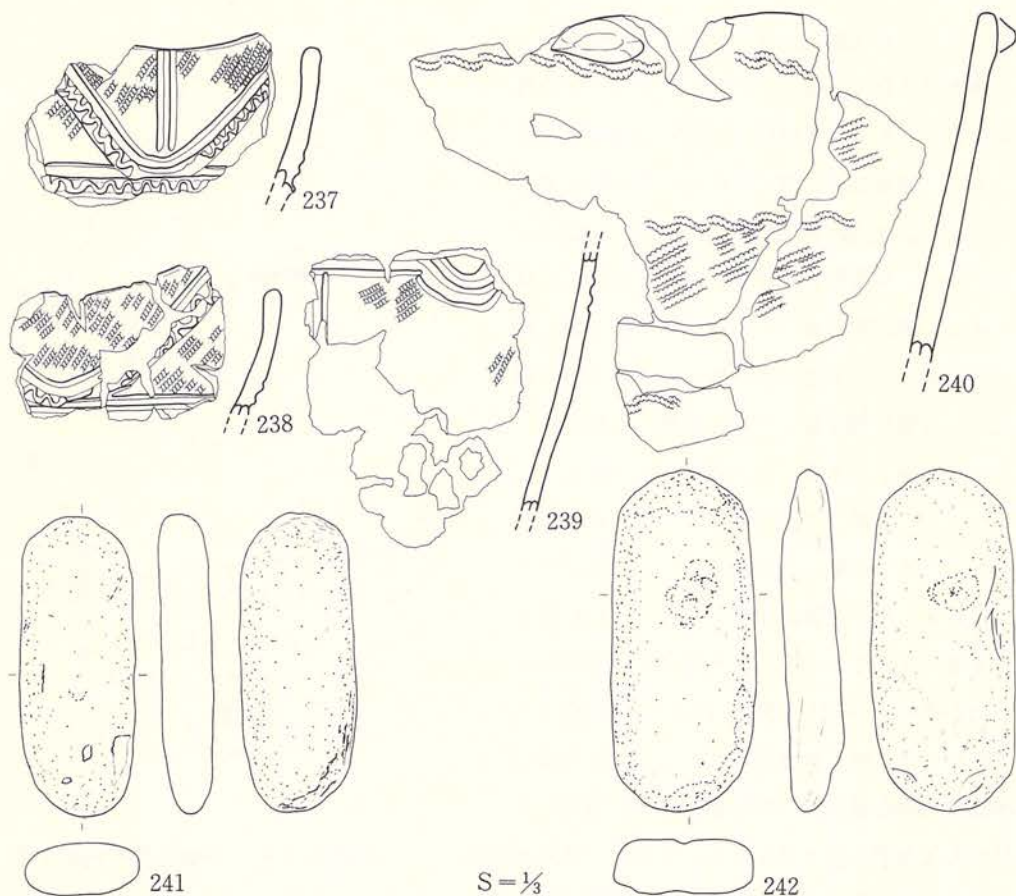
調査区 II D-21 区の平坦面に位置し、II D 区に検出された柱穴群の柱穴に切られている土坑である。規模は開口部で 1.97×1.66m、底部で 1.50×1.20m、検出面からの深さは中央部で 37cm である。平面形は開口部、底部とも楕円形状を呈し、断面形は皿状である。埋土は 6 層に細分される。1、6 層が暗褐色土、2～4 層が褐色土、5 層が明褐色土で何れの層にも炭化物、小石を含み 1、2 層には土器片や石器が入っている。4、5 層は II D 区柱穴群の柱穴の埋土である。これらの層は人為的に投げ込まれたと考えられる。出土遺物は土器、石器で、何れも 1～2 層にかけて出土した。土器は 237～240 の 4 点である。そのうち、237～239 は土器の胎土や文様からみて同一個体の破片である。器形は口縁部が波状を呈し、口縁部が外傾して頸部でく



第55図 II D-6 土坑 S=1/40

1. 暗褐色土 7.5YR 3/4 炭化物微量、小石含む、土器片あり
2. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物微量、小石含む
3. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物微量
4. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物微量、小石含む
5. 明褐色土 7.5YR 5/6
6. 暗褐色土 7.5YR 3/4 炭化物微量、小石含む

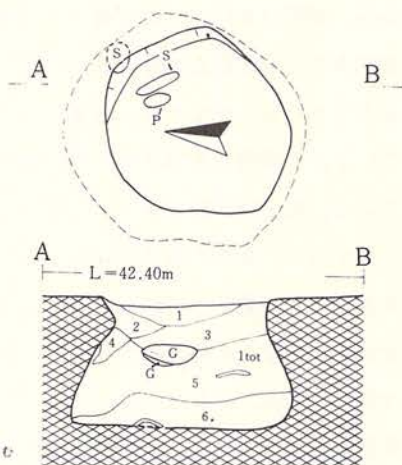
びれる深鉢形土器と見られる。文様は口縁部と頸部、そして胴部にあり、半截竹管の内面を使用した沈線で施文されている。口縁部では緩やかな S 字状のカーブを横位に 4 条巡らし、そのうち下位の 2 条間に上下から半截竹管の背の部分を使って粘土を彫り去って残った部分が隆带状に連続する波状文となり、これらの文様を区切るように縦位に 2 条一対の沈線が入るようである。頸部にも口縁部と同様の工具の内面を使用し、沈線と連続する波状文を横位に巡らす。頸部直下にも沈線が施文され、一部に半円状の沈線が施文されるようであり、胴下部に沈線が垂下しているようである。縄文は原体 L R と見られるものが口縁部から胴部にかけて施文されているが、表面の剥落が著しいために明瞭に捉えることができない。表面には炭化物が付着している。胎土は砂粒が多く入り脆い。240 は平縁の深鉢口縁部破片である。一部残されているだけであり、全体の形状は分からない。文様は口縁部直下に大型の粘土粒が付けられ、原体 L R と見られる縄文と綾織りが横位に口縁部直下から施文されているが、表面の剥落が著しく縄文はよく分からない。胎土は砂粒が多く入り脆い。これらの土器は縄文時代中期初頭で第 II 群 1 類に属する。石器は 241、242 の 2 点が出土した。何れも長楕円形状の石を利用した磨石で、表面が磨かれている。241 は縁辺の一部に敲打痕が見られる。242 は片面に敲打による凹みが見られる。



第56図 II D-6 土坑出土遺物

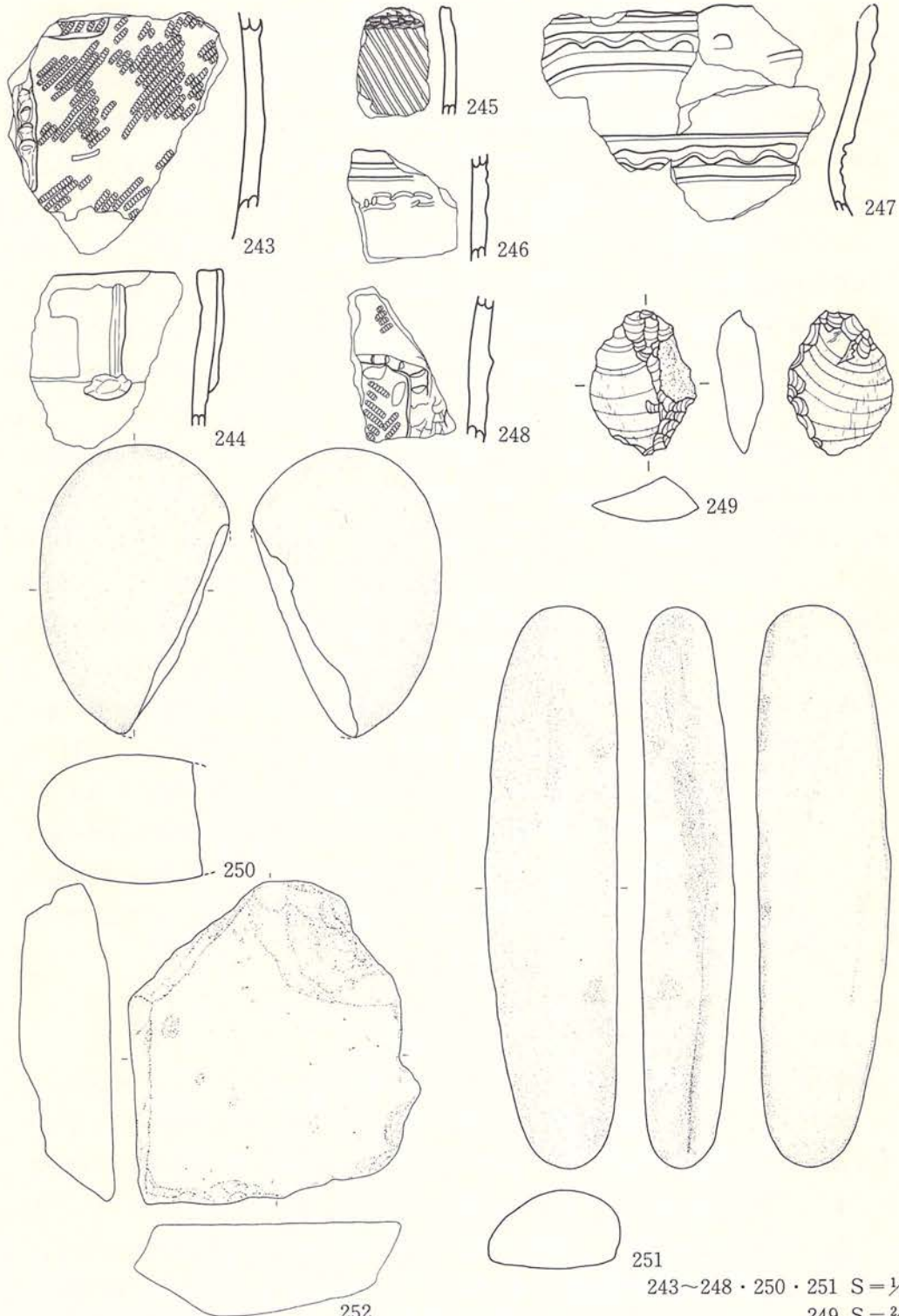
11. III D-1 土坑 (第57、58図、写真図版24、40、41)

調査区III D-9 区の平坦面に検出された。規模は開口部で0.96×0.95m、頸部で0.98×0.90m、底部で1.25×1.14m、検出面からの深さは中央部で64cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形は頸部で狭く底部で広いフラスコ形を呈している。底面は平坦で堅



1. 褐色土 10YR 4/6
2. 明褐色土 7.5YR 5/6 礫含む
3. 明褐色土 7.5YR 5/6 炭化物微量
4. 赤褐色土 5YR 4/8
5. 褐色土 7.5YR 4/6 炭化物多量、土器片含む
6. 褐色土 7.5YR 4/3 炭化物微量
7. 明褐色土 7.5YR 5/6

第57図 III D-1 土坑 S=1/40



第58图 III D-1 土坑出土遗物

243~248 · 250 · 251 S = 1/3
 249 S = 2/3
 252 S = 1/2

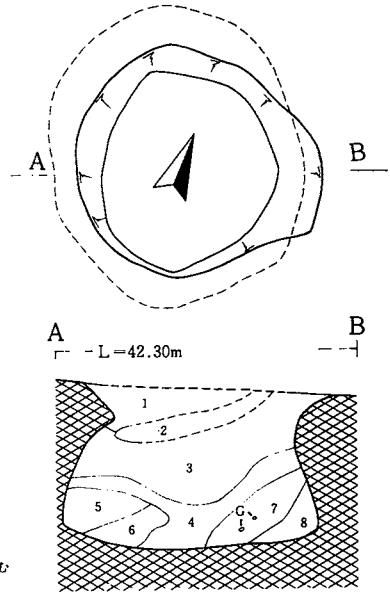
い。埋土は6層に細分される。1、5、6層が褐色土、2、3層が明褐色土、4層が赤褐色土であり、炭化物や小礫を含んでいる。特に3、5層には石皿や大型の礫が投げ捨てられていた。これらの土層の大半は人為的に投げ込まれたと考えられる。出土遺物は土器、石器が埋土中や床面から出土している。土器は何れも破片であり、243～248の6点が掲載できたものである。243は頸部から胴部にかけての破片と思われる。文様は粘土紐を貼り付けた隆帯で施文されるもので、横と縦にそれぞれ一条見られる。隆帯上は押し引き状の刻みが施文されている。縄文は原体LRが施文されている。244は深鉢の口縁部破片で、口縁は平坦のようである。文様は粘土紐の隆帯が1条縦位にあり、末端部には粘土瘤が付けられている。縄文は表面の剥落が著しいため不明である。245は小型の土器の破片と思われるもので、口縁部は平坦で文様は口縁部直下に半截竹管の内面を使用した沈線を巡らし、その中を上下から彫り去りされている。胴部には縄文はなく、半截竹管の内面を使用した沈線が斜位に施文されている。246は口縁部破片であるが、口縁を欠くものである。文様は沈線が2条見られるだけであり、縄文は表面が剥落して不明であり、綾繰りと見られるものが1条見られる。247は口縁部が外傾する深鉢の破片である。文様は横位に沈線と彫り去りによって施文されているが、表面が剥落しているため詳細については不明である。248は口縁部破片で、口縁が欠損している。文様は粘土紐の隆帯で区画文を施しているようであり、隆帯の上には刻みが付けられている。縄文は原体RLと思われるものが施文されている。胎土は何れの土器も砂粒が多く入り、表裏面とも剥落して脆い。これらの土器は中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。石器は不定形石器、磨石、叩き石、石皿が出土している。不定形石器は249の1点があり、縦長剥片の縁辺部分に調整剥離が見られるものである。磨石は250の1点であり、楕円形状の偏平な石の全面に磨痕が見られるもので一部が欠けている。叩き石は251の1点であり、棒状の石の縁辺部分に叩き痕が見られる。石皿は252の1点であり、大型の偏平な礫の片面を使用している。使用面は幾らか擦れて中央部が若干凹んでいる。

12、ⅢD-2土坑（第59図、60図、写真図版24、41）

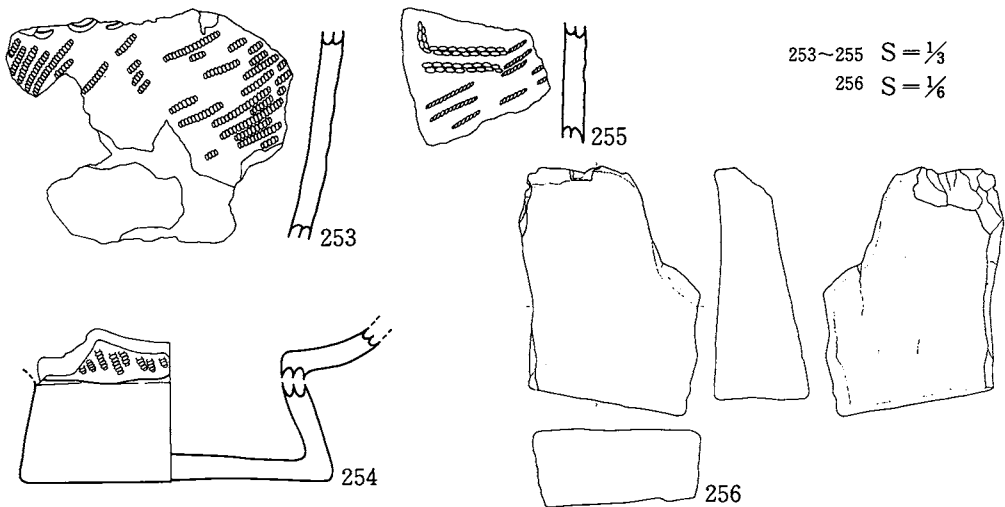
調査区ⅢD-18区の平坦面に検出された。規模は開口部で1.30×1.07m、頸部で0.94×1.04m、底部で1.32×1.58m、検出面からの深さは中央部で88cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形は頸部で狭く、底部で広いフラスコ形を呈している。底面は平坦で堅い。埋土は8層に細分され、1～4、7層が褐色土、5、6、8層が赤褐色土であり、炭化物や小礫を含んで、特に4層には炭化物が多量に入っていた。これらの土層は人為的に投げ込まれたと考えられる。出土遺物は土器、石器が埋土中から出土した。土器は253～255の3点である。253は深鉢の胴部破片で原体RLの縄文が施文され、一部に半円状と見られる沈線が施文

されている。254は膨らみをもった胴部の鉢に筒状の台を付した台付深鉢形土器の底部破片である。縄文は原体RLが胴下部まで施文され、台部分は無文である。255は深鉢胴部破片で2条の側面押圧縄文と原体LRの縄文が施文されている。胎土は253、255が表面が剥落して脆いが、254は比較的良い。この土器は縄文時代中期初頭で第Ⅱ群1類に属する。石器は256の石皿1点で、縁辺部が欠けている破損品である。表裏両面に使用面があり、磨り痕が僅かに認められ中央部が幾らか凹んでいる。

1. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物微量
2. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物微量
3. 褐色土 10YR 4/6 炭化物微量
4. 褐色土 7.5YR 4/3 炭化物多量
5. 赤褐色土 5YR 4/6 小石含む
6. 5層と同様
7. 褐色土 7.5YR 4/4 炭化物微量、小石含む
8. 5層と同様



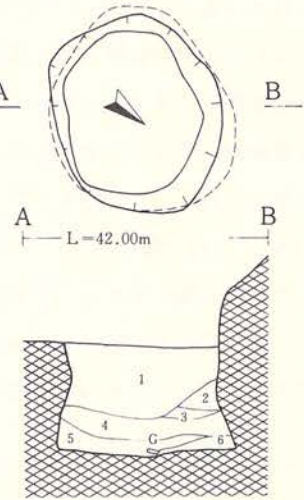
第59図 III D-2 土坑 S = 1/40



第60図 III D-2 土坑出土遺物

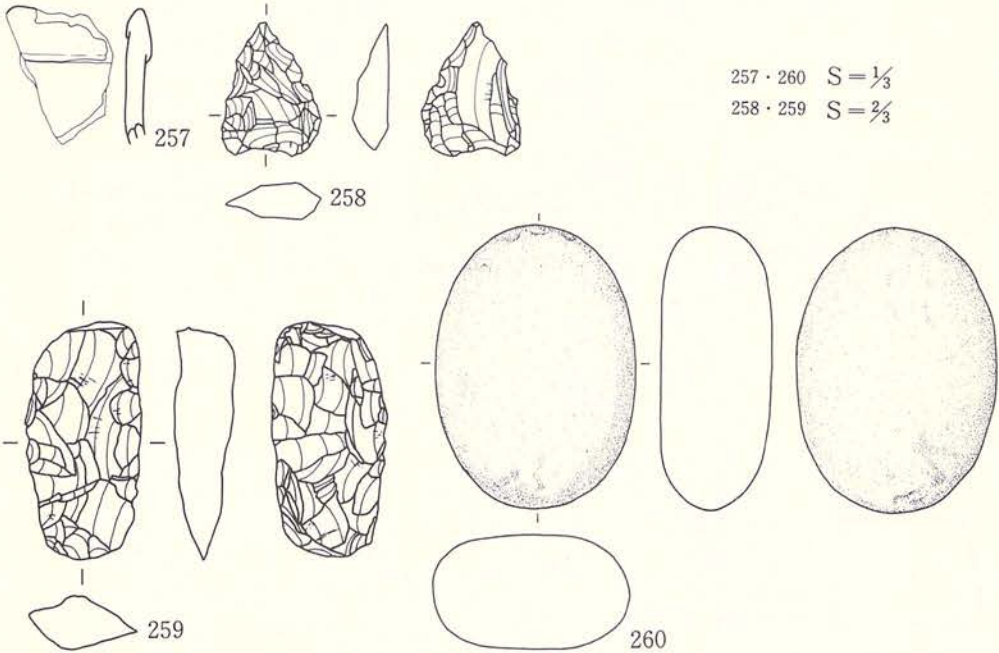
13、ⅢD-3土坑（第61、62図、写真図版24、41）

調査区ⅢD-14区でⅢD-4住居址に切られ、ⅢD-2住居址を切って検出された。規模は開口部で0.88×1.04m、頸部で0.72×0.84m、底部で0.96×1.06m、検出面からの深さは中央部で56cmである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形は頸部で狭く、底部で広いフラスコ形を呈している。底面は平坦で堅い。埋土は6層に細分され、1、3、5、6層が褐色土、2、4層が明褐色土であり、炭化物や小礫を含んでいる。これらの土層は人為的に投げ込まれたと考えられる。出土遺物は土器、石器が埋土中から出土している。土器は257の口縁部破片1点で、折り返し口縁状になっているものである。縄文等は表面が剥落していることから分からない。胎土は砂粒が入り脆い。この土器は縄文時代中期初頭と見られ、第Ⅱ群1類に属する。石器は石鏃、不定形石器、磨石が出土した。石鏃は258の1点で剥片の縁辺部に調整剥離を施し、基部は凹基状となっている。



第61図 ⅢD-3土坑 S=1/40

1. 褐色土	7.5YR 4/4	炭化物微量
2. 明褐色土	7.5YR 5/5	
3. 褐色土	7.5YR 4/4	
4. 明褐色土-褐色土	7.5YR 5/6-4/4	小石多量
5. 褐色土	7.5YR 4/4	炭化物微量
6. 褐色土	7.5YR 4/5	炭化物微量



257・260 S=1/3

258・259 S=2/3

第62図 ⅢD-3土坑出土遺物

不定形石器は259の1点である。剥片の表裏両面を剥離し、断面が菱形状で先端部と見られる部分は尖っている。磨石は260の1点で楕円形状の扁平な石の全面が磨石となっている。

3. 遺構外の遺物

縄文、弥生時代の土器、石器が出土している。ここには縄文時代の遺構以外の採掘跡や柱穴埋土中から出土した土器、石器も含めてある。

1. 縄文時代の土器（第63図、写真図版42）

縄文時代の土器は遺構内外から出土し、それらは2群に分けられる。Ⅰ群は縄文時代前期に、Ⅱ群は縄文時代中期に属する。遺構内出土のものにはⅠ群土器とⅡ群土器があり、その中でもⅡ群土器は中期初頭と末葉のものが出土しているが、遺構外からはⅠ群とⅡ群が出土し、Ⅱ群では中期初頭のものだけが出土している。

第Ⅰ群土器

縄文時代前期に比定されるもの2点が出土している。261は深鉢形土器の胴部破片と見られるものである。文様は原体LRを施文後に口縁部直下と頸部に相当する部分に半截竹管の内面を使用した2条一対の平行沈線を巡らし、沈線間に刻みを施文し、その沈線間に同様の工具で沈線を斜位や半円状に施文している。胎土は良好で内面にはミガキを施している。262は深鉢形土器の胴部破片で直前段反撚りの原体RRの縄文が施文されている。内面にはミガキが施される。胎土は261と同様良好である。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期初頭に属する一群である。器形は深鉢形土器と見られるが何れも破片のため正確な器形を特定できるものはない。施文方法から以下のように細分される。

A 隆帯と沈線を施文するもの

263～265、272の4点である。何れも口縁部破片であるが、265は口唇部を欠くものである。263は口唇部が角張り、外側に肥厚している。文様は口縁部直下から曲線状の隆帯文に沿って沈線を施文している。隆帯の上は押し引き状の刻みが見られ、一部には円形状の刺突が付されている。縄文は見られない。胎土は砂粒が多く、表面が剥落して脆いものである。264は口唇部が角張るもので、文様は口唇部直下に半截竹管の内面を利用した沈線を巡らし、その下位に隆帯が弧状に連続して施文されているようである。さらに、隆帯に沿って沈線が施文され、円形の沈線が数箇所施文されている。縄文は表面の剥落が著しいため良く判らないが、口唇部直下から施文されているようである。胎土は砂粒が多く脆い。265の文様は2本一対の隆帯を縦に施文し、沈線を横位に小波状に巡らしているようである。胎土は砂粒が多く入り脆い。272

は口縁部が平坦で数箇所に低い突起が付き、口唇部は丸みを呈し内面が僅かに肥厚している。文様は口縁部と頸部にあり、口縁部には突起部分で縦位の隆帯を付け数区画に分けられた部分に楕円形状等に隆帯を巡らし、隆帯沿いや楕円文の中に「X」字状の沈線を施文している。頸部には1条の沈線を巡らし、沈線下位に鋸歯状に短い沈線を巡らしている。縄文は頸部から下位に原体R Lと見られものが施文される。胎土は砂粒が多く入り、表面が剥落して脆い。

B 隆帯だけを施文するもの

266～268、273の4点である。何れも口縁部破片である。266は突起部分の破片と思われるもので、口唇部は丸みがある。文様は突起部分に円形の隆帯を付け、そこから2本の隆帯が縦位に付けられるようであり、円文の中を円錐形にくり抜き、同様に裏面にも見られる。縄文は見られない。胎土は砂粒が入り脆い。267は平坦な口縁で口唇部は角張っている。文様は口唇部に隆帯が付けられ、半円状の隆帯から縦位に2本の隆帯が施文されている。縄文はない。胎土は砂粒が入り、表裏面が剥落し脆い。268は平坦な口縁で口唇部は丸みがあるが、上部は微かな凹凸がある。文様は口縁部直下に隆帯を巡らし、隆帯の一部に特に盛り上がっている部分から隆帯が2本縦位に付けられているようである。隆帯の上は円形状の刺突が付けられ盛り上がっている部分では特に大きな刺突状となっている。縄文は見られない。胎土は砂粒が入り器表裏面が剥落して脆い。273は突起部分の口縁部破片で、突起を上から見ると菱形状となっている。文様は突起部分に半円状の隆帯を付け、その直下に1条の隆帯を横位に付けている。縄文はない。胎土は砂粒が入り脆い。

C 刻みと彫り去りを施文するもの

269の1点で、平縁と思われる口縁部の破片で口唇部には細かい刻みが見られる。文様は口縁部直下から施文され、半截竹管の工具によって沈線を数条横に引いた後に口縁部直下に三角形状の刻みを施文し、その下位から波線間に上下から交互に彫り去りを施し、残された部分が小波状の隆带状となるものと斜位の刻みを施すものが交互に施文されている。胎土は砂粒が入るが比較的良い。

D 縄文の地文に沈線を施文するもの

270の1点である。深鉢形土器の胴部破片で縦位の綾織り文と原体L Rの縄文が施文されている部分に半截竹管の内面を使った沈線が施文されているものである。胎土は比較的良い。

E 沈線と刻みを施文するもの

271、276の2点である。沈線沿いに棒や竹管によって刺突を施すもので、271は頸部で「く」字状に外傾し、口縁部は直立している。文様は口縁部に先の尖った棒状工具による刺突を巡らし、頸部には沈線が弧状に巡るようである。胎土は砂粒が入り脆い。276は沈線を横位に巡らし、それに沿って棒状工具で刺突が施文されるものである。縄文は見られない。胎土は砂粒が

入り脆い。

F 縄文の地文に隆帯、刺突、押圧縄文を施文するもの。

275の1点が見られる。胴部破片と見られるもので横と縦に沈線と隆帯を施文し、それに沿って刺突や側面押圧縄文原体Lが施文される。地文には原体LRと見られるものが施文されている。胎土は脆く、砂粒が多く見られる。

G 幅の狭い口縁部文様帯にだけ文様を施文するもの

277、278の2点である。何れも口縁部から底部にかけて狭くなる深鉢形土器の口縁部破片である。277は口唇部は平坦で口縁から頸部にかけて細い隆帯が縦位に見られ、頸部に相当する部分に1条の沈線を巡らしているものである。縄文は原体RLが口縁部から胴部にかけて施文している。内面にはミガキが見られる。胎土は脆い。278は口唇部が丸くなっているもので、斜位の刻みが口縁部を全周しているものである。頸部に相当する部分に沈線を1条巡らせている。縄文は原体LRを頸部より下位に施文している。表裏面は剥落しているが所々に炭化物が付着している。胎土は脆い。

H 無文地や縄文地に粘土粒を貼り付けているもの

274、279、280の3点である。274は口縁部破片で隆帯が弧状に1条みられ、その下位に粘土粒が1個貼り付けられている。表裏面とも剥落が著しい。胎土は脆い。279は深鉢形土器の口縁部破片で、2個連なった粘土粒が口唇部から下3cmの部分に付けられ、縄文と横位の綾繰り文が口縁直下から施文されている。縄文は原体LRが施文されている。表裏面は幾らか剥落している。胎土は脆い。280は折り返し口縁部分の破片で折り返し部分に粘土粒が付けられている。縄文は原体LRと思われるものが口縁部から施文されている。表面には炭化物が付着している。胎土は砂粒が入るもので脆い。

I 縄文だけが見られるもの

281、282の2点である。何れも平縁の口縁部破片であり、小さいため良く判らないが、H類と同様かも知れない。縄文は281が原体LR、282が原体RLを施文している。胎土は何れも砂粒が入り脆く、表面が剥落している。

以上のほかには283の上下とも欠けている土器か土製品か判らないものがある。表面には2条の平行する沈線を施文し、上下部分とも中央部が凹んでいる。胎土は砂粒が入り表面が脆く剥がれやすい。



第63図 遺構外出土遺物（縄文土器）

2. 弥生時代の土器（第64図、写真図版43）

弥生時代の土器は第Ⅴ群土器としたもので、出土地区は主にⅡC-1採掘跡の黒褐色土埋土中やその周辺から出土したものである。器形は鉢、高坏、甕、壺等のようであるが、破片が小さいことから全体形で捉えることができないものである。284は壺の口縁部破片と見られ、口縁部は外側に逆「く」字状になり、刻み列を巡らし、その直下の頸れ部分に沈線を1条施文しているものである。285は壺の口縁部破片で口唇上部に1条の沈線を施文し、口縁直下から半截竹管状の工具による2条一対の平行沈線による連弧文を5条施文し、その下位に1条の沈線が施文されている。286～302は鉢や高坏の破片と思われるもので、286は頸部がくびれ、口縁部が外反し、口縁は波状を呈するようである。文様は口縁部に沈線文、体部に沈線による変形工字文を施文している。287は口縁部が外反するもので、文様は貼瘤を有する変形工字文が施文されている。288～290は口縁部が外反し、頸部でくびれるもので文様は沈線によって施文されている。291は口唇部が丸く幾分内傾するもので、文様は平行沈線と刺突が施文されている。292は体部破片で2条の平行する沈線が施文されている。293～294は口縁部に平行沈線、その下位に原体LRの縄文が施文され、293で条が横走り、294は斜行している。295は平行沈線が施文されるが、縄文は見られない。296～302は高坏の脚部破片で、296が横位の平行沈線のみ施文され、297～302は2条ないし3条一組の横走る平行沈線と曲線文が施文される。300、301は胎土等から同一個体と思われる。303～315は甕の破片と見られる。303は口縁部がほぼ垂直で、305は口縁部が外反し頸部で締まる甕で、303、305とも口縁は小波状を呈し、口縁部はミガキを施して無文である。頸部から下位には原体LRの縄文が施文されている。304は頸部に1条の沈線が施文され、頸部から下位は条が横走る原体LRの縄文が施文されている。307は平縁の小形鉢の口縁部破片と思われるもので、原体LRの縄文が施文されている。306、308、309、311は胴部破片で何れも原体LRの縄文を施文している。301、312～315は底部や底部近くの破片で、314、315が燃糸文、他は原体RLの横走縄文が施文されている。胎土は何れも良い。また、甕形土器には炭化物の付着しているものがある。

3. 石器（第65～69図、写真図版44～46）

石器も土器と同様の出土状態を示し、弥生時代の石鏃1点以外はすべて縄文時代のものである。器種としては石鏃、石槍、石錐、不定形石器、石製品、凹石、磨石、打製石器、敲石、棒状石器である。

1. 石鏃（第65図、写真図版44）

石鏃は22点出土し、316～336が縄文時代のもので、337が弥生時代のものである。縄文時代



第64图 遺構外出土遺物 (弥生土器)

のものは基部形態から円基式、平基式、凹基式状に分かれ、円基式のものは316～319の4点である。剥片の表裏両面から調整加工が施され、断面形が台状ないし菱形状となり側縁も膨らんでいる。318は先端部が欠けている。平基式のものは320、321、331、332、334、336の6点である。そのうち、332、334が黒曜石製である。320、331が縁辺部分の両面にだけ調整加工を施し、334が片面の全面に調整加工を施している。他のものは表裏両面の全面に調整加工を施しているものであり、321、336が先端部や基部の一部が欠けている。凹基式状のものは322～330、333、335の11点で、内333、335が黒曜石製である。何れも表裏全面に調整加工を施し、側縁が直線的なものが322、323、325～328、333、335で何れも二等辺三角形状で、335は抉り部分で折れている。側縁が膨らんでいるものは324、329、330であり、324が五角形状、329、330が正三角形状で抉りが大きいものである。弥生時代のものは337の1点で先端部が欠けている。基部は平基式であるが両側縁から抉り込んで逆T字状となっている。石質は玉ずいである。

2. 石槍（第66図、写真図版44）

338の1点で、完形で中程でくびれ、基部は舌状に近いものである。細部調整が表裏表面から行われ、断面形は菱形状である。

3. 石錐（第66図、写真図版44）

339～342の4点が出土した。何れも頭部と錐部が明瞭に分かれる。339は完形で錐部は断面菱形状に作られている。340～342は錐部が欠損しているものである。

4. 不定形石器（第66、67図、写真図版44・45）

343～359の17点出土した。縦長や横長の剥片の縁辺に調整加工を施すものや、微細な剝離が見られるもので、343、344は刃部と見られる部分が鋸歯状になっている。345は表裏全面に調整加工を施している。353、359は玉ずい製の剥片の縁辺に調整加工を施し、片面は自然面である。

5. 石製品（第68図、写真図版45）

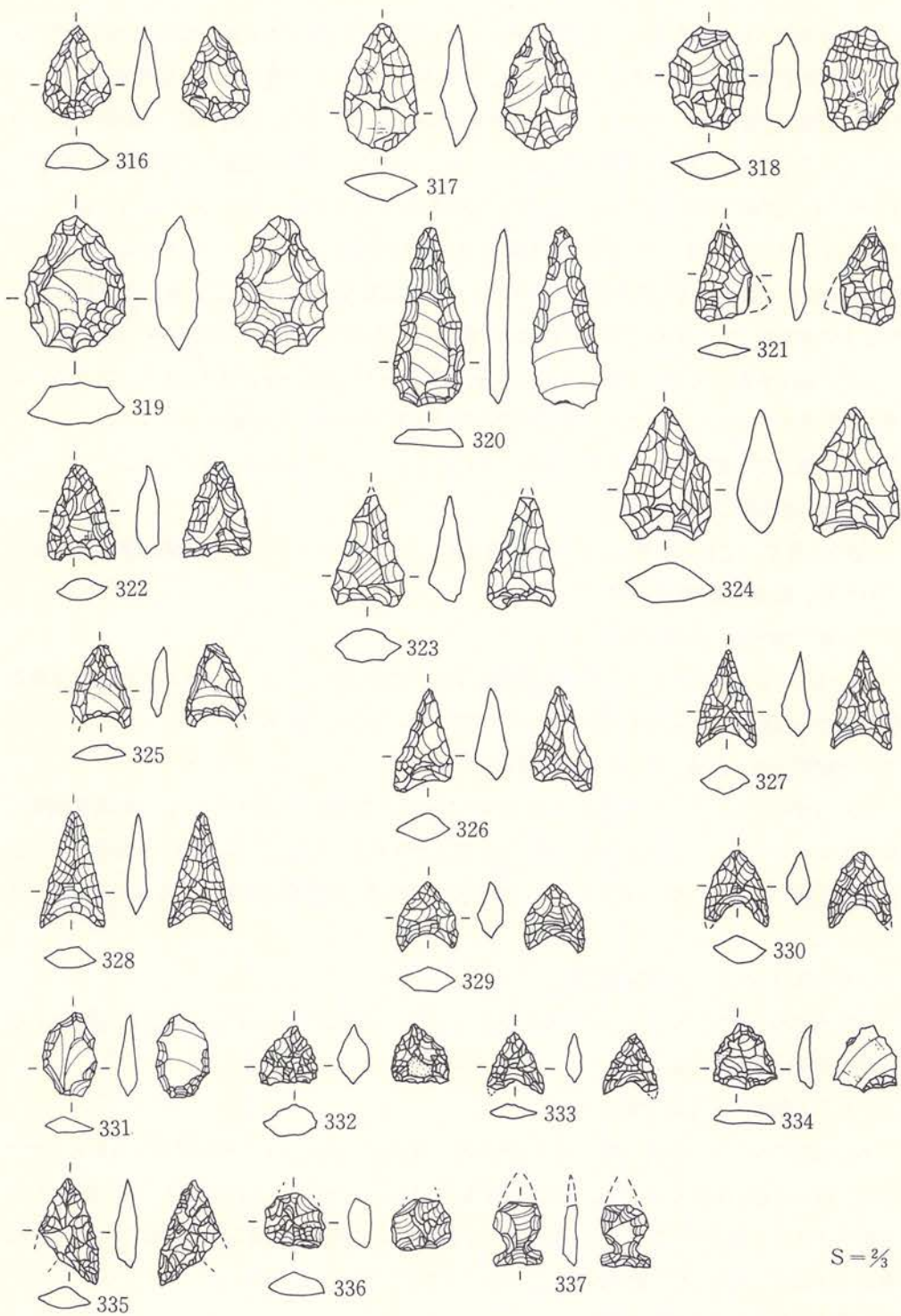
360、361の2点で、何れも粘板岩製である。360は三角形状に仕上げられ、361は円盤状に仕上げられているものである。

6. 凹石（第68図、写真図版45・46）

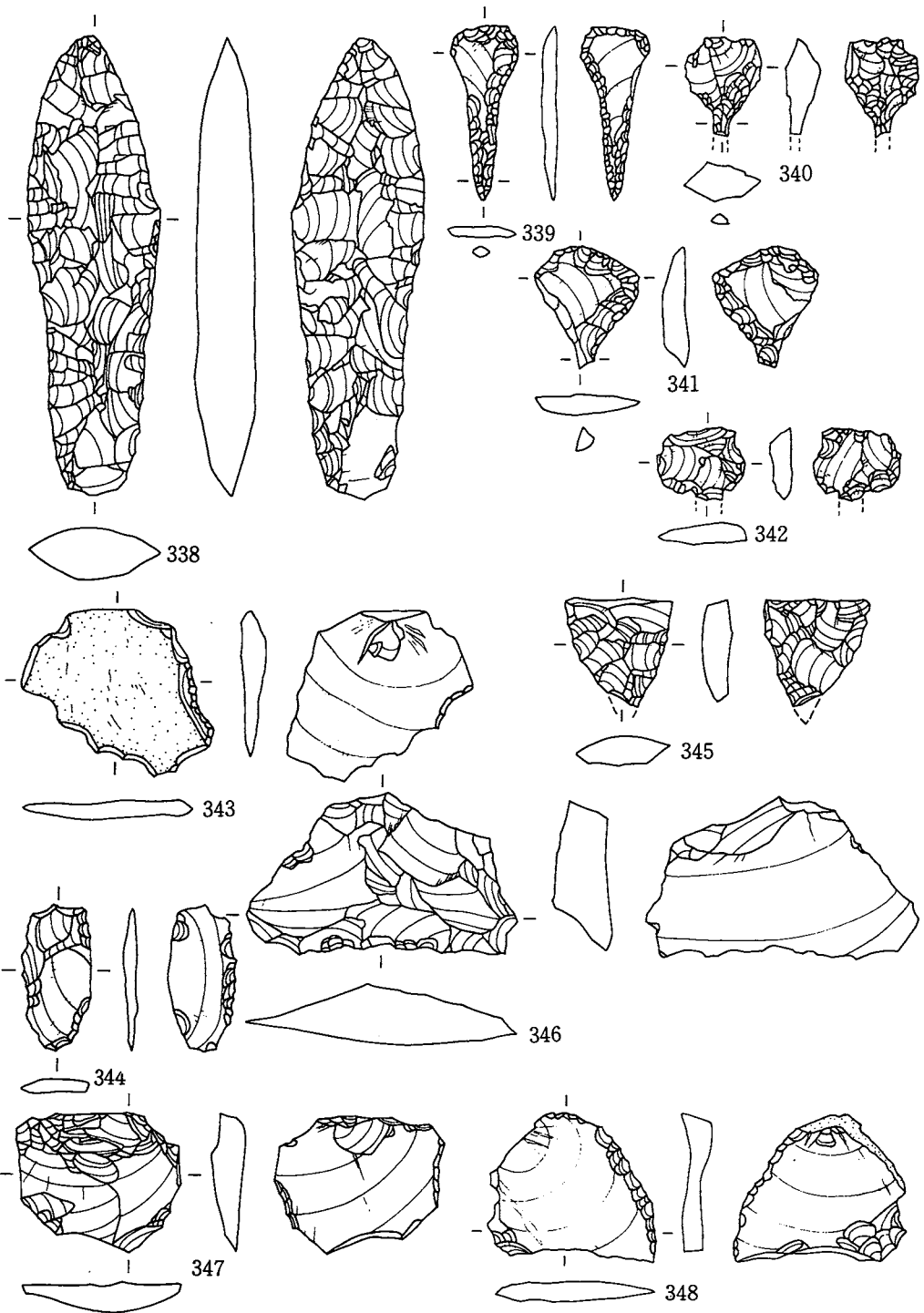
362～366の5点で、細長い棒状や円形状の礫の表裏面に敲打痕が一箇所以上見られるものである。凹みは逆円錐形状で、362は表面に3箇所、側面に1箇所、裏面に2箇所見られ、363は表面に7箇所、裏面に1箇所、364は表面に1箇所あり、表裏面は幾らか磨られている。365は表面に1箇所、366は下半部が欠損しているが表面に2箇所見られる。

7. 磨石（第69図、写真図版46）

367～372の6点である。367は欠損しているが棒状の全面を磨いている。368は断面三角形状

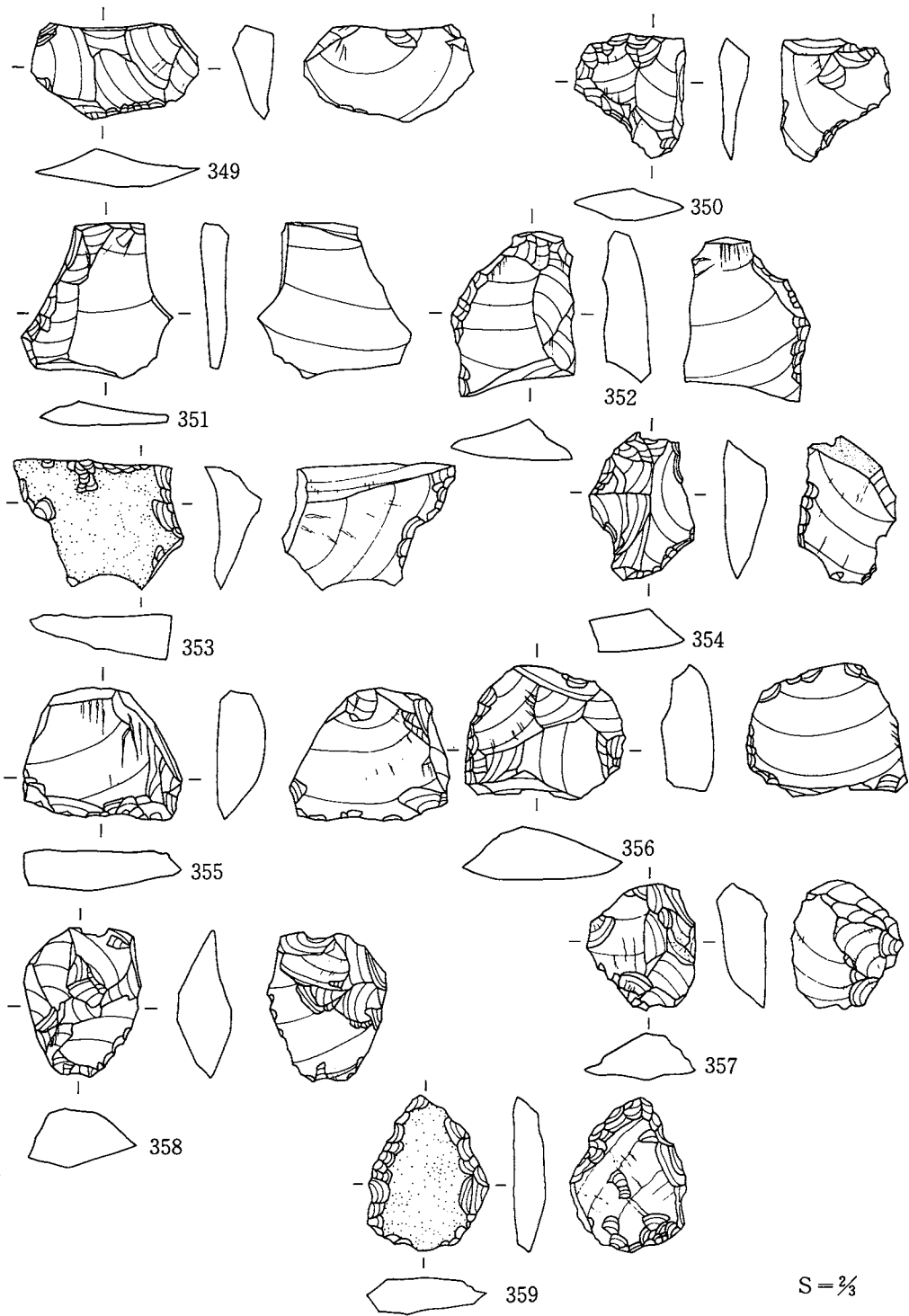


第65図 遺構外出土遺物（石器1）

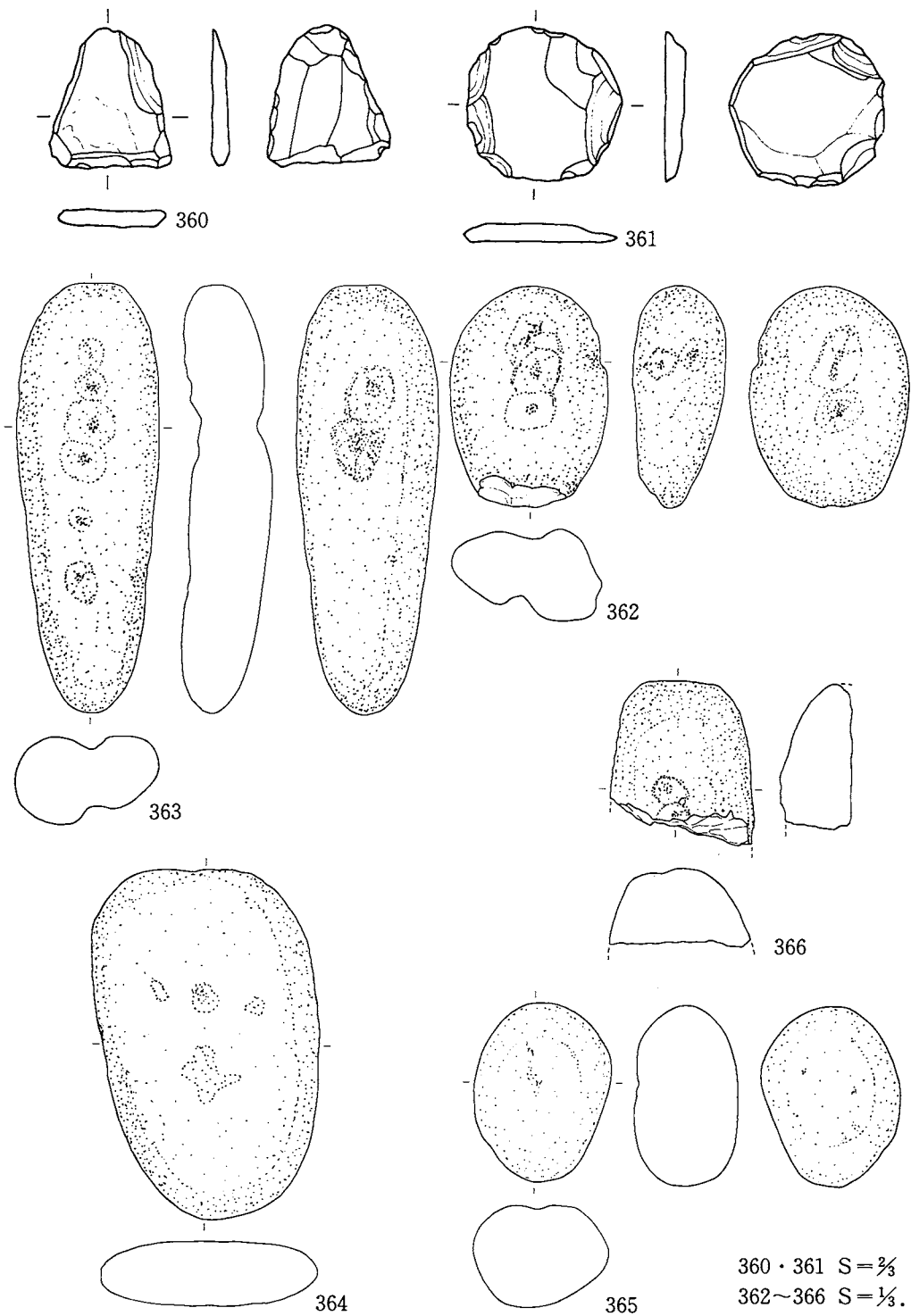


S = 2/3

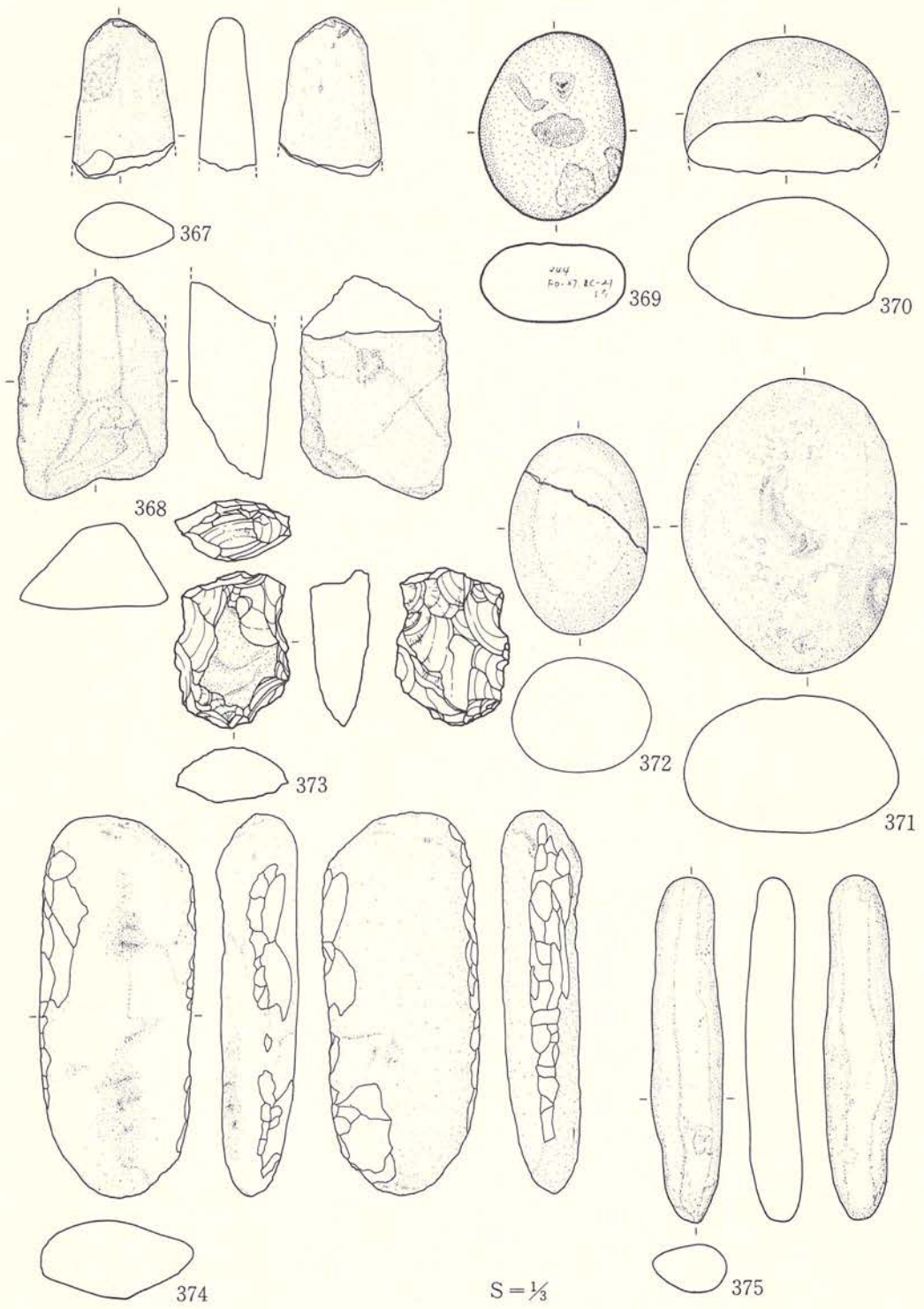
第66图 遺構外出土遺物 (石器2)



第67図 遺構外出土遺物（石器3）



第68図 遺構外出土遺物（石器4）



第69図 遺構外出土遺物 (石器 5)

の棒状のもので、稜の一部を磨り面としているものである。369～372は円形状の礫の全面に磨り痕が見られるものである。

8. 打製石器 (第69図、写真図版46)

373の1点で礫の表面を打ち欠いて石斧状に整えているもので、刃部と見られる部分は尖っている。

9. 敲石 (第69図、写真図版46)

374の1点で、偏平な石の両側縁に敲打による剥離が見られる。或は石器を作製途中のものかもしれない。

10. 棒状石器 (第69図、写真図版46)

375の1点である。細長い棒状の石の全面に擦り痕が見られ、特に先端部分が磨られている。

(3) 館以降の遺構と遺物

館が廃棄された後の遺構としては、採掘跡、集石、墓壇、土坑がある。これらに関する遺物としては陶磁器、古銭、鉄製品がある。

1. 採掘跡 (第70～72図、写真図版25)

採掘跡は調査区のはほぼ全域に13基検出されたが、西側の堀部分では何度かの掘り返しが行われているようで、正確な実数は掴めなかった。これらの採掘跡は露天掘りによって掘られている。規模は大半が調査区外に続いていることもあり、全体形として捉えることは出来ないが、直径6～10m前後、平面形は円形ないし楕円形状で、断面形は円筒状となるものとそれに出入口状の施設と見られる幅約2mの溝が付くものがあり、溝は掘り込み部に向かって緩やかに傾斜したスロープ状である。掘り込み部は地表面から6m程掘り下げたが、底面まで達せず、それ以上掘り下げるのは危険であることから掘り下げなかった。ⅢB-1採掘跡では6m下がった所から30cm大の石を入れて閉いでおり、その部分から下位に向かって広がっているようである。また、ⅡB-1採掘跡では地表面下4mの位置で、高さ1.60cm、幅1.50cmの坑道入り口が検出された。この坑道は若干落盤しているが、現在でも這って入れるほどの空間がある。坑道内部には坑木の跡は見られず、出入り口付近には石を積んでいる部分が見られ、坑道は枝分かれして一部閉じるために石を積んでいるような所もある。人が通れる部分では蛇行しながら約25m程入れるがまだ続くようである。この坑道はⅥ層中の礫層を掘り込んでいる。これら採掘跡の埋土は暗褐色土や褐色土、黒褐色土等で構成され、古館跡では何れも埋め戻されて平坦であるが、周辺の山にも見られ、それらは現在でも窪んでいる。

出土遺物は埋土中から縄文時代の土器、石器と弥生時代の土器が出土しているが、本遺構に直接関わるものとは考えられないことから2章の館以前の遺構と遺物の遺構外の出土遺物として扱った。この他には陶磁器の細片があるが、何れも実測図が取れる状態ではなく、近世末期から近代初頭にかけての製作窯等が不明のものが出土している。

2. 墓壙

墓壙は調査中に3基、調査以前に墓誌名が安永のものと明治2年の2基の計5基あった。墓誌名が判明しているものは改葬され、その際に実見したものでは人骨が一部残っており、副葬品として寛永通寶が伴っていた。調査中に検出したものは以下のものである。

Ⅱ B-1 墓壙 (写真図版26・47)

調査区Ⅱ B-17区のⅡ B-1 採掘跡の埋土中に検出された。この墓壙は上部に杉の大木の根があり、墓壙の輪郭や掘り込み面は攪乱のため掴めなかったが、人骨や古銭、煙管の検出状況から墓壙と判断したものである。人骨は頭骨や上肢骨等の一部が残っているだけであるが、屈葬のようである。古銭は4枚が一塊となって出土した。何れも寛永通寶であり、うち2枚が背

「文」の銘がある。煙管は火皿部分と吸い口部分が出土しているが腐食が進んでいた。

Ⅱ B-2 墓壙 (第75図、写真図版26・47)

調査区Ⅱ B-25区の平坦面に検出された。規模は開口部で1.00×1.04m、底面で0.52×0.54m、深さ65cmで平面形は円形状、断面形は円筒状を呈している。底面はほぼ平坦で、30cm程の方形の杉板材が貼り付いていた。埋土は2層に分かれ、1層は暗褐色土で層中には径40cm大の石が1個入っている。2層は黒褐色土で脂ぎった状態の土層である。出土遺物はない。

Ⅱ B-3 墓壙 (第76図、写真図版26)

調査区Ⅱ B-24、25区の平坦面に検出された。規模は開口部で0.80×0.86m、底面で0.50×0.50m、深さ55cmで平面形は円形状、断面形は円筒状を呈している。底面は平坦である。埋土は2層に分かれ、1層は暗褐色土で柔らかい。2層は有機質の黒褐色土である。出土遺物は寛永通寶が2枚と銭名の不明銭1枚が出土した。

3. 土坑 (第77図、写真図版26)

土坑はⅡ B-2 土坑としたものが、調査区Ⅱ B-25区で検出され、近くにはⅡ B-2、3 墓壙がある。規模は開口部で0.90×1.10m、底面で0.70×0.95m、深さ15cmで平面形は不整形で断面形は皿状である。底面は平坦であるが、木根によって攪乱されている。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物はない。この土坑は性格不明であり、埋土が墓壙の埋土と同一であることからほぼ同一時期のものと考えられる。

4. 集石（第73、74図、写真図版26）

集石としたものは調査区ⅡB区の掘部分で平場との裾部分の表土除去中に検出された。ⅡB-1、2集石とも明瞭な掘り込みはなく径10～30cm位の石が集められているものであり、石の下位には何ら検出されなかった。検出状況から畑の耕作の際に集められたものようである。

5. 遺構外出土遺物

ここで扱った遺物は表土除去中に検出した館以降の遺物と見られるものである。時代的には不明のものが多し。出土した遺物は古銭、煙管、小刀、鉄製品である。

古銭（写真図版47、48）

古銭は6枚出土した。何れも鉄銭で腐食が著しいが銭貨銘を判読できるものがあり、387、388が仙台通宝、389は寛永通寶である。

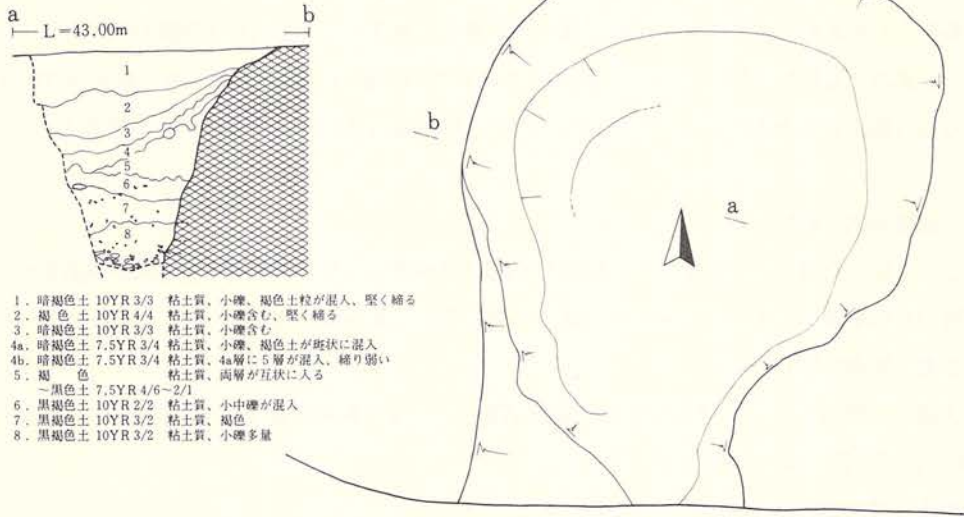
煙管（写真図版48）

391の1点で胴製の煙管の雁首部分で比較的大きな火皿がついている。

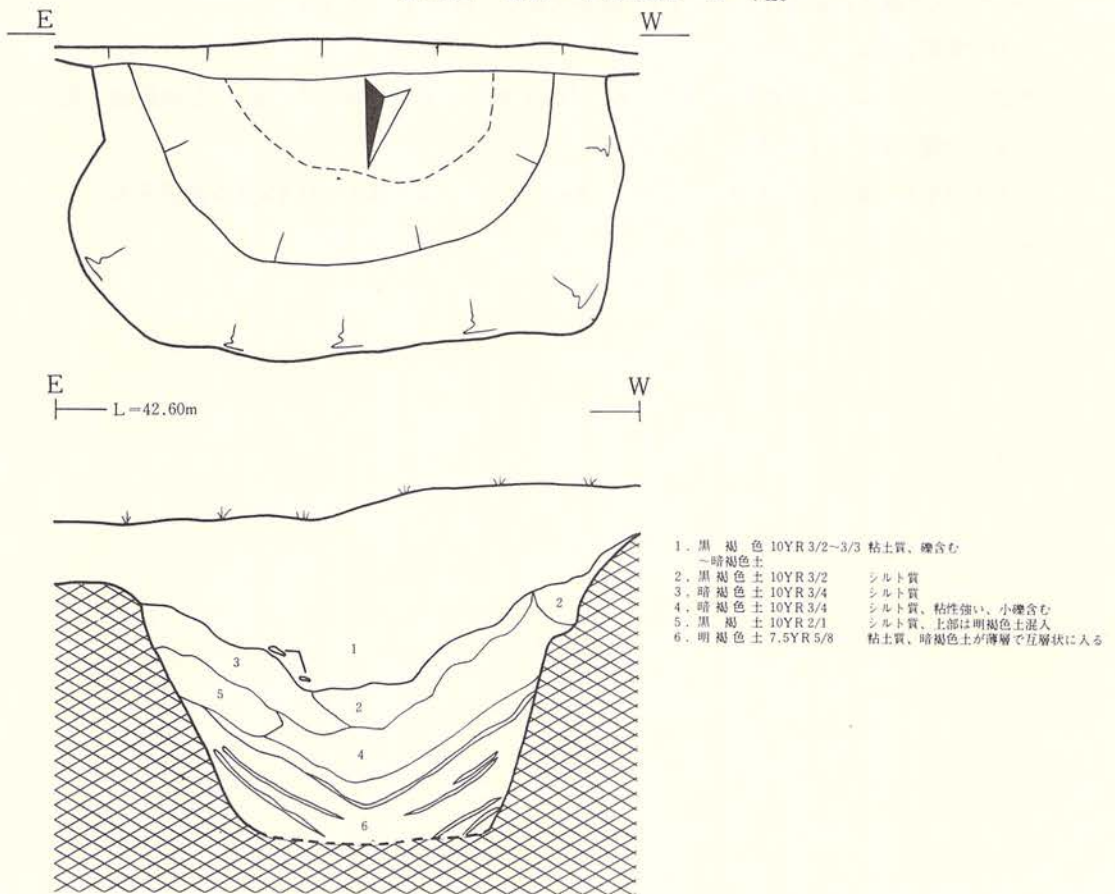
小刀（写真図版48）

2点出土した。392は現存長7.5cmであり、刀先と柄の一部が欠損している。393は腐食が著しいもので現存長は6cmである。

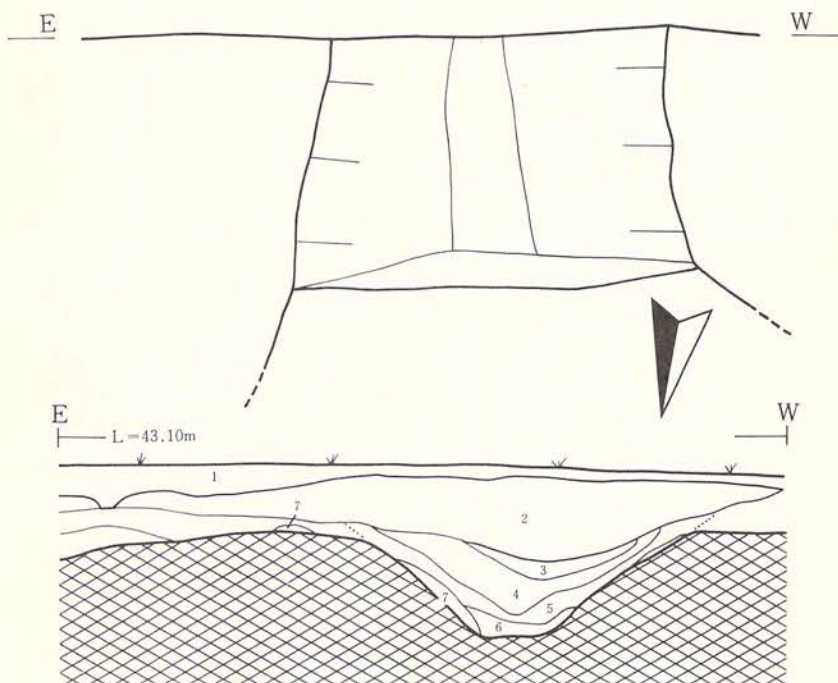
以上のほかには締め金具と思われる395、396と鉄鍋の一部と考えられる394の鉄片が出土している。



第70図 III B-1 採掘跡 $S = \frac{1}{120}$

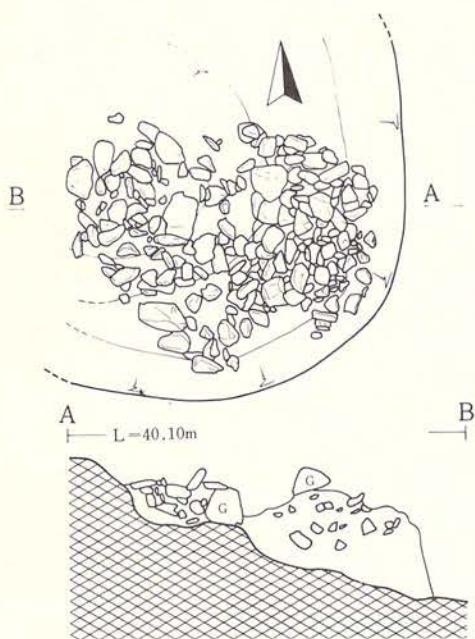


第71図 III D-1 採掘跡 $S = \frac{1}{60}$

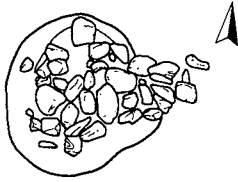


第72図 III D-2 採掘跡 $S = \frac{1}{60}$

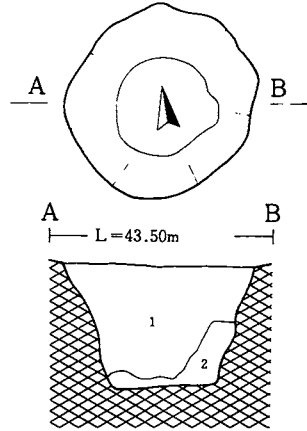
1. 褐色土 10YR 4/4 小礫混じる
2. 明褐色土 7.5YR 5/6 堅く締る、暗褐色土ブロック状、礫多量
3. 暗褐色土 10YR 3/4 明褐色土がブロック状
4. 褐色土 7.5YR 4/6 堅く締る
5. 暗褐色土 10YR 3/4 炭化物、小礫混じる
6. 明褐色土 7.5YR 5/6
7. 掘り過ぎ部分



第73図 II B-1 集石 $S = \frac{1}{40}$

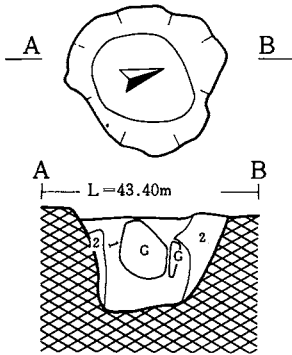


第74図 II B-2 集石 S=1/40



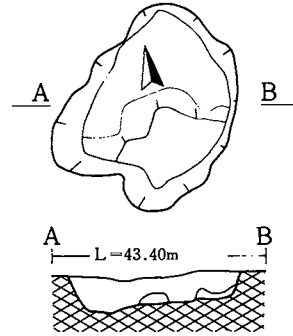
第75図 II B-2 墓塚 S=1/40

1. 黒褐色土(斜線部)
2. 褐色土が混入



第76図 II B-3 墓塚 S=1/40

1. 暗褐色土 10YR 3/3
2. 暗褐色土 10YR 3/3-4/6
~ 褐色土



第77図 II B-2 土坑 S=1/40

1. 暗褐色土 10YR 3/3 粘土質
2. 褐色土 10YR 4/6 粘土質

2. まとめ

古館跡遺跡の調査内容について今まで記述したとおりであるが、ここでは遺構、遺物について若干の考察をしてまとめとする。

1. 古館跡について

古館跡は南側に延びた東西150mの幅がある舌状に張り出した尾根を利用したもので、北側のもっともくびれている部分を東西に掘り切ることによって人工の独立部を造り出している館である。館を見ると北側に東西方向に堀を一条巡らし、東側と西側は自然の沢を利用し、南側は尾根の先端までを利用している。このような形態は中世城郭に見られる天嶮利用によって築城される占地形態に類似しているが、人工的に地形を変えている部分は堀と頂部の平地、それを取り巻くように造られた犬走り状の平地であり、南側に2段、東側に5段見られるが、自然地形を極端に改変しているものではないし、特に東側にある5段の平地の中で幅の狭い段などは後に作られた山道の可能性もある。また、建築物としては今回の調査区で見ると館の主要部分である頂部の平地が主な調査対象区であるが、建物跡2棟と柱穴群2箇所が検出された。しかも柱穴群については縄文時代の可能性があることから当館に関係すると思われる建物跡は建築物跡の2棟であり、ⅢC-1建物は大半が調査区外にあってその全容は明らかに出来ないが、棟を北東-南西方向とした北西側に庇をもつ建物であり、ⅢC-2建物は方形状の建物である。これらの建物は館の在り方から見れば建物配置に規則性が見られないことから果たして館に伴うか疑問のものである。しかも館全体も館廃棄後に金を採掘したであろう採掘坑や南側は東日本旅客鉄道大船渡線によって一部削られ原形が損なわれている。

以上、積極的に館として押し進めるだけの根拠のある遺構、遺物は検出されなかったが、当館について考えてみると、当館は尾根の頸れた部分を掘り切ることによって独立した部分を作り出すことによって館として機能するようになっているが、調査区で見ると建築物は2棟と極端に少ないことや出土遺物も極僅かであることから常時使用したものでないと考えられるし永続的に使われたとすると居館は調査区外の鉄道によって削られた部分にその中心があるものと考えられるが、館主等に関する古文書等の記録がないことから館の存続期間は短いものと思われる。この館は矢作地区に26箇所ある一連の館の一つと見られ矢作川沿いに発達した今泉街道の押さえとして、しかも宮城県北から岩手県南の沿岸部のいわゆる気仙郡一帯は古くから金の産出地として知られている地区であることから、金の利権に関わる領地争いやそれに関わる私闘等によって築城されたと考えられ、この付近一帯を押さえていた葛西氏やその配下である矢作氏の滅亡と共に廃城に至ったと見られる。その時代も少ない出土遺物から見ると16世紀の末頃と考えられる。

2. 館以前の遺構と遺物

館が造られる以前の遺構と遺物は、縄文時代の遺構と遺物、弥生時代の遺物がある。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、住居址、住居址状遺構、土坑がある。

1. 住居址

住居址は建て替え、拡張分も考えると、ⅡD-1、ⅡE-1、ⅢD-1、2a、2b、3a、3b、4住居址の8棟が検出された。検出された地区は調査区の中央より東側部分で南北に長く検出され、住居址間の重複は建て替え、拡張を除くと、ⅢD-2、4住居址で、ⅢD-4住居址がⅢD-2住居址を切っている。建て替え、拡張はⅢD-2、3住居址にあり、いずれも拡張している。また、ⅢD-2、4住居址は調査区外に延びているため多くは分からない。平面形はⅢD-2住居址が方形ないし長方形を呈しているようであるが、調査区外に住居の大半があると思われるため詳細は分からない。他の住居は何れも円形を基調としているが、ⅡE-1住居址は隅丸方形、ⅢD-3住居址が多角形状を呈している。

規模はⅢD-2住居址が東西辺5.50mであり、ⅡD-1、ⅢD-1、3a住居址が5m前後、ⅡE-1、ⅢD-3b住居址が6m前後である。

柱穴は全部の住居址から検出出来た。ⅢD-2住居址が壁に沿って大小合わせて11本検出されたが、柱配置は分からない。ⅡD-1住居址は方形に4本配置され、西側の2本が壁に寄っている。ⅡE-1住居址は方形に配置される4本の柱と炉1の前庭部の両脇の2本と炉2の近くにある2本の計8本でほぼ等間隔に構成されている。この住居址の柱は柱穴の底面に柱痕跡があり、それから見ると2回以上の柱の据え替えが行われているようである。ⅢD-1住居址は5角形状に等間隔で5本検出され、西側の2本は西壁に寄っている。ⅢD-3a住居址は14本検出され、南側の2本が床面上に検出されたが、残りの12本は周溝内から検出された。柱配置は4本を基調としたものようである。ⅢD-3b住居址は14本検出され、壁際の8本を除いた6本が支柱穴である。但し、この住居はⅢD-3a住居を拡張したものであり、そのまま柱を利用している。ⅢD-4住居址は2本検出されたが、柱配置は不明である。以上のことから、ⅢD-2住居址を除いた他の住居址は柱配置が4、5、6、8本のものであるが、いずれも柱穴の状況から4本を基調としているようである。また、住居が大きいものほど柱の数も多くなっている。

炉はⅢD-2住居址が形態が不明である。他の住居址は何れも複式炉であり、土器埋設石囲い部、石囲い部、前庭部からなるもので、平面形態は概ね長方形である。前庭部が住居の壁まで達し、「ハ」字状に見られるものはⅢD-3a住居址1棟であり、他の住居址では何れも前庭部は長方形となり住居の壁まで達していない。また、ⅡE-1住居址では複式炉の延長

線上に長方形の石囲い炉、ⅢD-3b住居址では複式炉の長軸線上よりやや南側に土器埋設炉がそれぞれ設けられ、使用頻度が高いためか床面やその周辺等が良く焼けていた。複式炉の作られる位置は住居のほぼ中央付近でもやや東ないし東南側の偏った位置であり、長軸方向は東側に向くもの（ⅡD-1住居址、ⅢD-3住居址）と東南側に向くもの（ⅡE-1住居址、ⅢD-1住居址）とがある。

住居址の時期はⅢD-2住居址が出土遺物から縄文時代前期末～中期初頭に位置づけられ、ⅡD-1、ⅡE-1、ⅢD-1、3、4の住居址が出土遺物や炉の形態等から縄文時代中期末葉に位置づけられ、さらに炉の長軸方向が東側にあるものと東南側にあるものとに分けられるが時期的なものは分からなかった。

2. 住居址状遺構

住居址状遺構は調査区の北側に1棟、南側に2棟の計3棟が検出された。いずれも調査区境界付近から検出され、しかも壁や炉、柱穴等を明瞭に捉えることが出来ないことから表記の名称にしたものである。ⅡC-1住居址状遺構は平面形は良く分からないが、柱穴が6本検出され、ⅢD-1、2住居址状遺構は平面形が円形状である。これら遺構の時期はⅡC-1住居址状遺構とⅢD-2住居址状遺構が伴出される遺物から縄文時代中期初頭頃と考えられる。

3. 土坑

調査区の北側と南側で東西に並んで北側に10基、南側に3基検出された。平面形は円形状と楕円形状、断面形はフラスコ形9基、ピーカ形1基、皿形3基で平面が楕円形のは断面形が皿形のものである。規模は開口部で直径150cm前後と100cm前後、深さはフラスコ形のⅡC-1土坑の108cmがもっとも深く、皿形のⅡD-4土坑の17cmがもっとも浅いもので、総じて小型のものが多い。遺物はⅡD-3土坑以外の土坑から出土している。出土状態は何れも投げ込まれたもので、特にⅡD-3土坑が多かった。土坑の機能としては貯蔵穴として使用され、必要がなくなると不用物の捨場として使われたと考えられる。これら土坑の時期は出土遺物やⅡC-1住居址状遺構、ⅢD-2、4住居址の重複関係等から縄文時代中期初頭頃に構築されたと考えられる。

4. 遺構の占地について

調査区において検出された遺構は、住居址8棟、住居址状遺構3棟、土坑13基で遺構の時期は住居址では前期末葉から中期末葉のもの1棟、中期末葉のもの7棟、住居址状遺構は中期初頭と思われる3棟、土坑は中期初頭のもの13基であり、これら遺構はそれぞれ地点を異にしているが舌状に張り出した丘陵の縁辺部に沿って構築され、丘陵の中央部分には遺構が構築されていない。以上のことから、館に伴うであろうとした柱穴群を縄文時代のものとした場合を含めても、検出された遺構が各時代によって構築されている場所が異なるが、本遺跡は「広場」

を有する「環状集落」を呈している可能性があり、時代を異にしても「場」の使い方に社会的規制があったことが伺われる。岩手県内では本遺跡例とは集落の構造、時代、性格、規模とも異なるが広場ないし広場状の空間を有する遺跡として、紫波町西田遺跡、大迫町観音堂遺跡、松尾村長者屋敷遺跡が上げられ、西田遺跡では大木8 b式頃の環状集落を呈し、広場部分には長方形柱穴列や墓墳群が密集して見られる。観音堂遺跡では規模の大きな台地の縁辺に大木10式～後期初頭頃の馬蹄形ないし環状の集落を呈し、台地の中央部は広場としている可能性のある遺跡である。長者屋敷遺跡は大木9、10式頃の住居址だけが地点を変えて構築され、小さな台地に狭い広場状の空間が見られる遺跡である。

5. 遺物

出土した遺物は土器、石器等で、遺構外からの出土は少なく、多くは遺構内の埋土中からの出土である。

土器

土器は縄文時代前期末葉と中期初頭、中期末葉のものが出土している。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器としたものは縄文時代前期の大木6式に位置づけられる。ⅢD-2住居址の埋土中(103)からと遺構外(261、262)から出土している。器形は103の土器でみると口縁部が外反して頸部で締め、胴上部で膨らみそこから底部に向かってすぼまる器形のものである。文様は口縁部と胴上半に施文されるようであり、頸部と胴部の最大径付近に半截した竹管で隆帯の上などに刻みを施し、口縁部と胴上半部には細い沈線を半円状や斜位に施文している。

第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器としたものは縄文時代中期に位置づけられ、1類中期初頭と2類中期末葉に分けられる。

1類

1類は中期初頭に位置づけられ、更に細分できる。但し破片が主であり、しかも土器表面の剥落が著しいことからはっきりと捉えられないものが多い。

A：大木7 a式に相当するものである。ⅢD-2住居址(104～107)、ⅡD-6土坑(237～240)、ⅢD-1土坑(243～248)、ⅢD-2土坑(253～255)の埋土中と遺構外(265～269、273、274、279、280)から出土している。器形はいずれも深鉢形土器と思われ、口縁部は外反し、胴部は筒状のものようである。また、台状の脚が付くものもあるようである。文様は平行沈線間に刻みを密に施文するものや三角形の刻みを上下から或は交互に施文するもの、太い隆帯を付け、その上に刻みや刺突を施文するもの等がある。地文は縄文、綾織り文であり、綾織りは横位に施される。

B：大木7 b式に相当するものである。ⅡC-1住居址状遺構（148～151）、ⅢC-2住居址状遺構（197）、ⅠD-1土坑（198～200）、ⅠD-2土坑（202～204）、ⅠD-3土坑（205～216）、ⅠE-1土坑（219、220）、ⅡC-1土坑（221～224）、ⅡC-2土坑（227）の埋土中とⅢD-3住居址の壁際柱穴埋土上部（122）それに遺構外（263、264、270～273、275、276～278、281、282）から出土している。器形は深鉢形と浅鉢形がある。深鉢形土器では口縁部が平縁、波状口縁のものがあり、口縁部と体部が明瞭に区別されないものと口縁が複合口縁状になるものがある。浅鉢は口縁部が平縁のもの和小波状のものがあり、上から見ると方形状になるものがある。文様は棒状工具による沈線や斜位の刻みと刺突、細い隆帯、隆帯に沿って付けられる沈線や側面押圧縄文等である。これらは口縁部に施文されるものが多く、まれに粘土隆帯が体部に及ぶものもある。地文は縄文、綾織り文であり、綾織りは横位に施文されるものが多い。

C：円筒上層b式に相当するもの。ⅠE-1土坑（218）の1点が大木7 b式土器と共伴して出土している。深鉢形土器で口縁部は4個の扇状突起を持つもので、文様は口縁部から頸部にかけて粘土隆帯を縦位と横位に貼り付け、文様を4単位に割り付け、隆帯の上や隆帯間に縄文の側面を押した爪形状の刻みが付けられている。縄文は頸部から体部に付けられている。

2類

2類は縄文時代中期末葉の大木10式に位置づけられる。ⅡD-1、ⅡE-1、ⅢD-1、3住居址の埋土中や炉の埋設土器として使用されたものである。遺構外からは1片も出土していない。器形は深鉢形で、文様は隆帯を曲線的に配したもので、口縁部や隆帯に区画された中が磨り消されている。隆帯は顕著に表れず、断面三角形状となっている。他には小形土器がⅡE-1住居址の柱穴埋土から出土している。文様は沈線を曲線的に配したもので区画された中を磨り消し、頸部に相当する位置に刺突が巡っている。大迫町観音堂遺跡の第3群土器3類に近いものであろう。

石器

石器は233点が遺構内外から出土しているが、その多くは遺構の埋土中からである。石器種は石鏃、石錐、石匙、石槍、削搔器類等の剥片石器と石斧、磨石、凹石、砥石、石棒、石剣、石皿等の礫石器である。その中で剥片石器は全体の65%を占め、剥片石器の中で石鏃は56%と石鏃の出土が特に多いのが目に付いた。石材は泥岩、砂岩、閃緑岩、粘板岩、チャート、玉ずい、流紋岩、黒曜石等の石質で、これら石質は石器種によって使い分けられているようである。また、本遺跡では黒曜石のものでは石鏃など小型の製品21点と剥片が出土している。また、石器以外ではフレーク、チップ等が出土していることから、本遺跡でも石器製作に伴う台石、叩き石等の道具が検出されていないが石器を作っていたと考えられ、なかでも黒曜石の産地分析

をした結果、かなり広範囲な地域から石材を集めていることが分かった。分析結果については鑑定分析の項に掲載している。

(2) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は土器が主であり、石器はアメリカ式石鏃1点が出土しているだけである。土器は第Ⅴ群としたものでⅡC-1採掘跡の埋土中やその周辺から出土したもの(284~315)とⅡC-1住居址状遺構の埋土中出土のもの(152~155)であるが、何れも破片である。器形は甕、壺、鉢、高坏等のようなものである。文様等から以下のように細分できる。

1類

284、285は何れも壺の口縁部破片であり、284は口縁部に刻みを巡らし、その直下の頸れ部分に1条の沈線を施文している。285は口縁部に2条1対の連弧文を5条施文してあるもので、頸部に1条、口唇部に1条の沈線を巡らしている。いずれも竹状の施文具であり、沈線は細い。破片のため器形や文様も明確に捉えられないが、刻みや連弧文等の文様の特徴から常盤式土器に相当するものであろう。

2類

286~315、152~155のもので、器形は、甕(303~315、155)、鉢(286~295、152~154)、高坏(296~302)である。文様は鉢では変形工字文を主体としたものが多い中に、287は瘤を有する変形工字文のもの、291は刺突文のものがそれぞれ1点ずつである。高坏では脚部のみであり、2条ないし3条の平行する沈線が施文されている。甕は口縁部が小波状となるもので口縁部はミガキを施して無文とし、体部には横走る縄文や捺糸文が施文されている。文様や施文などの特徴から陸前高田市中沢浜貝塚第Ⅴ群土器や、八起島式土器に相当するものであろう。

3. 館以降の遺構

館が廃棄された後の遺構としては、採掘跡と墓塚、集石、土坑があるが、ここでは採掘跡について若干述べることにする。

採掘跡は今回の一連の調査で打越遺跡、東角地遺跡でも検出され、本遺跡でも13箇所以上あることが確認された。採掘跡の規模は直径6~9m前後、深さ6m以上であり、ⅡB-1採掘跡では露天掘り以外に坑道が確認され、礫層を掘り込んでいる。埋土は暗褐色土、褐色土、黒褐色土等の再堆積層である。この採掘の目的については、打越遺跡で石英礫等を分析しており、それによれば金の採掘が試みられた可能性が指摘されているし、打越遺跡のまとめで述べているように、気仙地方が古来から産金地帯として知られており、周辺にも16世紀から17世紀頃まで賑わいを見せていたようである雪沢、玉山等の金山が点在していることから、本遺跡でも金

採掘の為の諸道具が見つかっていないが、雪沢、玉山金山等の一連の山体であることから金の採掘を試みた可能性が高いと考えられる。また、このような採掘跡と考えられる窪地が遺跡周辺の山地にも多く見られる。本遺跡での採掘跡の年代としては、館や採掘跡の埋土を掘り込んで作られている寛永通寶を伴うⅡB-1墓塚から、開始年代は館が廃棄された後、恐らく16世紀後半からで17世紀の初頭には廃止されたと考えられる。

《参考文献》

- | | | |
|----------------|-----------------|---|
| 相原康二他 | 1982年 | 「鳩岡崎遺跡」 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X V-1、2
岩手県文化財調査報告書第70集 岩手県教育委員会 |
| 稲野裕介他 | 1983年 | 「滝ノ沢遺跡」 北上市文化財調査報告書第33集 |
| 岩手県教育委員会 | 1986年 | 「岩手県中世城館跡分布調査報告書」 岩手県文化財調査報告書第82集 |
| 及川 洵他 | 1979年 | 「大陽台貝塚」 陸前高田市教育委員会 |
| 小田野哲憲 | 1977年 | 「八起島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関教育委員会 |
| 小岩末治 | 1963年 | 「岩手県史」第4巻 岩手県 |
| 佐々木嘉直他 | 1987年 | 「和光6区遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集 |
| 佐々木勝他 | 1980年 | 「西田遺跡」 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 岩手県文化財調査報告書第51集 岩手県教育委員会 |
| 佐藤正彦他 | 1987年 | 「中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅲ」 陸前高田市文化財報告第11集 |
| 佐藤正彦 | 1985年 | 「貝畑貝塚発掘調査概報」 陸前高田市文化財報告第8集 |
| 佐原 真編 | 1983年 | 「弥生式土器Ⅱ」 ニュー・サイエンス社 |
| 高橋文夫
・三浦謙一他 | 1980・1981・1984年 | 「松尾村長者屋敷遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第12、20集 |
| 中村良幸 | 1986年 | 「観音堂遺跡」 大迫町教育委員会 |
| 林 謙作 | 1976年 | 「大船渡市清水貝塚発掘調査概報」 岩手県文化財愛護協会 |
| 三浦謙一他 | 1978・1983年 | 「湯沢遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第2、66集 |

石器一覽表(1)

No.	図版番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考
1	12	ⅡD-1住Q3埋土	石鏃	1.2	1.1	0.3	0.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
2	13	ⅡD-1住Q2埋土	石鏃	1.8	1.7	0.5	1.2	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統	
3	14	ⅡD-1住埋土	石錐	2.8	1.6	0.4	1.0	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
4	15	ⅡD-1住Q2埋土	石錐	2.8	1.0	0.5	0.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
5	16	ⅡD-1住埋土	石錐	3.8	2.0	0.8	4.2	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
6	17	ⅡD-1住No.6柱穴埋土	不定形石器	1.8	2.1	0.4	1.4	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	石匙の破損品か
7	18	ⅡD-1住埋土	不定形石器	6.5	3.3	1.0	24.3	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
8	19	ⅡD-1住Q1Q2埋土	不定形石器	5.1	3.4	0.7	15.8	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
9	20	ⅡD-1住埋土	不定形石器	4.3	2.7	1.0	10.2	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
10	21	ⅡD-1住埋土	不定形石器	3.2	3.1	0.8	7.8	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
11	22	ⅡD-1住Q1床直	凹石	20.0	7.0	5.7	1320	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
12	23	ⅡD-1住柱穴内埋土	燧器	9.8	10.2	3.4	600	凝灰質粘板岩	北上山地	古生界	
13	24	ⅡD-1住炉埋土	砥石	12.0	5.4	3.1	165	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
14	25	ⅡD-1住炉埋土	砥石	10.8	3.8	2.3	95	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
15	26	ⅡD-1住埋土	磨石	10.1	9.2	6.7	890	硬砂岩	北上山地	古生界	
16	27	ⅡD-1住床面上Q4	磨石	9.3	8.5	5.7	563	閃緑岩	北上山地	中生界	
17	28	ⅡD-1住Q3埋土	磨石	10.2	6.8	4.6	490	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	
18	29	ⅡD-1住Q2埋土	磨石	15.7	8.4	6.7	1330	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	
19	30	ⅡD-1住Q2埋土	磨石	14.4	8.5	5.8	1185	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	
20	31	ⅡD-1住柱穴内埋土	磨石	6.5	8	5.6	360	硬砂岩	北上山地	古生界	
21	32	ⅡD-1住埋土	大型球状石	22.5	19.4	18	1030	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	全面に磨痕有り
22	33	ⅡD-1住Q3Q4埋土	石皿	19.7	5.7	3.7	665	粘板岩	北上山地	古生界	
23	34	ⅡD-1住埋土	石皿	20.5	14.1	5.7	3730	硬砂岩	北上山地	古生界	
24	44	ⅡE-1住東側周溝	石鏃	2.0	1.6	0.5	1.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
25	45	ⅡE-1住No.1柱穴埋土	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?
26	46	ⅡE-1住Q5埋土	石鏃	0.8	1.0	0.2	0.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
27	47	ⅡE-1住Q2埋土	石鏃	1.5	1.3	0.2	0.5	チャート	北上山地	古生界	
28	48	ⅡE-1住東側周溝	石鏃	2.3	2.2	0.4	1.7	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統	
29	49	ⅡE-1住埋土	石鏃	2.7	2.0	0.5	1.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?
30	50	ⅡE-1住埋土	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
31	51	ⅡE-1住Q4埋土	石鏃	1.4	1.2	0.4	0.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
32	52	ⅡE-1住埋土	石鏃	1.8	1.4	0.5	1.4	粘板岩	北上山地	古生界	
33	53	ⅡE-1住埋土	石鏃	2.3	1.4	0.7	2.2	粘板岩	北上山地	古生界	
34	54	ⅡE-1住溝	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.5	チャート	北上山地	古生界	
35	55	ⅡE-1住Q2埋土	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.8	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	

石器一覽表(2)

No.	図版番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考
36	56	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	1.8	1.1	0.3	0.5	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
37	57	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	1.4	1.3	0.4	0.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
38	58	II E-1 住No.1 柱穴埋土	石鏃	1.1	1.4	0.3	0.5	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統	
39	59	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	1.1	1.3	0.4	0.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
40	60	II E-1 住埋土	石鏃	1.2	1.2	0.3	0.3	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統	
41	61	II E-1 住Q 1 埋土	石鏃	1.1	1.1	0.3	0.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
42	62	II E-1 住埋土	石鏃	1.2	1.0	0.3	0.3	粘板岩	北上山地	古生界	
43	63	II E-1 住No.8 柱穴埋土	石鏃	1.0	1.4	0.4	0.5	粘板岩	北上山地	古生界	
44	64	II E-1 住埋土	石鏃	1.2	1.1	0.2	0.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
45	65	II E-1 住No.8 柱穴埋土	石鏃	1.2	1.0	0.3	0.3	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
46	66	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	1.3	1.1	0.4	0.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
47	67	II E-1 住Q 4 埋土	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.4	黒曜石			
48	68	II E-1 住Q 2 埋土	石槍	3.3	2.0	0.8	4.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
49	69	II E-1 住埋土	石槍	2.5	1.6	0.6	2.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
50	70	II E-1 住Q 2 埋土	石槍	8.9	2.8	1.1	32.8	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
51	71	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	2.4	1.9	0.5	2.1	玉ずい			
52	72	II E-1 住Q 2 埋土	石鏃	2.8	2.4	2.0	0.4	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
53	73	II E-1 住Q 4 埋土	石鏃	2.6	1.0	0.5	0.6	黒曜石			
54	74	II E-1 住No.1 柱穴埋土	石匙	4.1	5.9	0.5	8.9	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
55	75	II E-1 住Q 5 埋土	不定形石器	5.3	4.8	1.4	24.4	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
56	76	II E-1 住居址-2 柱埋土	不定形石器	3.6	2.9	0.8	7.4	チャート	北上山地	古生界	
57	77	II E-1 住炉-2 埋土	不定形石器	4.0	2.9	0.5	4.5	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
58	78	II E-1 住Q 4 埋土	不定形石器	5.9	1.5	0.8	8.2	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
59	79	II E-1 住No.3 柱穴	不定形石器	6.0	2.5	1.1	15.9	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	石匙の可能性あり
60	80	II E-1 住Q 3 埋土	不定形石器	1.9	2.6	0.3	3.3	玉ずい	奥羽山地		
61	81	II E-1 住炉-2 埋土	不定形石器	2.7	1.9	0.7	3.1	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
62	82	II E-1 住東側周溝	不定形石器	1.7	3.9	0.8	5.7	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
63	83	II E-1 住埋土	石筥	3.7	2.8	1.3	13.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
64	84	II E-1 住Q 2 埋土	不定形石器	2.6	0.9	0.5	0.5	凝灰質珪質	奥羽山地	新第三系中新統	
65	85	II E-1 住埋土	不定形石器	2.5	1.3	0.9	1.8	黒曜石			
66	86	II E-1 住No.9 柱穴埋土	石斧	9	4.2	2.2	145	硬砂岩	北上山地	古生界	
67	87	II E-1 住Q 3 埋土	石斧	11.6	5.7	2.5	285	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
68	88	II E-1 住埋土	磨石	8.0	3.2	2.7	110	硬砂岩	北上山地	古生界	
69	89	II E-1 住床面周溝内出土	磨石	11.6	9.2	7.4	1160	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	
70	90	II E-1 住埋土	砥石	9.3	5.1	2.8	100	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	

石器一覽表(3)

No.	図版 番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考	
71	91	Ⅱ E-1 住埋土	砥石	3.3	3.0	0.8	20	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界		
72	92	Ⅱ E-1 住床面直上S-1	石皿	20.3	9.8	4.1	1065	硬砂岩	北上山地	古生界		
73	93	Ⅱ E-1 住埋土	石皿	24.2	16.0	10.0	5000	硬砂岩	北上山地	古生界		
74	95	Ⅲ D-1 住埋土	石鏃	2.1	1.8	0.6	3.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
75	96	Ⅲ D-1 住埋土	石鏃	1.2	1.4	0.5	0.8	粘板岩	北上山地	古生界		
76	97	Ⅲ D-1 住埋土	石鏃	2.0	1.1	0.3	0.9	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
77	98	Ⅲ D-1 住埋土	石鏃	1.2	1.4	0.3	0.3	黒曜石				
78	99	Ⅲ D-1 住埋土	不定形石器	7.2	4.3	0.6	17.6	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		
79	100	Ⅲ D-1 住埋土	不定形石器	3.6-4.4	3.1-3.5	1.0	10.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西部	新第三系中新統		
80	101	Ⅲ D-1 住埋土	磨石	11.6	10	7.7	1280	花崗閃緑岩	北上山地	中生界		
81	102	Ⅲ D-1 住床面	磨石	13.8	8.5	7.8	1410	閃緑岩	北上山地	中生界		
82	108	Ⅲ D-1 住埋土	石鏃	1.9	1.2	0.4	6.9	粘板岩	北上山地	古生界		
83	109	Ⅲ D-2 住埋土	石鏃	1.8	1.7	0.4	0.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
84	110	Ⅲ D-2 住埋土	石鏃	1.1	1.2	0.3	0.3	黒曜石				
85	111	Ⅲ D-2 住埋土	石鏃	2.0	1.1	0.3	0.4	黒曜石				
86	112	Ⅲ D-2 住埋土	石鏃	1.8	1.2	0.4	0.6	黒曜石				
87	113	Ⅲ D-2 住埋土	不定形石器	4.9	4.7	1.1	22.6	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		
88	114	Ⅲ D-2 住埋土	石槍	4.8	3.2	1.3	21.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
89	115	Ⅲ D-4 住No.1 柱穴	石鏃	2.6	1.8	0.8	3.3	白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
90	116	Ⅲ D-4 住埋土	凹石	19.5	6.9	2.8	450	玢岩	北上山地	中生界		
91	124	Ⅲ D-3 住埋土	石鏃	1.2	1.7	0.3	0.6	凝灰質珪質	奥羽山地	新第三系中新統	未製品	
92	125	Ⅲ D-3 住Q1 Q4 埋土	石鏃	1.7	1.7	0.4	1.0	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
93	126	Ⅲ D-3 住Q2 Q3 埋土	石鏃	2.1	1.4	0.6	1.5	粘板岩	北上山地	古生界		
94	127	Ⅲ D-3 住埋土	石鏃	2.6	1.1	0.5	1.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	石鏃(石槍)の可能性あり	
95	128	Ⅲ D-3 住No.2 柱穴	石鏃	1.4	1.0	0.3	0.3	粘板岩	北上山地	古生界		
96	129	Ⅲ D-3 住Q2 Q3 埋土	石鏃	1.6	1.0	0.3	0.2	黒曜石				
97	130	Ⅲ D-3 住埋土	石鏃	2.0	1.4	0.6	1.1	黒曜石				
98	131	Ⅲ D-3 住周溝埋土	石鏃	2.2	1.2	0.3	0.7	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
99	132	Ⅲ D-3 住Q1 Q4 埋土	不定形石器					凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
100	133	Ⅲ D-3 住Q1 Q4 埋土	不定形石器					凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
101	134	Ⅲ D-3 住埋土	不定形石器	3.0	2.6	3.1	0.7	4.9	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
102	135	Ⅲ D-3 住埋土	石斧	10.9	4.7	2.3	180	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界		
103	136	Ⅲ D-3 住埋土	磨石	7.8	9	7.2	740	花崗閃緑岩	北上山地	中生界		
104	137	Ⅲ D-3 住Q1 Q4 埋土	剥片					凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	接合資料	
105	138	Ⅲ D-3 住Q1 Q4 埋土	剥片					凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	接合資料	

石器一覽表(4)

No.	図版番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考
106	139	ⅢD-3住Q1Q4埋土	剥片					凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	接合資料
107	140	ⅢD-3住埋土	打製石斧状	21.3	8.7	1.6	375	凝灰質粘板岩	北上山地	古生界	
108	141	ⅢD-3住埋土	石皿	19.1	18.7	5.3	2930	輝石安山岩	北上山地	古生界	
109	142	ⅢD-3住Q2埋土	石皿	27.0	14.2	3.6	2140	硬砂岩	北上山地	古生界	
110	143	ⅢD-3住埋土	石皿	21.5	15.5	6.8	2775	輝石安山岩	北上山地	古生界	
111	144	ⅢD-3住埋土	石皿	27.0	19.4	7.1	6000	硬砂岩	北上山地	古生界	
112	145	ⅢD-3住埋土	石皿	20.8	10.9	4.4	1520	硬砂岩	北上山地	古生界	
113	146	ⅢD-3住埋土	石皿	21.1	10.1	5.7	1650	硬砂岩	北上山地	古生界	
114	147	ⅢD-3住埋土	石皿	35.2	15.0	4.2	3820	輝石安山岩	北上山地	古生界	
115	156	ⅡC-1住状	石鏃	0.7	1.2	0.4	0.2	粘板岩	北上山地	古生界	
116	157	ⅡC-1住状Q3埋土	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
117	158	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.1	1.2	0.3	0.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
118	159	ⅡC-1住状	石鏃	2.1	1.9	0.8	2.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
119	160	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.5	1.5	0.5	1.2	粘板岩	北上山地	古生界	
120	161	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.7	1.7	0.3	0.8	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
121	162	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	2.0	1.7	0.6	0.8	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
122	163	ⅡC-1住状Q3埋土	石鏃	1.2	1.1	0.3	0.4	粘板岩	北上山地	古生界	
123	164	ⅡC-1住状№9柱穴	石鏃	2.0	1.5	0.7	1.6	粘板岩	北上山地	古生界	
124	165	ⅡC-1住状Q4埋土	石鏃	1.8	1.2	0.6	1.1	粘板岩	北上山地	古生界	
125	166	ⅡC-1住状	石鏃	1.0	1.2	0.4	0.4	粘板岩	北上山地	古生界	
126	167	ⅡC-1住状Q3埋土	石鏃	1.4	1.2	0.5	0.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
127	168	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	0.9	1.3	0.4	0.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
128	169	ⅡC-1住状	石鏃	1.0	1.0	0.3	0.2	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統	
129	170	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.1	1.1	0.3	0.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
130	171	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
131	172	ⅡC-1住状Q3埋土	石鏃	1.4	1.5	0.2	0.5	凝灰質珪質	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?
132	173	ⅡC-1住状Q4埋土	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.7	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?
133	174	ⅡC-1住状№1柱穴	石鏃	1.2	1.3	0.3	0.4	凝灰質珪質	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?
134	175	ⅡC-1柱状埋土	石鏃	2.1	1.2	0.5	0.9	黑曜石			
135	176	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.3	1.3	0.4	0.3	黑曜石			
136	177	ⅡC-1住状Q1埋土	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.4	黑曜石			
137	178	ⅡC-1住状Q1埋土	石鏃	2.0	1.8	0.9	2.5	黑曜石			
138	179	ⅡC-1住状Q3埋土	石鏃	1.7	1.5	0.6	1.0	黑曜石			
139	180	ⅡC-1住状Q2埋土	不定形石器	2.2	1.9	1.1	4.4	黑曜石			
140	181	ⅡC-1住状Q2埋土	石鏃	1.2	0.7	0.3	0.1	黑曜石			

石器一覧表(5)

No.	図版番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考
141	182	ⅡC-1住状埋土	石錐	2.5	1.6	0.5	1.5	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
142	183	ⅡC-1住状Q3埋土	石錐	3.0	1.2	0.5	2.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
143	184	ⅡC-1住状Q2埋土	石錐	2.0	1.0	0.7	1.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
144	185	ⅡC-1住状Q4埋土	石槍	7.3	2.4	1.1	22.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
145	186	ⅡC-1住状	石匙	4.0	4.5	0.7	14.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
146	187	ⅡC-1住状Q2	石匙	2.6	5.0	0.5	6.4	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
147	188	ⅡC-1住状	不定形石器	2.3	3.0	0.9	6.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
148	189	ⅡC-1住状Q4埋土	不定形石器	2.0	1.5	0.4	1.3	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	石匙の破損品か
149	190	ⅡC-1住状埋土	叩き石	20.2	5.5	2.1	400	粘板岩	北上山地	古生界	
150	191	ⅡC-1住状Q4埋土	石棒	17.5	2.0	1.8	85	粘板岩	北上山地	古生界	
151	192	ⅡC-1住状埋土	磨石	12.2	7.2	3.7	520	閃緑岩	北上山地	中生界	
152	193	ⅡC-1住状Q3埋土	磨石	11.6	7.3	4.3	630	硬砂岩	北上山地	古生界	
153	194	ⅢC-1住状埋土	石錘	6.1	5.3	0.8	20	粘板岩	北上山地	古生界	
154	195	ⅢC-1住状埋土	石鎌	1.5	2.0	1.3	4.8	白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	
155	196	ⅢC-1住状埋土	不定形石器	2.7	3.8	0.8	6.2	凝灰質砂岩	北上山地	古生界	
156	201	ⅠD-1土坑埋土	凹石	14.4	5.3	4.0	450	硬砂岩	北上山地	古生界	
157	217	ⅠD-3土坑No.6土器埋土	石鎌	1.1	1.1	0.3	0.3	チャート	北上山地	古生界	
158	226	ⅡC-1土坑埋土	磨石	11.7	9.3	5.7	965	花崗閃緑岩	北上山地	中生界	
159	228	ⅡC-2土坑埋土	不定形石器	3.8	3.3	1.2	14.1	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
160	229	ⅡC-2土坑埋土	不定形石器	3.9	3.1	1.2	13.8	凝灰質砂岩	北上山地	古生界	
161	230	ⅡD-2土坑埋土	石鎌	1.7	1.4	0.4	0.8	粘板岩	北上山地	古生界	
162	231	ⅡD-2土坑埋土	打製石斧状	13.8	6.7	0.9	120	粘板岩	北上山地	古生界	
163	233	ⅡD-4土坑埋土	石斧	10.6	5.2	3.1	310	硬砂岩	北上山地	古生界	
164	234	ⅡD-4土坑埋土	石斧	8.3	5.4	3.9	215	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
165	235	ⅡD-4土坑埋土	磨石	19	7.4	3.2	605	硬砂岩	北上山地	古生界	
166	236	ⅡD-4土坑埋土	磨石	13.9	7.1	3.4	550	細砂質凝灰岩	北上山地	古生界	
167	241	ⅡD-6土坑埋土	磨石	12.0	4.5	2.0	200	粘板岩	北上山地	古生界	
168	242	ⅡD-6土坑埋土	凹石	8.8	5.7	2.2	315	細砂質凝灰岩	北上山地	古生界	磨石兼用
169	249	ⅢD-1土坑埋土	不定形石器	3.3	2.4	1.0	5.9	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	縁片にリタッチ
170	250	ⅢD-1土坑埋土	磨石	13.2	8.4	5.9	875	硬砂岩	北上山地	古生界	
171	251	ⅢD-1土坑末面直上	叩石	25.8	6.0	3.7	900	硬砂岩	北上山地	古生界	棒状
172	252	ⅢD-1土坑埋土	石皿	34.9	38.4	11.0	22700	凝灰質砂岩	北上山地	古生界	
173	256	ⅢD-2土坑埋土	石皿	18.7	13.2	6.1	3790	輝石安山岩	北上山地	古生界	
174	258	ⅢD-3土坑埋土	石鎌	2.5	1.4	0.7	3.3	粘板岩	北上山地	古生界	
175	259	ⅢD-3土坑埋土	不定形石器	4.7	2.3	1.1	12.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	石筥か石槍の可能性あり

石器一覽表(6)

No.	図版 番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考	
176	260	ⅢD-3土坑埋土	磨石	11.3	7.9	4.5	645	花崗閃緑岩	北上山地	中生界		
177	316	ⅢB-19検出面	石鏃	2.0	1.5	0.6	1.8	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
178	317	ⅢB-23採掘跡Q1埋土	石鏃	2.7	1.6	0.7	2.8	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
179	318	ⅢB区P9柱穴	石鏃	2.3	1.6	0.6	2.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
180	319	ⅢB区P9柱穴埋土	石鏃	3.0	2.2	0.9	6.1	チャート	北上山地	古生界	未製品?	
181	320	ⅡC区P126埋土	石鏃	3.9	1.6	0.4	2.8	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	石鏃の可能性あり	
182	321	ⅡD-22	石鏃	2.0	1.2	0.3	0.8	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
183	322	ⅢB-1採掘跡埋土	石鏃	2.0	1.6	0.5	1.4	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統		
184	323	ⅢB-1採掘跡埋土	石鏃	2.3	1.5	0.7	1.9	白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
185	324	ⅡE-8	石鏃	2.7	1.9	0.9	4.5	白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?	
186	325	ⅢB-23採掘跡Q1埋土	石鏃	1.6	1.4	0.3	0.8	粘板岩	北上山地	古生界		
187	326	ⅡC-11	石鏃	2.0	1.3	0.6	1.3	白色細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
188	327	ⅡE-20	石鏃	1.8	1.3	0.6	1.0	粘板岩	北上山地	古生界		
189	328	ⅠD-15	石鏃	2.2	1.4	0.4	1.0	玻璃質流紋岩	奥羽山地	新第三系中新統		
190	329	ⅢB-1採掘跡埋土	石鏃	1.2	1.3	0.5	0.8	凝灰質粘板岩	北上山地	古生界		
191	330	ⅡB-4	石鏃	1.2	1.4	0.6	0.8	粘板岩	北上山地	古生界		
192	331	ⅡD-23	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.8	凝灰質珪質	奥羽山地	新第三系中新統	未製品?	
193	332	ⅡE-17	石鏃	1.3	1.3	0.7	0.9	黒曜石				
194	333	ⅡC-17	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.3	黒曜石				
195	334	ⅢE-4旧表土	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.5	黒曜石				
196	335	ⅢE-12	石鏃	2.4	1.2	0.5	0.9	黒曜石				
197	336	ⅡC-17	石鏃	1.1	1.4	0.5	0.7	黒曜石				
198	337	ⅠD-10	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.5	玉ずい	奥羽山地			
199	338	ⅢB-1採掘跡埋土	石槍	10.0	2.9	1.2	33.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
200	339	ⅢB-20	石鏃	3.8	1.5	0.3	1.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
201	340	柱穴P27埋土ⅢB区	石鏃	2.1	1.6	0.8	1.9	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第三系中新統		
202	341	ⅢB-1採掘跡	石鏃	2.7	2.3	0.6	2.9	流紋岩質	奥羽山地	新第三系中新統		
203	342	ⅢB-1採掘跡埋土	石鏃	1.6	1.9	0.4	1.5	珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	縁辺にリタッチあり	
204	343	ⅡE-20	不定形石器	3.7	3.9	4.2	0.5	5.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
205	344	ⅡC区P116埋土	不定形石器	1.6	3.2	0.3	1.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
206	345		不定形石器	2.4	2.3	0.6	3.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統		
207	346	ⅡE-17	不定形石器	3.4	5.0	1.2	24.6	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		
208	347	ⅢB-1採掘跡埋土	不定形石器	3.0	3.6	0.7	7.1	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		
209	348	ⅢB-14	不定形石器	4.0	3.7	0.5	6.2	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		
210	349	ⅢB-1採掘跡埋土	不定形石器	3.0	3.8	0.9	6.2	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統		

石器一覽表(7)

No	図版 番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	時期	備考
211	350	ⅢB-1 採掘跡埋土	不定形石器	2.7	2.5	0.7	3.6	凝灰質砂岩	北上山地	古生界	
212	351	ⅢB-1 採掘跡埋土	不定形石器	3.5	3.1	0.5	6.1	凝灰質砂岩	北上山地	古生界	
213	352	ⅡD-22	不定形石器	3.2	2.7	0.9	8.0	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
214	353	ⅡC-19	不定形石器	2.8	3.5	1.0	10.3	玉ずい	奥羽山地		
215	354	表採	不定形石器	2.4	3.3	0.9	5.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
216	355	ⅡE-25	不定形石器	2.9	3.6	1.1	14.2	凝灰質珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統	
217	356	ⅢE-17	不定形石器	2.9	3.5	1.2	12.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
218	357	ⅡE-17	不定形石器	2.8	2.4	1.0	6.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
219	358	ⅢD- 採掘跡	不定形石器	3.3	2.6	1.3	10.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	新第三系中新統	
220	359	ⅠE-25	不定形石器	3.5	2.7	0.8	7.8	チャート	北上山地	古生界	未製品?
221	360	ⅡC-1 採掘	石製品	3.1	2.8	0.4	4.6	粘板岩	北上山地	古生界	三角盤状
222	361	ⅡC-1 採掘	石製品	3.4	3.5	0.4	8.35	粘板岩	北上山地	古生界	円盤状
223	362	ⅡD-6 Grid	凹石	9.8	7.0	4.1	360	硬砂岩	北上山地	古生界	
224	363	ⅡC-1 採掘跡埋土	凹石	19.2	6.4	3.9	775	硬砂岩	北上山地	古生界	
225	364	ⅡD区ⅡD-6グリッド	凹石	15.7	9.7	2.9	745	硬砂岩	北上山地	古生界	
226	365	ⅡC-1 採掘跡埋土	叩き石	8.0	6.1	5.5	340	硬砂岩	北上山地	古生界	
227	366	ⅡC-11	凹石	6.8	6.4	3.3	195	硬砂岩	北上山地	古生界	
228	367	柱穴P16ⅢB区埋土	石斧	7.0	4.6	2.5	100	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	
229	368	ⅢD-1 Grid	磨石	9.1	6.7	3.8	310	細砂質凝灰岩	北上山地	古生界	棒状
230	369	ⅡC-21	磨石	8.5	6.6	3.7	300	凝灰質硬砂岩	北上山地	古生界	凹石兼用
231	370	ⅡD-22	磨石	6.1	9.1	5.5	400	硬砂岩	北上山地	古生界	
232	371	ⅢD-9 Grid	磨石	13.2	9.2	6.2	1140	硬砂岩	北上山地	古生界	
233	372	P41	磨石	10.1	6.3	5.2	425	硬砂岩	北上山地	古生界	
234	373	ⅢB-1 採掘跡	打製石器	7.0	5.1	2.6	110	粘板岩	北上山地	古生界	石斧?
235	374	ⅢD-24	叩き石	17.4	7.0	3.5	610	凝灰質粘板岩	北上山地	古生界	
236	375	P29	棒状の叩き石? 磨石?	15.7	3.2	2.2	180	粘板岩	北上山地	古生界	

古銭出土一覧表

No.	写真 版番号	銭名	出土地点	直径 (cm)	重さ (g)	備 考
1	376	寛永通寶	Ⅱ B-1 墓壇埋土	2.5	4.3	背紋に「文」 銅製品
2	377	寛永通寶	Ⅱ B-1 墓壇埋土	2.5	3.4	背紋に「文」 銅製品
3	378	寛永通寶	Ⅱ B-1 墓壇埋土	2.3	3.2	銅製品
4	379	寛永通寶	Ⅱ B-1 墓壇埋土	2.3	2.1	銅製品
5	381	寛永通寶	Ⅱ B-3 墓壇埋土	2.4	2.7	銅製品
6	382	寛永通寶	Ⅱ B-3 墓壇埋土	2.3	2.0	銅製品
7	383	不明	Ⅱ B-3 墓壇埋土	2.2	2.3	銅製品
8	384	寛永通寶	Ⅲ D-18 I 層	2.4	1.8	銅製品
9	385	寛永通寶	Ⅲ D-19 I 層	2.3	2.0	鉄製品
10	386	寛永通寶	Ⅲ B-1 (斜面) I 層	2.2	2.0	鉄製品
11	387	仙臺通寶	Ⅱ C-15 I 層	2.1	2.7	鉄製品
12	388	仙臺通寶	Ⅲ D-18 I 層	2.1	2.6	鉄製品
13	389	不明	Ⅱ G-16 I 層	2.5	3.2	鉄製品

鉄器一覧表

No.	図版 番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	
1	391	Ⅱ C-6 I 層	煙管	2.3			2.5	銅	火皿部分
2	392	Ⅱ B-18 II 層	小刃	7.5	4.8	0.2	11.3		
3	393	Ⅲ B-1 採掘跡埋土	小刃	6.0	4.0	0.3	12.6	鉄	
4	394	Ⅱ G-16 I 層	鍋?	7.5	6.5	0.4	35.4	鉄	
5	395	Ⅱ F 区表採	締金具	4.2	0.9	0.4	7.1	鉄	
6	396	Ⅲ D-10 I 層	締金具	2.7	1.5	0.2	11.7	鉄	

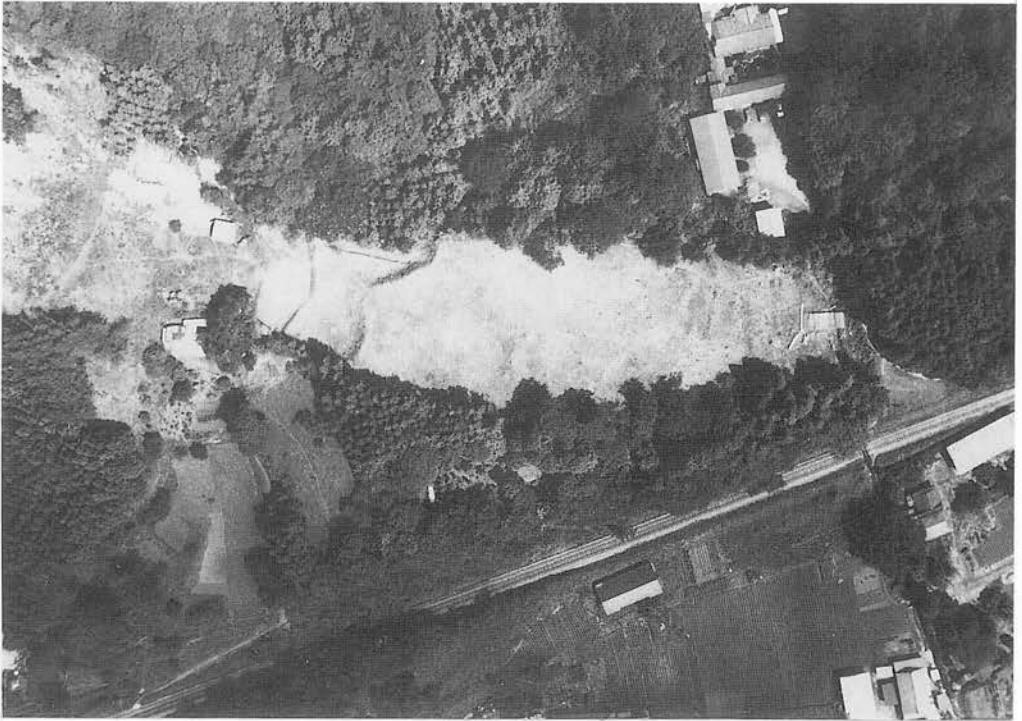
陶磁器一覧表

No.	写真 版番号	出土 地点	層位	器種	部位	文 様 等
1	1	Ⅱ C-7	採掘坑Ⅱ	白磁皿	口縁部	端反り口縁。灰白色を呈し、口縁端に微細な気泡がある。推定口径13.0cm
2	2	東側斜面	I	染付碗	◇	口縁部内外面に2条線が巡り、外面に薄い藍色の花紋をもつ。推定口径14.8cm
3	3	Ⅲ D-14	I	染付皿	◇	端反り口縁。口縁部内外面に条線が巡り、外面唐草文をもつ。推定口径11.6cm
4	4	Ⅱ C-7	I	◇	◇	内外面の口縁部直下に1条、見込みに重圏紋をもつ文様がある。推定口径14.5cm
5	5	Ⅱ C-7	I	◇	◇	4と同一個体
6	6	Ⅲ B-1	採掘坑Ⅰ	◇	◇	内面に発色のよい文様の一部が残る。調整痕があり、厚手である。
7	7	Ⅱ b-2	I	◇	底部?	見込み界に重圏文をもち、両面に貫入がある。焼成不良。
8	8	Ⅲ b-1	採掘坑Ⅱ	灰釉皿	体 部	黄緑色を呈し光沢がある。

写 真 图 版

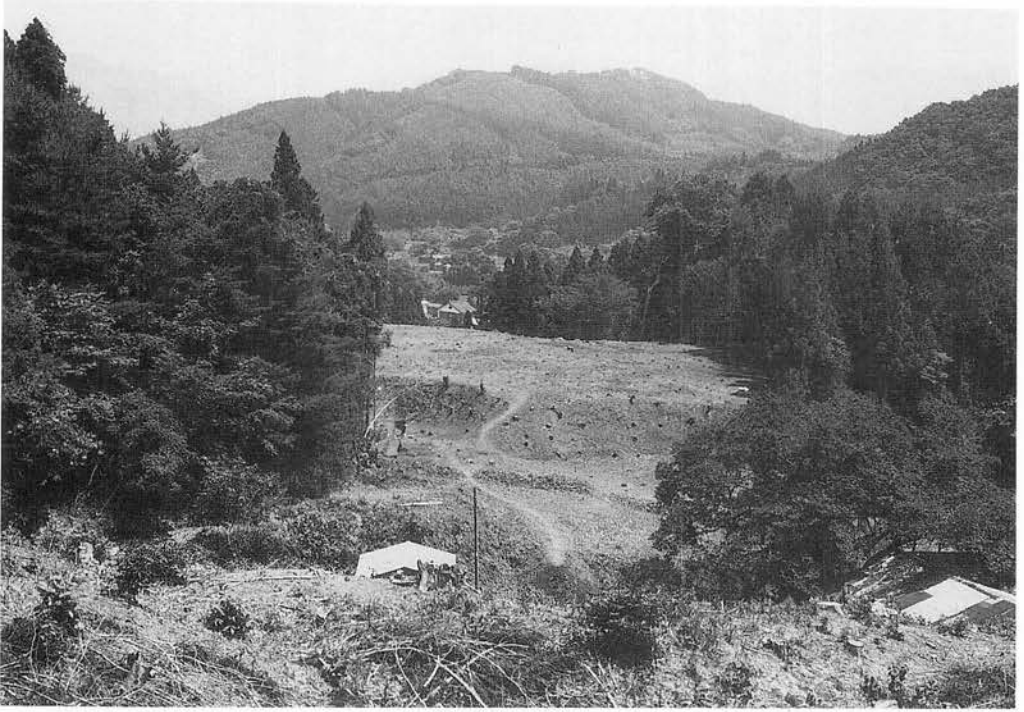


遺跡遠景 南西から



空中写真（上方が北）

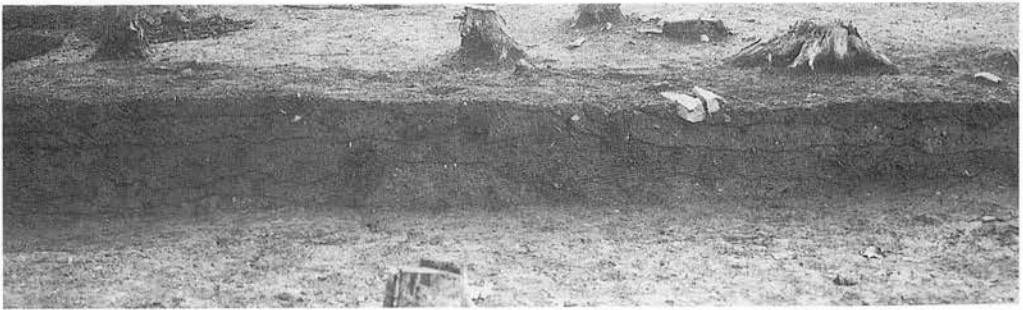
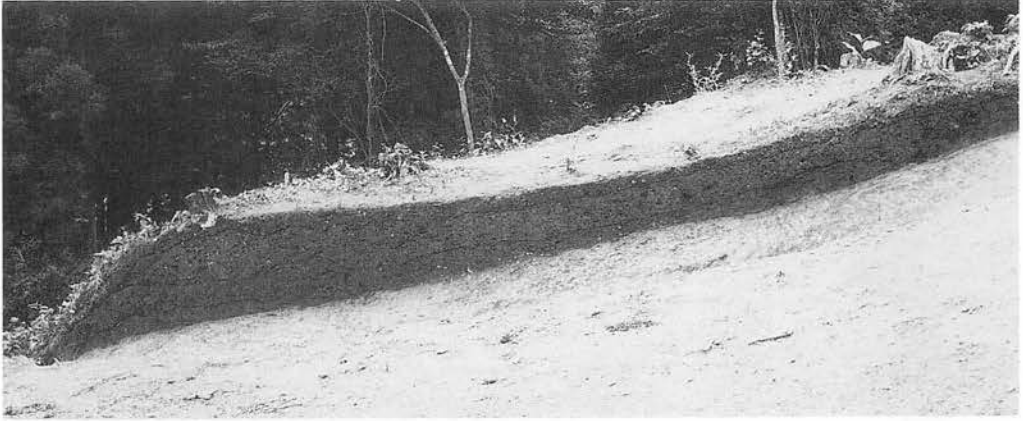
写真図版1 遺跡遠景・空中写真



遺跡近景 西から



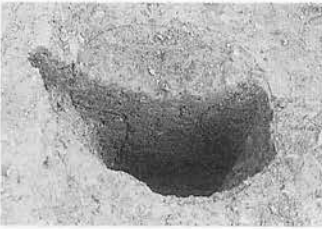
平場 南西から
写真図版 2 遺跡近景 (現状)



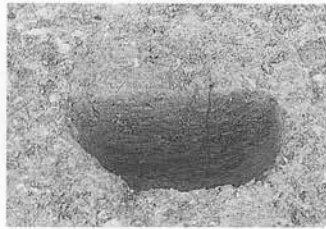
写真図版 3 基本土層



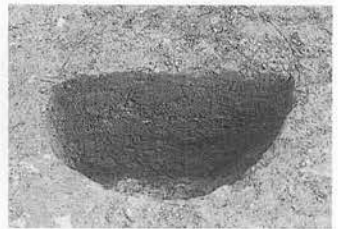
III C-1 建物跡 北から



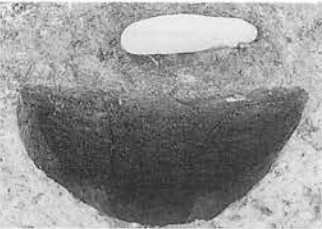
柱 2 断面



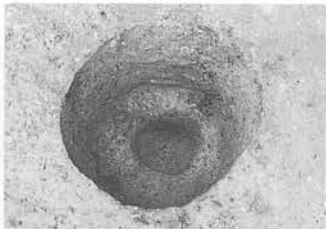
柱 3 断面



柱 4 断面



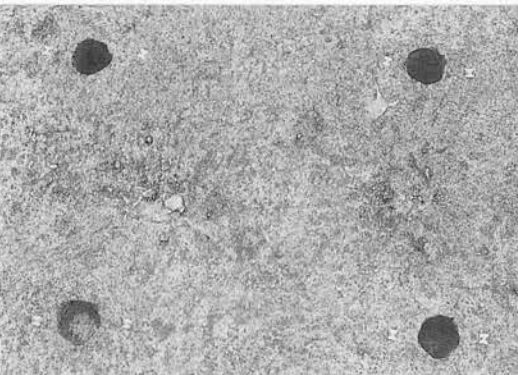
柱 5 断面



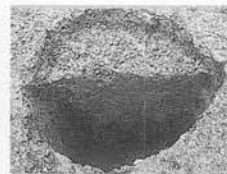
柱 5 平面



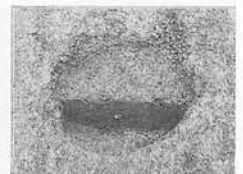
柱 6 平面



III C-2 建物 南から



柱 1 断面



柱 2 断面



柱 3 断面

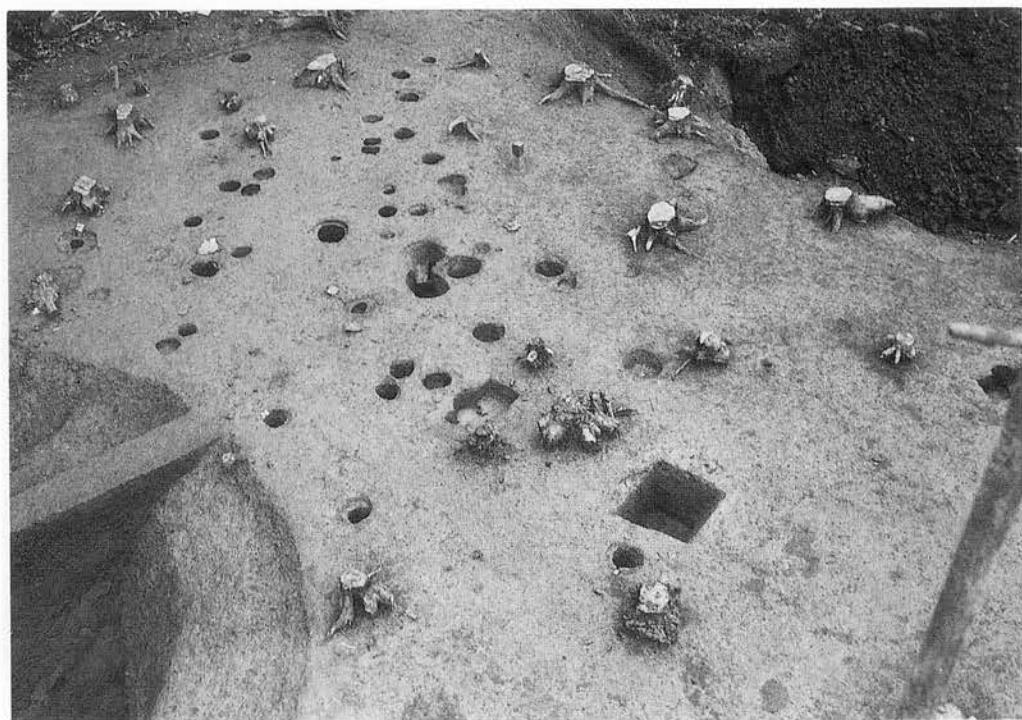


柱 4 断面

写真図版 4 III C-1・2 建物跡



ⅡC・D区柱穴群 東から



ⅢB区柱穴群 北東から
写真図版5 柱穴群



東側一段目平場 現状南から(Ⅱ区)



東側一段目平場 西から(Ⅲ区)
写真図版6 東側段差(現状)



東側二段目平場 現状(Ⅱ区)南から



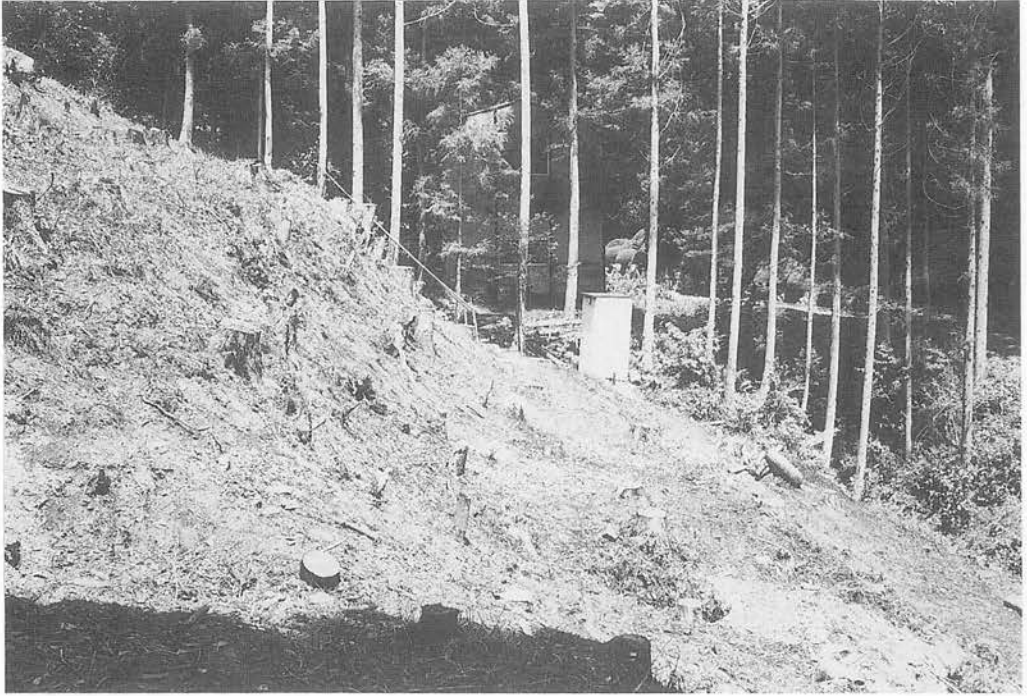
東側二段目平場 現状(Ⅲ区)北から
写真図版7 東側段差(現状)



東側三段目平場 現状(Ⅱ区)南から



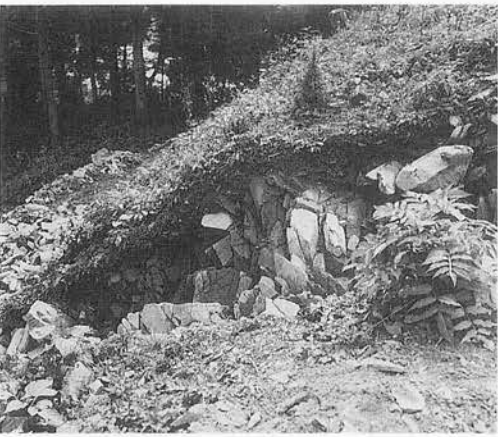
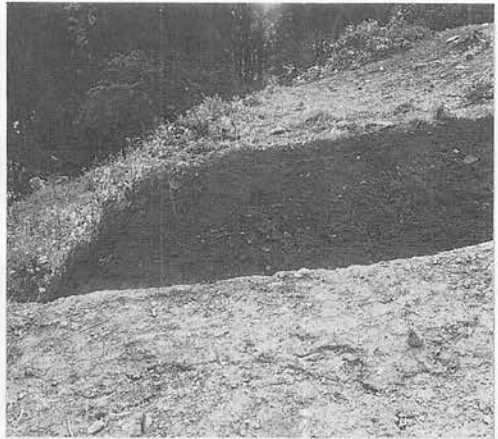
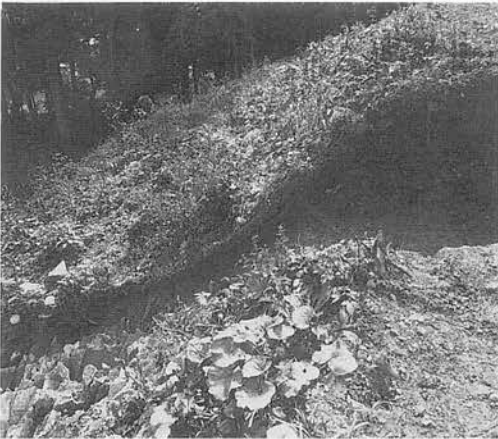
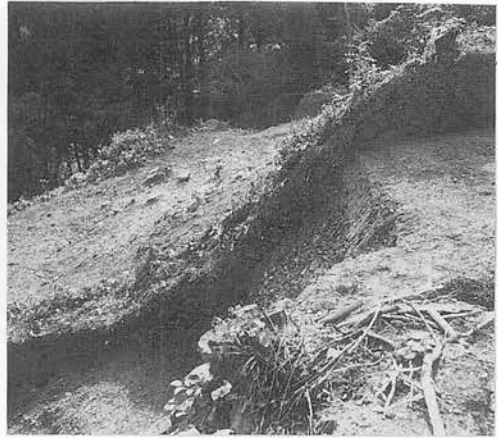
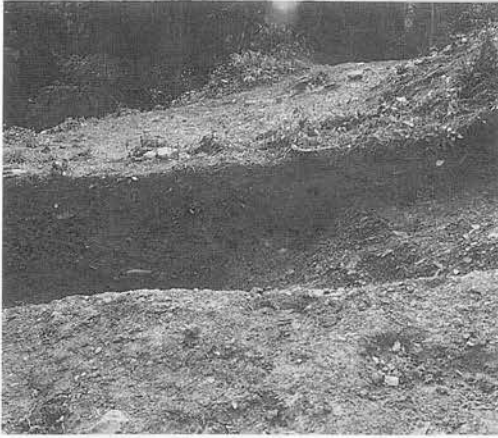
東側三段目平場 現状(Ⅱ区)北から
写真図版8 近景(現状)



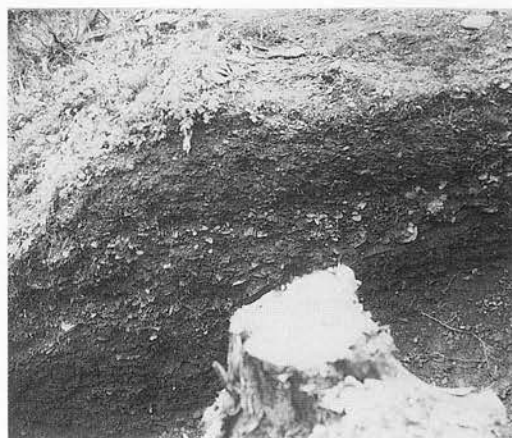
東側四段目平場 現状



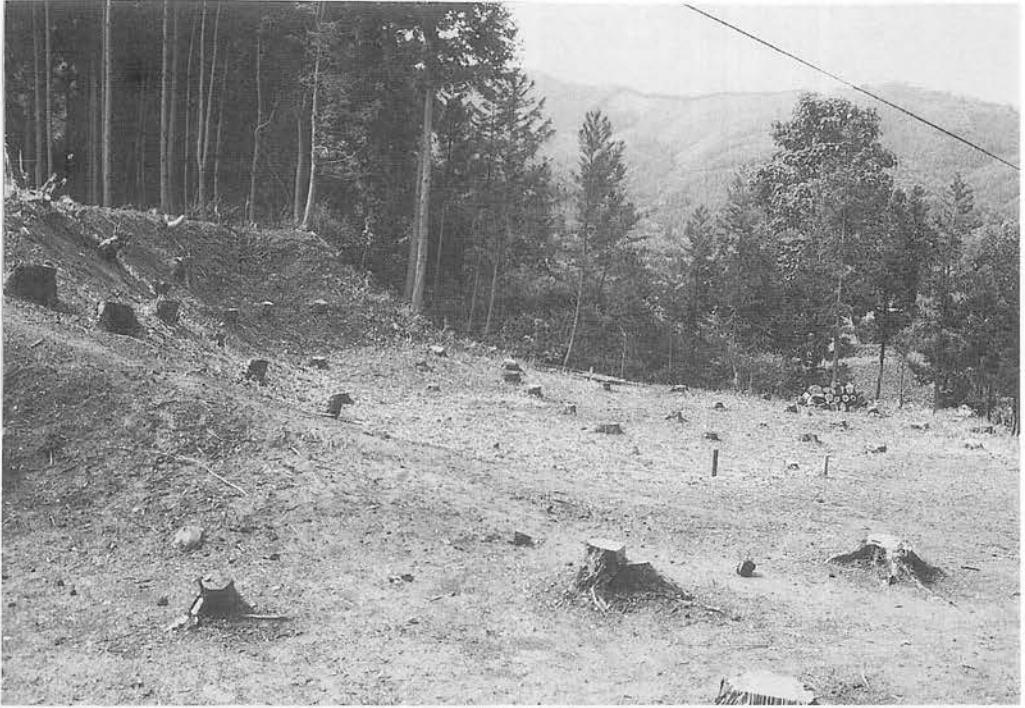
東側四段目平場 現状
写真図版9 近景(現状)



写真図版10 東側斜面土層断面



写真図版11 東側斜面土層断面

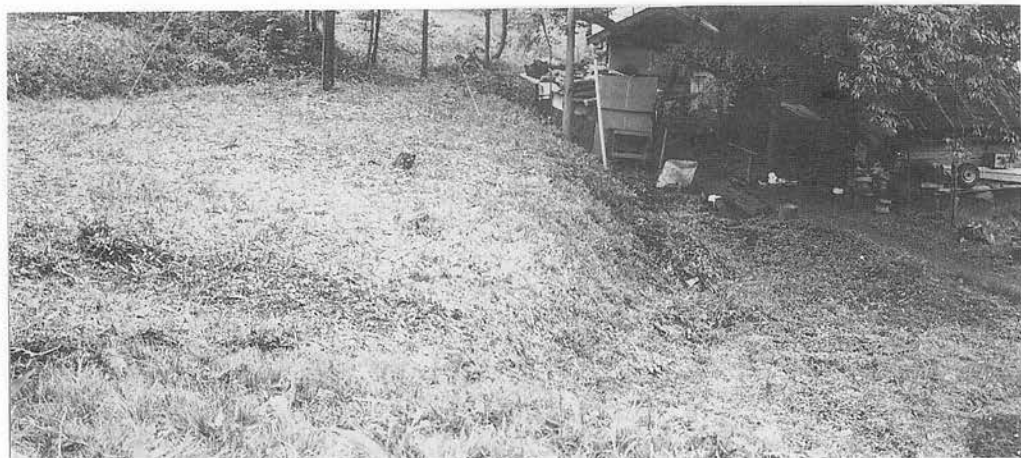


西側段差 現状



堀・跡

写真図版12 近景（現状）堀跡



西側段差



堀跡断面



西側段差

写真図版13 堀跡・現状・西側段差



現状 南から



調査中 東西から

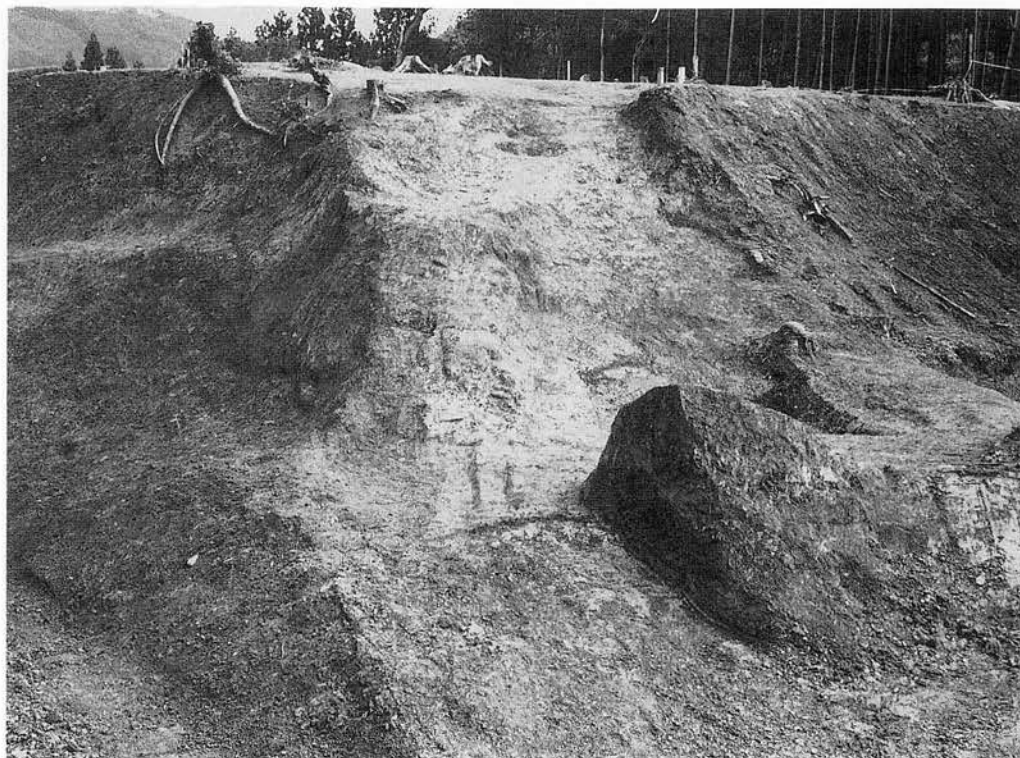


土層1 南から

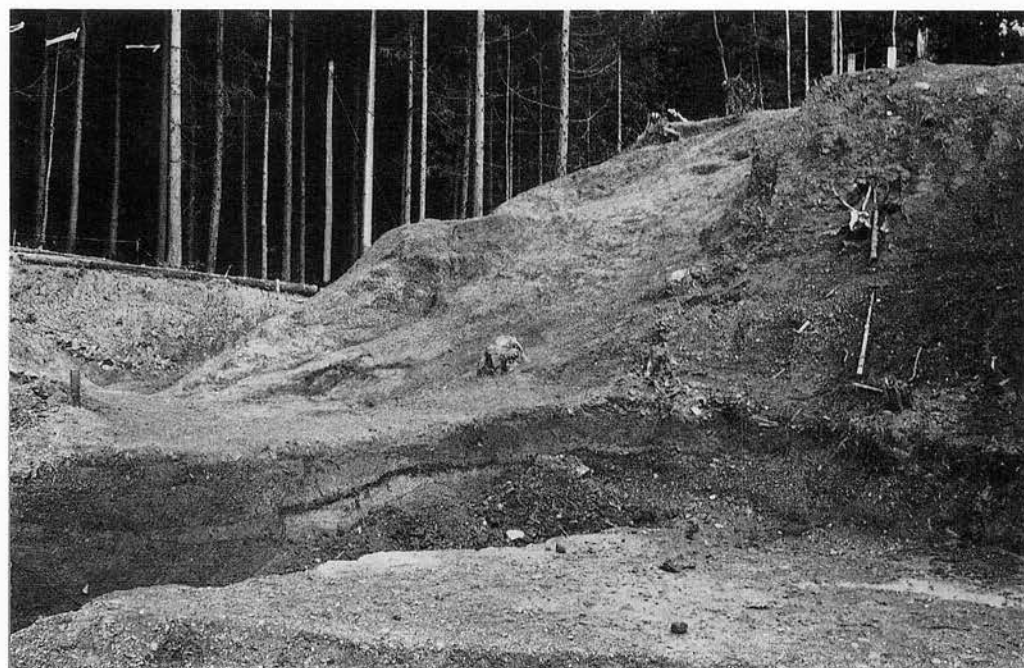


土層2

写真図版14 土橋

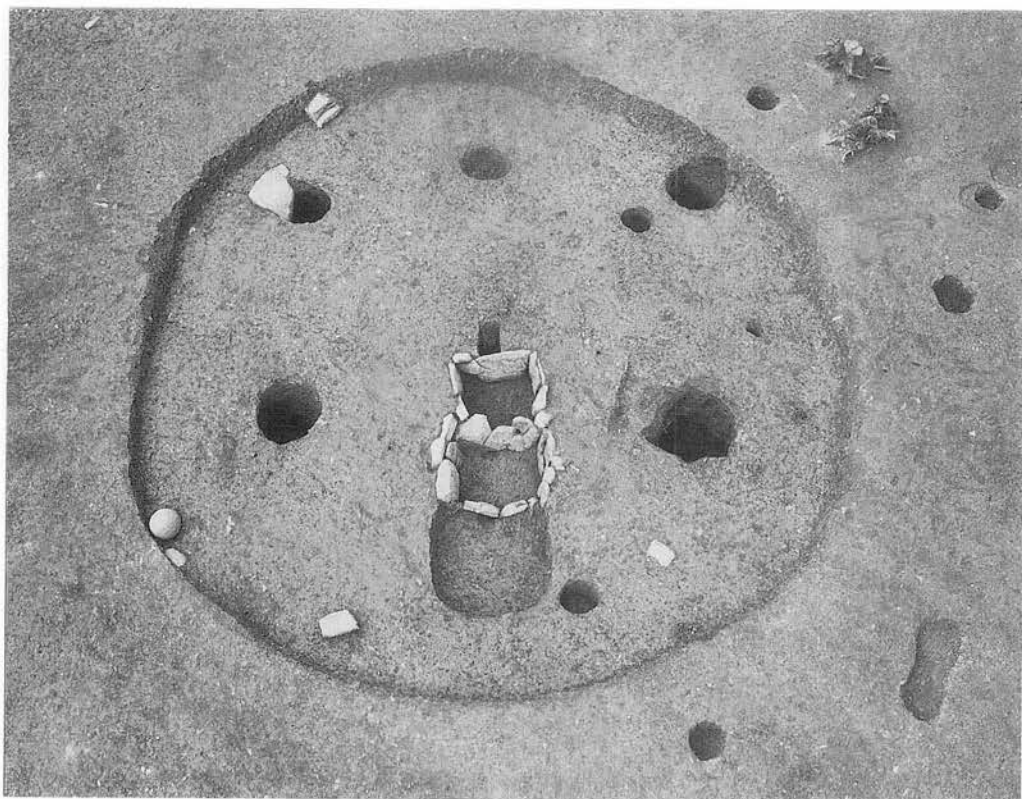


土橋完掘状況 西から



南から

写真図版15 土橋調査後



平面完掘 東から



東西断面(調査中)南から

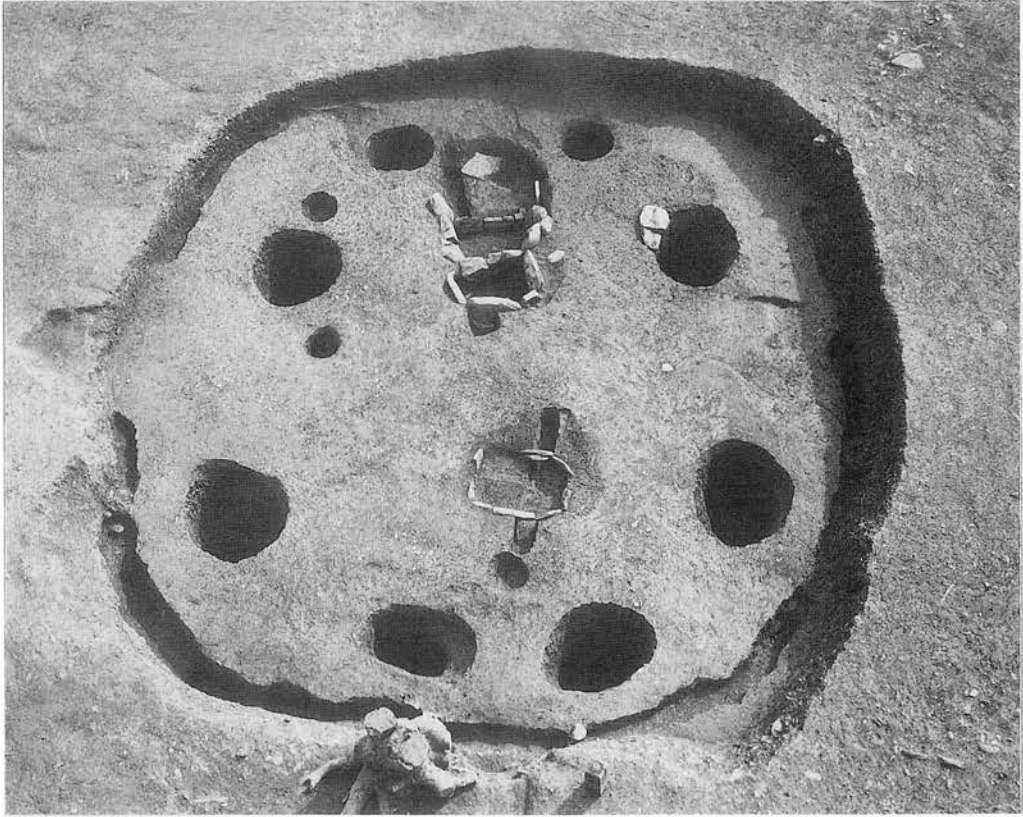


炉断面1



炉断面2

写真図版16 II D-1 住居址



平面(完掘)北から



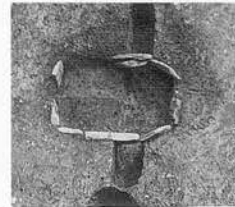
断面(東西)南から



炉1 東から



炉1 完掘 北から



炉1 平面 北から



柱2 断面

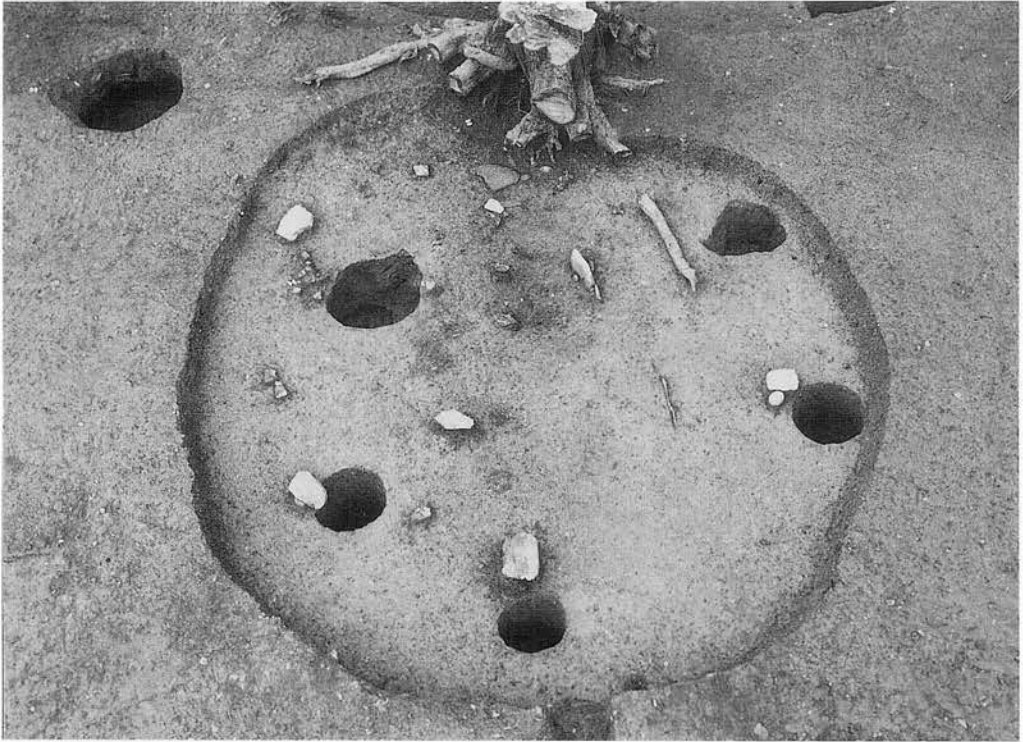


柱3 断面



炉2 断面 南から

写真図版17 II E-1 住居址



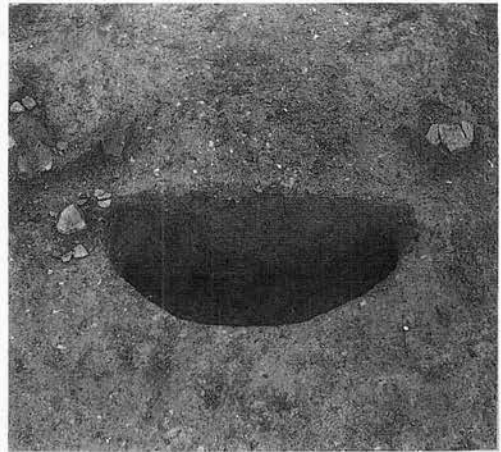
平面(調査中) 北から



土層断面 西から



炉平面 北から



柱穴土層断面 北から

写真図版18 III D-1 住居址



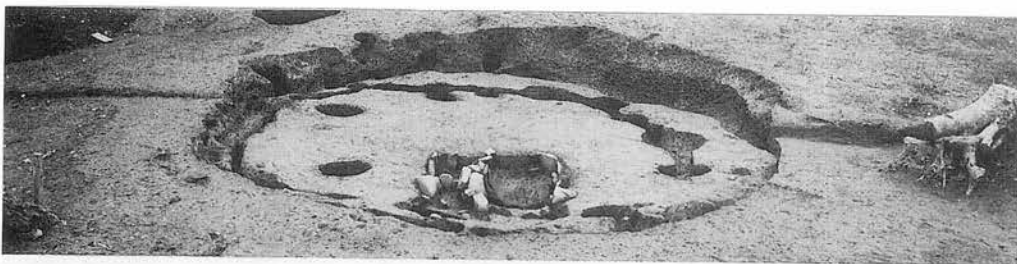
ⅢD-2・4住居址平面 東から



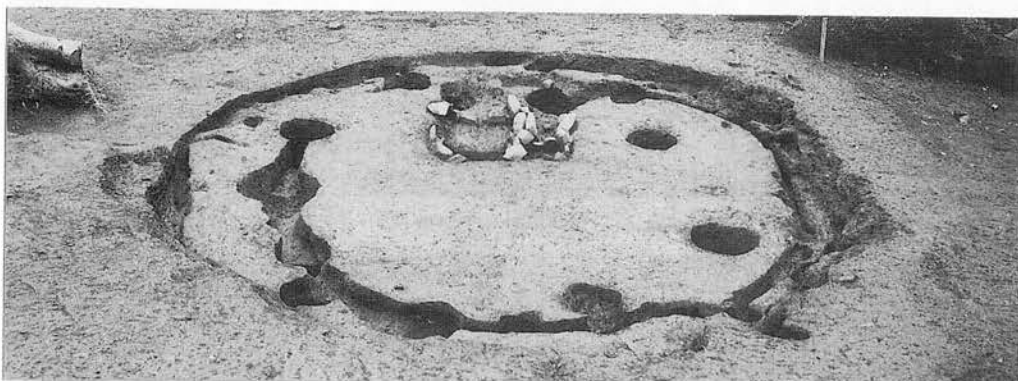
ⅢD-2住居下位検出状況 東から



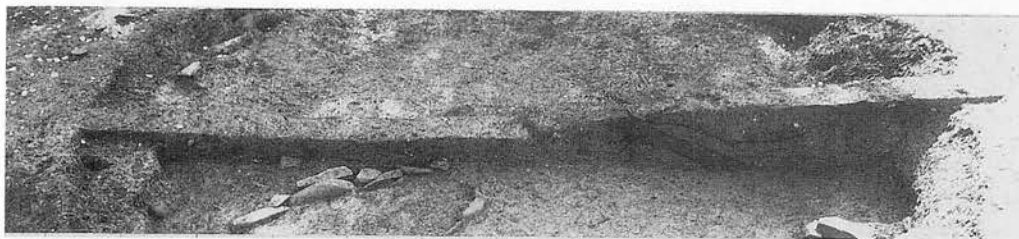
ⅢD-2住居址土層断面 北から
写真図版19 ⅢD-2・4住居址



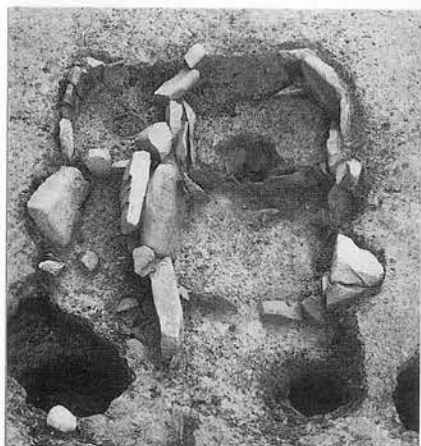
平面(完掘) 東から



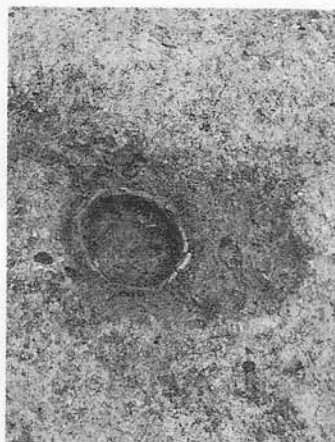
平面(完掘) 西から



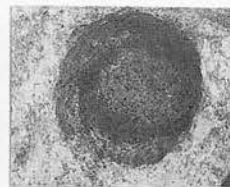
土層断面 北から



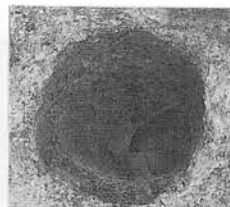
炉1・2平面 東から



炉3平面 東から



柱5 炭検出状況



柱5 平面

写真図版20 III D-3 住居址



ⅡC-1 住居址状遺構平面(完掘) 南東から



断面 南から

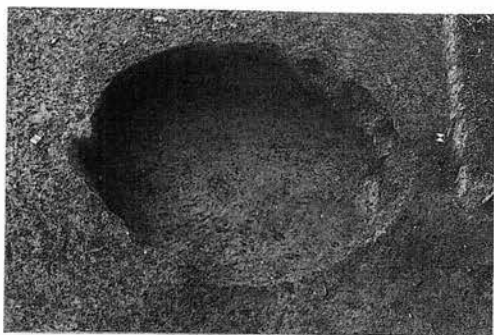


ⅢD-1 住居址状遺構平面(完掘) 北から

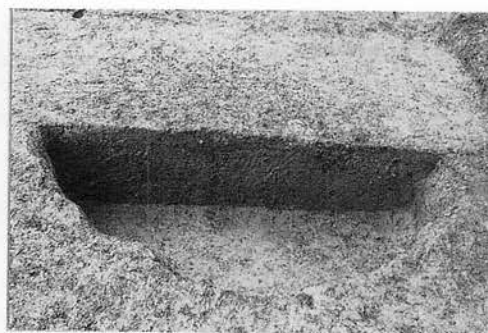


断面 北東から

写真図版21 ⅡC-1・ⅢD-1 住居址状遺構



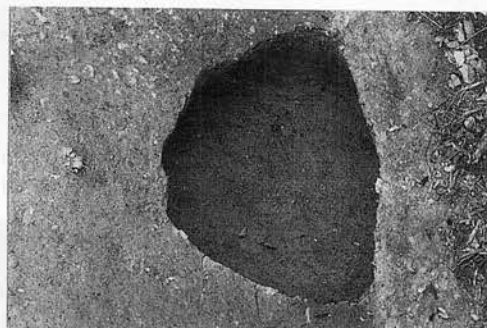
I D-1 土坑平面



I D-1 土坑断面



I D-2 土坑断面



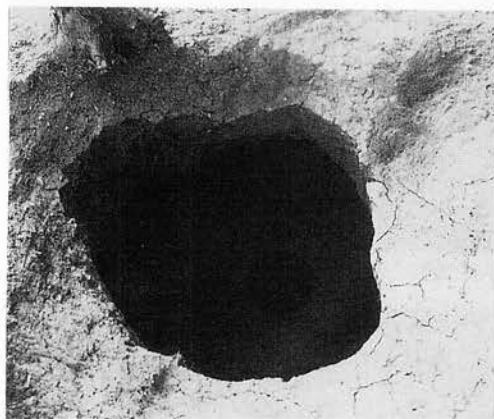
I D-3 土坑平面



I D-3 土坑断面



I D-3 土坑遺物出土狀況



II C-1 土坑平面



II C-1 土坑断面



II C-1 土坑遺物出土狀況

写真図版22 土坑1



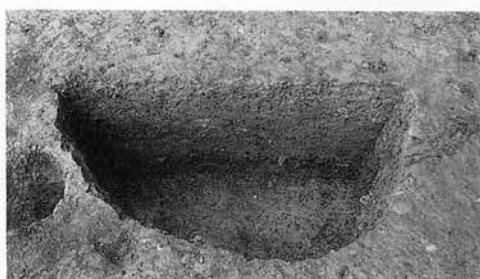
II D-2 土坑平面



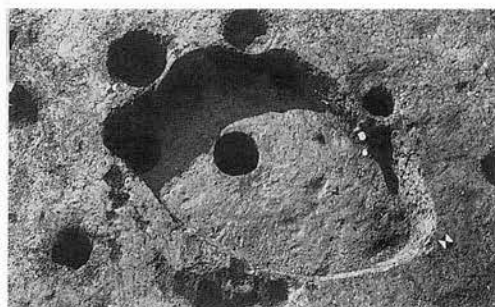
II D-2 土坑断面



II D-3 土坑平面



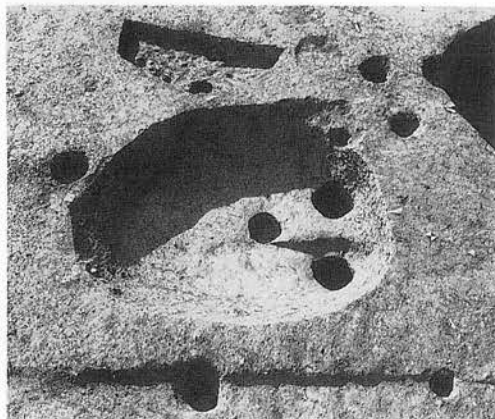
II D-3 土坑断面



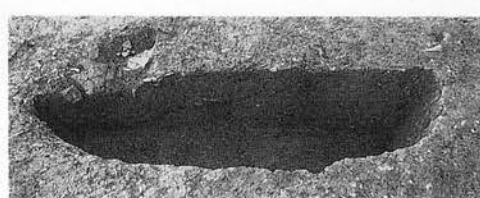
II D-4 土坑平面



II D-1 土坑遺物出土狀況



II D-6 土坑平面

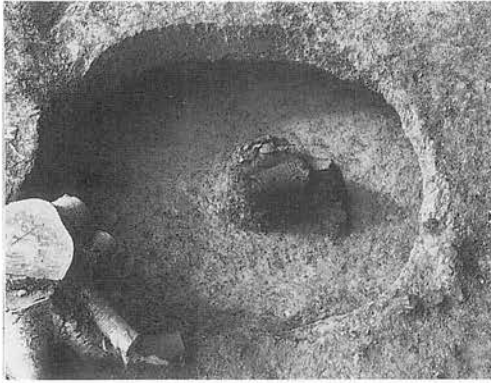


II D-6 土坑断面

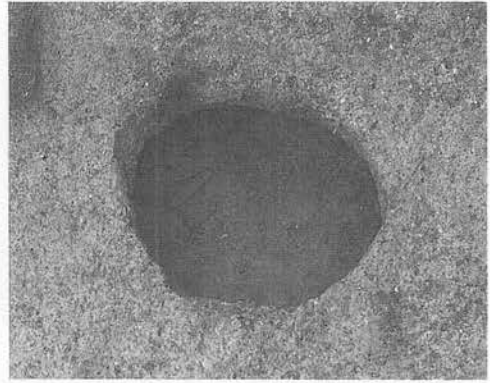


II D-6 土坑遺物出土狀況

写真図版23 土坑2



I E-1 土坑平面



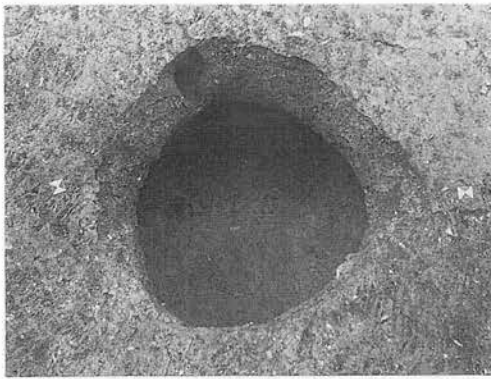
III D-1 土坑平面



I E-1 土坑断面



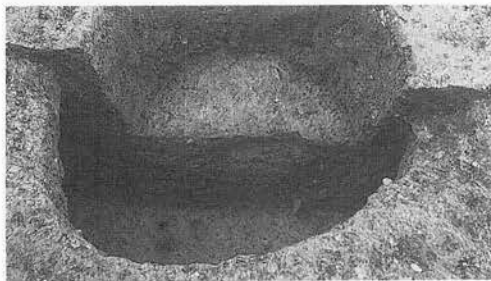
III D-1 土坑断面



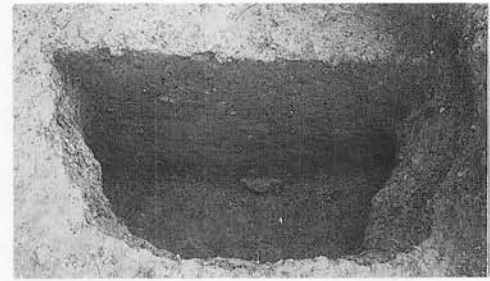
III D-2 土坑平面



III D-3 土坑平面



III D-2 土坑断面

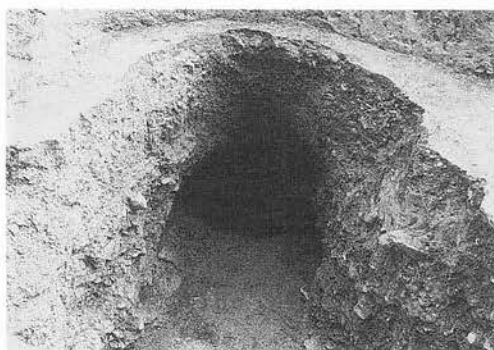


III D-3 土坑断面

写真图版24 土坑3



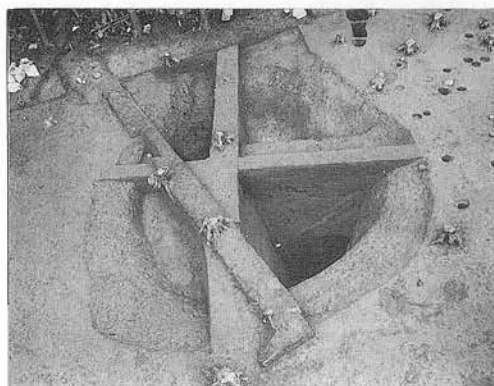
ⅡB-1 採掘跡断面



ⅡB-1 採掘跡坑道入口



ⅡC-1 採掘跡調査中



ⅢB-1 採掘跡(調査中)



ⅢB-1 採掘跡土層



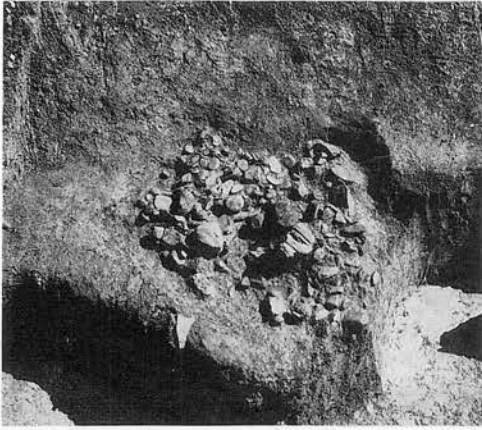
ⅢD-1 採掘跡土層



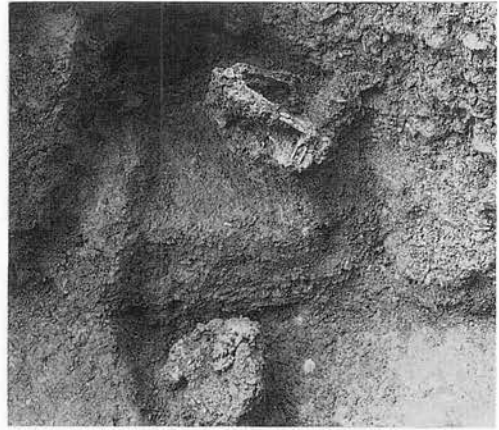
ⅢD-2 採掘跡断面

ⅢC-2 住居址遺構断面

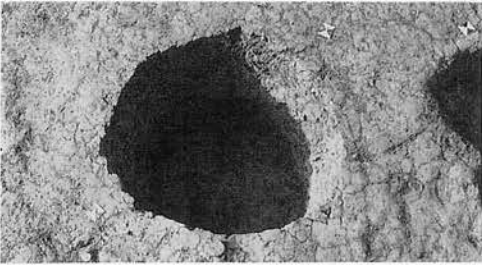
写真図版25 採掘跡



ⅡB-1 集石検出状況



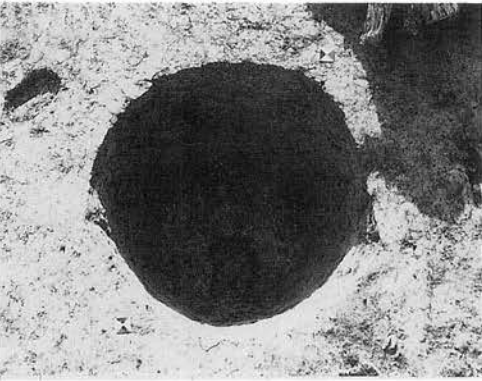
ⅡB-1 墓壙人骨出土状況



ⅡB-2 墓壙平面



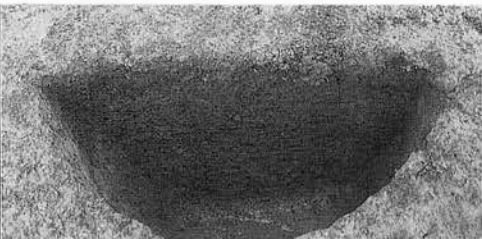
ⅡB-2 墓壙土層断面



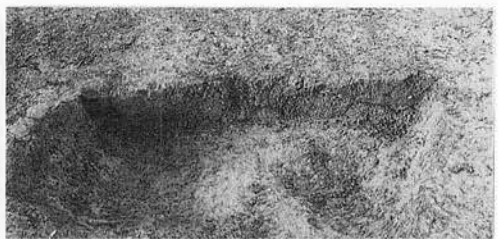
ⅡB-3 墓壙平面



ⅡB-1 土坑平面

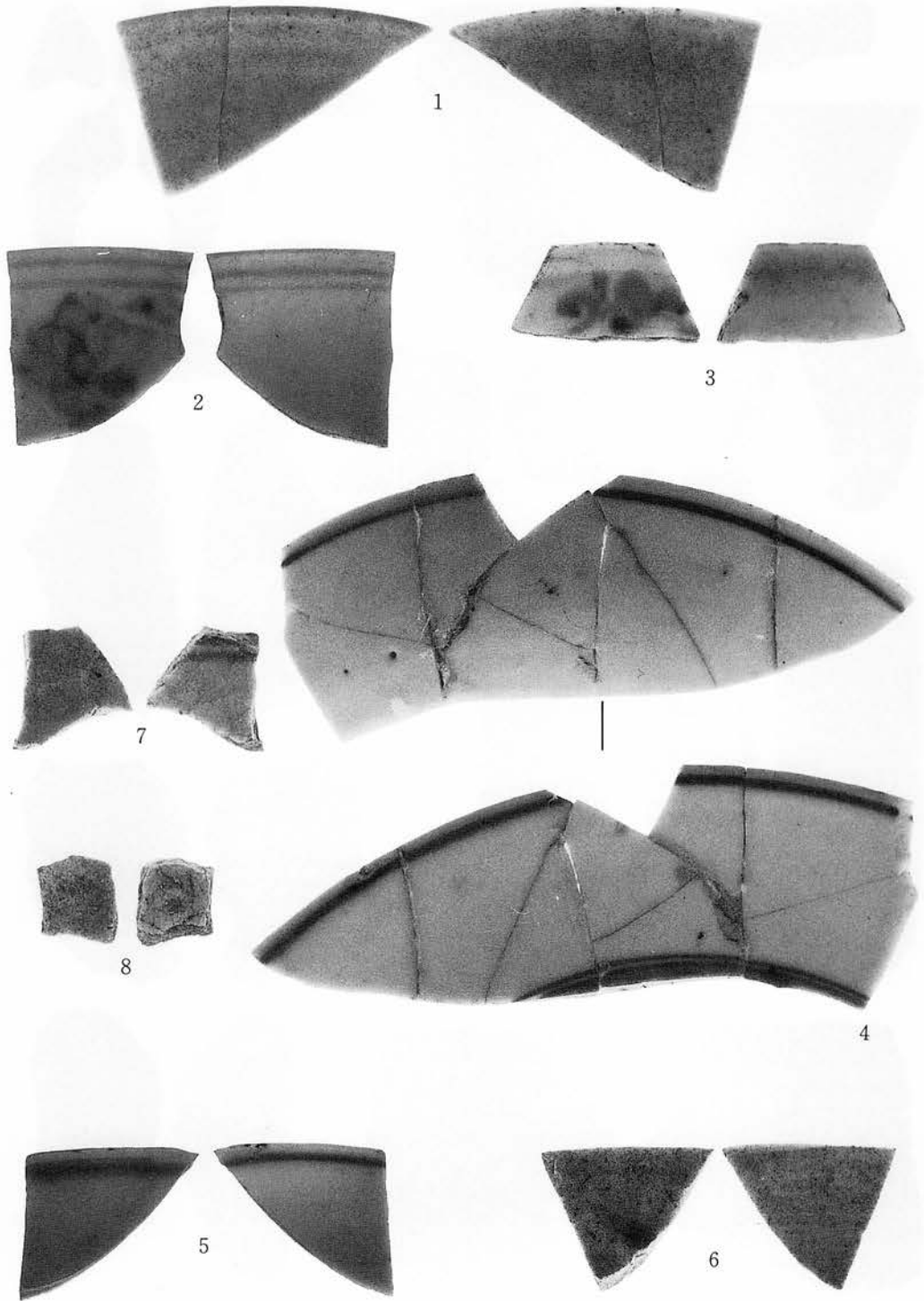


ⅡB-3 墓壙断面

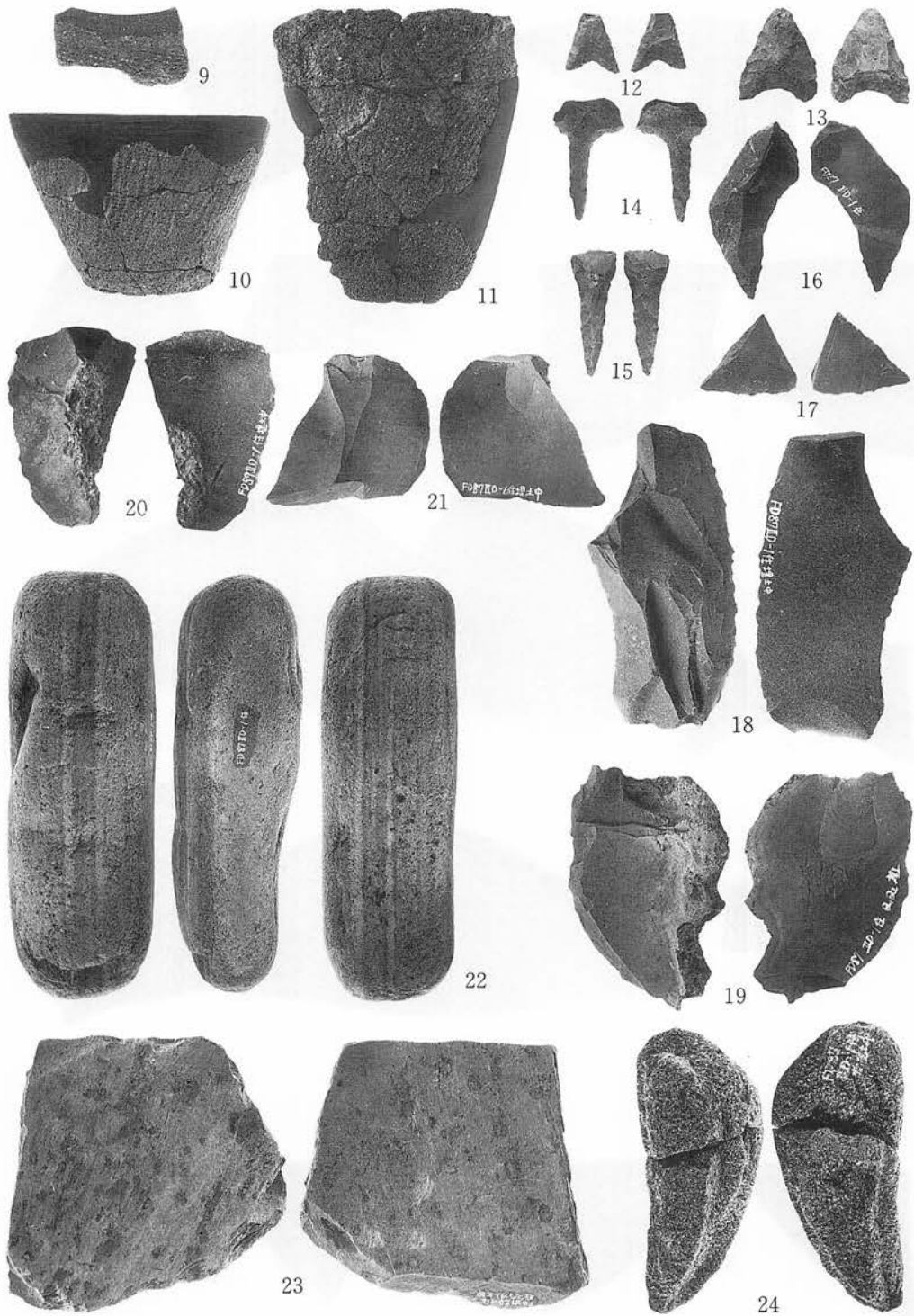


ⅡB-1 土坑断面

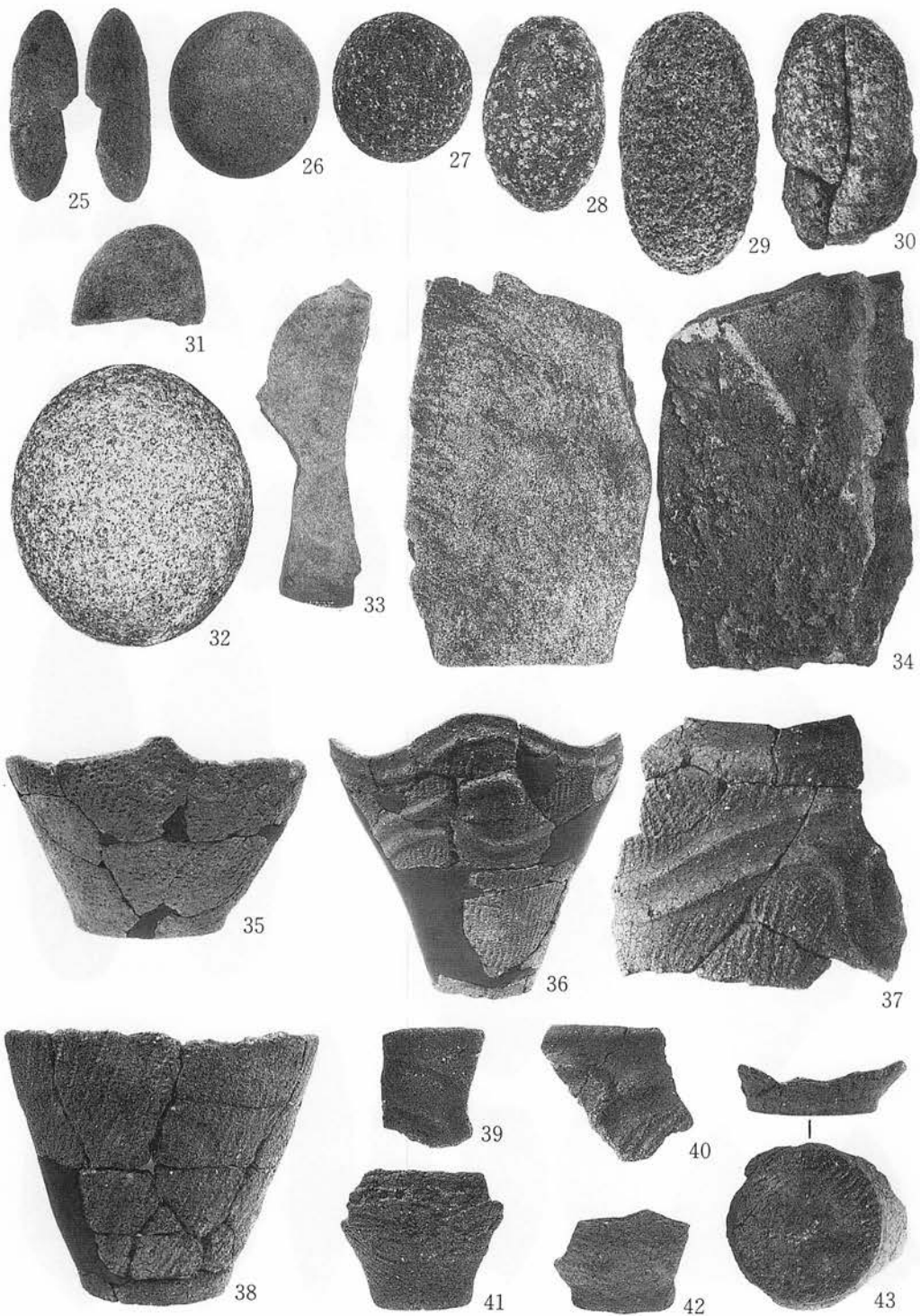
写真図版26 集石・墓壙・土坑



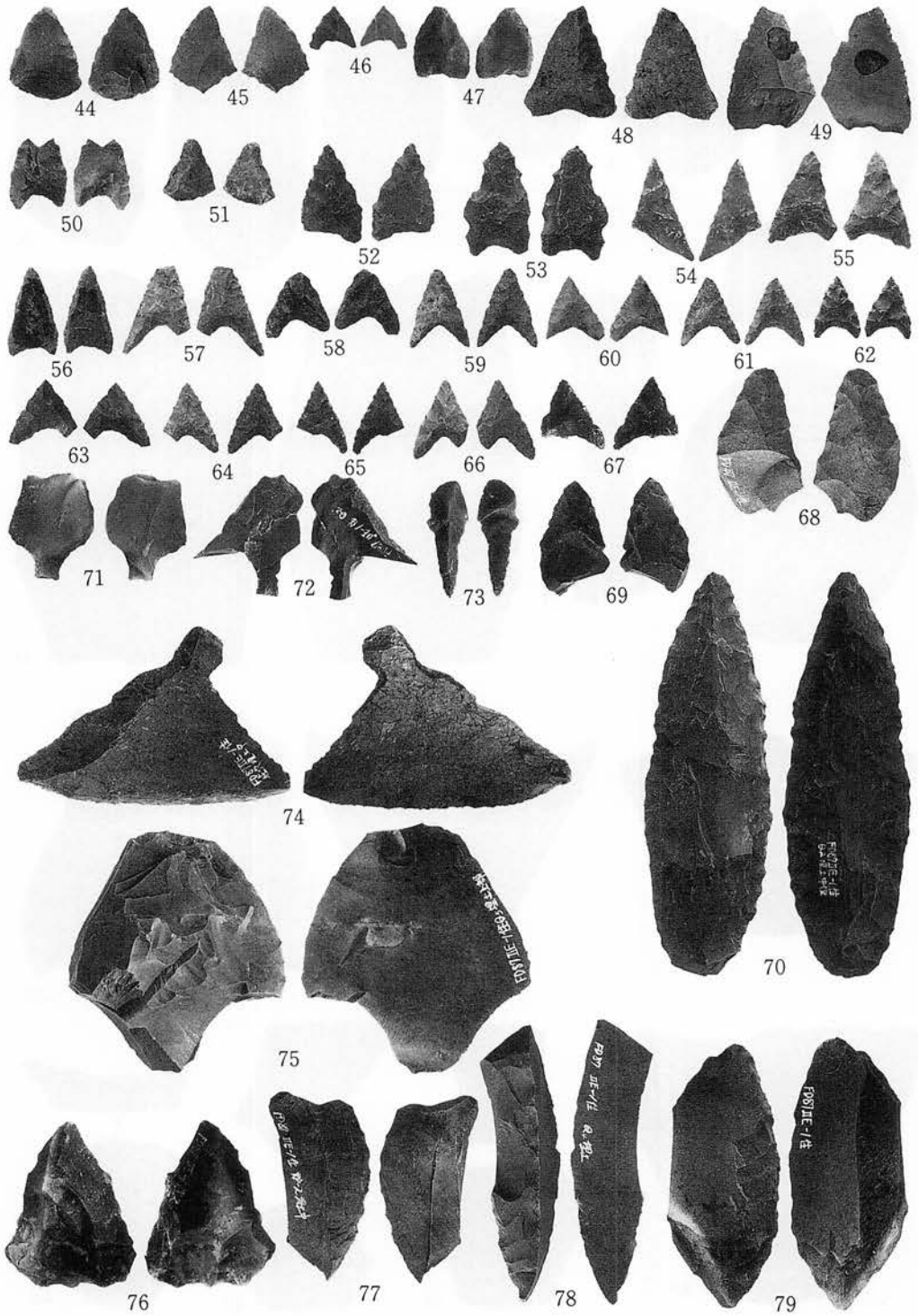
写真図版27 陶磁器



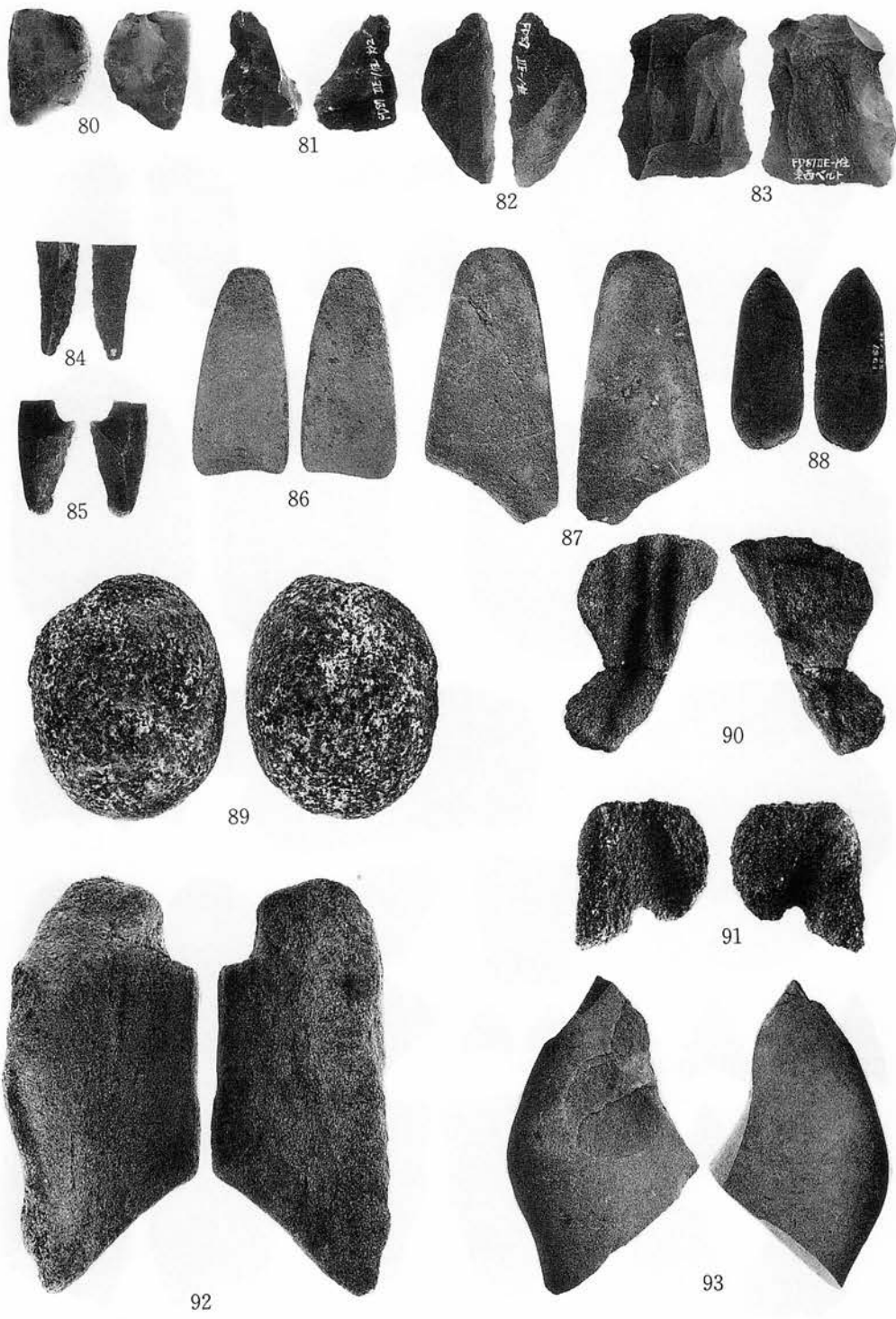
写真図版28 II D-1 住居址出土遺物



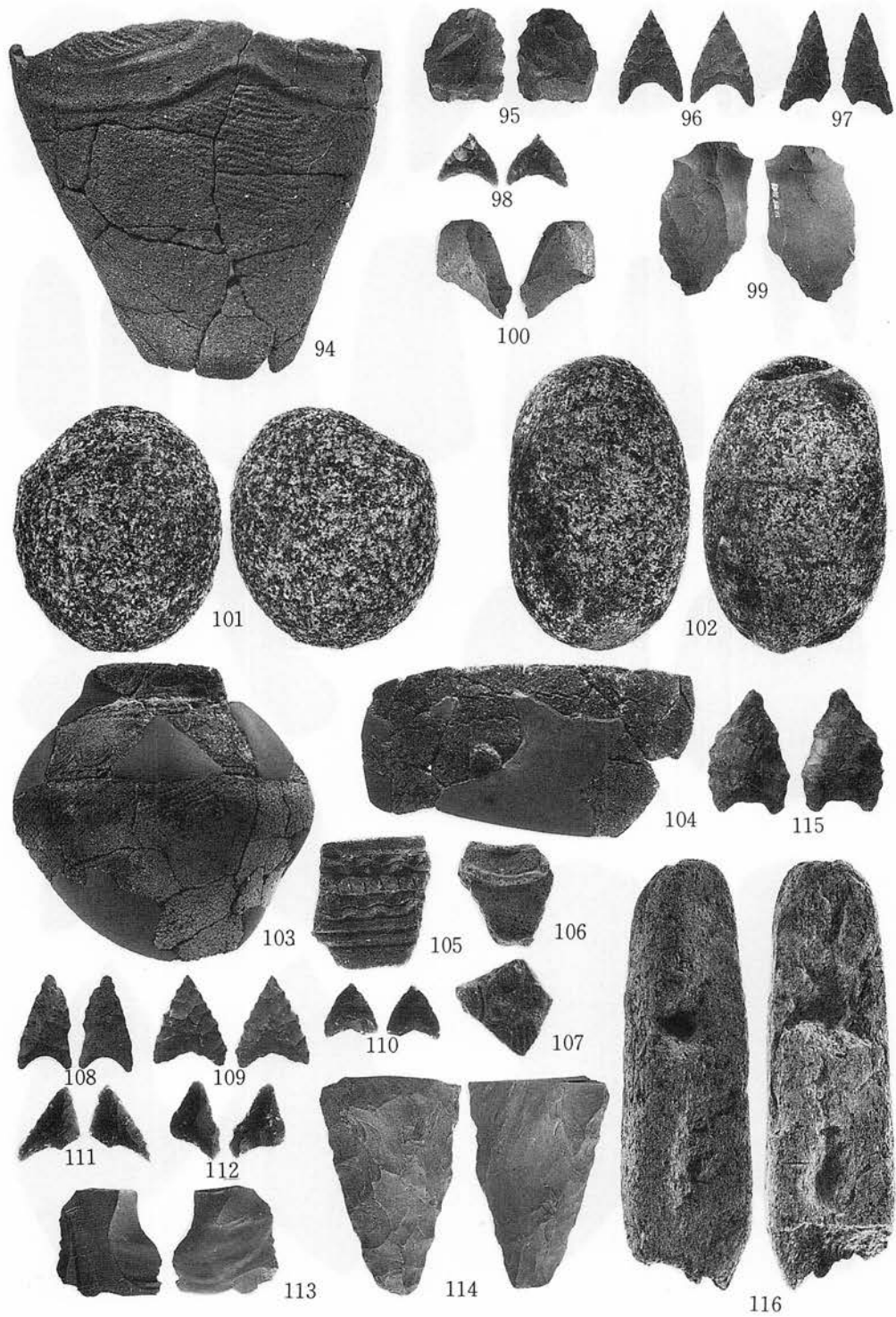
写真図版29 II D-1・II E-1 住居址出土遺物



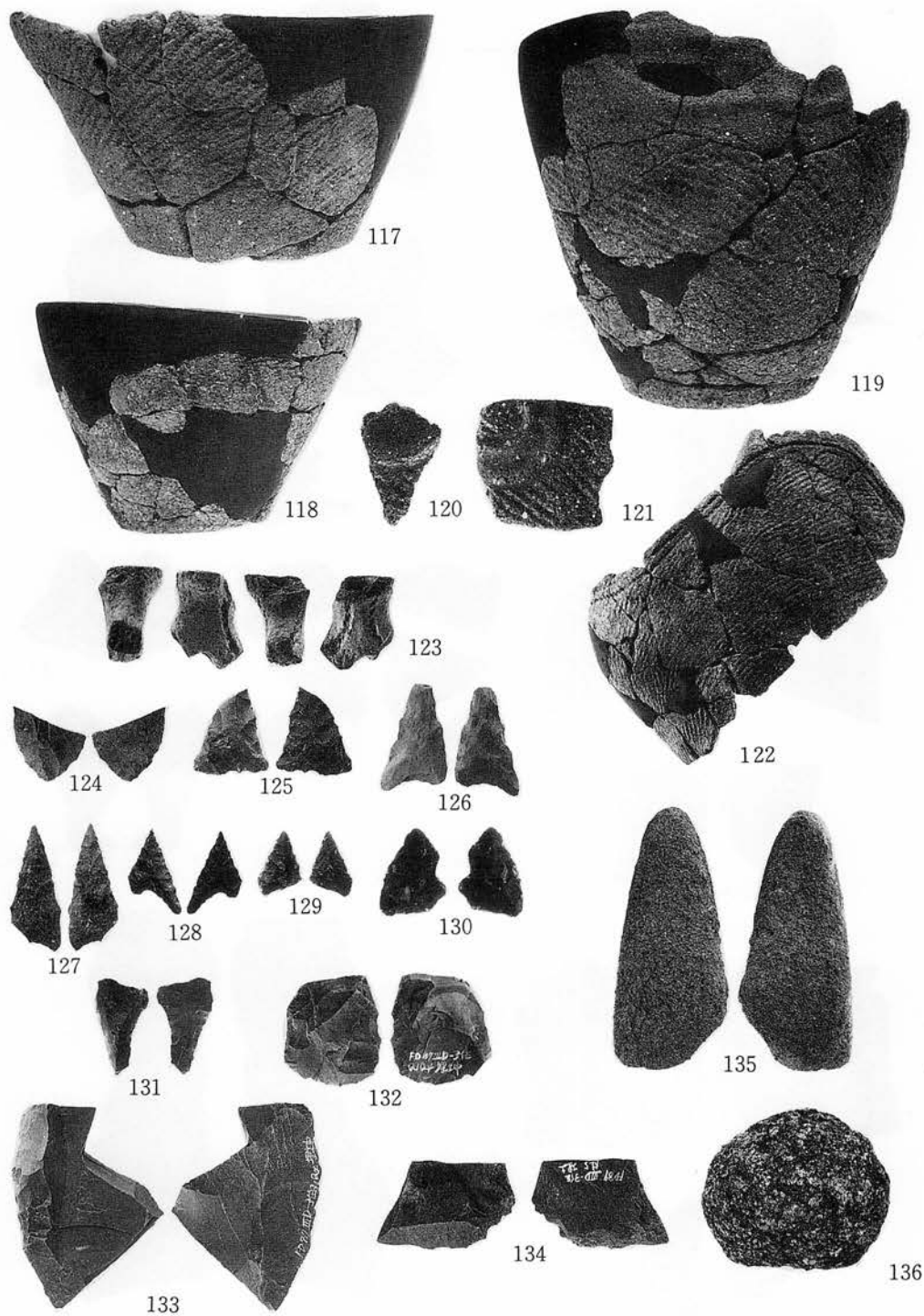
写真図版30 II E-1 住居址出土遺物



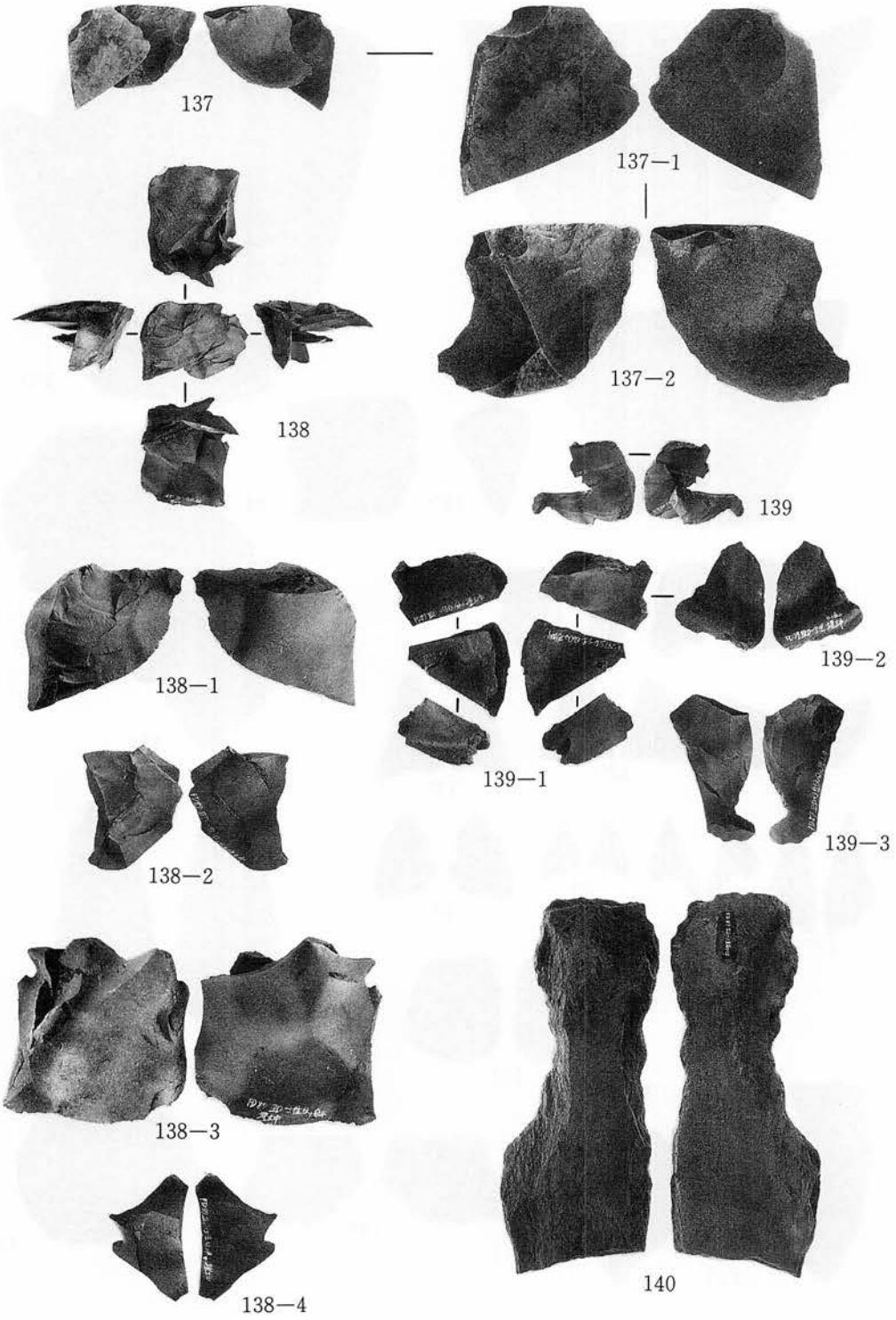
写真図版31 II E-1 住居址出土遺物



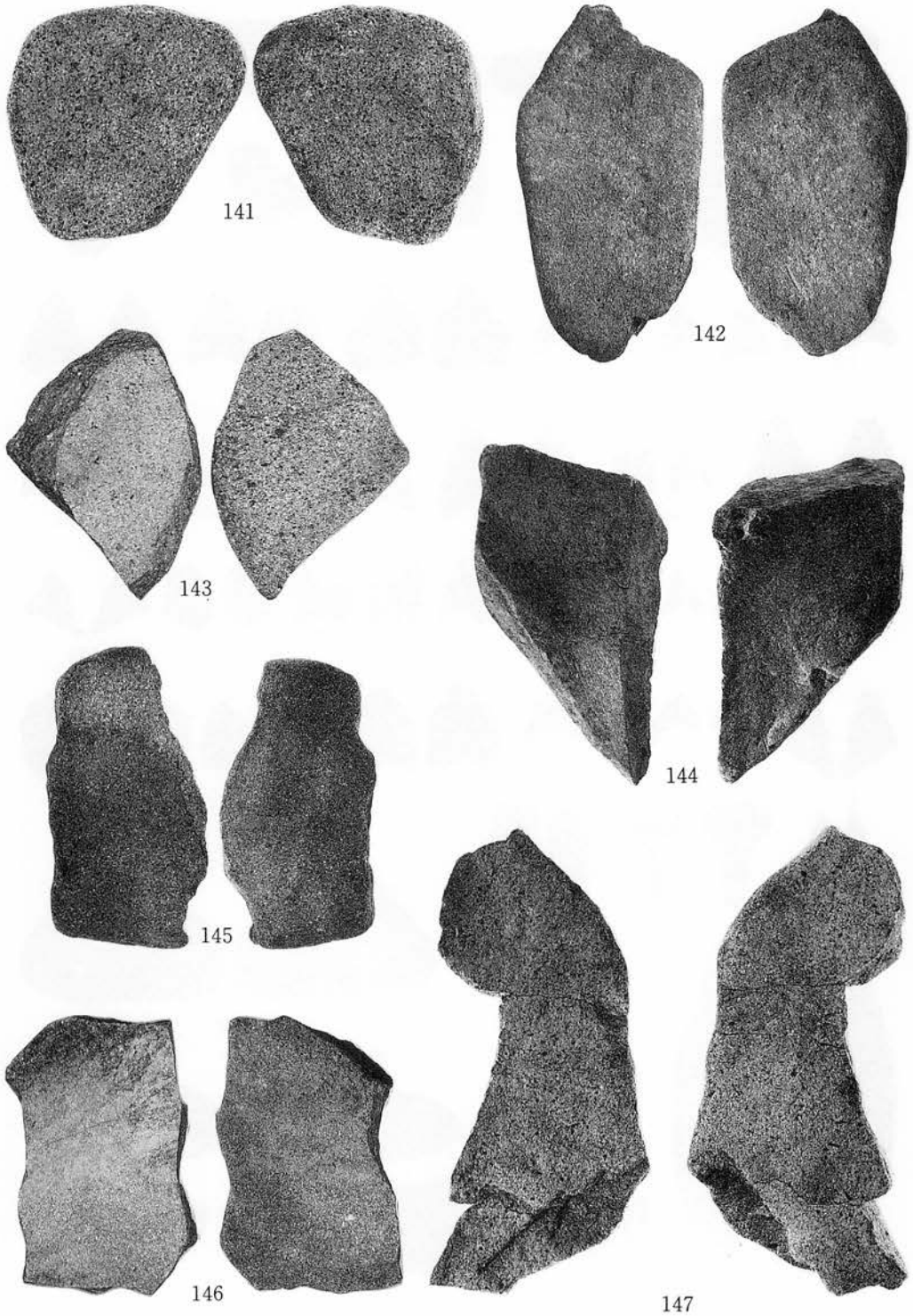
写真図版32 III D-1・2・4住居址出土遺物



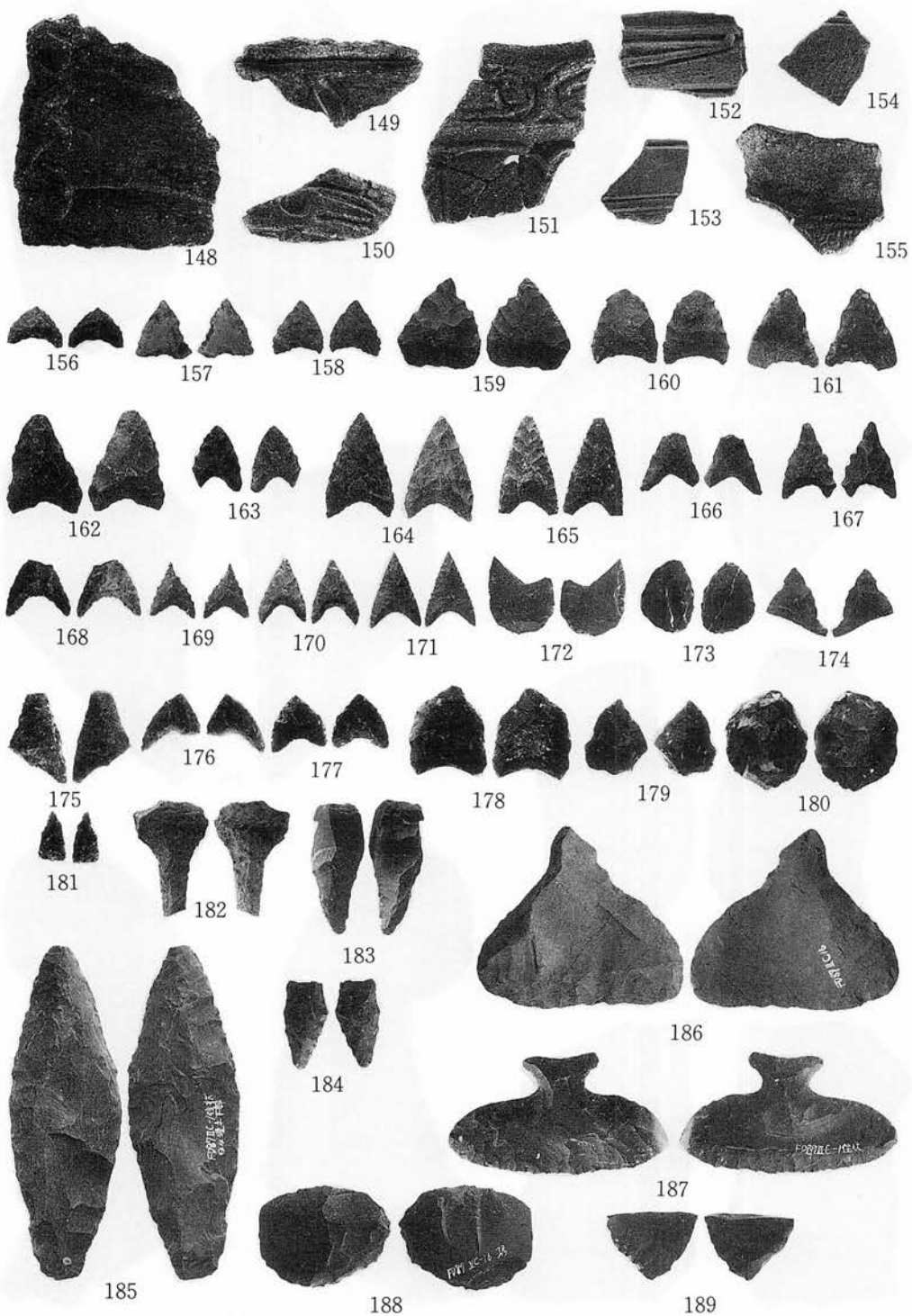
写真図版33 III D-3 住居址出土遺物



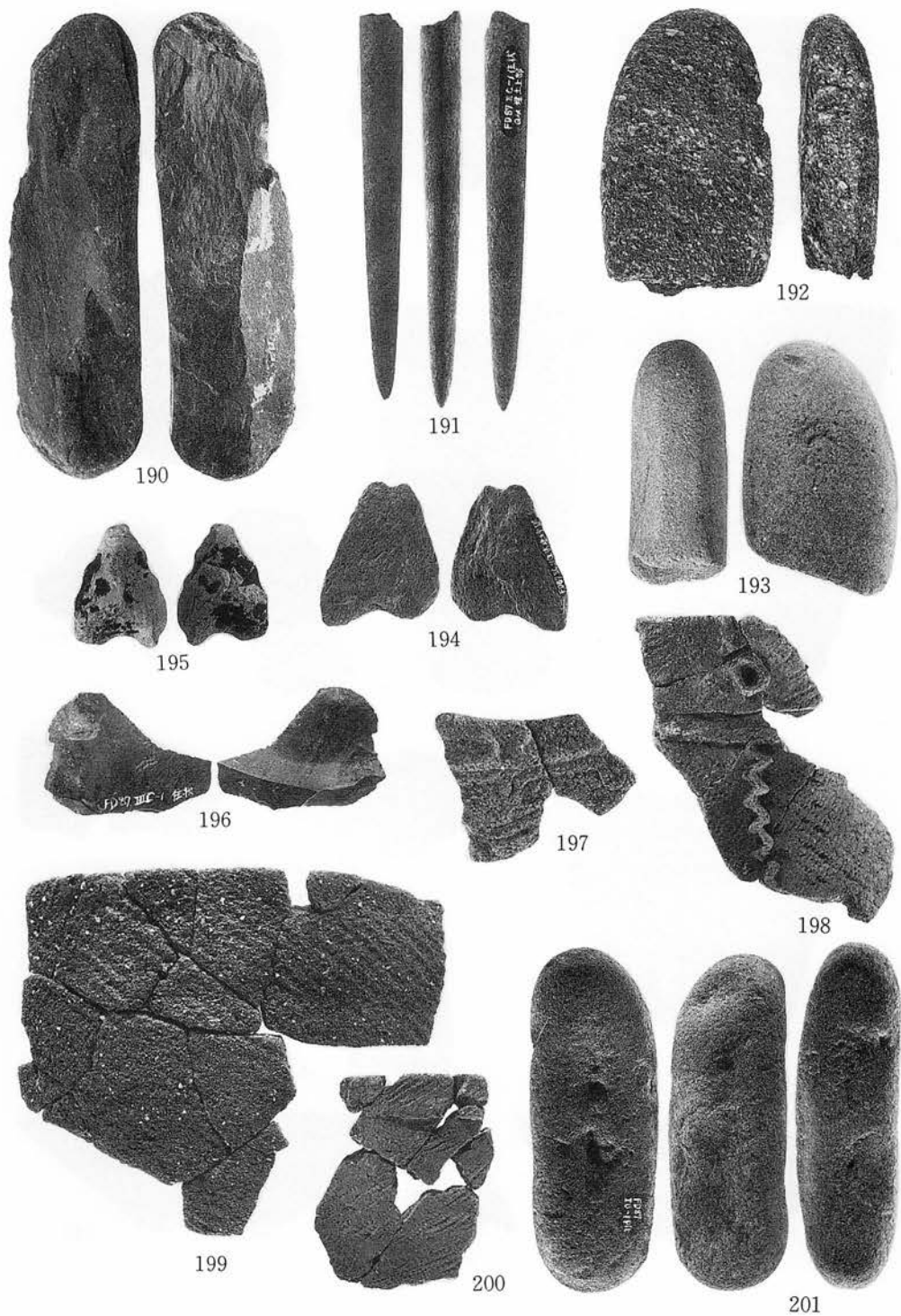
写真图版34 III D-3 住居址出土遺物



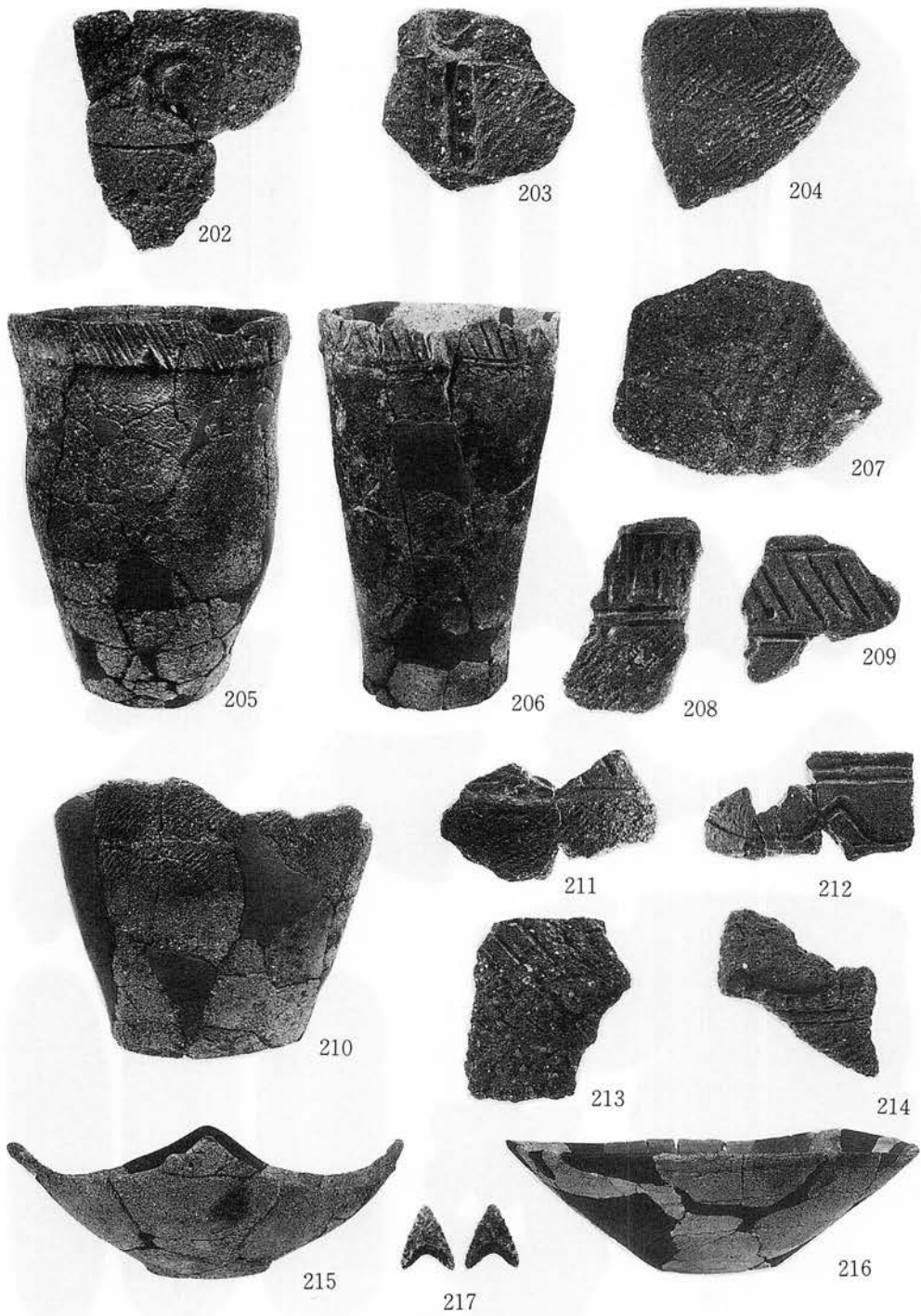
写真図版35 III D-3 住居址出土遺物



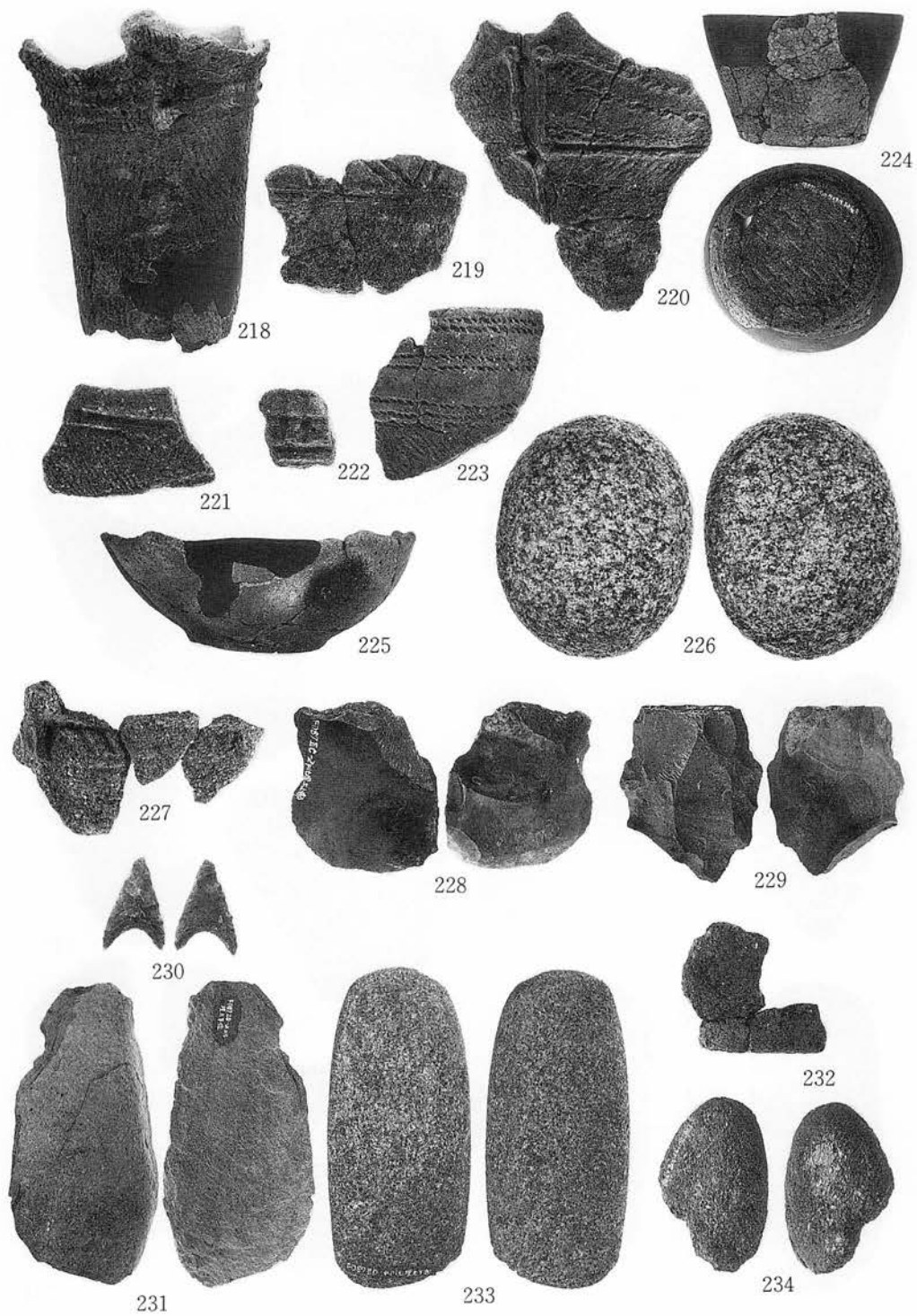
写真図版36 II C-1 住居址状遺構出土遺物



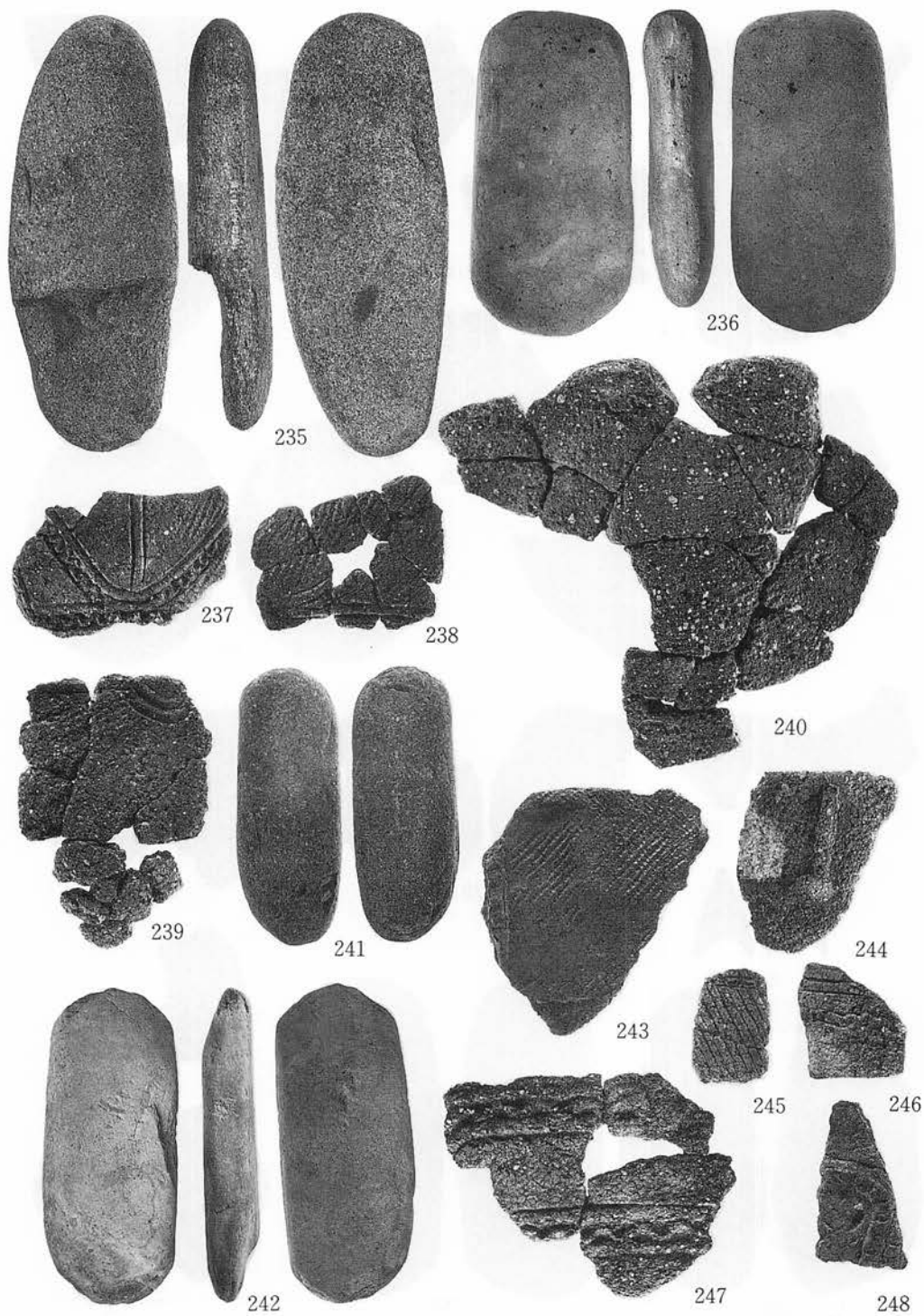
写真図版37 II C-1、III C-1・2住居址状遺構、I D-1土坑出土遺物



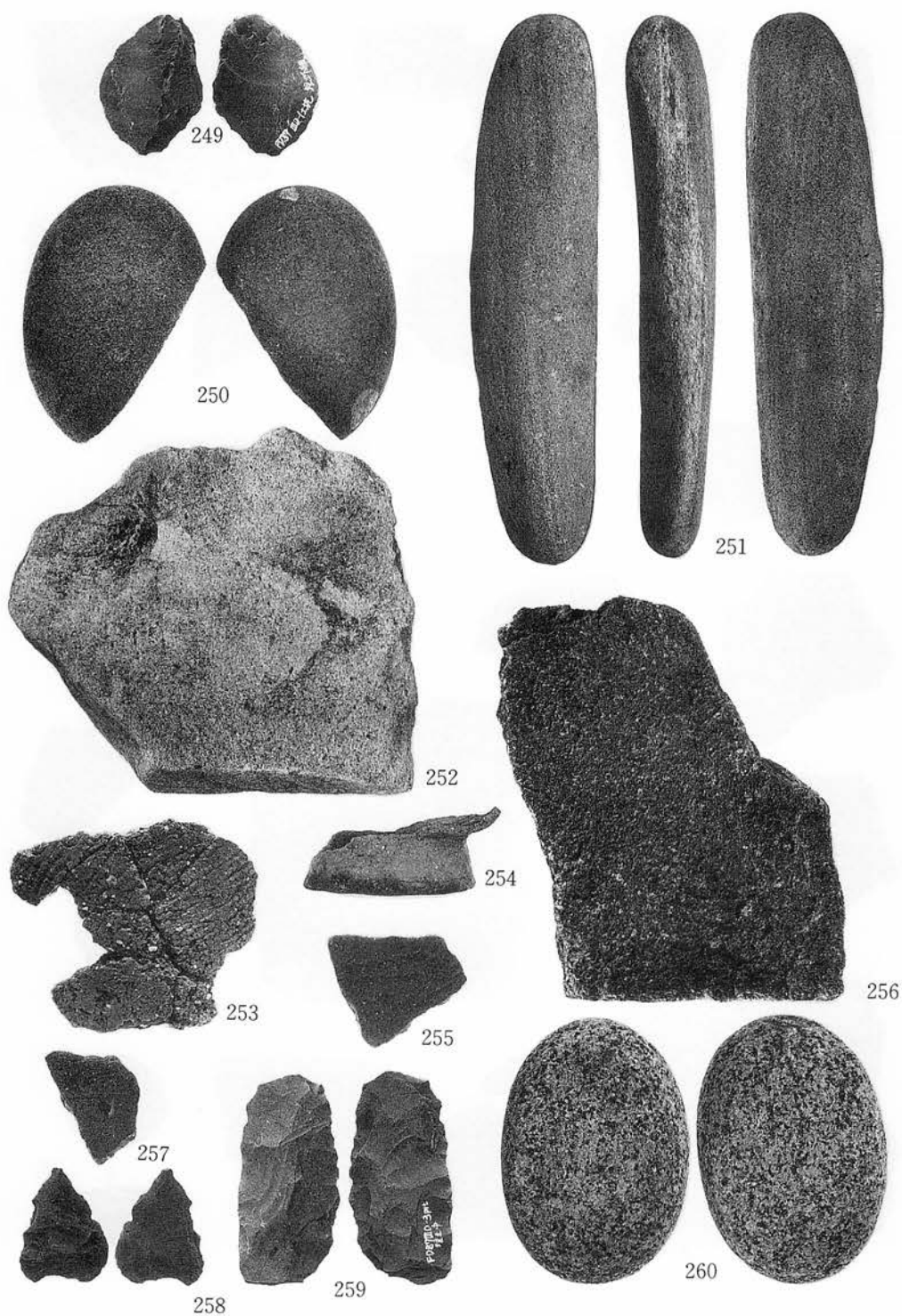
写真図版38 ID-2・3土坑出土遺物



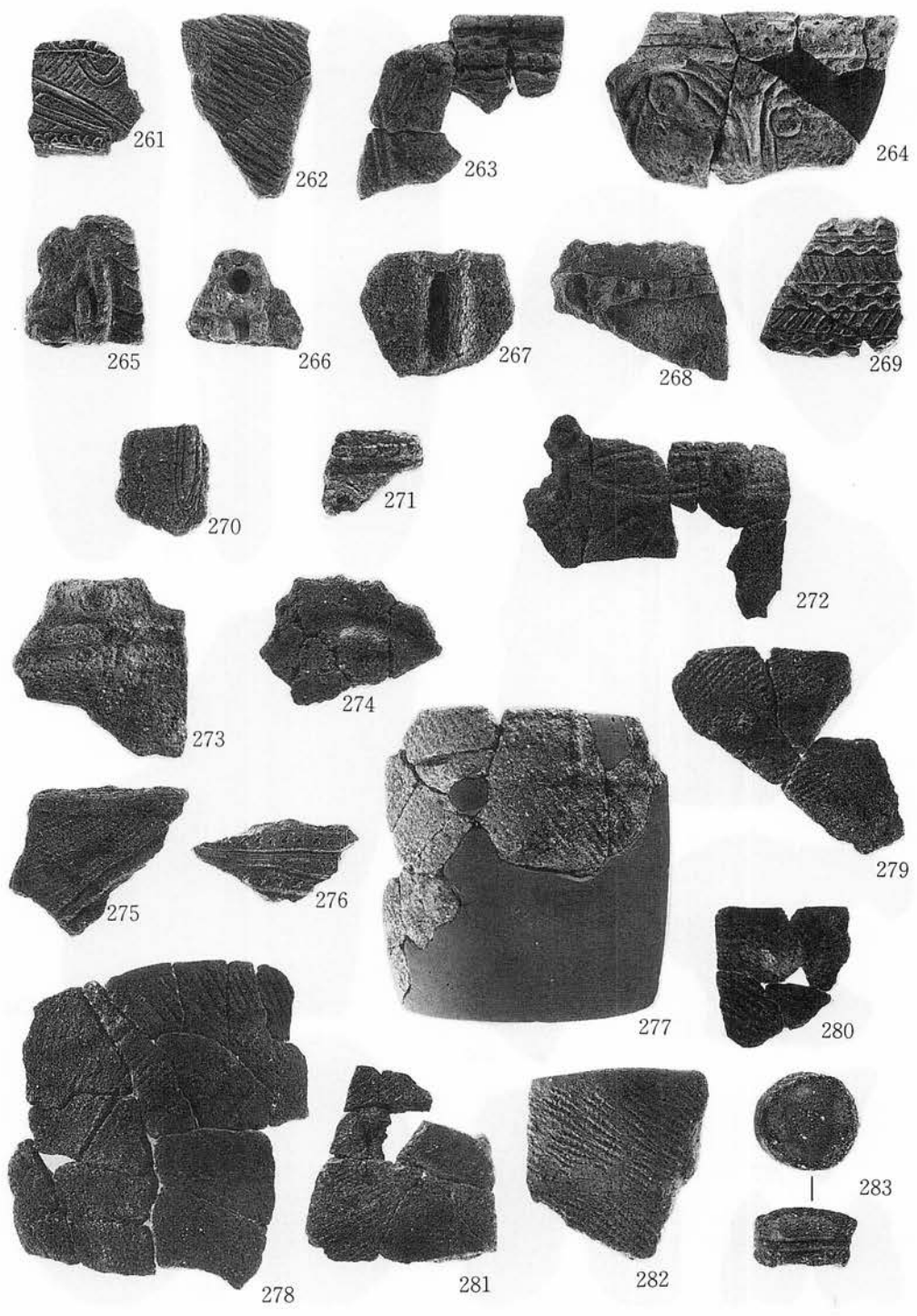
写真図版39 IE-1・II C-1・2、II D-3・4 土坑出土遺物



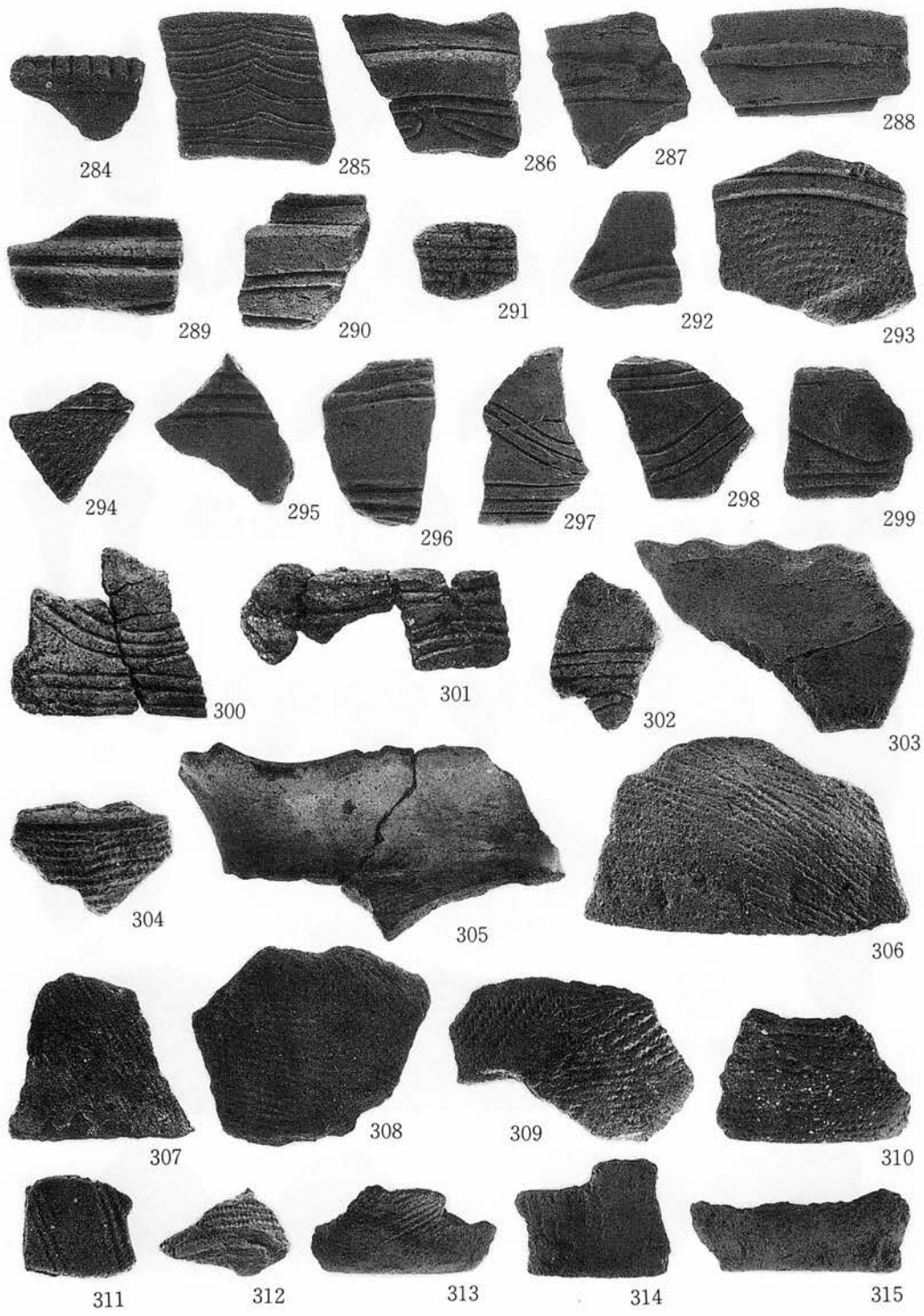
写真图版40 II D-4 · 6、III D-1 土坑



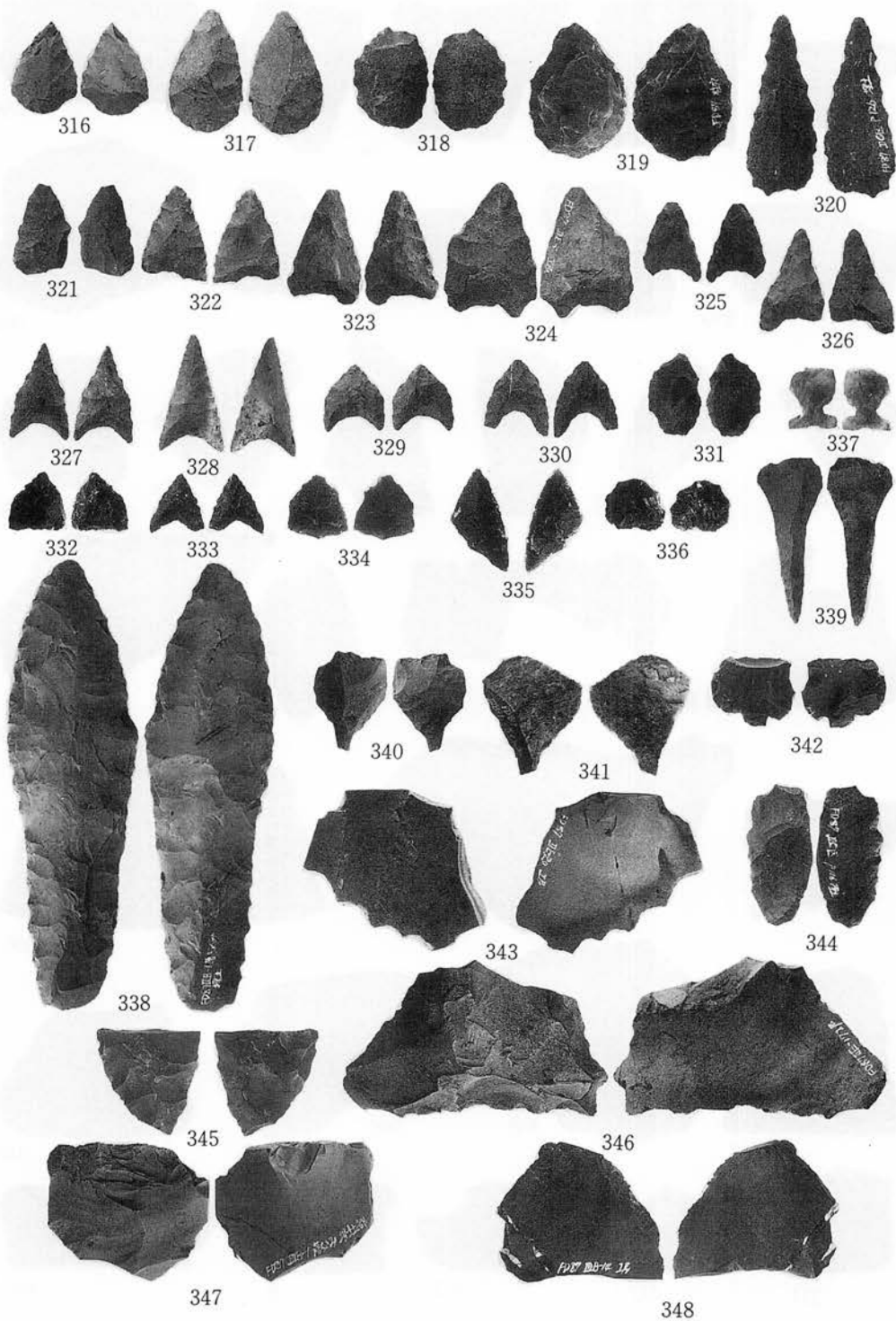
写真図版41 III D-1・2・3土坑



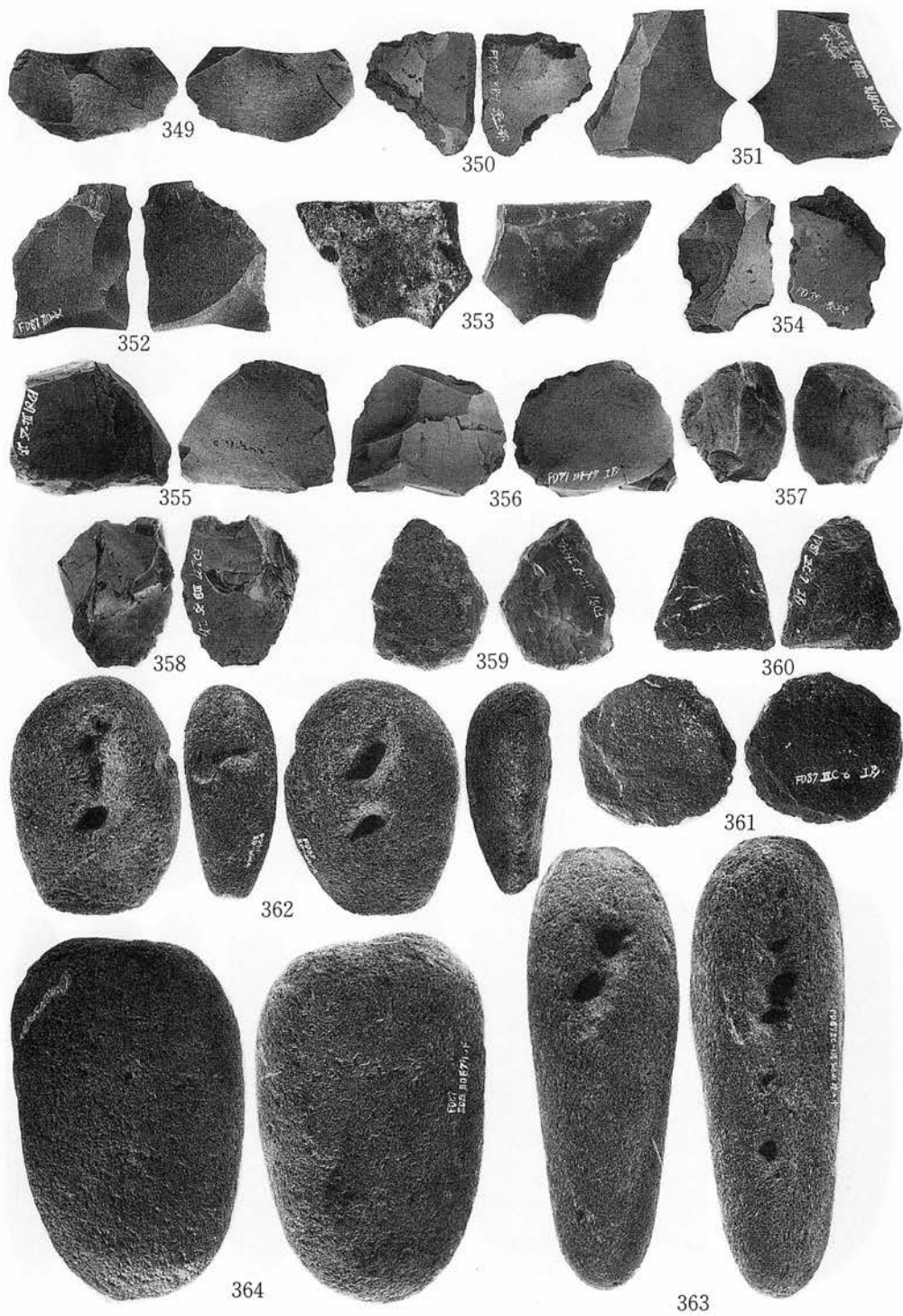
写真図版42 遺構外の出土遺物（縄文土器）



写真図版43 遺構外の出土遺物 (弥生土器)



写真図版44 遺構外の出土遺物（石器1）



写真図版45 遺構外の出土遺物（石器2）



376



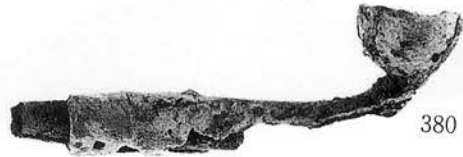
377



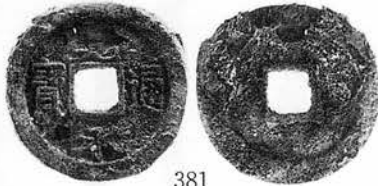
378



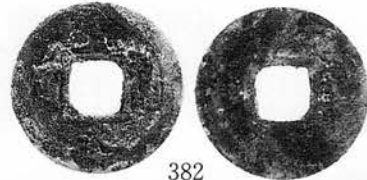
379



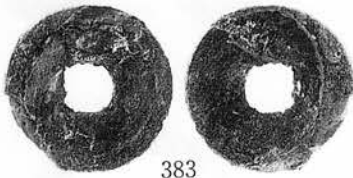
380



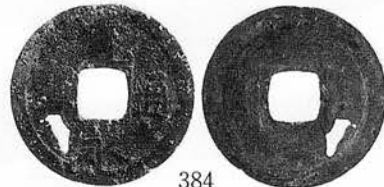
381



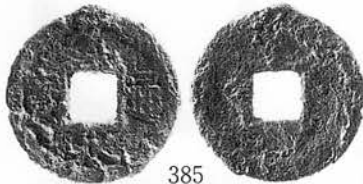
382



383



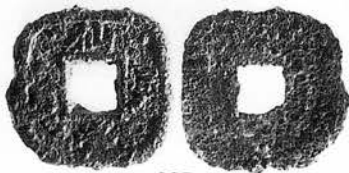
384



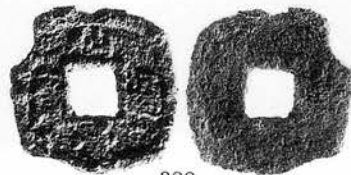
385



386

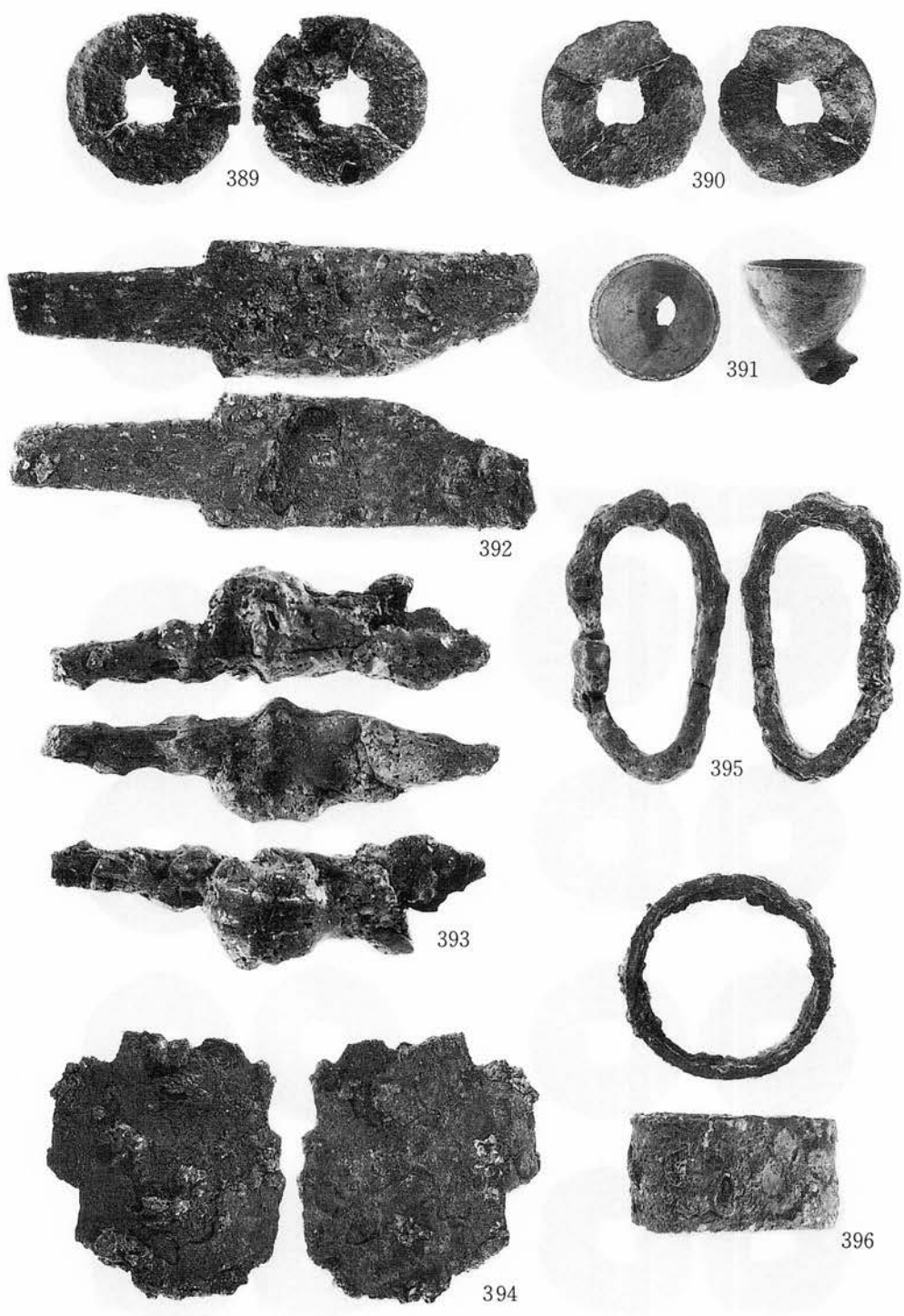


387



388

写真図版47 墓域、遺構外、出土遺物（古銭、煙管）



写真図版48 遺物外出土遺物（古銭、鉄製品）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

課 長 (兼) 鎌 田 良 悦

課 長 補 佐 伊 藤 吉 郎

主 事 阿 部 隆 広

嘱 託 似 内 喜 兵

運 転 技 師 兼 技 能 員 佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長 昆 野 靖

主任文化財専門調査員 三 浦 謙 一

〃 工 藤 利 幸

〃 高 橋 与 右 ^エ 門

〃 田 鎖 寿 夫

〃 佐 々 木 嘉 直

〃 平 井 進

〃 中 村 良 一

〃 中 川 重 紀

文化財専門調査員 光 井 文 行

〃 佐 瀬 隆

〃 玉 川 英 喜

〃 齋 藤 博 司

〃 東 海 林 隆 幹

〃 遠 藤 修

〃 斎 藤 邦 雄

〃 高 橋 義 介

〃 酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長 新 田 和 雄

主任文化財専門調査員 小 野 田 哲 憲

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第131集

打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書

国道343号道路改良工事関連遺跡調査

印刷 昭和63年10月25日

発行 昭和63年10月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323

古館跡地形図



陸前高田市
矢作町
元屋敷

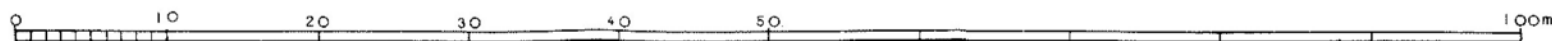
① 50m

40m

30m

20m

1:500



30m ②



付図2 古館跡地籍図 (1:600)